

アラス奇譚

新時代の風俗雑誌

1954-5



アラス奇譚
ガラス

5

華麗な責めの色刷画帖が皆様への興入を待っています

装釘、縦六寸、横八寸五分、横トシ豪華美本、各葉説明
文句入、特アート使用、オフセット多色印刷

画帖

三条春彦・画

時代物責絵巻

特価三百円 (送料五十円)

内容

- 一、山法師と静御前
- 二、女スリと岡引き
- 三、淀君と千姫
- 四、犬公方と侍女
- 五、八百屋お七の最期
- 六、新撰組と芸妓
- 七、十郎左エ門と腰元
- 八、小紫と悪旗本連

縛られた女ばかりの三十二態

(九人のモデルを駆使して得た未発表の秘作)

辻村隆構成・塚本鉄三撮映

豪華アルバム 頒価一冊五百円 (送料五十円)

美しき縛しめ 第二集

◇責め写真は欲しいが、印画紙に焼付けたのは高くて困る、とおつしやる方は是非この傑作集をお求め下さい。

印画紙と交らぬ極鮮明コロタイプ印刷により他の追随を許さぬ低廉な値段で堂々三十二態のあらゆる姿態の責写真がお手元へ届くのです。御申込次第厳重荷造りの上急送申し上げます。

傑作緊縛女体写真

キヤビネ版 三枚一組
三百円 (送料共)

◎灸責めの三態

杉 芙 美 嬢

◎碁盤責め三態

雲 井 久 子 嬢

◎溪流の飛魚

村 田 美 那 子 嬢

◎高手小手三態

本 田 雅 子 嬢

◎鞭打ちの三態

杉 芙 美 嬢

◎制服の女学生

雲 井 久 子 嬢

◎野外全裸の縛り

村 田 那 美 子 嬢

◎ナイロンに包まれた女体

杉 芙 美 嬢

◎女が女を責める

第一集 一女対一女

第二集 一女対二女

急襲

手札型十五枚
一組 五百円

連続十五枚続きで、女が縛られる迄の過程を描いた最優秀作

川端多奈子悦虐姿態集

第一集 手札型 七枚一組
三百円

吊り 三態 特集

キヤビネ版 三枚一組 五百円

第一組 第二組

第三組 第四組

男性マゾフォト

虐待 (一、二月号の口絵掲載の四枚の外に一枚)

キヤビネ版 五枚一組

五百円

台上の殉教者

キヤビネ版 二枚一組

二百円

磔 キヤビネ版

第一組 二枚一組 三百円 (送共)

第二組 一枚 百円 (送八円)

奇譚クラブ臨時増刊号

【原名 THE GLOOMY EXPERIENCE】

アリスの人生学校

(定価 100円)

吾妻氏の麗筆により心にくき迄執拗に描写された

サバイズム文学の決定版

美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く

サディ・ブラツケイズ◎吾妻 新訳

堂々五百枚に垂んとする長篇サディズム小説

口絵(色刷・単色)カット・挿絵多数挿入

第一部 純潔教育 第二部 貞操教育

にてお買洩れの方は直接発行所へお申込み下さい。送料共

縛られた女ばかりの16態

豪華アルバム 美しき縛しめ 第一集

(各葉解説文句入・美術コロタイプ印刷)

美濃村晃構成・塚本鉄三撮映

内容 工足高鞭芋 燭く滑床鏡紅荒目猿 麗字綴つ び 手小 燭さ車 の置 と の牲 賣柳手打虫 責り吊物念白縄綾台目わ

【全部未発表】

四人のモデルを使つて完成した縛られた女の集大成、優美さと緊縛感の秀れた代表的な責め写真集、痺れるような妖しい雰囲気は素晴らしい反響を呼んで瞬く間に限定部数を突破、これは同好者のために若干増刷した分です。

曙書房代理部

(頒価一部 500円 送料60円)

月刊 **KK通信** 定価 20円 半年100円

(既に第十六号迄毎月) (休みなしに発行)

奇譚クラブの誇る特別會員の機関誌

本誌愛読者を中心に楽しいグループ

B6判十六頁に新聞用扁平活字にて記事満載挿絵、写真等毎号多数掲載、本誌愛読者の欠かすことの出来ない伴侶です。一般市販せず予約者へのみ送付、目下三千の会員を擁し毎日増加の一途を辿っています。本誌をごらん下さった方は是非KK通信も併せて御愛読下さい。絶対他の真似の出来ぬ内容を誇つております。旧号は第六号より第十五号迄在庫しております。【六回分送付に急送】

【曙書房内KK通信係】

本誌6,7,8月号の3回に亘り連載大好評を博したクリスチーナの受難の全譯遂に成る！

再版出来！

クリスチーナの受難全訳
キドロドシユトツク 被虐の家
新・訳 吾妻

可憐なる美女クリスチーナに対する緊縛と狼ぐつわは汚辱と鞭打と凌辱の地獄凶絵サディズムの粋をつくしたクリスチーナの全訳、画壇の一方の雄、某氏のアブノーマル挿絵相俟つてこゝに完全なるサディズム文学の金字塔が打ち樹てられた。

定価 三二〇円(送料四〇円)

申込所 曙 代理部

B6判 二二六頁 上製函入
ボール表紙 挿絵 十五葉入



定價百円

昭和十七年四月三十日印刷
日本印刷株式会社
印刷部

本欄はすべて新版
未発表の作品です
価格は全部送料共

〔女体緊縛〕
●寫真集●

断然卓絶した特写
群を抜く素晴しき傑作
類例のない犠牲的安価

悦虐写真は同好者本位の迅速、確実、安価で信用のある曙書房代理部へ

◎村田那美子嬢悦虐集◎

手札型 五枚 一組 200円

◆さるぐつわ三態◆

キヤビネ版 3枚 1組 300円

◆二女連縛集◆

(中宮綾子、並川トミの二嬢)

手札型 六枚 一組 300円

自分から縛りのモデルを志願してきた二人
の乙女を仲よく連縛したポーズ

◆三人連縛棒吊り◆

(杉、坂口、村田の三嬢)

キヤビネ版 3枚 1組 300円

これは誠に珍妙な写真である。予想して出
来るものでなく、偶然のチャンスをつか
んで得た三人連縛の棒吊りである。

◆様子責め3態◆

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版 3枚 1組 300円

梯子に縛りつけるということは、サディス
トの見果てぬ夢の一つである。

男性被縛写真 (縛られた男)

第三集 手札型 5枚 1組 300円

第四集 手札型 5枚 1組 300円

男性マゾ写真 (女に苛められる男)

第一集 キヤビネ 3枚 1組 300円

第二集 キヤビネ 3枚 1組 300円

◎川端多奈子嬢

第二集 悦虐姿態集◎

手札型 7枚 1組 300円

大好評の第一集に引続いて待望の第二集は
多奈子嬢の真価を遺憾なく発揮した作品と
なっている。乞御期待。

◆股間縛りの5態◆

(坂口利子嬢)

キヤビネ版 5枚 1組 500円

問題の股間縛り十数態の中から選んだ最も
強烈で美しさのある五態をおすすめする

◆椅子責めの5態◆

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版 5枚 1組 500円

十四貫三百の豊満な姿態を縦横に椅子の上
に縛りつけて得た変化のある真佐子嬢の緊
縛のポーズ。

◆半吊り二態◆

(村田嬢、坂口嬢)

キヤビネ版 2枚 1組 200円

完全に吊り下げられてしまうよりも、半吊
りの方が、辛いとはモデル嬢の偽らざる告
白。

女性切腹姿態

オニ集 手札型 6枚 1組 300円

女性切腹擬態シリーズ

キヤビネ版 8枚 1組 600円

正坐より割腹に至る迄の連続写真。



奇譚クラブ ☆ 五月号 ☆ 目次

あぶのーまる・ふおと・せくしよん

目次表 棒抗を用いた縛り方	五月の貴族 安房の北向き地蔵	女性の切腹幻想四態	アメリカンスタイルの責め(2)	(戯文) 黒 髪	都築峰子画集 奈落の戯夢	車を轆くボニー(小馬)	後手足首縛りと一本縄	床柱・後手縛りの二態	瀧 関子画集 土 蔵	マソヒスチックな責め [足詰め、大奴早く歩かないか!]	呼草数久画集 通り魔	外国の縛り写真 (椅子責め) (新しい縛り)
瀧 関子・画	伊藤晴雨・画	呼草数久・画	杉原虹児・画	呼草数久・画	外面誌より	杉原虹児・画	杉原虹児・画	杉原虹児・画	瀧 関子・画	呼草数久・画	呼草数久・画	呼草数久・画

罪 罪人の野郎

刑務所図録より

少年囚獄記

三根耕二 (36)

悪の部屋

二俣志津子 (11)

女性切腹の夢

溝口龍夫 (50)

感情教育

吾妻新 (52)

あるマソヒストの手帖から

沼正三 (56)

奴隸加虐

川崎四郎 (72)

或る同性愛の告白

小田雅春 (77)

変態讚美論

鬼山絢策 (80)

懸賞入選作品(三席)

二百字讚歌

真砂十四郎 (84)

童貞作家

淡美一郎 (152)

海外サティズム雑誌

さるぐつわ(下)

吾妻新 (88)

サド女の人妻期

乗杉貴代子 (104)

女装マニアの告白

重田正和 (118)

私の求めた男

松井籍子 (122)

切腹研究夜話(四)

中康弘通 (132)

非小説性液

伊藤晴雨 (147)

懸賞(告白と手記と体験)入選作品

MS・プレイ

中谷冷一 (140)

半公刑

篠原咲恵 (154)

元憲兵の手記

林田真樹 (171)

北國湯場哀話

吉野朝夫 (176)

変性男子の告白

篠原幸雄 (182)

私の悦虐ノート

妻木満三 (187)

終りなき敗北

菅野朝郎 (191)

残虐なる女性達

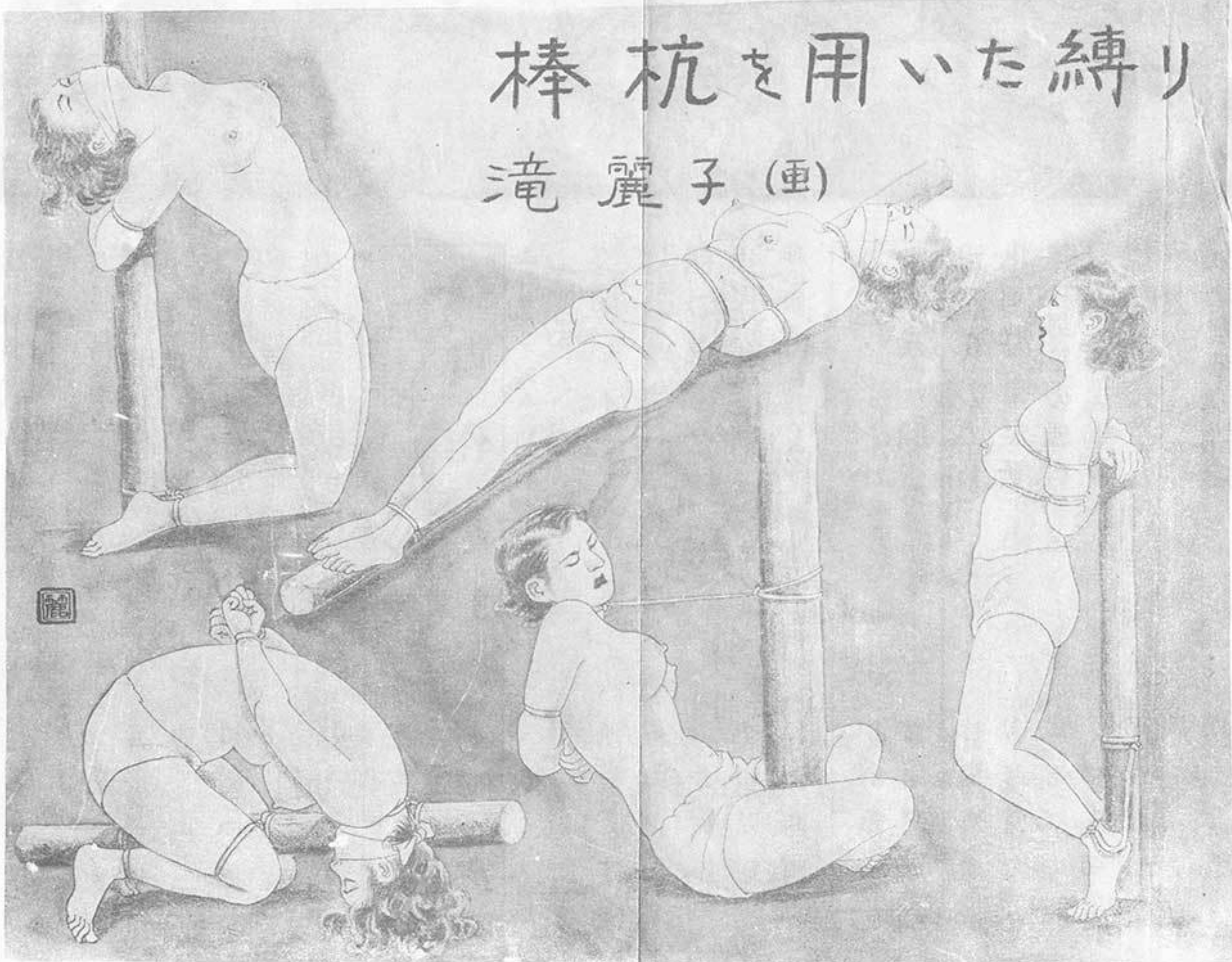
森本愛造 (198)

告白 京子の浮ぶくろ

羽村京子 (201)

縛りたて杭に棒

(重) 子麗滝





安房の北向き地蔵
 安房の國夷隅郡の或る村に孝女があつて、母に仕えて柔順な女であつたが、母は此女を酷く憎み、或夜女を地蔵尊の祠に縛つて見渡す限りの広い田圃の植附けを一夜の内にしなれば殺して了うと責めた。女は縛られ乍ら地蔵尊を祈つて居ると地蔵は女に代つて大なる田の植附けを一夜のうちに完了してしまつたので、流石の母も其奇蹟に驚いて善心に立帰つた。その夜から其地蔵尊は北向きに位置を替へてしまひ、何度南向きに尊像を置き直しても一夜の内には北向きになつてしまふので、後には之れを北向き地蔵と呼ぶに到つたと伝えて居る。(伊藤晴雨画)



戯文
黒髪

畔亭 数久
文並画

縛る目的は三種あると思います。即ち

一、責めの目的で縛るもの、これはあらゆる縛り方が考えられます。たとえば雁字搦めにして身動きも出来ないものから、唯一本の縄で腹部を蜂の様にしめて手足は自由にしておくといったもので、およそ苦しめる事の出来ることなら何でもよい訳です。

二、他に目的があつて縛るもの、つまり単に逃亡を防ぐとか、抵抗を封ずるといった程度の縛りで、これは手首や足首を縛るだけで足ります。

三、マゾヒストを縛る場合、大体一に準じます。



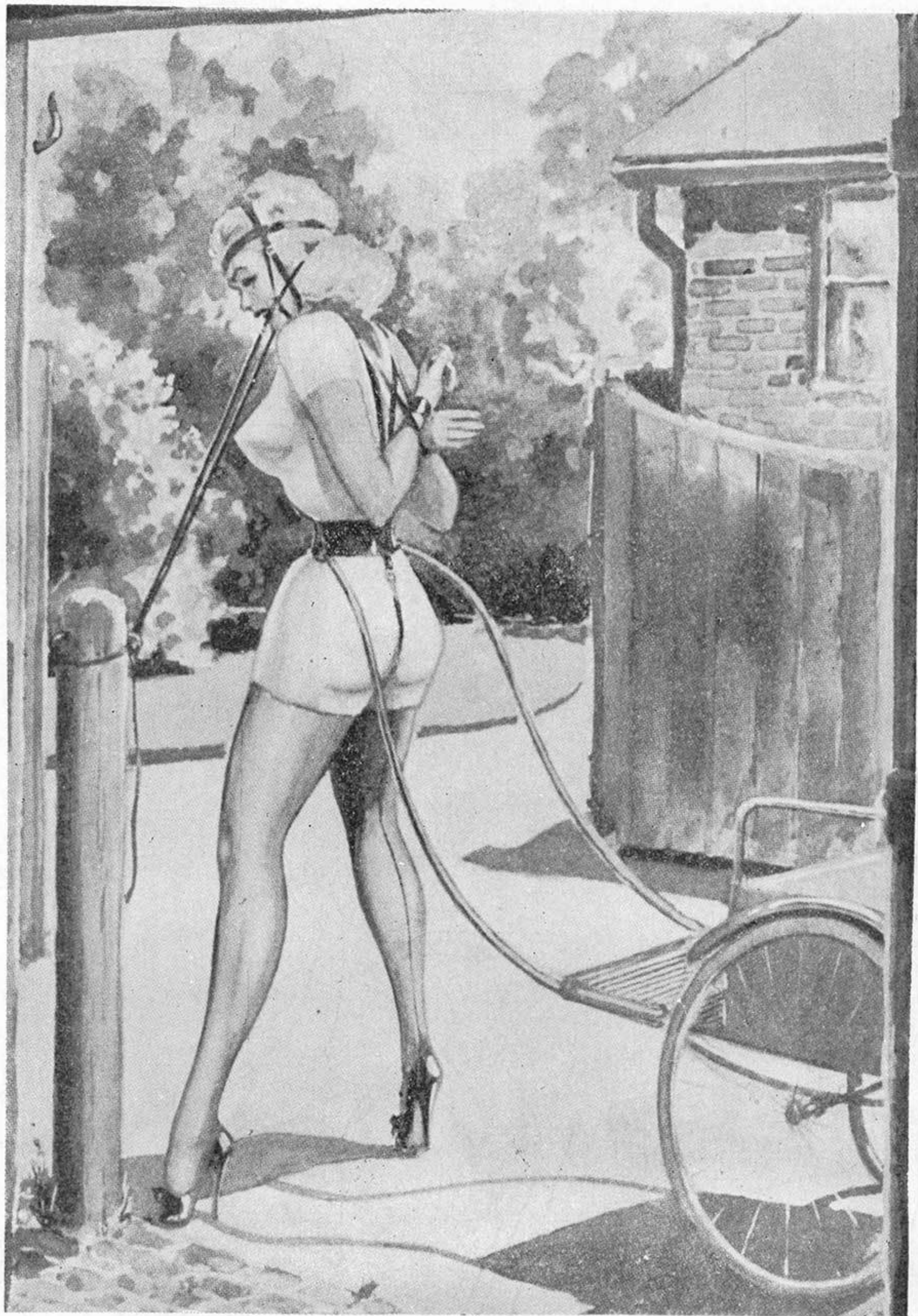


さて、これ等を絵に書くとき、それぞれに応じた表情が必要ですが、いずれも苦悶の気持が現れていなければなりません。たとえ縛られる事を楽しんでいる人であつても、苦しくない様な縛り方ではよろこびは味わえないでしょう。ところで、こゝに掲げた絵は前記のどれにも当りません。無風流な縄を使わないで、女なら誰でも持つっている艶やかな黒髪を使つたたのしいお湯殿の遊びです。いずれも楽しそうです。その表情を声にして見たら

① いやん、こんなの ② もう下して、落ちそうよ ③ 足が抜けそうで抜けないわ ④ どこで結んだの? ⑤ 毛がもつれてるのよ ⑥ わあッ たすけて ⑦ 意地わる、足つき取つてよう ⑧ 首が抜けるわ ⑨ 着物が着られな

いわ
といった処でしょう。





手綱をとられた小馬はいきり立つた

馬を轆く小車

彼女は非常に美しい大きな動作で駆け出した



奈々洛の戯夢

山幸子画





幻想腹切

画・久数亭畔

奉







椅子縛り

外國の縛り寫眞

兩足の膝の下で、肘をベルトによつて固定した
自由束縛の方法は、新しい着想として面白い。

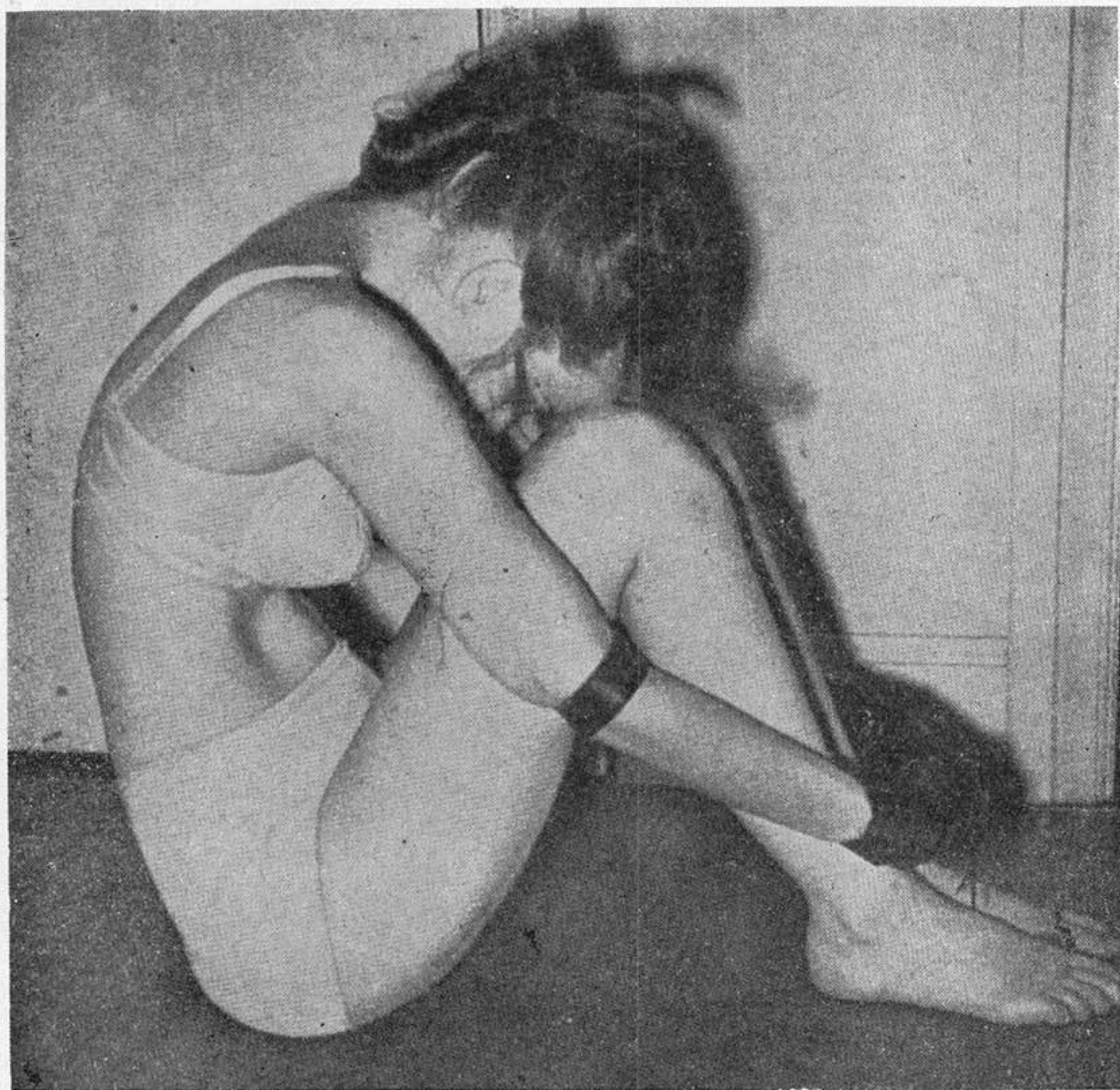


Photo from C.L.W.

後手縛りの二態

後 手 首 縄





後手首縄足首縛り

モデル・伊吹真佐子嬢

アメリカンスタイルの責め(2)

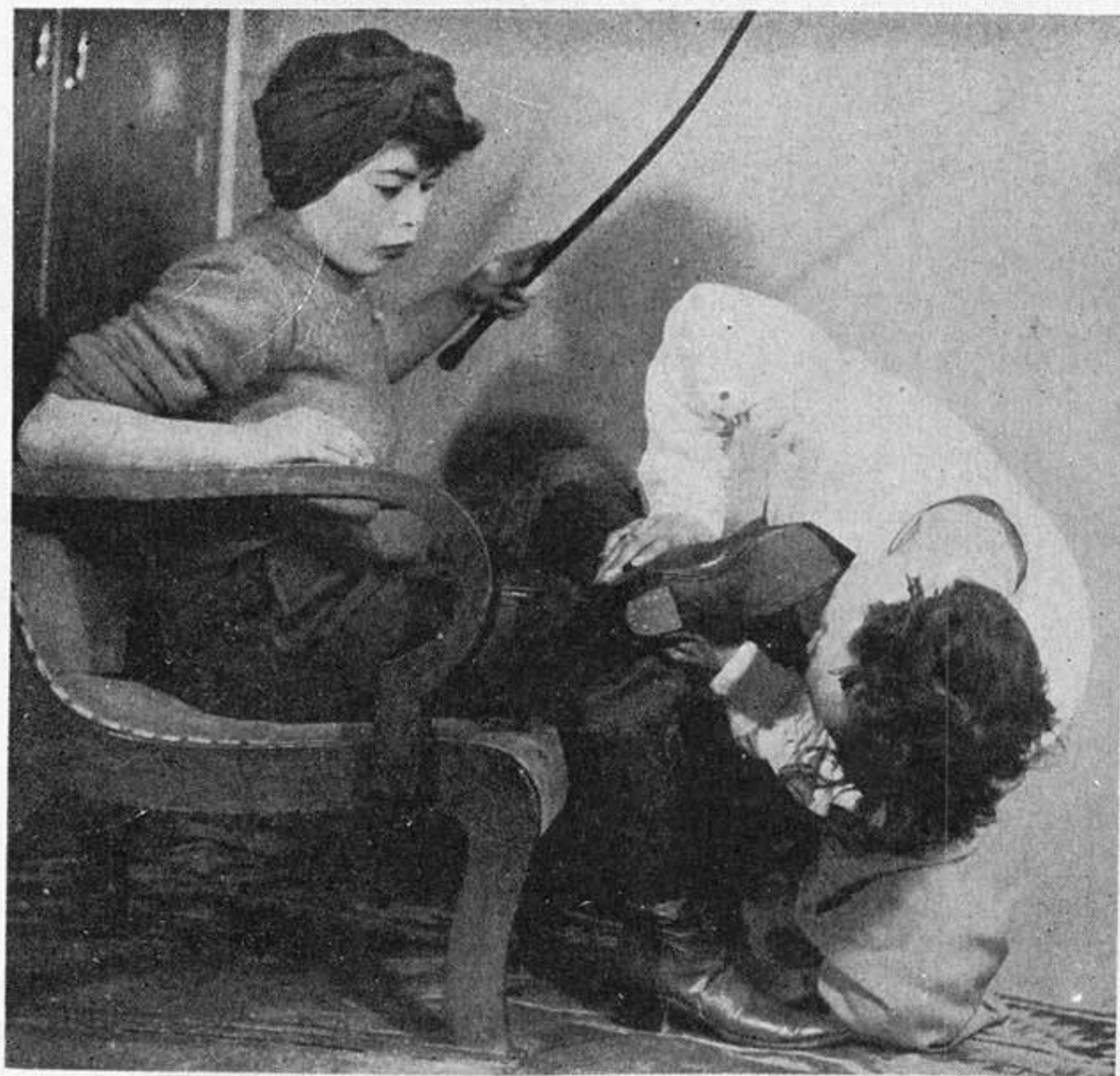
杉原虹児構成







乗馬靴の裏をおなめ！



これ犬奴

早く歩かないか！

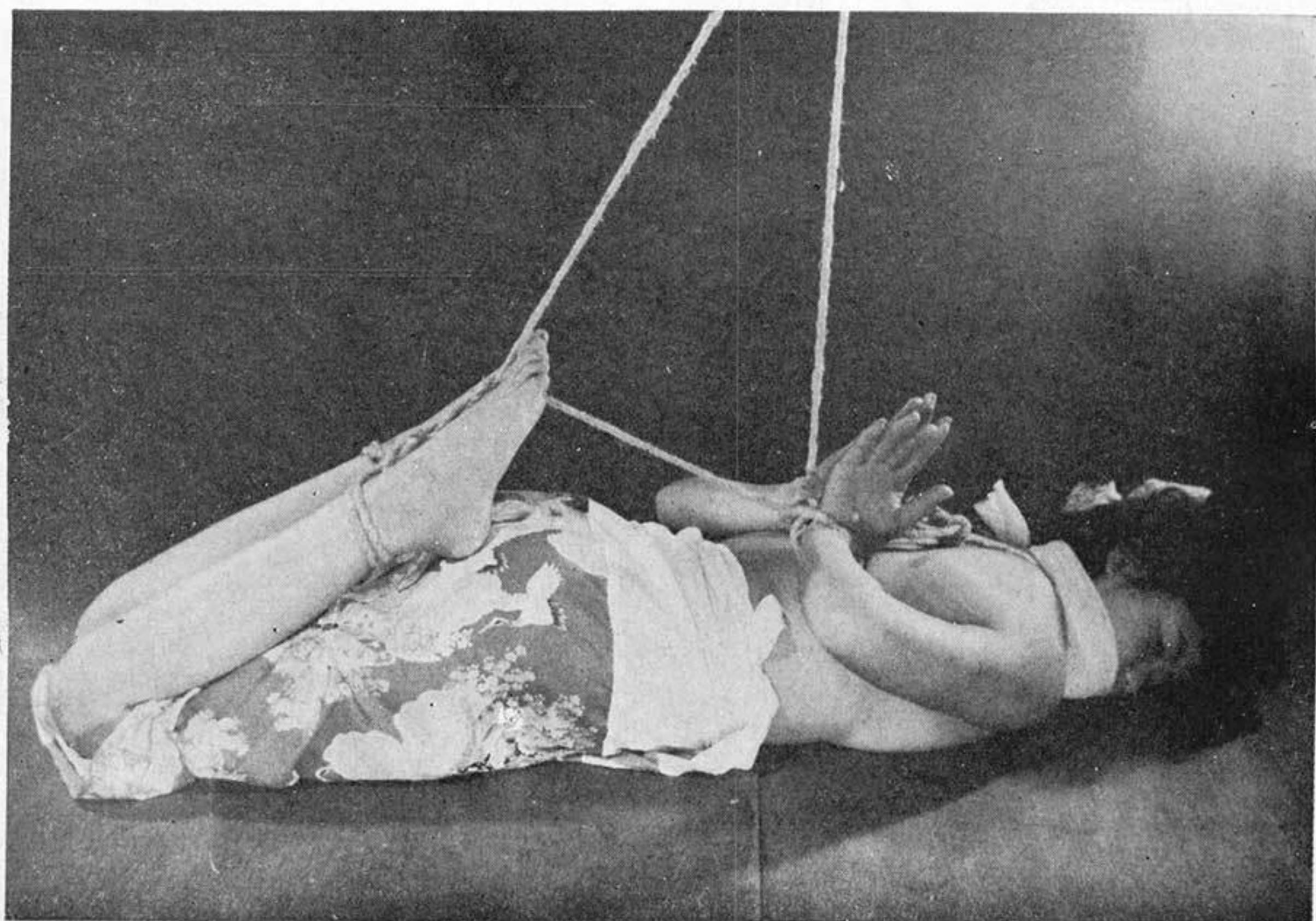
人
間
馬

天泥盛英指導



床 柱

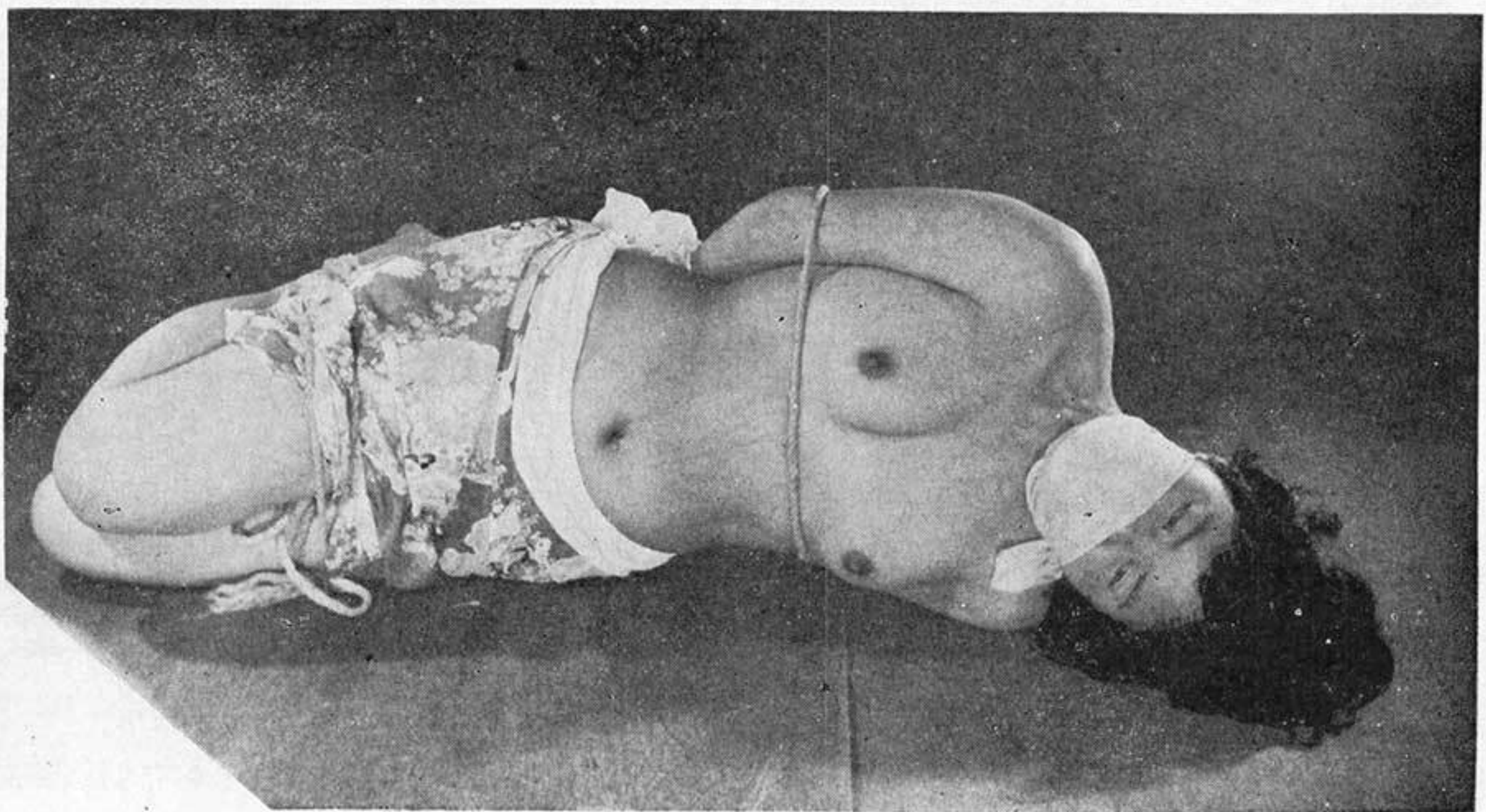
モデル・伊吹真佐子嬢



後手足-吊り

杉原虹児・構成

一本の縄

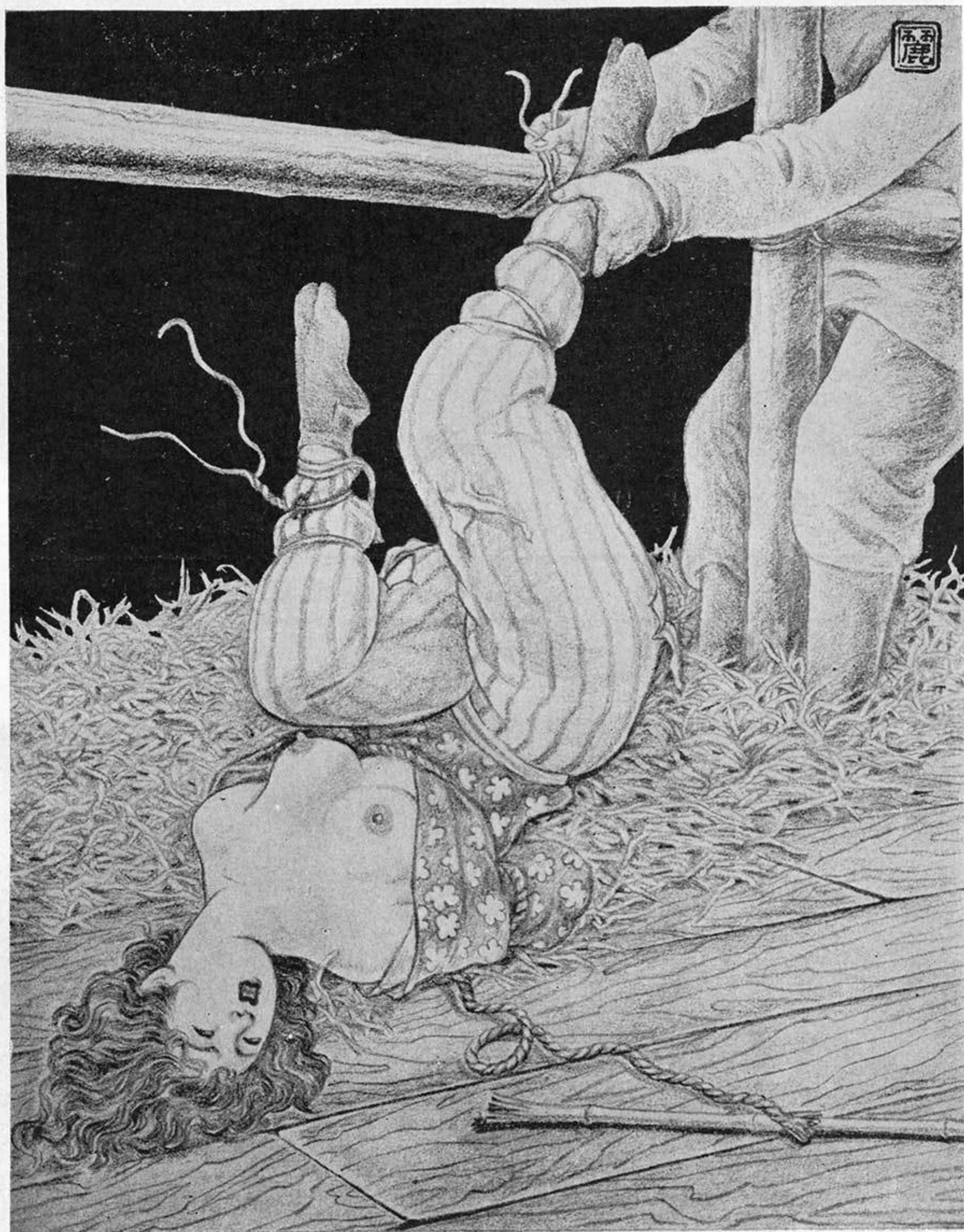


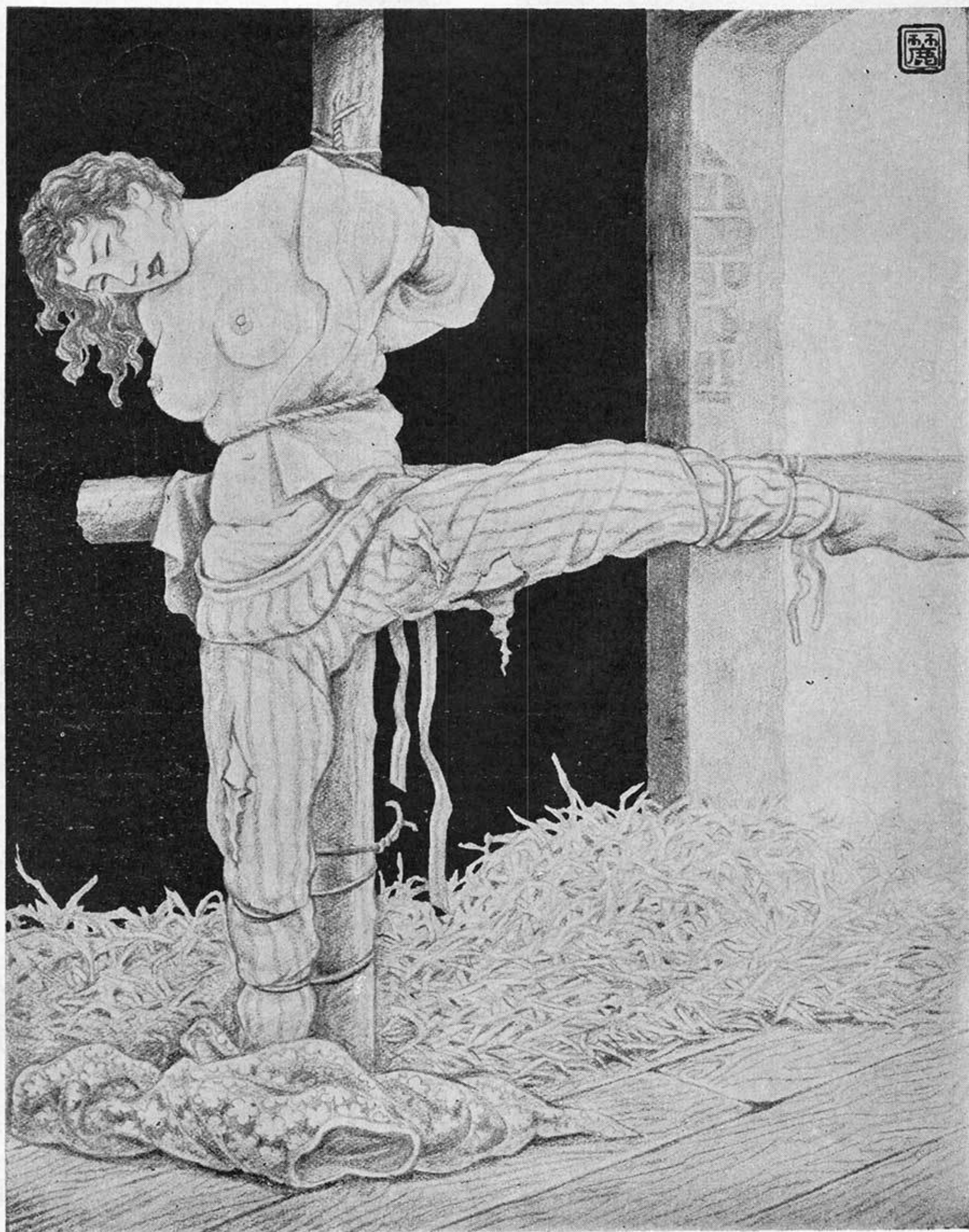
土

藏

敗戦の悲劇のアイデアより

瀧 麗 子 画





通り魔

乙女よ かりそめに さまよう勿れ

小





Suk.



SUK.

鶏盗人の野晒



「鶏盗人は畠の瓜盗人と違って出来心という軽いあつかいはされなかった。初犯でもひどく憎まれ、その証拠物である鶏を首にかけさせられ、野道に跪坐せしめ、野晒にあう。然し晒の期間は、習慣上、野晒三日という事になつていた。」

(刑事博物図録より)

新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

1954年 5月号

(第八巻 第五号 通刊第六十八号)

二 耕 根 三

少年
四年
獄
記

固く錠の下された厳丈な独房、窓の鉄格子は冷酷に月の光を遮ぎつていたのでした。浅黄色のゴリ／＼した固い木綿の布団二枚と同じ色の枕、板敷の房の真中に扉の方を頭にして敷かれています。頭の上には扉の視察孔があり夜寝ている時でさえ執拗な監視から逃れることは出来ないのが囚人なのです、その固い布団の上に私は傷ついた心と身体を投出している、何となく悲しくなってくるのです。あの故郷の美しい風景や懐かしい人々の面影を思い浮べるとたまらない淋しさに身を切られるように声を忍ばせて泣きました。

恐ろしいあの昼間の苛責をまざまざと思い出すと私の小さな胸の内に何とも云えない怒りすら湧いてくるのです。蛇の様な野村看守の冷たく光る細い眼、そして私を世間から無慈悲にも引離している此の暗い建物の存在を呪つてさえいるのでした。

扉の外をピタ／＼とゴム草履の音をさせながら夜勤の看守が巡視して行きます。足音の度に目を閉じます。書間受けたあのいわれなき苛責の痕はとてひどいものでした。厚い幅広のベルトで、しかも手足を縛られ自由を奪われた無抵抗の身を力一ぱい打たれたのですから今こうして布団に横たわつていても身

体中は腫れ上り燃えるように火照つていました。殊に野村看守が意識して狙つた臀部の二つの盛りは青紫色に色が変わつて所々には血さえにじんで未だにピク／＼と苦痛に震えてさえいるのです。

二度三度と寝返りを打つて少しでも肉体の疼痛を和らげようとしたが、それは唯布団の固さを思い知らされる丈のことでした。殺風景な天井には電灯が煌々と輝やいています。刑務所では夜間は決して電灯は消しません。それは逃亡とか自殺とかの事故を防ぐのが目的でとても嚴重なものです、泣いても叫んでもどうにもならぬ非情の世界なのですから。

こんな恐ろしい処に閉じ込められて、私の稚ない肉体は息もつまりそうで震えているのです。明日も、明後日も、そして四箇年もの間、私は毎日いつ襲うかも知れぬ看守の、そして同じ仲間である少年囚の暴力とに恐れ戦いていなければならぬと思うと、気が狂いそうでした。

野村看守はきつと明日も明後日も此の私の一寸した落度をうかがい、再び鞭打つ快感を味わおうとしているのに違いないのです。

あの時眼鏡の奥で妖しく燃えていた灼きつ

くような腫、私の頬が苦痛に歪み涙を流し脂汗に塗れていた時、あの冷たい蛇の目は歓喜に燃えてさえました。私の稚ない肉体が喘ぎ悶えている時、あの腫は淫らに輝やいてさえたのです。

そうです。野村看守は今から考えると紛れもないサジストでした。きつと鞭打ちながら悲鳴をき／＼ながら、嗜虐の果の恍惚に酔い痴れていたのに相違ありません。私の胸はそう考えた丈で、もう恐怖に押しひしがれて、果てしない絶望感となつて恐怖の深淵へと墜落してしまふのでした。こうして私は疼く鞭の痕を押さえながら深い心身の疲れにいつしか泣き／＼寝入つてしまつていました。

翌日、朝食が終ると雑役の少年がやつてきて、作業のやり方を教えてくれました。作業というのは軍手の仕上で、指先が、やゴム摘み部分の縫い合せて簡単そうで仲々難しいのです、雑役はそれでも先輩らしく何度も繰返して親切に教えてくれるのでした。

彼はその合間に私の年令や郷里や犯罪等を小声で訊ねます。そうして彼自身のことも教えてくれるのです、此の小柄な色の浅黒い少年は今年十九才で一年以上三年の刑で今年の秋に出所するのだそうです。出るとすぐ又兵

隊だよ、と云つてこぼしていました。彼は私達新入者と違つて国防色のキチツとした服を着ていました。その上着の襟には軍隊そっくりの襟章があり、左は566と囚人番号、右はⅡと云うアラビア数字がついているのです。私が訊ねると彼は次の様な事を教えてくれました。

そのアラビア数字は少年囚の所内に於ける階級を示しているのです、彼の階級は三級であつて566と云うのは称呼番号つまり所内での彼の名前に当る訳です、社会でどんなに地位の高い者であつても、一旦罪を犯して刑務所に入られると、社会での地位も名前も無視される訳です、階級は一級を最上級として四級迄あり、少年囚達の学課、教練、作業行状、などの成績に応じて毎月点数が与えられ、それが一定の点数になると審査会で審議されて通過すると進級すると云う仕組で、その間に事故反則があると降級されたり、進級停止などになる訳です。勿論階級に依つて種々の特権が与えられ優遇されることになつてゐるのです。（これに就いては後で詳述します）

雑役の少年はいろ／＼とそうした事を話してくれるのですが、無論野村看守の隙をみな

がらのことでした。こんな事も云うのです、
「お前は氣をつけるよ、工場じや河童共が、
お前にもう目をつけて、下りるのを待つてい
るから」

私は十四才の初犯で何のことやら分らない
ので不審そうな顔をしていると、彼は苦笑し
ながら、

「お前が余り可愛い顔してるからだよ、工場
へ下りると引張りだこだぜ、だけど反則じや
逃走の次に重いんだから氣をつけるよ」

私はそれでもなんの事か分りませんでした
が、やがて工場へ出て、いやと云う程その意
味をさとらねばなりませんでした。

さて、作業用の材料と器具を入れて貰つて
からは、仕事をしていることに依つて氣が紛
れて、時間の経つのがとても早く感じるので
した、すべてを忘れてその神経の要る作業に
熱中していると、突然ガチャ／＼と鍵の音が
して房の扉が開けられました、ハツとして見
るとそこには野村看守が立っています。私は
思わず身をすくめました。しかし今日の野村
看守は手に鍵を持つてゐる丈で、あの恐ろし
い鞭も捕縄も持つてはいません。野村看守は
ニヤ／＼笑いながら

「オイ、お前はその手袋が、一日どれ丈出来

る？」

と訊ねるのです、私は正直に

「ハイ、十足位です」

と答えました。實際夢中でやつても十足程

度が私の精一ぱいの能力だったからです。

「何だつて十足だア、オイ科程は一日二十四
足だぞ、十足ぼつちじや飯も喰えん、出来ん
奴は出来る様に教育してやるからそのつもり
で頑張るんだ、いゝな。」

そう云つて扉をガチャ／＼と閉めました。さ

あ私は震え上つてしまいました。ソビエトで
は囚人は勿論一般勞働者にもノルマがあると
云うことですが、刑務所にも科程と云つて一

日の責任作業量が定められているのでした。
十足しか出来ない私には二十四足と云えば倍
以上で、どんなに目の色変えてやつても不可

能です、しかし野村看守は出来ん奴は出来る
ように教育してやると云いました。教育とは
無論云わずと知れています。私の胸には恐ろ
しい予感がします。あの辛かつた苛責はまだ
私の身体に痕すら残しているのです。まだ疼
いてさえいるのですから。

私は懸命に針をあやつり眼を皿の様にして
作業に没頭しました。それこそ寝食を忘れる
思いでした。しかし現實はやつと十五足が精

一ぱいでした。もう駄目だ！ しかしその日
は別に何事なくすみました、だが私の胸は不
安で一ぱいで、その夜は何度恐ろしい夢でう
なされたことか、翌日もそして又翌日も。

恐ろしい予感が現實となつて現われたのは
丁度三日目のことでした。その日は、野村看
守は朝から氣嫌が悪いらしく雑役に矢鱈と怒
鳴られているのでした。四舎中は来るべき嵐
の恐ろしさを感じてヒツソリと静まり返つて
いるのです。私にもその險惡な空氣は感じら
れて震えながら一生懸命針を動かしていたの
です。昼食が終つて三十分程してからでしよ
うか野村看守は雑役に何事かを命じました。
雑役の少年は各房の入口に掛けられている科
程表を集め始めました、私はドキツと胸がつ
まる思いでした。

此の科程表と云うのは各人の毎日の作業量
が記入されているのです。此の表を見れば少
年囚達の作業の成績は、一目で分るのです、
そうすると私は教育を受ける資格の持主であ
り、引張り出されることを覚悟せねばなりま
せん。私は針を動かしていても外の氣配に耳
を澄ませて心を凍らせていなければならな
いのでした、本当にその時は翼があつたら逃げ
たいとさえ思いました。でも此の古ぼけた木

造の板壁は何と堅固なものでしょう。窓には赤茶けた鉄棒が私を嘲笑するかの様にガツチリと嵌っているのです。仮りに奇蹟が起つて板

壁を破り鉄棒をへし曲げて窓の外に出て見た所で、あの高い赤煉瓦の塀や四隅の監視所、巡廻している警戒の看守達をどうすることも



出来ないのです。結局は鳥肉屋の店先に籠に伏せられて料理されるのを待つ鶏と同じことなのです、それが囚人の甘受せねばならない苛酷な運命なのです。私の目には恐ろしさを通り越して口惜し涙がふくれ上つてくるのでした。

ガチャ／＼と扉を開ける音がして、五・六人呼出された様子で、やがて野村看守の喚声がかきこえ、それは次にはピシツピシツと云う鞭音となり、悲鳴と変つて行きました、私共囚人にとつて此の同囚の悲鳴は何より辛いものです。一種の精神的拷問とも云えましようア、始つたと思うと、私はもう身体がブルブルと小刻みに震えてくるのを押えられないのです。何と云つても十四才の稚さは哀しいものでした、少年刑務所に送られるのは一度や二度の警察沙汰ではなく、数回も感化院に入つたような常習犯罪の少年達が圧倒的に多く九割程を占めているのです。しかし私の場合は前に書いたように特殊のケースであり、生れて始めて警察の手にかゝるとそのまま獄舎への道に直結していたのです、ですから変な話ですが多くの著にも棒にもかゝらぬスレツカラシの少年囚の中での私は純真でありあどけなさが残っていた所に私の悲劇があつた

とも云えましょう。

さて外では次から次へと引張り出されてやられていきます、こうして十五、六名もやられてからでした。ガチャリと私の房の扉が開けられました。きたな、と思うと私は狂い出し、そんな恐怖感で口も利けないのでした。

「オイ、二〇七番出てこい」

野村看守の冷たい声です、私はふら／＼と立上ると外へ出て野村看守の後についてゆくより仕方がないので、刑務所内では如何なる弁解も哀願も認められないのです。野村看守の机の前に立つと廊下の向うの方で心配気に眺めている難役囚の少年の姿が目に入りました。しかしそれが何の心の支えになるのでしょうか、むしろこれから展開されるであろう私の被虐の姿をその目にも晒さねばならないのかと思うと恥ずかしさでクラ／＼とする思いでさえあつたのです。

野村看守はもう大分撲り疲れたとみえて物も云わず、難しい顔をして机上の書類やら科程表やらを仔細ありげに眺めているのです。でも私には分ります、野村看守は今迄つづけてきた悦虐の仕上を私の稚い肉体で果たそうとしているのです、今、野村看守の胸の中には淫虐の炎が燃え上っているのでしょうか、そ

の証拠に頬にテラ／＼と血が昇り、眼がキラ／＼と輝き始めているのです。大勢の少年達を苛み苦しめてその仕上げに私の汚れを知らない稚い肉体を選んだに違いないのです。私は気が遠くなるような思いで足がふらつくのです。

「どうだ少し怠けているようだな、馬鹿々々しくて一生懸命なんかやれないかヨ、エ、」怠けている？ とんでもない事です。恐らく私がこんな真剣に仕事と取組んだことは今迄になかったのですから。

「先生、怠けちゃいけません。一生懸命やつてゐんです。でも、出来ないんです。」

私には精一ぱいの弁解であり抗議でした。

先生？ 何と云うことでしよう、規則で看守を先生と呼ぶのですが、こんな悪魔の様な看守にすら先生と呼ばねばならないのでしょうか？ しかしそれは私が囚人である以上は悲しい現実なのです。

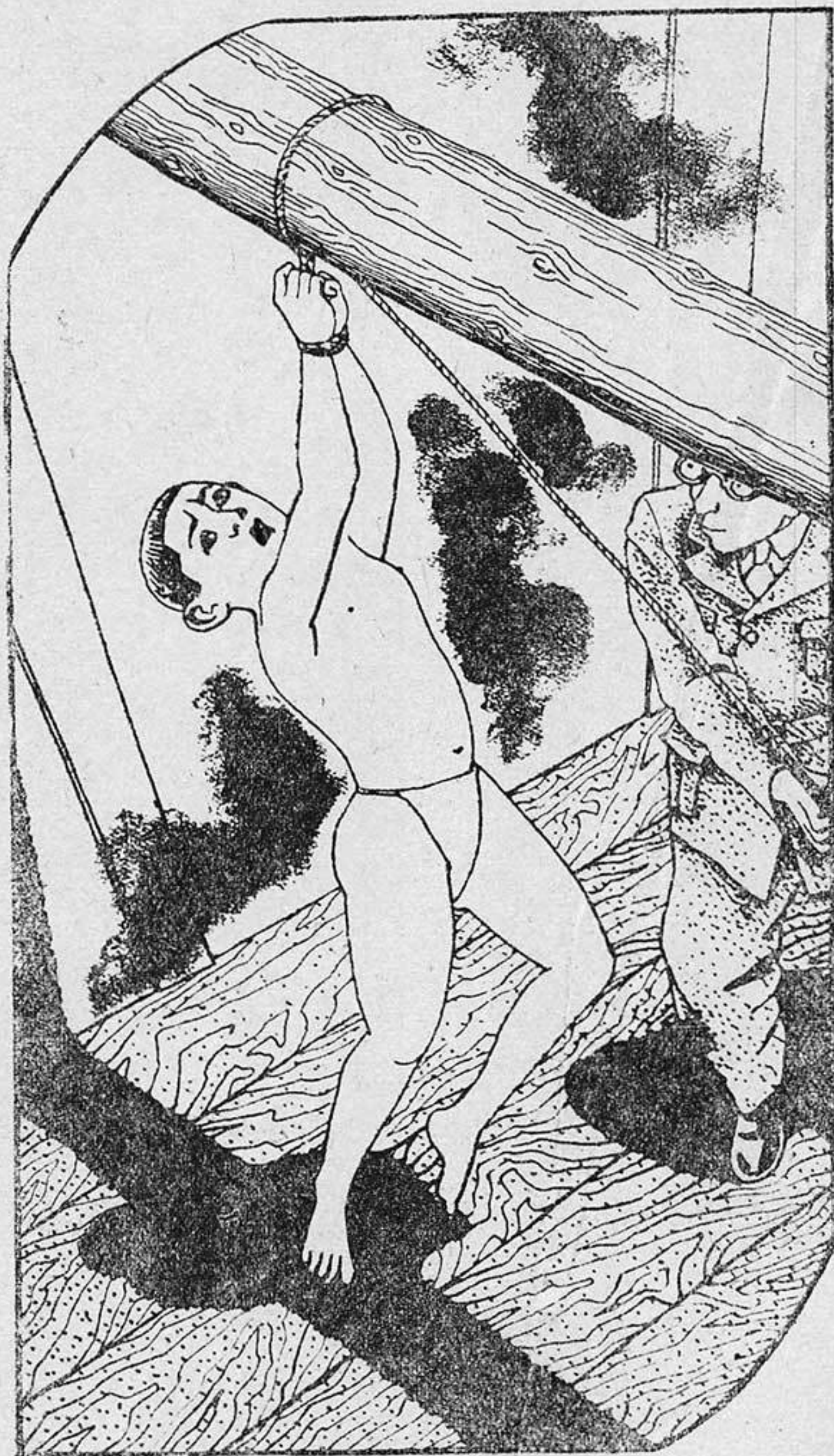
「馬鹿野郎、他の者に出来ることがどうしてお前に出来ないんだ。怠けてるから出来ないんだ。出来ないなら出来る迄教育してやるからな。」

野村看守は勝利に酔っています。無抵抗の囚人に優越感を味わっているのです。

「オイ、ズボンとシャツを脱げッ、大切な官品だからナ」

私の体内に屈辱感がみなぎります。薄いシャツやズボンよりも無難作に扱われる人間の口惜しさでした、しかし此の屈辱感こそ、野村看守が周到に計算した心理的凌辱であるのでしよう。私は口惜し涙を浮かべながらシャツを脱ぎズボンを取り去りました。身体をおくものは只一枚のふんどし丈でした。むき出しになつた私の白い肉体にはまだ先日鞭の痕が消えてはいません。下半身に野村看守は淫らに視線を走らせるのです。私はその度に悪感のする思いで目を伏せました。野村看守はしばらく眺め廻していましたが、やがて私を一番奥の空房へ連れて行きました。そこは雑役の物置部屋になつていたので、中に一本横に丸太の柱が渡してあるのです。

野村看守は私の両手首に捕縄をかけるとその柱に吊上げました。足がやつと床にふれる程度にして固く縛りつけるのです。今日は何を企んでいるのでしょうか、私は両手を吊られた恰好でみじめな姿を野村看守の眼前に晒しているのです。私の身体を掩っている只一枚のふんどしは小さくて、ともすれば隠されるべき部分さえも満足に掩われずに私の羞し



さを倍加させるのです。しばらく野村看守は私のむき出しの身体を眺めていましたが、何を考えついたのか雑役の少年を呼びました。「オイ、こいつの下帯、汚れてるから取替えてやれ」

雑役は私のみじめな姿に顔をそむけながら「ハイ、後で房へ入れてやります」

と答えました、すると野村看守はニヤ／＼笑いながら

「いや、今外して持つて行け」

と云うのです。ひどい事を云うものです。

私は思わず顔が赤くなりました、ためらっている雑役に

「早くせんか」

と急ぎ立てる野村看守の声で雑役の少年は止むなく私のそばにやつてきて、ふんどしの結び目に手をかけました。私は必死になつて悶えました、彼の顔も紅潮しています。幾分震えを帯びた彼の手は暴れる私の為に仲々結び目は解けません。彼とても十九才であり思春期も過ぎた青年ですから、此んな役目には閉口する訳です、いや止むを得ず看守の命でやるのか、或いは野村看守の意志以上に自らも此の自由を奪われた美少年を全裸にすることに喜びを感じているのではないのでしょうか？

「ア、、、、、」

と私は身をくねらせました。

思春期と云う年令は自分の肉体のすみ／＼迄秘密を感じますし、他人にそれを見せるなんてことは非常な羞恥を感じます。幾ら同性の前でも裸体を見られると云うことは穴があつたら入りたい程の羞しさなのですし、しかもそれが自分の意志に反して自由を奪われていてそうされると云うことは何と云う辱しめです

よう。しかも悲しい肉体の生理は私の意志とは反対に、いつの間にか、私の顔は真赤に染っているのです。

野村看守も気がついていらしく面白そうに淫らな視線を走らせます。こうしている内に私の最後の一枚もはぎ取られてしまつていました、本当の生れた時そのままの姿で私は白昼の光線の中で野村看守や雑役の少年の展観に供してしまつていたのでした。雑役は外へ出ましたが、すぐ入つてきて野村看守に「先生、部長の巡廻です」と告げました。すると流石に野村看守はあわてゝ、雑役に

「オイ、一寸猿轡しとけ、そしてお前、こゝにいて中を整頓してゐるようにしろ」

とソクサと云いつけて外に出ようとして、又雑役に

「オイ特別に許可してやるから此奴と遊んでいゝぞ」

と云つてニヤツと笑うのです。さすがにこの意味は私にも分つたので私は大声を出そうとしましたが、その時はもう物置内に沢山置かれてあつた布切で、私の口は雑役に塞がれていて声にはならないのです。雑役は布切れを私の口の中にイヤと云う程詰め込んで、そ

の上から手拭で固く猿轡をしてしまいました。彼の頬も真赤に上気しているのです、彼は私と扉との間にマツトとか色々な物をかけて、部長が覗いても私の姿が見えない様にしてしまいました。こうなると同囚で、可哀そうと思うよりも、美少年を苛めたいという誘惑に負けるのでしよう、彼は私のぶら／＼暴れる足も布切で縛つてしまふのでした。

「ウゝゝゝ」

私は声にならない声を出してもがきましたしかし手も足も固定された恰好で吊下つていては、どうにもならず、私はそこで此の雑役の少年のなすがまゝになつてゐるより仕方がなかつたのです。私もいつか苦しみや羞しさも忘れ果てゝいました。これがマゾというのでしようか。でも、此の時の気持は今でも私の求める特殊なものであつた事を白状して置きます。

こうして看守と雑役と二人で行われた奇妙な悦虐の日も過ぎて、此の四舎の独房に収容されてから廿八日目に私は戒護課に呼び出されて「工場行」を云い渡されました。

あゝ、工場、あの雑役の少年が大勢の河童共がお前の下りるのを待つてゐると教えてくれた処なのです。

私は一緒に工場へ出役する十二・三人の新入囚と共に四舎に別れを告げました。野村看守も雑役の少年もニヤリと奇妙な笑いで私達を送つてくれました。こうして私の告白はいよいよ工場篇へとペンを進めることになりました。

(此の項終り)

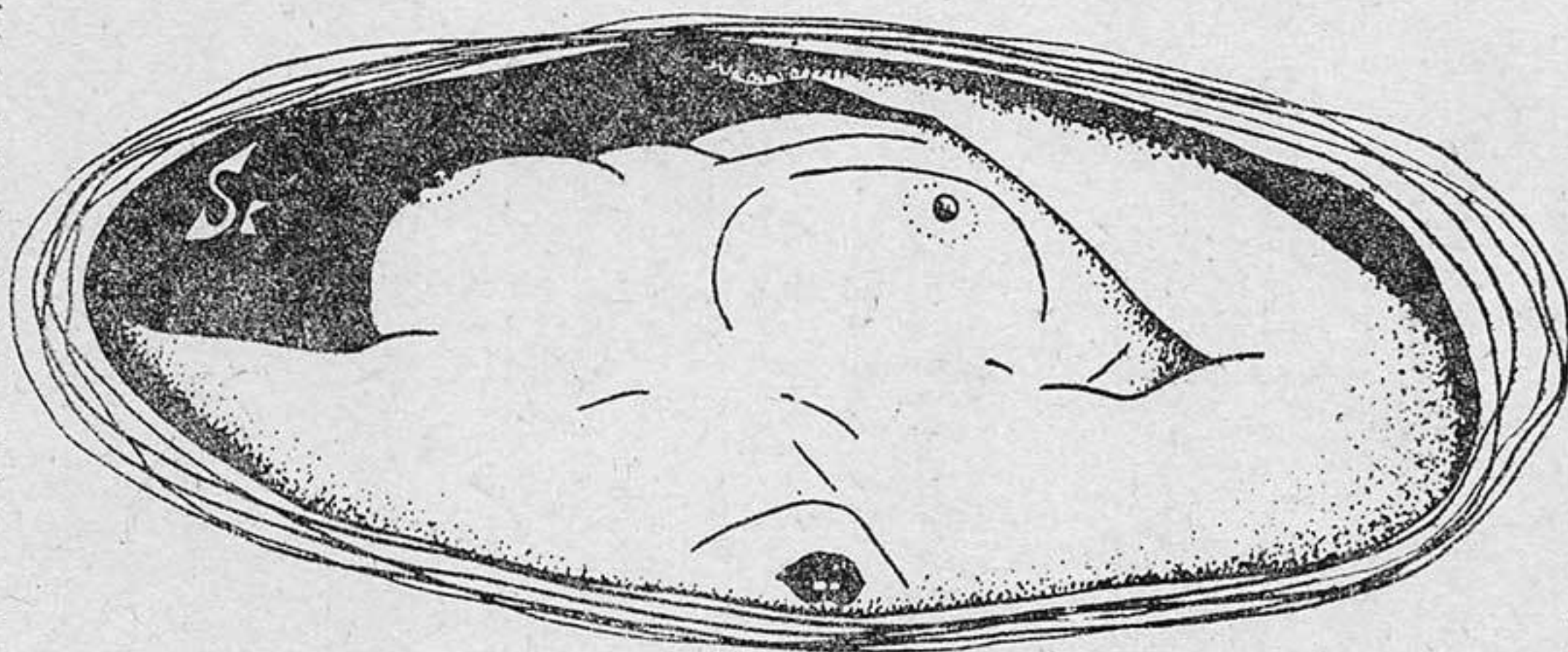
【読者通信】

(投稿歓迎)

奇ク四月号オヒザモトの大阪で求めました開頁一番滝女史の「縛り方教室」いつもの如く中々面白く楽しく拝見しました。猿ぐつわを全部ハメてあるので一層「よさ」を感じました。坂口嬢モデルによる口絵写真、高手小手はいただける作です。目をかツとむいて(どうにもするが)といつた感じを出した方が活きたのではないでしようか、柱しはりは猿ぐつわを咬んでいますが、やはり口へ覆うべきです。そうすると顔の美しさが倍加するのですが惜しいことです。勿論、目を開けて絶望の情を表すべきだつたと思います。アチラ物は奇抜、舞台写真は珍、誠に結構なくめで結構でした。轢殺は無残で美しさがなく第一「縛り」から、まるきり縁がなく、とても見られません。あの画技を以てストーリーのある「縛りもの」を望みます。久留木栄氏の「縄をめぐる随想」は共感を強く呼ぶと共に美しき限りでした。小生の妻は縛られることを好まず、——中略——一読、あゝ、いゝなアとタンソク久しくしました。

(大阪にて東京池袋R・O生)

悪 の 部 屋



二 俣 志 津 子

アクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘ

アクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘヤアクノヘ

——女と言う動物は、とに角不思議な動物だな。変らないと思えばどの女も全く同じだ。

違うと思えば一人の女は太陽の動きと共に変化しているんだ。と正木は呟いた。

「で、金は?。」

「はア、どうぞ。」

私はテーブルの下で正木の掌に札束を渡して、テーブルの上でネガとフオートを受取った。

一瞬正木の顔に心残りの表情が動いたが、こゝで乗ぜられたら何んにもならない。冷血動物のような非情な彼につけ込まれるのは、つけ込まれる方が悪いのだ。女の敵であると共に男だ。すべてのひとはひとりだ。自分以外はすべて敵だ。女はあらゆるもので武装しなければならぬ。左手に鳩をかゝげたら、左手に剣を持たねばならない。

「じゃ。」

「コーヒを飲んでから行き給え。」

正木は急に立上った私を少し狼狽気味に仰いで言った。

「結構です。私はまだ手をつけていませんからどうぞ、正木さん、あがつて下さいナ。」

私は一寸しなをつくつて、微笑してから大股に喫茶店を出た。何とも言えぬ爽快な気分に分分私は酔っていた。

——調子がいいぞ。

大塚智子の借りている部屋を引払わせて、敷金二万五千円を家主

から是が否でも、と、奪うように取つてきて、正木と約束の時間に約束の場所へ、少しく打しほれた恰好をわざ／＼とりつくろつてやつてきたのだ。智子の荷物は私の借家へ運ぶように運送屋に任してきていた。

——いよいよこれから二俣淫房を始めるか。

淫房とはよくぞ言つたものだ。とに角、智子は短期日に降服させ、私が養い育てて学校へ通わして、時々男を与えてやろう。

私の心は軽かつた。兄はもう荻窪の私の部屋へは足を向けないであろうし、正木とて同じことだ。たゞ、姓は不明だがあのしのぶと言う女性はわからない。それに、私はひどくしてやられたことが原因してか、彼女のことを考えると何と言うことなく気おくれがするのをどうすることも出来ない。これは克服しなければならぬ。それにこれからは私一人で生きて行かなければならないのだ。誰の援助も受けずに女が一人で生きて行くと言うことは容易ではない。が、男だつて同様であるに違いない。男一人で生きて行くには容易であるまい。

私は天井裏の捕虜、囚人のために御馳走を買つて部屋へ帰つた。

ハンコの注文はまるでなかつた。しかし、

そんなことはちつとも気にならない。

私は埃にまみれた仕事台をちらつと見て、天井裏へ上つて行つた。大の字に手足を梁に縛りつけられた全裸の智子は二燭一つの電燈の明るさでもわかるほどに眼をギラギラ光らせて私の行動を注視していた。全くいい肢体をしている娘だ。私は二畳の天井裏に押し込めておくのもいいが、こう、少し広いところへ魚の干物のようにひろげておくのも悪くないと思つた。

「どう？、何か喰べる。」

「いらぬ。」

「そのうちに、たべなくなるわよ。」

「たべない。」

「たべるわ」

「ぜつたいに。」

「今でもたべるわ。」

智子は顔をそむけた。私は、天井から抜け落ちないように注意しながら智子の頭の方へまわつた。

「たべるわよ。」

智子は私から顔をそむけようとする。私はそつと彼女の乳房をおさえてみた。

「いい乳房ね。」

「……………」

「一寸……………てね。」

「……………」

「いや？、でも兄には、……………じゃないの。いずれ私も……………あげるけどね。」

「殺して！」

「いやーよ。大切な、美くしい囚人をどうして殺せましょうか！今に、くたくたにして、骨をすつかり抜いてしまつて、私の奴隷にしてあげようと思つているのに。」

「殺して！」

「お馬鹿さんね。生きているつて言うことは楽しいじゃない。私も……………なるわね。」

私は下へ降りて玄関や窓の鍵を閉め、再び天井裏へ上つて、智子を二帖の方へ移し、両膝を立てさせた。

私は自分の肢体には自信があつた。私は、すつかり……………なると、……………ところを一寸



……てみて微笑した、何とも言い知れぬ感覚がそくつと全身を走る。

「……どうぞ、……で私の身体を……でも結構でございます。」

両手の首の自由を失っている彼女の足だけを自由にしてやつてそう言った。

しかし、彼女は、全く無抵抗であつた。私は拍子抜けがして、目を閉じている智子を見た。

閉じている彼女の眼から、あとからあとから涙が流れ落ちていた。

——同情してなんかいられない！、同情していたら、いつ私がやられちゃうかしれない。しのぶの時がそうだ。奴隷は奴隷として扱わなければならぬし、勝者は勝者らしく振舞おう。足を自由にしてやつただけでもせめての情だわ。

私は智子の……さりとした……共に……つた……を一寸……でみた。と彼女の全身はぴくつと動いた。が、それだけで何の反応もない。私は静かに、そして、次第に強く彼女を叩き、ゆさぶつた。が、しかし、彼女は全身の力を抜いたままであつた。

——手の自由も許してやろうか？

——いけないく、そんなことをすれば私が

やられる恐れがある。

——いいじゃないか、やられたつていゝわ、いえやられないわ。

——でも、こんなことはいやだ、と、私をこゝへ縛りつけたまゝ逃げられたら終りだわ。今度こそ終りだわ、兄も正木も来る筈はないし、ミイラになつちやうワ。

——くすぐつてみようかしら？

これは全く良い思い付きであつた。このくすぐりは忽ち効を奏した。彼女は全身をくねらせ、……で……の……を……め、或いは肩を振り……を……させ、私のくすぐりから逃げようともがいた。

「はア、は、苦しい」

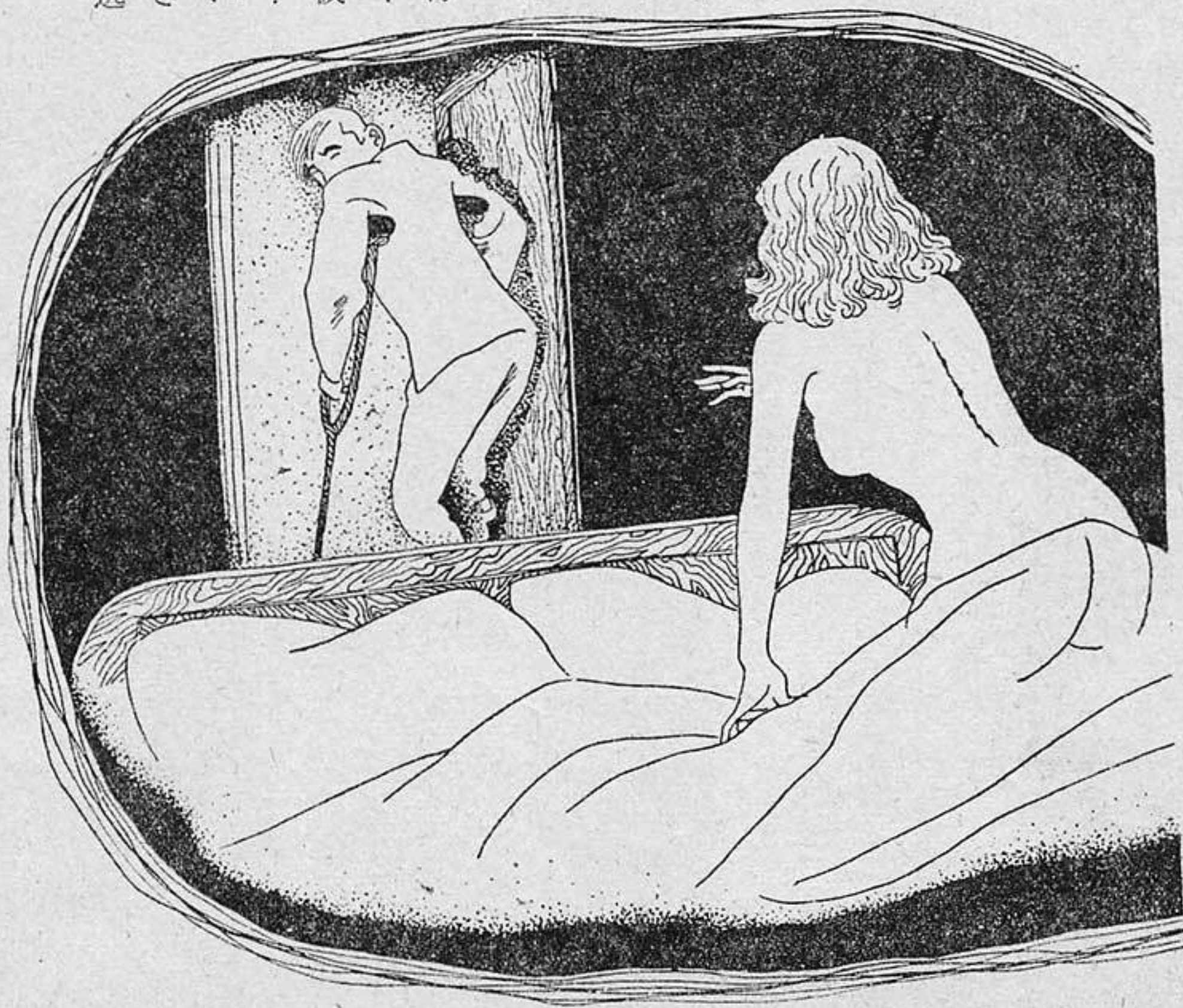
「ほゝ、こゝはどう？」

「は、止めて、は、は、止めて、」

「いやよ。私、あなたが苦しむのが楽しいの

よ。」

「ほか、ほかのとなら、どんなことでもこられます。これだけは、やめて。」



「いや！、私、楽しいわ。こゝ、こゝはどう
ほゝ、こゝは、こゝは。」

「やめて、はア、死にそう！」

「死になさいよ。」

私は智子のあらゆるところをくすぐりつづけた。一度くすぐつたくなると、どんなところでもくすぐつたくなるものだ。ふだん何でもないと、一寸ふれてもたまらなくなる。

智子の今がそれだ。

「私の言うことなら、何でもきく？」

「きゝます。きゝますから、止めて下さい。

あ、あ！、あ！。」

「食事する？」

「します。」

「パンパンになる？」

「なるわ。」

「兄を返す？」

「えゝ、だから、止めて。」

「もう一つ。」

「一生、私の奴隷になる？勿論、結婚させてやるけど……」

「何んでもいいですから、やめて下さい。お願い。」

「そう、じゃ、やめるワ。」

私がくすぐるのをやめると、彼女は、今度は本当に芯からぐつたりとしてしまった。そして、素直に、私が口へ運んでやるものを食べ始めた。全身をまだ波打たしたまゝ、……彼女の食事が終ると、私は優しく彼女を抱いて、そのまゝ眼を閉じ、少し熱を帯びた彼女の……を静かに……まわした。

二

×月×日

「開けよ、扉！」男はみんなそう言っているようだ。そして、その中の宝物を盗み出そうとするのだ。欲の張つた者は、扉の中に入つて、宝物に心を奪われ、遂には扉から出られなくなってしまう。

「開け、扉！」

私は、夜を、海の如き夜を、海の如き夜の街を夜光虫となつて、きらびやかに歩く。

「開け、扉！」

愚かにして貪欲なる男共は私に向つて夜毎に叫ぶ。私の室の扉は静かに開いて男をのみ込んでしまう。そして、頭のズイまで絞つて吐き出す。と、すぐに耳元で呪文がとなえられる。

「開けよ、扉！」

——おや？

私は扉を開いて一人の男を吞み込んでから、その男が、且て夫と呼んだ男であることに気付いた。この技巧は忘れない。なかく、味をやるわい。と、すると、あれから大分数多く扉を開いてきたにちがいない。

私は一寸懐しかったが、黙つてそのまゝ吐き出してしまった。そして、さよならも言わずに別れてしまった。かすかな感傷は、すぐに雑踏する足音にかき消されてしまった。

私は、すっかり墮落してしまつた。美しいものに対する憧憬も、ある種の好奇心も、権力に対するレヂストも、消滅してしまつた。私には、もう如何なるパツションも湧いて来なくなつてしまつたのではないだろうか。たゞ、あの荻窪の家で縛られていた感覚だけが、山火事で消え残つた地中の松の根のように、私の肉体の奥底で燃えつづけているようだ。しかし、「開けよ、扉！」と、となえる男共の中で、一人として私を縛ろうと言う者は居ない。はなはだしい者は公衆電話のボックスで小用をすますようにして、あわただしく闇の中に消えて行く。以然の私だつたら絶対にそんなところで……はしなかつたけれども……今はまるで痴呆だ。金が欲し

いのではない。情性にすぎない。

しかし私は、バタフライではない、バタフライと言う語感からくる浮薄さがやり切れない。それに、何と言う屈辱的な言葉だろう。バタフライ——ラシヤメン——パンパン——これに対して私は一つの古くて新らしい日本語を、まず私自身に冠し、且つ同様の境遇にある女性達に贈ろう！

「夜光虫」

私は美しい夜光虫だ。昼間はみすぼらしく、すべてが何となく面映ゆいが……

夜光虫

夜の装い

……

と言うような詩があつたつけ。

× 月 × 日

私は一人のみすぼらしい、松葉杖をついた青年を捉えた。一寸二俣三郎を想い出して、
「開けよ、扉！」とも言わずに、むしろ私を避けるようにして通すぎようとした彼を捉えたのだ。

(縛られたいッ！)

「お茶をのみに行かないこと？」

青年は夜目にもわかるほど赤面してドモツ

た。

「ぼ、ぼく、お金、な、ないんです。」
「いいわ。誰だつて、お金ない時つてあるのよ。今夜、私、少し嬉しいことがあるの。それで、つい呼止めちやつたのよ。私、おどるわ。ね？ いいでしょ？」
「でも、ぼく、いつも、お金ないんです。見も知らぬ女の方におどつていただいても、僕、困ります。」

「困ることなんかちつともないワ。あなたつて初心ね。気に入つたワ。男つてね。もつとゆつたり構えているもんよ。おどるわ。と言つたら、あゝ、そうかい。と、黙つておどられるの。わかつた。あなたが良心的に何かお返ししたかつたら、私、あなたに出来ることを何か要求するわ。ね。」

私はタクシーを呼止めて、まだ渋つている青年と共に乗つた。そして、私は久しぶりにまともなホテルの名を運転手に言つた。

ホテルに着くと、青年は目を見張り、おどおどと私の影のように従いて来た。それが、いじらしいようでもあり、齒掻くもあつた。

案内された部屋は可成り上等で、設備も調つていた。青年はホテルへ入つたことも初めてであるらしく、じかも、泊る。と、言うこ

とに私が勝手に決めてしまつたのを見て、すっかり困惑している様子であつた。

私達は定食をとり、少しばかりカクテルを飲んだ。

青年は憐みを乞うように私を見て、

「帰して下さい。」

「あら、どうして？、私、宿帳に夫婦と書きましたのよ。夫だけ帰つてしまふのは、それでは私の立場がなくなりますワ。」

「でも……どうして、僕をこんなに困らせるのですか？」

「あなたが気に入つたからよ。今夜、結婚しましょう。」

「青年は真赤になつて俯いてしまつた。」

「からかわないで下さい。」

「いえ、私も真剣よ。あなた、私が嘘をついていると思つて？、私があるあなたをからかつていると、思いになつて？」

「いえ、」

「私がおきらい？」

青年はちらつと私を見てすぐに伏目になつてしまつた。

「さ、もう一杯ぐつとやつて」

「でも、僕、のめないんです。」

「三三九度よ。あなた、男でしょ？」

「えゝ」
「じゃ、」

私は本当に結婚するようになった。そして、結婚したい。と思つた。

——ふん、殊勝らしくね。

私は自嘲してカクテルをぐつと飲んだ。青年は小児麻痺らしかった。

「さ、休みましょ。」

「は。」

「いやあね。は、だなんて。」

「は、すいません。」

私はついふき出してしまった。

二人は背を向け合つてバチヤマに着替えたが、青年は、ベツトの上にキチンと坐つたまま横になろうとしなかつた。で、私もわざとキチンと坐つてかしまつた。

「あなたがお休みにならないと、妻たる私も休めないのよ。」

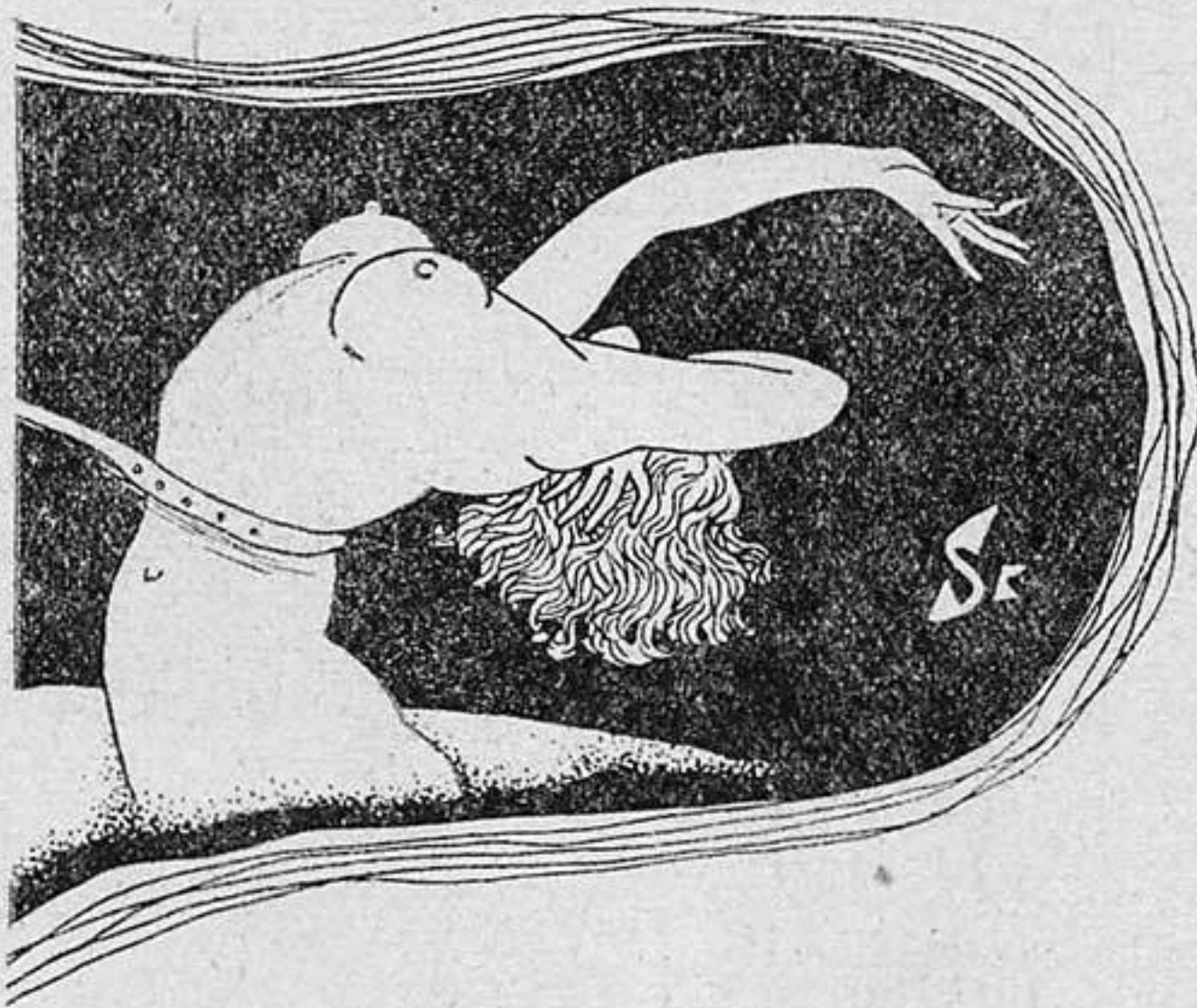
「は、」

「いやあね。」

「じゃ、こうしなさい。あなた、蛇つて恐い?。」

「は、恐いです。」

「その蛇が恐くなくなる方法があ



るの。蛇を一度徹底的にやつつけちやうのよ。無茶苦茶にね。そうすると、もうそれから平気になるのよ、犬でも何でも。だからこうしなさい。あなたね。私を裸にして縛つてしまふの。うんと強くね。それから叩くのよ。それも、どこでも力一杯に。そして、そして、あなた、あたしを勝手にするの。わかる?。どんなことしてもいいわ。」

青年は、又、ちらつと私を見た。彼はふるえていた。私はその俯向いてふるえている青

年をこれから苛めようとしているような錯覚に捉われた。

——いや、こんな子にいじめられた方がかえつてせいせいするかもしれない。

私は青年の眼の前にどさりと倒れて、両手を背後へまわし、全身をくねらせて青年に寄り寄つた。

「さ。勇気を出して!、私を蛇だと思えばいいわ。人間だなんて思わないで。」

「は。」

「あんた、男でしょ?」

「では、失礼します。」

「えゝ、えゝ、遠慮なんかなさらずに。」

「どんな縛り方でもいいんですか?。」

「えゝ、かまいませんわ。紐は私のハンドバックの中にあります。」

青年は毀れ易い物にでもさわるように私の右手を取つて、手首を紐の一端で軽く縛つた。

「もつと、きつくしるのよ。」

「えゝ。」

青年は同じ紐の一端で、やはり

そつと右足首を縛つた。それから別の紐の両端で左手首と左足首を。

「何なの？ これ。」

「縛るのです。」

「こんなんじや、縛つたつていえないワ、もつときつぐよ。」

「えゝ、今。でも、いいんですか？。」

「怒るわよ。私、ぐずぐずしている男つて大嫌いだわ。」

「じゃ。」

突然、両の手足首の紐が締め、更に、右手首は右足首に、左手首は左足首に引寄せられて各々びたりくつついてしまった。私は久しぶりに強い肉体のうずきに呻いた。しかし、脚ばかり痛んで参つてしまった。

「あなた、もつと気の利いた縛り方、ないの？、これじゃ、不恰好だわ。」

「は、」

青年は急いで両手首のいましめを解いた。すると、曲つた私の身体は、ぶるん。とのびた。

「これからどうするの？。」



しかし、跛の青年は答えない。一寸首を傾けて私の全身を眺めまわしていたが、間もなく両足の紐も解いて縛り直した。そのうちに青年も私を縛ることに次第に興味を覚えてきたらしく、弓なりに絞つてみたり、息もつけぬほど海老型に縛り固めたりしていたが、どれもみんな気に入らないらしく、やがてすっかり私の身体から紐を取外してしまつた。疲れてもきたらしい。しばらくぼんやりと私を見ていた。私も軽い運動をしたあのような

快い疲労を覚えて幾分気を抜いていた。と青年は黙つて起上つた。尤も、これまでも殆んど無言ではあつたが……

次の瞬間、ピユウ、と鋭く風を切る音がした。それは全く思いがけないことで、私は身を曲げて顔を覆つた、脇腹が、カツ、と、熱くなつた。

——革のバンドだ。

ヒユツ、ヒユツ、と革のバンドが、私の肌に吸付いては離れた。私は転りながらベットの上を、革のバンドから逃げ廻つた。最初は楽しい鬼ごつこの遊戯のような気分であつたが段々真剣になつてきた。ふとあげた腕にバンドが巻きつくくと、彼はうん／＼引つぱつて、私は危くベットから引きずり下されそうになつた。

全身が燃え出した。あゝ、私はやつと息付き始めたのだ。私は全く自由の身で、革のバンドから逃げられるのだ。が、身をくねらせ、時にはお尻を高くつき出し、胸を反せ、背を丸め、跛を引き引き私を打すえている彼と呼吸を合せた。

「私は自由だ、私は縛られていない。」

ピユツ、と、大きく一と振りすると共に彼はバンドを投げ捨てて、どつと私の横に倒れてきた。私は喘ぎながら言つた。

「どうなさつたの?。」

「帰ります。」

「え?。」

「帰ります。」

「いや、いや、ひどいわ。」

「帰らせていただきます。」

「ひどいわ、ひどいわ。お願い、私と結婚して頂戴!」

「僕に恋人が居るんです。僕は、……」

「私と結婚して!、私と!。」

「いやです。やはり、私は、恋人を愛してい

ます。」

「じゃ、じゃ、お婆さんでいいわ。」

「僕はお婆さんを養えるほど、お金持じゃありません。」

「いいのよ。お金は、お金のことは。時々一週間に一度位逢つて下さるだけでいいわ、ねお願い!」

「僕には恋人があります。あなたより美しくはないけれど、あなたよりは貧弱な容姿ですけど、僕は愛しているのです。お許し下さい。又、お目にかゝることもあるでしょう。いろ／＼有難うございました。」

青年は服を着て部屋を出て行つた。私は呆然として、廊下を去つて行く彼の松葉杖の音を聞いていた。私の眼から涙があふれ落ちて

止まない。全身に残る痛覚が、今迄になく強烈であつたことを今更のように感じた。

私は、がば、と、はね起きると、素早くバジャマを身につけ、全身の痛みをこらえて、狂気のように、彼、跛の青年の後を追つた。——待つて! もう一度、もう一度。

行ずりのボーイに、恥も外聞もなく、取乱した声で青年の行方を聞いた。が、ボーイは知らない。玄関の者に聞いてきました。と去つて行つた。が、間もなく戻つてきて、玄関に居た者も、そのような方は見掛けなかつた。と、気の毒そうに言つて、他を捜してみよう。と、去つて行つた。

私は、ばつたり気を失つてしまつたように廊下に倒れた。

(次号完結)

わたしが貴誌の存在を知つたのはきわめて最近のことです。ふと通りがかりの書店で十一月号を手にして頁を繰つてみて、その異常な内容に驚き且つ一つの新しい世界を発見したような思いをいたしました。特にわたくしを強く刺戟したのは裸体の若い女が屠腹しようとしている写真です。これを見たとき、わたくしには久しく忘れていた少年時代の記憶がよみがえつてきました。わたくしが性的な欲望を覚えたのは実に屠腹への場面を描いた画を見たときからでした。

小学校の六年生のときであつたと記憶しております。わたくしは上級学校受験の準備をしていましたが、その時国史の参考書に会津

若松の白虎隊の少年たちの屠腹を描いた画が載せてあつたのです。同性のこうした画を見たことから起つた衝動を性欲と名づけるのはおかしいとも思われますが、たとえ変態的なものにしても、こう呼ぶ以外に適当な名称がないようです。わたくしはこの小さな挿絵に熱中しましたが、そのうちに、自

分で下手ながら少年屠腹の図を描くようになり、それが何枚もたまりました。自宅に遊びに来た同年輩の子に見つけられて恥かしい思いをしたことも記憶に残っております。のちにはこの秘密の戯が昂じてわたくしは実地に屠腹の真似をするようになりました。わたくしの下腹部には自身で肥後守の小

刀でつけた横一文字の疵が、以後長い間残っていました。その当時、わたくしと同学年の女子組を担当していた若い女の訓導がおりました。美人という形容からは甚だ遠い人でしたが、肉附のよい立派な体格の持主で、少年のわたくしにもその印象が久しく消えないでいたと見えます。小学校を卒業してから二、三年もあと、屠腹の図をかくことや、その真似をすること等の戯を忘れてしまつた頃、わたくしはその女の先生が真裸になつて屠腹する夢を何度か見ました。あたかも十一月号の写真とそつくりの場景です。何故この時になつてこんな夢を見たのか、わたくしはこれは変態的なものから出た発したわたくしの性欲が次第に正常のものに移つて来たあらわれで、その過渡期に両者が混合してこういう形をとつたのではないかと思ひます。このような経験を過去に持つてゐるわたくしは十一月号の写真を見て、その変態的傾向が未だに根強く残つてゐることを発見したわけでもあります。変態という中でもこの種のもの

女性切腹の夢

溝口 瀧 夫

(梅田 淳二 画)

は女を縛りあげて快感を覚えようとするものよりもよほど正常の性欲に近く、従つてこれに該当する人の数もはるかに多いのではないかと思ひます。他の雑誌が次第に貴誌を模倣するようになったといわれるこの頃、貴誌がこの種の読者のためにも大いに力を致されることをのぞみます。屠腹の場景について、わたくしの希望を申し



ますと、先ずモデルは必ず全裸であることを要します。十一月号の写真では禪のようなものをつけていましたが他の縛りの写真同様、全裸が宜しい。髪はウェーブをかけるなり、その他の現代風の髪型に結うなりして、必ず現代の女性であることを示し、屠腹という昔の風習と極端な対象を見せて刺戟を強烈ならしめます。これがため

にはなるべく場景を昔の屠腹の場と同じにし前に三宝を置き、後に介錯人を立てるのもよいと思ひます。

それから写真の撮り方も

一、女が腹切刀を載せた三宝の前に端座してゐるところ、

二、腹切刀を下腹部に擬したところ、

三、突きたてゝ疵口から血がほとぼしつてゐるところ、

四、既にこと切れた女が前にうつぶせになつてゐるところ、

と時間を追つて一連の続き写真にすること、胸部、腹部を大寫しにすること、横或は斜後から撮ることなど、いろいろ考えられます。

なお希望したいことはモデルの乳房と臍とが腹切刀を持つ腕に隠されないようにすることです。乳房は勿論、女性の象徴ですが、白い豊かな腹部の中央にボツンと一つ深く窪んだ女の臍にはまた無限の魅力があつてこれが見えなくなるのはまことに惜しいと思ひます。以上、長々と申し述べましたが、この到底あり得るべからざる夢の光景が貴誌によつて完全に誌上に実現せられることを願つて止みませ

感情教育

【七】

吾

妻

栗原

伸画

新

結城由紀の告白

(先月号に記したように、これは最初私あての感想であつたが、Kにのせる許しを求めると、訂正加筆したいからといつて取り戻され、あらためて渡されたのがこの一文である。したがつて私信の形が公開状態みたいなものになり、多少長くなつたが、内容ははじめの文章と変りがないことを念のため書き添えておく。——吾妻)

女の立場からの抗議

女は毎朝鏡にむかつて化粧しますが、それをのぞかれるのは夫でもないやです。まして日記をよまれたり私事を曝かれたりすることはたとえ疚しい覚えがなくてもいい気持ではありません。ところが吾妻さんはそれを、しかも活字の形でなさっている。正直に言つて、私はKKを毎号よむたびにドキドキするのです。たしかに自分の過去の映像が第三者の眼にどう映るかという点については、不安の入

れまじつた一種の興味が、あることはあります。だがそれが、気心の知れた吾妻さんひとりの場合と何万人を対象とした場合とでちがうことは、わかつていただけるでしょう。活字になつた自分の映像に私は神経質にならざるをえません。ときには羞恥、ときには恐怖すらかんじます。

だが、仮名という約束で章三郎は日記まで貸したのだし、私もかゝる気持ちで承諾してしまつたのだから、いまさらとやかく言うつもりはありません。言えばかえつて吾妻さんのサディズムを満足させる結果になるでしょう。そんな魂胆はわかりきつてゐるのだから、私もその手にはのりません。だが私の不満は、一方的なかきかたにあります。

すでに読者の方もお気づきと思いますが、吾妻さんは六カ月も「感情教育」をつづけながら、ほとんどが夫の章三郎の立場だけから詳述し、妻の私の立場からは書いておりません。これは極めて不平等だし、作家らしからぬ片手落だと思ひます。もちろん吾妻さんには逃口上がある。自分は男だからというのがそれです。しかし吾妻さんが書いてゐるのは私たち夫婦のことであるはずで、トルス

トイはレーヴインだけを描いてアンナ・カレーニナを描かなかつたでしょうか。イブセンは「人形の家」でノラの心理を描かなかつたでしょうか。

こんなことは常識です。ましてやその複数の男女が夫婦という形で結びつけられ、一方的な強制行為でなく、両者の合意による愛情の遊戯を主題になさっているならば、六回もの間、ただ章三郎の心理ばかり追求することは正しいとは思えません。私は長年にわたつて夫から、平等の観念を植えつけられてきました。いまではそれが私たちの幸福のいちばん大切な前提だつたということを悟つています。だから、もしもあなたが私たち夫婦の生活を正確に書こうとなさるならば、私の見栄や弁解という意味ではなく、あなたご自身の目的のためにも、「女の心理」にもうすこし筆をさいてくださるべきだつたと信ずるのです。

だが、仲のいい吾妻さんと、これ以上ケンカするのはやめましょう。さもないと、次の号あたりで復讐されそうですから。飛入りの形で、私は妻の由紀の立場から、吾妻さんの筆の足りない部分をすこしおぎなつてみたいとぞんじます。文章は拙くとも、真情は汲みとつていただきたいのです。それはある面では夫の章三郎の批判となり、ある面ではサディズムにたいする私なりの気持になりました。うが、要は「感情教育」に描かれたような妻の心理の告白にすぎません。

合意によるサディズム

現在すでに私は、十九才の娘をもつた四十の人妻です。満でかぞえれば、娘は私が結婚した年に達しています。足かけ五年アテネフ

ランスに通い、アメリカ、フランス、インドなどにお友だちもできそのころの私よりも美貌なせいか結婚話もたくさんあるのですが、まだ全然そんなことを考えもしないくらい無邪気です。夫はこの娘をあちこち連れ歩き、いささか得意のようです。いやもつと突つ込んで申せば、この娘（真理と申します）と一緒にあるいてときどき夫婦か恋人と間違えられるほど自分が若くみえるのがうれしいらしいのです。私たち三人は東京の北端に住み、まるで兄妹か友人のような暮しをしています。お互いになんでもしやべり、合唱したり朗読したりし、ときにはふざけて取っ組み合いしたりします。こうした夫の子供つばさは手も焼くこともあります、たしかに家庭の若返りには役立つので、私の容色が比較的衰えず、真理が私たちになんの秘密もたず、ラブ・レターまでみせるのも（書いた方々にはお気の毒ですが）夫のつくりあげてきた明るい開放的な空気のためであると思います。

だが、私たちは唯ひとつ、娘に打ち明けないことがあります。それは私たちの性生活です。娘の性教育については私よりも夫のほうに適任なので、一切章三郎に任してありますが、彼のやりかたは新婚々この私にたいするのとはまるでちがっています。これは妻と娘の相違から当然だし章三郎自身が若くないせいもあります。いまの彼は娘にむかつて性のお講義もやらないし、かたくるしい説教もしません。そのかわり彼女と交際したいどんな男とでも自由につきあわせ、「第一印象で惚れこんでもいけないが嫌つてもいけない。どんな男にも長所と短所があるのだから比較するように」と注意するだけです。この実際教育はうまくいつていますが、その背後には、彼自身が実地に手ほどきしてやれないセックスの世界の限界が

横たわっているからだと思います。私たちが泳ぎまわってきた性愛生活は理論と体験の両方から支えられて、はじめて不安なく受け入れられるので、そのどちらを欠いても後ろめたものにつきまわれ、永つづきはしなかつたでしょう。だから、いづれ真理は結婚するまでに章三郎から具体的な知識をさずかるでしょうが、サディズムにかんしてはおそらく詳しく説明されないでしょう。それは未婚の娘に正確に伝えることは不可能だし、不必要でもあるからです。いま、こうした娘をながめ、吾妻さんの「感情教育」をよんでいると、廿年前のじぶんの姿がうかんできて、感慨無量とでもいうほ

かありません。当時の私はなんという無知だったでしょう！ またなんと無邪気で、熱情に燃えていたでしょう！ いまなら顔を紅らめずにはいられない舌つ足らずの言葉で失にまつわりつき、夜ごとの饗宴に酔い痴れたのです。（その点では、吾妻さんの描写はまず正確です）私はきわめて単純な熱情的な娘でしたから、もし章三郎が利用しようと思つたらどんな女にでもなつたかもしれません。たとえばドレイのような妻です。また、弄ばれて捨てられても争えずに泣き寝入りしたでしょう。男からみれば極めて便利な、無知と古風さをたぶんに持つていたと思います。それを章三郎は利用しませ



んでした。むしろ私の心からふるいギセイ心や因習道德をたたきだすために、どれほど努力したかもしれません。事あるごとに、かれは女の弱さや愚かさを指摘し、女性史をよませ、ミルやベーベルの話をし、かれの親戚にあたる伊藤野枝のことなどを話しました。また、社会主義と女性論の関係なども説明しました。そして、なによりも大切なこと、それを日々の生活で示してみせてくれました。

私たちの家庭をたずねたお客さまのなかで、私だけが台所に

閉じこもつたり、べつの部屋で食事したりするのを見た方はないはずです。どんな初対面の人でも、地位のある方でも、私たちは一緒に話し、一緒に膳で、一緒のおかずで食べました。私は章三郎より早く起きたり、おそく寝たりする必要がありませんでした。もちろん、そういうことは度々ありましたが、みんな私の自由意志で、これの強制ではなかったのです。かれは収入を全部私にわたし、お互いに、好きなときに勝手に出してそれを使いました。これは廿年後の今日でも変わりません。だからヘソクリ貯金などというものは存在の余地がありませんでした。

私は好きなときに、ひとりで映画を見に行くこともできたし、どんな異性の友人をつくることもできました。そのどちらも必要でなかったのは、私が夫に満足していたからにすぎません。もしも強制といえるものがあつたとすれば、それは私に歴史や経済の本をよませて、能力のない女をすこしでも啓蒙しようとしたことでしよう。

これはある意味で強制にちがいありませんでした。というのは、私は平凡な女で、文学や小説ならともかく、かたくるしい知識は女学校時代からまことに苦手だつたからです。あわれな生徒は、四六時中とはなれられない教師に気に入られただけで、いやいやそういう書物をよんだのですが、おかげで廿年後の今日でもろくに身につかず、やつと常識を得たぐらいのものです。思えば勿体ないかぎりですが、これは能力の問題ですからしかたありません。ときには苦しさのあまり、「だからもつと頭のいい奥さんをもらえばよかったのよ」と反抗したことがあります。すると夫は冗談とも本気ともつかない口調で、「おなじHでもヘッドよりハートを選んだのさ」と言いました。おそらくその言葉には、私の知的能力にたいする絶望が

ふくまれていたと思います。だが吾妻さんにしたかえれば彼は相当の「お面食い」だつたそうですから、責任はむしろ彼にあります（念のためにつけておきますが、私は娘時代からじぶんの容貌にうぬぼれたことは一度もなく、結婚してからそんなことを意識さえしませんでした。もし意識していたら、もつと我儘を言つてやつたでしように）。

学問のほうでは、このように失格者の私ですが、夫がつくりだしてくれる文学的な雰囲気は十分に楽しみました。ゴーゴリやメリメの全作品は、私自身がよむよりも夫の朗読のおかげで味わつたのです。章三郎は朗読が好きで、娘が大きくなつてからでも夕食後によくやりました。私たちはこれを「放送」と名づけているのですが、徳富蘆花の「寄生木」のような長いものを連続放送してくれるときは、私や真理は夜になるのが楽しみで、「もつと、もつと」とせがんだものです。

さて、私は主題にはいります。このような家庭生活と、私たちの性生活——サディズムと名づけられる——との間に、多くの人々は矛盾や溝を感じられているようです。すくなくともそれを両立させるための「技巧」を空想されているようです。KK三月号の読者通信にも中村佐一さまは、「アブノーマル遊戯と日常生活の区別につきシーキルとハイドの斗争をどのように調整されているか」と疑問を述べられています。

しかし、問題は昼と夜の生活をシーキルとハイドの斗争として提出なさつているところにあるように思います。これは完全な二重人格を前提としていますが、はたして実際の世の中にありうるでしょうか。私には考えられません。たとえば、「昼は処女のごとく、夜

は娼婦のごとく」という言葉がありますが、これは公開的な昼の生活と二人だけの夜の生活が、封建的な時代にもつともマツチした理想型を言いあらわしたもので、女のしとやかさと性的なおもちゃとの二つの男の要求をみたすためのスローガンだつたと思います。その場合にも、女の心理は処女でもなければ娼婦でもなく、ひとつであつたはずです。つまり性にめざめた女にすぎないので、ただ昼は慎ましやかにとりつくろい、夜は本能を爆発させたにすぎません。現代はその表面的な相違さえ、ずつと少なくなつていきます。腕を組んだり抱擁したり接吻することが、昼間の生活に入りこんでいます。他人の眼の前で抑制しなければならないのは寢室の遊びだけだと言えるかもしれません。そしてこの限界は、ノーマルだろうとアブノーマルだろうと、おなじことだと思ふのです。

前にも申したとおり、私は理論は苦手ですからむづかしい議論はできませんが、女の気持から次のように言うことはできます。つまり、いわゆるアブノーマルといわれる性生活とノーマルな日常生活とは、すこしも矛盾せずに成り立つということです。それどころか私どものような性生活は、私どものような日常生活——すでに簡単にのべました——なしではむづかしいのです。

生意気なようですが、この点は、風俗雑誌などで論じたり語つたりしている諸先生方の意見と正反対なので、性の分野の盲点ではないかと思つています。有名な諸先生方にたいしてまことに失礼ですが、いつたいその方々は、論じられていることをどれだけごじぶんの頭でお考へになり、経験なさつたのでしょうか。私は天や吾妻さんのすすめで二三の書物しかよみませんが、クラフト・エビングあたりの思想がエリスによつてすでに訂正されつつあることは存じて

おります。またそのエリスでさえ、私たちはエリスという名の権威に満足しているのではないので、かれの帰納法が比較的多くの実例に支えられており、私たちの實際生活に受け入れられるから敬服しているにすぎないのです。しかしどんな理論も学説も、ひとつの眞実の生活をどれほど正しく説明できるかという努力にすぎません。言いかえると、みづから体験者でない学者はできるだけ多くの例をあつめ、それから良心的に類推しようとしているのです。ただその場合には、顕著な病理学的な例がいちばん集まりやすいので、アブノーマルとノーマルとの境界線にはかなり大きな「忘れられた地帯」がのこります。ハヴェロック・エリスの努力はこの巾のひろい地帯に足を踏み入れようとする点にありました。かれの研究でそれがいちばん成功しているのは、同性愛であつたと思います。

しかし、いまの諸先生方はそういうこともあまりお考へになりません。むしろ逆コースと申しますか、アブノーマルの極端な面を強調なさることによつて、その純粋さを誇り、ノーマルな生活に溶けこむことは堕落か邪道のようにおつしやいます。いつたいそれはなんの目的でしょうか？ 一方では拡大された性生活のなかで朗らかに楽しみたい方々があるのに——KKの読者の大半がそうだろうと信じます——他方ではそれを、せまい、かぎられた暗黒生活に追いやろうとされるのは、はたして正しいことでしょうか。

一例をあげます。ごく最近——この手記をかき直すとき——吾妻さんから借りた「風俗××」増刊号に、平野威馬雄氏（ああ、はるか昔このひとのボオの翻訳をよんだことがありましたつけ）の「鞭打ちの歴史」というのがありますが、そのなかで次のようにきめておられます。

『……してもらおう』 『……させてもらおう』の範圍に踴躍している不自然さを、じつとこらえて遂行する……のが、サドでありマゾだと思ふと、虫酸が走る」

「どの雑誌どの本を見ても、純然たるサドの世界は掩われ、話合による反復行為の謳歌でしかない」

「マゾの場合でもそうだ。之はサドより一そう鼻もちならぬ」

「このように、物に書かれ、脳裡に仕組まれ、さらに實際的行動に移された既往のすべてのサドやマゾが、技巧と、虚偽と、お芝居と、嘆願、妥協以外の何ものでもなかつたことを思う時、全く頼りなく、味気ない、さく然たるものを覚えすにはいられないのである」

そして得々と氏のあげている友人の实例というのをよくよんでみると、結局どの奥さんも夫の要求を拒んでいないのだから、私などからみると氏の批難する妥協ということになり、矛盾も甚だしいのですが、この矛盾はじつは当然なのです。實際生活のなかで妥協なくしてサディズムは永続しません。まして氏の空想するような、一方的な容謝のないサディズムは行いようがないのです。もし妻がマゾヒストでなければ、喧嘩、不和、離婚となるのがあたりまえで、さもなくばよほどバカな女でしょう。ところがマゾヒストでは合意ということになつて、氏のお氣に召さないのですから、結局は實現不可能ということになります。

しかし、この矛盾には眼をつむるとして、なぜ性生活に合意があつてはいけないのか、これがわからないのです。「してもらおう、させてもらおう」という表現がそもそも単純粗野でコツケイですが、それが「不自然」だというのはもつとコツケイです。思うに氏はサド

もマゾも「自然」であるためには「反自然」でなければいけないと無邪氣に信じているのでしよう。そうなると古川裕子さんや私たちのような夫婦は正しくそういう資格を欠くわけで、サディストもマゾヒストもつねに他の一方はノーマルでなければ（つまり非合意でなければ）いけないことになります。その場合、ノーマルな側はつねに苦痛で、不快で、その夫婦関係はつねに不調和でなければならなくなります。夫婦相和すでなく、夫婦葛藤の図が理想形となります。

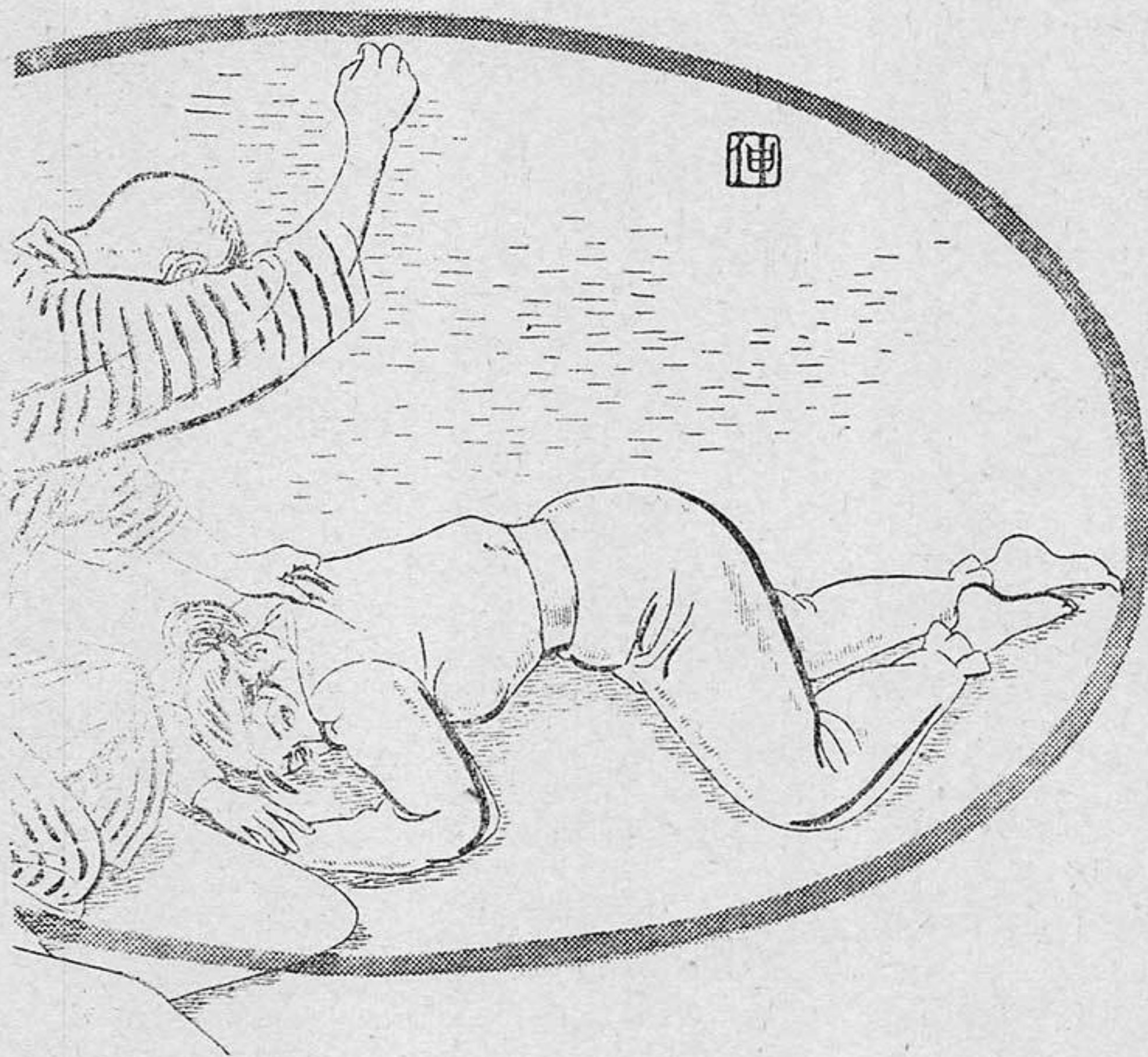
これは「名に捕われて実を失う」好適例です。サディズムはむりやりに行うものだという定義（？）に頭を奪われて、實際にそれが行われる生活の場を無視している觀念論にすぎません。それがたわいのない空想にすぎないことは、サディズムの成り立つ持続的な性関係ではかならず一方の（暗黙にしても）合意があるという事実から言えます。また、なぜ古川裕子さんが理解のある対象を求める必要があるのでしょうか？ 平野氏が虫酸を走らせようと鼻もちならぬと感じようと、私たちはア・プリオリの定義と心中するわけにはいきません。生ける、現実の、血の通つた人間は、サディストだろうとマゾヒストだろうとノーマルな人間と同様に幸福になりたいのだし、なる権利をもつています。

幸福な生活にはぜつたいに合意がなければなりません。これが第一条件です。なぜなら、どんな性関係だつて、調和と持続がなければ幸福には感ぜられないからです。サディズムも例外ありません。章三郎のサディズムは軽微なものです。もつと極端な場合にすらこの原則は動かないと思います。

なにも知らない無邪氣な娘であつた私は、結婚してから徐々に性

の手ほどきを受けました。いみじくも吾妻さんが「感情教育」と名づけたように、私の精神は夫の手で切りひらかれていったのです。けれども、私はマゾヒストになりませんでした。

いま、KKなどをみて、時々思うことがあります、もし私が古川裕子さんのような性向だったら、夫はどんなに幸福だろうと。あるいは、夫もおなじことを考えているかもしれません。だがこれはけつして嫉妬ではないのだから、およみになつても古川さん、気になさらないで下さい。私たちはなんでも話しあうし、嫉妬の起きる秘密をもつていません。ただアブノーマルといわれる世界にいくらでも合意や宥和がありうると考えたとき、ふとあなたのことを思いうかべたのです。だが、私がマゾヒストでなかかったらこそ「感情教育」は必要だったと言えます。そしてその結果は、私は幸福でした。ただくりかえします、その当時も今も、私はマゾヒストではありません。



こう言うと、なにか曖昧な、疑わしい、矛盾を感じる方がありませんか？ そんなことはありませんか？ ありうるのです！ いまの私はけつしてマゾヒストの名に恐れも劣等感もちませんが、事

実そうなのです。私自身、それを説明するのに苦しみます。なぜマゾヒストでないものが、縛られたり猿轡をはめられたりするに男の暴力意志をみとめないか？ なぜそれらの行為を愛情の遊戯として受け容れ、ついてゆくことができるのか？ それには夫の暴力についてお話しすることが必要だと思えます。

章三郎の暴力

章三郎は激しい性格なので、若いころはずいぶんケンカもやつたようです、結婚してからも不本意ながらそんな場面をいくどか見せつけられました。しかし、私自身が暴力をうけたのは廿年という永い年月の間に三回しかありません。したがって其等は全部おぼえています。

最初は結婚後まもなく、私の母が郷里の新潟県から上京して泊つたときです。もちろん章三郎はできるだけだけの歓待をしてくれました。ところがわかい私はそれに感謝するどころか、不満を示しました。というのは、章三郎の父がある方面で有名だったことを母にしらせたばかりでなく、結婚直前に章三郎がすでにひとかどの文学者であるかのよう

に宣伝していたからです。これは夫をえらくみせたいという、私の子供っぽい虚栄心でした。章三郎はまたそういうことが大嫌いで、父から扶助もうけず、貧乏世帯を張りぬいていたのですから、私たちの貧乏ぶりをすこしもかくそうとしません。私は母の尊敬が崩れるのが恐ろしくて、つい白々しい嘘を言いました。とたんに私はなぐり倒されました。

「貧乏は恥じやないぞ。なんのためにそんなにやらしい見栄を張るんだ！」

まさかと思つていた夫の暴力、それも母の見ている前です。私は痛さよりも口惜しき、恥かしきで、畳にしがみついて泣きました。するとその心を見抜くように

「親の前だろうとなんだだろうと、僕はおなじようにする。それを忘れるな」

と言いました。

田舎育ちの母はすつかりおどろいてしまつて、ただオロオロする



ばかりでした。よほど乱暴な男だと思つたのでしよう。

だが、二日たつて郷里へ帰るまでに、章三郎がなぐつたのはこれがはじめてで、なんのためかもわかり、ふだんの優しい性格も見抜いて、むしろ信頼を高めたようです。その後私の妹の結婚話がおきたとき、母は彼の意見をきくように命じて上京させた位です。妹は私たちの家庭にしばらくいた上、章三郎の忠告にしたがつて結婚しました。

次は結婚後三年目、吾妻さんが書くつもりかどうか知らないが、書いてしまいます。章三郎は人にだまされてひどい借金を背負いこみ、差押競売までされました。それを挽回するために思い立つたのが出版です。当時はやつていた単行本の通信販売で、資金は二千元で十分、早ければ三カ月、おそくとも半年で儲かる……。もちろん甘い夢でした。が、例によつて彼は熱っぽくその夢を語りました。

「ねえ、私を売つたらいくらになる？」

なにげなく私は訊ねました。彼はあつけにとられた表情で私の顔をみつめました。

「芸者つて、お酌をしたりすればいいんでしょう。それで資本ができるなら、三月か半年ならがまんするわ。その代り、ときどき会いにきて、あたしを……」

「ばかっ、ばかっ！」

布団をはねのけてとびおきると、彼は私を力まかせに撲りました。いま思えば、私も当時の自分をなぐりた。それは鼻持ちならぬ古風な倫理観念だからです。そして結婚後三年もたち、自由や平等や女の権利もわきまえていた筈の私が、こんな気持ちになつたのは信じられぬほどです。だが事実、私は芸者がどんな職業かもしれぬほどその方面では無知な子供でした（とつくに真理は生れていたのに！）。私は悲壮なギセイ心を發揮したわけではないので、三四月月芸者になつてがまんしていれば夫の事業は成功し、わけもなく苦境を脱して家庭に戻れると空想し、そのくらいなら私にもできると思つたにすぎません。

なぐりつづけながら、章三郎は哭いていました。それを見るとたまらなくなつて、私も哭きだしました。

おそらく彼は、度しがたい私の無知と保守的感情に呆れはて、憎悪と怒りにかられ、そのドレイ根性を叩き出そうとしてなぐつたのでしよう。その夜の木枯は私の胸に沁みわたり一生わすれません。

次はずつと飛んで終戦直後。秋田県に疎開していた私たちは栃木県那須村に移つたのですが、はじめこの部落の農民は白い眼でこの移住者を眺め、米も売ってくれず、畠も貸してくれないのです。そして「開墾するのなら貸してやる」と言うのです。ところがその土地は一面の篠簞で、軍隊が倉庫をつくるため切り倒した一抱えもある木の根が一坪に二つも三つもある山地です。いわば不可能を宣告されたも同然でした。

そのころ夫は東京の出版社から好条件で呼ばれていたのですが、持前の反抗心に燃え上つてしまい、「よし、都会人にできるところをみせてやる」というわけで、開墾生活に入りました。

田植は四食、開墾は一升飯といわれます。これ以上の重労働は農村にないのです。配給は二合一勺でした。水のようなカユにして一食二杯あるかなしです。それをすゝつて、一貫目以上の唐鍬をふるい、篠を刈り、根を起し、朝から晩まで頑張りました。そして一反の畠をつくりあげました。部落の人たちは眼をまるくしましたが、「百姓のやることはなんでもやつてやる」と言つて、章三郎の超人的労働はさらにつづきます。山を買つて採伐もしました。それを背負いだし、薪をつくり、納屋を建て、炭も焼きました。三年いるうちに彼は無視できない存在となりました。すると彼は社会運動にのりだし、横暴な駐在所の巡査をつるしあげたり、校長の闇をあばいたり、配給所の不正を衝いて移転問題を起したり、青年をあつめて座談会を開いたりしはじめました。

それはいいのですが、あわれなのは由紀です。私は終日よごれたズボンをはき、精力的な夫の労働を分担しなければなりません。私は夫のやるどんな仕事でも手伝いました。しかし最大の苦痛はべつのところにあつたのです。それは、章三郎の父が亡くなつて、母が私たちの家に同居していたことです。

ある日、肥桶のかつき方というお話にもならぬくだらないことから言い争いがはじまり、ケンカになりました。はじめて私はヒステリックになり、泥だらけの草履をひろつて夫に投げつけました。たまりかねて章三郎が肩をついたとき、私はとびかかりました。

彼は火の出るような平手打をくわせ、私の腕をねじあげて納屋に追いつめました。

「なぜそう暴れるんだ、どうしたというんだ、由紀！」
「殺して！」

「なに」

「殺して、殺して。こんな奴隷生活するくらいなら死んだほうがいい。ねえ、殺してよう！」

叫び声をあげると、私は薬の上にしゃがみこみ、両手を顔にあてて、子供のように嗚咽しました。

彼はだまつてその様子をみていましたが、私のシャツの襟をつかみ、いやがるのを無理にひきずり出して家につれ戻し、座敷に上げてすわらせました。それから、しずかに言うのです。

「ここで不用意な言葉を吐いたら、どつちもあとに退けなくなる。そうなたら破滅だよ。だからよく考えて返事してもらいたい。一体、なぜ僕が君を殺さなければならんだ？ そりやあ労働の苦しいのはわかつている。しかし、僕もしている。奴隷とは言わせないよ。……本心を言つてごらん。理由はほかにあるのだろう」

私はだまつていました。どうして言えましょう！

夫の母は世間並以上にやさしい人で、一度も私に干渉したり叱つたことがありません。それを誤解するほど私は卑屈ではないのです。ただ困つたことには、私たちの結婚生活はあまりにも特殊でした。

私たちは結婚した最初の日から、両親と別居し、完全な独立のなかで自由を享樂してきました。その自由は夫婦の平等とむすびついて、十二年の間にかたい根を張つてしまつたのです。だから、じぶんの子供以外のどんな異質物もこの空気のなかでは共存できないのです。そこへ、突然彼の母がはいつてきました。もし最初から姑がいたら、あるいは私たちがこれほど自由に馴らされていなかったら、それほどに感じなかつたかもしれません。だが、今となつては

もうダメです。たとえ姑が神のごとく優しかろうと、少くとも家族制度の常識はもつています。真昼間からキスもできないし、食卓で夫とだけの会話を楽しむこともできません。そんなことすらが非常に苦痛と重圧になります。世間並みだとか世間よりましだと慰められても、そんなことは問題とならない。自由はもう空気のように自然になつてしまつて、特権というよりも最低限度の不可欠物として意識されているのです。

皆さまはなんというゼイタクだと非難なさるでしょう。そうです。いまの日本の社会では正しくゼイタクです。由紀もそれを感じずにいられません。感ずるからこそ、解決できずに悩むのです。母も気づかず世間の常識もみとめないその苦痛は、口に出して訴えても我儘として葬り去られる性質のものです。しかし、この実感をどうすることもできないのです。だからそれは抑圧となつて蓄積し、内攻し、じぶんでも理解しがたいヒステリックな発作となつて、夫の上に爆発したのです。

告白しますが、こういう分析は私がやつたのではなく章三郎がやつたのです。はじめは労働の不満と思つたのですが、すぐに彼は疑問を抱き、その夜床にはいつてから、ゆつくりと私の心理の解剖にとりかかりました。私はそれを認める外ありませんでした。

最後に、かれは結論を下しました。

「この責任は母にも君にもない。僕にある。僕こそ君をそういう人間に仕立てあげた張本人なのだ。もちろん僕は後悔していない。それが正しいんだ。たとえ世間からどんな批評を受けようともかまわない。母とは別居することにしよう」

「いや、いや。私のためにそんなことをしちやいや」と私はたのみ

ました。

「不自然は永つづきしないよ」と彼は笑いました。「それに、なにも君のためだけじゃないさ。僕が今日まで貫いてきた信念と思想をまもるためだよ」

幸いに、なんの楽しみもない農村の貧しい生活から母をひっぱりだしたがつている章三郎の姉が三人もいました。その中の一人が家事に手が足りないという口実で、母に来てほしいという手紙をよこしました。世間の常識では、相続者の男は義理にも母をひきとるこ

とになつていたので、愛情の詐術は必要だつたのです。章三郎はもとよりそんな形式を無視している人間ですから、すぐ承諾しました。

私はこう思う

私が夫から受けた暴力といえ、以上の三つに尽きます。そのどの場合を考えても、残虐とは関係がないということがおわかりと思います。これは私にとつてきわめて重要なことなのです。なぜかというと、一度も残虐になりえない夫が、愛撫の二形式として行うどんなことにも残虐になりえないということは、まったく自然な感情の帰結だからです。

かれの暴力は正しい意味で暴力とは言えません。一つ一つに根拠があり、それはすべて私への愛情や批判とむすびついています。それを疑うことのできない私が、どうして愛情のテクニクに対してだけ、疑うことができるでしょうか？ だから彼が私を縛り、猿ぐつわをはめ、叩いたり抓つたりしたところで、私を苛めてよろこんでいるとはどうしても思えないのです。

もうすこし立ち入つてこの問題を考えてみましょう。

私は幾百回となく縛られてきました。そのいろいろの場合を吾妻さんは臆面もなく書き散らしていますから、それには触れませんが、だかどの場合にも、ひどい苦痛を与えられたことはありません。極度に高く吊つたり、首をしめたり、痣がつくほど締めたことはないのです。ただ手や足の自由を束縛するというのが目的なのです。そして、腰紐以外にはほとんど用いません。

叩くのは臀部と腿にかざられており、痛くないことはありませんが、鞭やベルトを用いるわけでなし、いちばんひどい場合でも薄赤く染まる程度です。おそらくKKの読者からみれば問題にならないでしょう。くすぐる方法があるそうですが、全く経験しません。抓るのは、やり方次第で非常な苦痛ですが、彼はつねに加減して行うので、わざと悲鳴をあげることはあつても本当にたまらないことはありません。

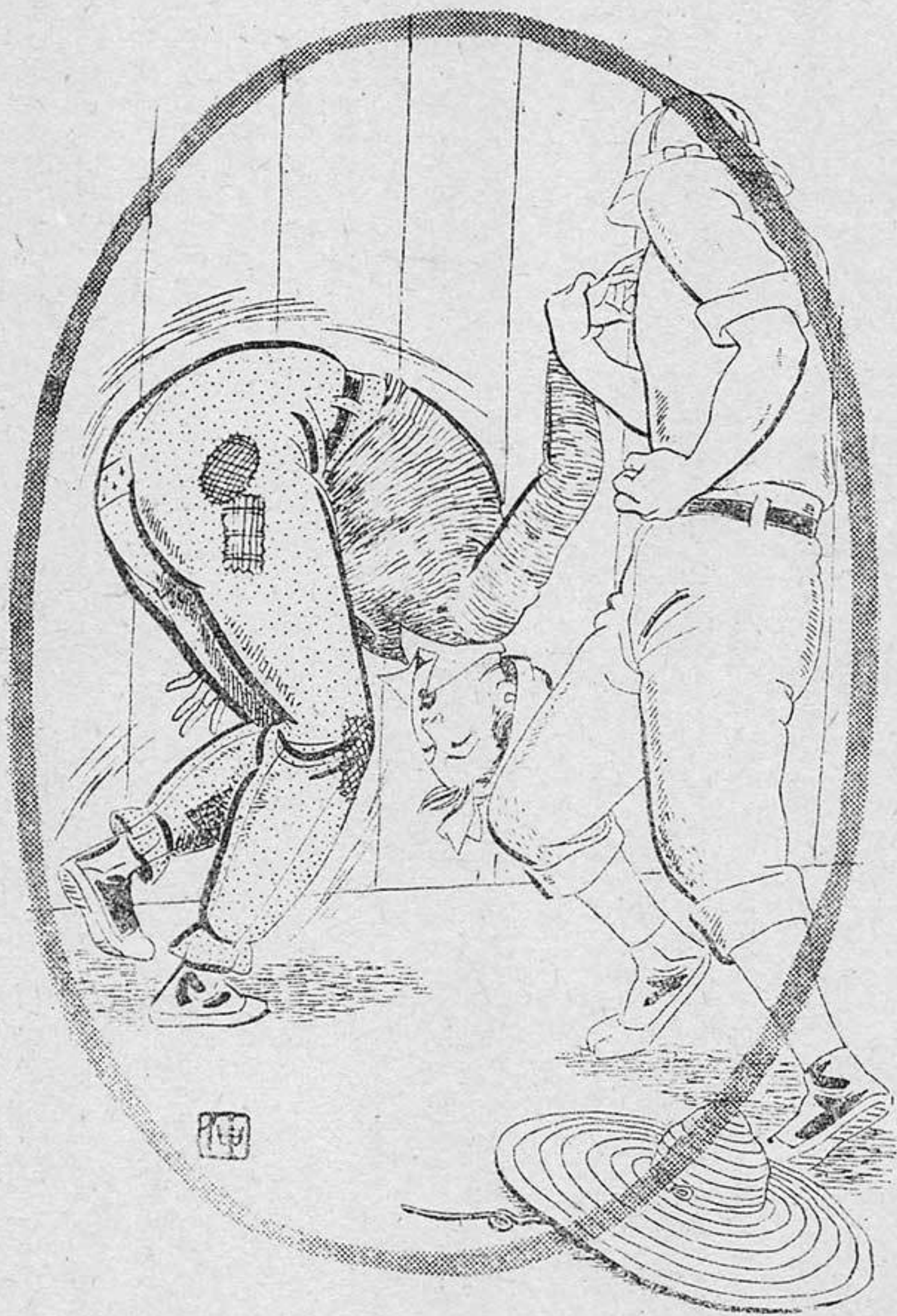
このような単純な「攻撃」のほかにrubbingがあります。これがどんな箇所にも、どんなに複雑になされるかは、説明できないし、する必要もないでしょう。彼が手足を縛るのは好んでこれを行うためで、私も耐えがたく悶えます。しかし、叩いたり抓つたりすることが混ろうとも、これは明らかに愛撫のうちに入るので、むづかしい説明をされなくても女はひろい意味の前戯として味わうことができます。

猿轡だけが、私にはあまりうれしいものではありません。それは息苦しいとか声が出ないとかいうことよりも、すでに吾妻さんが指摘したとおり、私は清潔好きだからです。ところが夫は好んで汚臭をかかれます。この点、章三郎はなにか汚物にたいするフエティシ

ズムをもっているのではないかと思います。だがもし私が真に嫌悪を感じ、耐えがたいとしたら、とつくに猿轡は拒否したにそういないので、いやだなあと思いつながら納得ずくではめられる心理を分析してみると、奇妙な疑問をかんじます。私は心理学者ではありませんからうまく言い現わせませんが、たぶん現在も清潔好きである私は「汚れ」や「臭気」には純粹な嫌悪をおぼえ、一方、夫の肌については、そこから分泌されたものには性的魅力を抱くのではありますまいか。その二つが独立にはたらくため、いやいやながら承諾ししかも呻くという結果になるのかと思います。

ツギだらけのひどいパジャマはそれほどありません。視覚のみじめさがあるだけです。ただこれはあまりにひどいものなので、不潔感には悩まされます。そして、夫の悪趣味だからと諦めてはいるものの、もし第三者に見られるとしたら、たちまち極度の劣等感に襲われるに相違ありません。

そこで言いたいことは、一般の方々は、緊縛とか猿轡とか服装とかその他の行為を、切りはなして想像しているのではないかということです。たとえば容貌を批評するとき、眼や口を別々に観察して、美しいとか醜いとか言う心理です。しかし、性愛にかんする一



連の行為はぜつたいに切り離せません。女であり、それを体験してきた由紀は、ハッキリと断言します。容貌全体の印象のように、コイタスに達するまでの一切の愛情テクニクは「印象」なのです。ですから、縛られたり猿轡をはめられたりすることの一つ一つが好きとか嫌いとかよりも——前述のとおりそれも言えますけれど——

全体として広い自由な前戯を好むか否かだと思います。もしそれを受け入れるひとならば、縛りや猿轡は、それだけを切りはなして考えたがる方の想像に反して、さほど問題にはなつてこないのです。これは、私が猿轡だけを切りはなして考えた場合に、おそらく拒むだろうということでわかります。

この事実を感覚的に申し上げれば、縛られ、猿ぐつわをはめられた場合、すくなくとも私はそのこと自体で興奮しないようです。興奮しているのは、その後につづく一連の遊びがかならずコイタスに達すること、またその遊びが夫を刺戟することによつて「お返し」が大きいという意識のためだと思います。ただそれは機械的なバラバラな感覚として起るのでなく、総体的なものとして最初から縛られるときから動きだします。そこには度々の経験からくる条件反射作用があるのかもしれませんが。とにかく前戯にならぬ緊縛や猿轡が快楽でないことで私はマゾヒストではないし、前戯としてはじまつたときには確実に興奮するということで、この種の遊びが通常家庭に行われうるといふ例証にはならないでしょうか。事実、私たちは年中こんな遊びをしているのではないのですから。

吾妻さんや夫の主張するサディズムが、すべてのサディストを満足させるとは、私も思いません。世の中には女を苦しめ、虐たげ、涙を流させ、不幸におとしいれ、あるいは奴隷にしなければ快感を感じないひとたしかにあると思います。ただそれは、人生の持続的な関係にならないだけです。また相手の異性を愛してはできないことです。それは「征服の快感」ではありましようが「愛情の快感」とは言えません。おそらくこの種のサディストは文明社会のなかでは孤独と抑圧に悩まされ、歪められた形で、欲望を発散する

か、あるいは空想的自慰に走るか、のどちらかだと思います。ところが一方では私たちのような場合があるのです。サディズムを「強烈」とか「徹底」とかいう言葉で、いわば残忍さの等級づけをすることは、私たちには観念的な遊戯としか思えません。私たちにとつては、なによりもそれが實際生活の問題となつており、どうしたら愛しあう平和な関係のなかにそれを生かしてゆけるかが第一の課題なのです。これは夫の立場もそうでしょうが、女の立場からいって、う切実なねがいです。さもないければ私は拒否してしまいますから、結局サディズムなどは現実に行われえないことになります。

ではどんな場合でも、マゾヒストでない妻に縄や猿轡を納得させることができるでしょうか？ 私は疑問だと思います。

女はどんなふうにも馴らせると簡単に考える方もあるようですが、これは危険です。青線区域の女がボスに屈服するのは意味がちがいます。現代社会のふつうの夫婦で、命令や暗示だけでこの種の行為をあつさり承諾する同性は、めつたにいないだろうと思います。私が徐々に馴致されてゆくプロセスを吾妻さんはお書きになりましたが、そしてそれはウソではないのですが、背後にはつねに大きな条件が伏いていました。つまり、縛ることや猿轡が一連の前戯のなかに包含されるように、それらの前戯そのものが日常生活の愛情と理解にむすびついているのです。パラドキシカルに響くかもしれませんが、夫婦間の完全な、あるいは完全に近い平等の意識がなければ、女は安心してこの種の遊びに溶けこむことはできないのです。夫がめつたに暴力をふるわなかつたこと、またそのどれもが無理な強圧でなかつたことは書きました。日常の生活で私は力づくに屈服させられたことがないのです。それどころか、平等の意識を絶え

ず注ぎこまれてきたのです。だからこそ、愛情の遊戯を言葉どおり信ずることができました。そのとき夫が興奮のあまり過度に走つても、残虐と感ずる心理的根拠がないのです。それはどこまでも性愛のよろこびを傷けないのです。女の心理はきわめてデリケートですから、僅かなことでも反撥や不快を感じ、ちよつとしたことが不感症の原因となることがあります。だがそれは日常生活の大きな保証を欠いているからです。もしも確実に愛されているという保証があるならば、サディステイックな行為そのものは恐怖を与えません。

私はいま、四十才という女の峠に立つてじぶんの過去をふりかえり、はじめてこんな述懐ができます。若いころにはなにも分らなかつたのです。だが無邪気にこの種の遊びに溶けこめたのは私が無知だからではなく、納得できる広汎な条件をあたえられていたからです。尚つけ加えたいことは、この条件はサディズムの代償として計画されてもダメだということです。それとは無関係に、まずお互いが理解し愛し合うために、信頼できる人間関係をつくり上げねばなりません。これは愛情の要求でサディズムの要求ではありません。それさえ確立されているならば、サディズムは決して異様な病的な怪物として映らず、変化のあるテクニクとして受け入れられるでしょう。その場合に女は「行為」よりも「熱情」を理解するからです。縄がアクセサリーになる秘密はそこにあります。もがくのは私の肉体で、私の感情は物質よりも愛する対象に向つているのです。

本当に縛つたり縛られたりする関係は稀だというのは、私に言わせれば、それが自然にスムーズにやれる雰囲気（条件）を人々が理解していないからだと思います。男の人にそういう趣味が多くて、女に奇異な感じをもたせないだけのヨリ広汎な人間関係をつくる努

力がないからです。それどころか逆に女をドレイ化しなければならぬのだと信ずる人が多いようです。だが、一方的満足が相互満足よりも快楽が浅いことは、あらゆる性分野に共通だと思っています。

サディステイックな絵画がまたおなじ誤解を抱かせます。縛られたり猿轡をはめられたりしている姿は、ふつうの女のひとに恐怖や嫌悪を抱かせます。しかし、だから彼女が実際にそれを嫌悪するとはかぎりません。この二つの反応は全くべつなのです。なぜなら絵画は緊縛や猿ぐつわだけを説明しているもので、彼女の性体験と切りはなされているからです。現実にはそれが、私の述べたような人間関係のなかで前戯として行われるならば、箇々の行為は抱括的な性感のなかの一部をなすにすぎなくなります。吾妻さんは、終局のコイタスから逆算されるからと言いますが、それは「終つてしまえば文句を言わない」という意味では正しいけれども、もつとさかのぼつて、プロセスにおいても興奮がないわけではありません。とにかく絵画や写真をみてアブノーマルと感ずるのは行為そのものの異常さに刺戟されるから当然であり、おなじことが愛し合っている間で実際に行われるとノーマルに近く感ずるのも、行為が前戯の一部に溶けこむから当然なのです。この点で、空想的なサディストのほうがアブノーマルと言えるかもしれません。

女の立場からまだ感じていること、言いたいこともあります。あまり長くなるのでやめます。「感情教育」にいつも甘つたれで未完成な由紀が出てくるのには閉口しますが、早く完結してもらいたいものです。それから、調子につて私を美化したり、逆に私を手ひどく苛めすぎないように。どちらも有難迷惑だと申し上げておきます。

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第五十二「罪の椅子」の元祖

話をまた東洋に戻そう。古代ローマやオリエントの豪奢も、中国古代の専制君主達のそれに比しては物の数ではなかつたとさえいえるのである。

本項では、随の煬帝のことを取上げる。明皇(唐の玄宗皇帝)と並ぶ一代の風流皇帝である。明代に「随煬帝艶史」八巻四十回が出ていて、私もかつてその拙劣な邦訳を読んだ記憶があるが、原本にあつていないし、特にマゾヒストとして注目すべき事項もなかつたので、メモが残してない。で、この「艶史」を離れてメモのある「海山記」「迷楼記」「開河記」等の範囲内で、トピックを拾つてみる。「迷楼」^{ミビル}というのは、字の如く、昔クレータ島ミノス王の宮殿にあつたという「迷宮」^{ラビリント}の東洋版であるが、彼と違つて、「後宮」の用を兼ねる。というより、後宮の佳麗三千人中から選り抜きの美女ばか

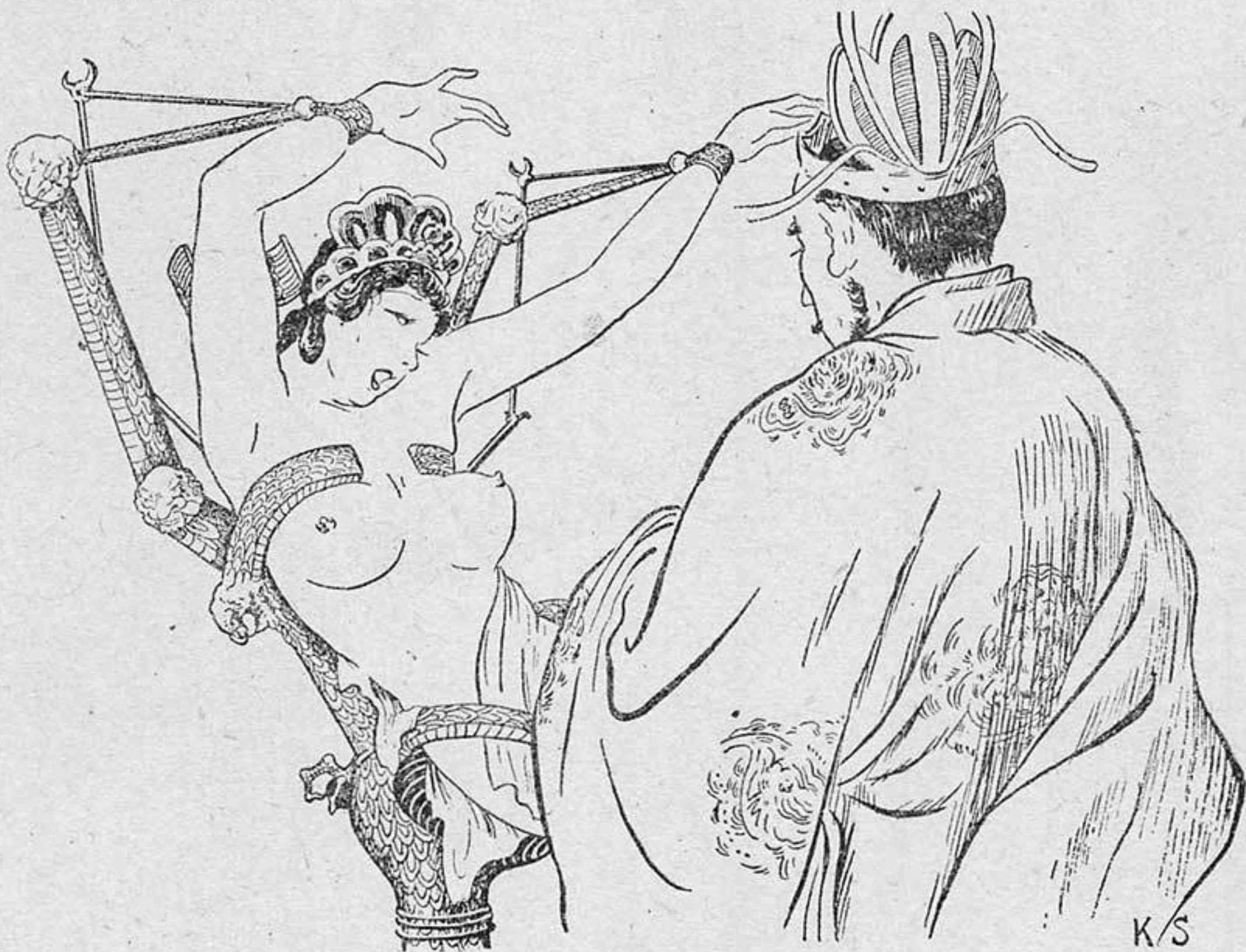
りをすぐつてこの中に入れたのであつて、全体が一の後宮ともいえる。むしろ、ルイナ五世の「^{バルクデセル}鹿苑」に比較すべきものかも知れない。「うっかりこの中に入つた者は、一日かかつても出ることが出来なかつた。帝はこの中に入つて見て大層喜んでいった。『仙人をここで遊ばせてもやはり道が分らなくなるだろう。迷楼と名付けよう』と。後宮及び良家の女数千人を選んで、楼の中に住まわせた。」この迷楼の中に、面白い機械があつた。本項はこれを紹介するのを眼目にする。これは特にマゾヒスト向きのトピックとはいえないが、「奇譚クラブ」の読者諸君には是非紹介しておきたい。というのは――

「KK通信」紙上に飛田良二氏の「罪の椅子」というのが連載されていた。「罪の椅子」というのは、名称はともかく、それに腰掛けた女の自由を奪つて自在に料理してしまえるような仕掛けになつた椅子である。このアイデアは、この種の作家には愛用されるものでサ

デイズム小説には屢々見出されるしマゾヒズム小説でも、女主人公が男を奴隷化する過程の初めに、これを使用するものがある（「鞭の下の淨福」。いずれ訳載したい。）

この「罪の椅子」アイデアの一番古い文献の一つが「迷楼記」ではないかと思われるのである。この部分を訳し、特に原文を併せ掲げておこう。

「大夫の何稠が、『童女を御する車』を献上した。この車のつくりは、極めて小さなもので、只一人を容れるだけ。その中には機械仕掛が施され機械で手足を抑えると、女はちつとも動くことができない。帝は処女を使つて、どんな工合か試験した結果非常に喜んだ。……稠は又転関車を作つて献上した。これを操縦すると、楼閣に上ることが平地を歩むように自由で、乗りながら女を御すると、ひとりでに微妙に動揺するのである。帝は非常に喜んで、稠にいつた『この車は何という名だ』と。稠がいつた『わたくしは勝手に造り出しましたまでで、まだ名はございません。よい名を賜りたい



と意思します。』と。帝はいつた。

卿はその技巧を思う存分に發揮して車を造り出した。朕はこの車を手に入れて思う存分に楽しむことができる。だから「任意車」思う存分自由自在の車と名附けよう』と。」

太夫何稠。進下御二童女一車上車之制度絶少。祇容二一人。有レ機処二于其中。一以レ機礙二女之手足。女纖毫不レ能レ動。帝以二処女一試レ之。恒喜。……稠又進二転関車一。車周二挽之一。可以下于二楼閣一。如上レ行二平地一。車中御レ女。則自動揺。帝尤喜悅。帝謂レ稠曰。車何名也。稠曰。臣任レ意造成。未レ名也。願賜二佳名一。帝曰。卿任二其巧意一以成レ車。朕得レ之。任二其意一以自樂。可レ名二任意車一也。

迷楼の中では日毎夜毎に小説「罪の椅子」の中のような少女凌虐の光景が繰り展げられていたことであつたろうが、想像の筆を行ふことは前項で試みたばかり、あまりくどくなるといけないから、これは読者諸君の想像力の課題として、ここでは省略しておこう。

第五十三 矮民王義

煬帝に關係してもう一つ王義の話をしよう。王義は矮民である。^{こび}侏儒のことだが、「矮民」というときは、丁度ピグミーなどいうと相似て矮少種族の出なることも意味したようである。王義は道川から貢物として献上せられたとあるが、これは道州の誤りであろうか。白樂天の「道州民」という詩に、
道州民多ニ侏儒



長者不^レ過二三尺余
市作^ニ矮奴一年進送

号為^ニ道州任士貢云々

とある。種族的にか遺伝的に侏儒が多くて年々の進貢品に「矮奴」を以てしたというのだ。

侏儒というのは、昔の王侯の宮廷にはつきものであつて、東西を問わなかつた。馬鹿がその「精神の不具」によつて玩弄の対象となつたように、侏儒はその「肉体の畸形」によつて、主人に娛樂を提^{てい}供した。いうまでもなく家畜的な存在に過ぎなかつた。宦宮の中には英雄が少くなかつた（東ローマのナルセスや明の鄭和の如き）に比し、侏儒にして名を青史に止めたといえる者は殆んどない。

王義はその珍らしい例外なのである。侏儒でありながら、個性を持った人間としての声を残した、殆んど唯一の存在である。「海山記」「迷楼記」によると、彼は眉目濃秀、言語應對甚だ敏く、道州から貢せられて、帝に寵愛されたが、後宮に入ることだけはどうしても許されなかつた。（これは矮民とはいいいながら王義が知性を具えていたために、帝の方でも彼を單純に家畜視出来なかつたことを示している。）そこで彼は自分で自分を去勢してしまつた（自宮）。これによつて後宮にも木戸御免の資格を得て、帝のベツトの下で眠るようになった。（臥^ニ御榻下^ニ）。

自ら宮するというのは、宦宮として權勢を得んとするものが屢々用いた手であるが、王義の場合には、權力が

望みではなく、ただ帝に日夜侍つて奉仕したいという奴隷的本性からの行動であつたらしい。奴隷的、ということはいいかえれば忠義と、いうことでもある。彼は真剣に帝の為にその荒淫と乱行とを憂えた。あるとき長文の上奏をして淫を慎しむように諫め、帝はこれに従つて、二日間女色を絶つたが、三日目にはもう出て来て「此の如くんば寿千万歳なりと雖も、亦安んぞ用いん」と忿然としていつたという。李世民が軍を起し、帝が叛乱軍のために害せられてしまう少し前に、王義は帝に最後の諫言をしてから自ら首を刎ねて死んだ。人の玩弄として生きる身でありながら、人並以上に忠義誠実であつた点では、丁度「リヤ王」の忠僕として暴風雨夜の放浪に従うあの名もない「道化」を想起させる。空想の中で王義の身になり代り、迷楼の中に出入することは、私をマゾヒスティックな昂奮に満す。蕭后、院妃、楊夫人、周夫人等々当代の美女達の閨房に入つてゆけるのは、「去勢侏儒」たる彼の特権であつた。この安全無比な生物相手ならば、帝の疑惑を惹くことは全くあり得ないから、彼女達は安心して彼を玩弄したのである。彼の見識も知性も人格も要するに彼の精神の一切はそこでは無視され、彼の畸形の肉体のみが単なる肉塊として美人達の肉欲に奉仕させられるのだ。——帝自身も、彼の諫言の理あるに暫し屈服せしめられたあとの反動的な閨房の沈淪の時には、報復的になつて王義の肉体を故意に侮蔑的に使用しなかつただろうか。そしてどんなことを命ぜられても否むことのできない存在なのだ、王義は、ある時はその倭小を利用されて、「任意車」の中の「罪の椅子」仕掛の内部に取付けられ、帝に御せられる美女のアヌスを……して、彼女の……「生きた道具」とされただろう。ある時は、長夜の荒淫に腎虚に近く、容易に……とせ

ぬ帝の……にふくんで、用をなす……になるまで秘術を尽すように命ぜられただろう。帝に女色を諫めた身が、女色のための道具として使用されるのだ。

しかも王義の身に潜入した私は、それらの奉仕に喜びを見出さずにいられない。帝の淫を諫め、その社稷の安泰を図るのはもともと宰相や諫議の職に在る人の任務である。ただ帝に仕える日の一日も長いことを祈るが故に、私は侏儒の身も忘れて、僭越な上奏もした。けれど、帝はどうしても女色をあきらめられない方なのだ。社稷を危くすることは承知の上で、一日一日を本能の赴くまゝに暮さずにおれない「情豪」なのだ。それならば、侏儒としての自分の第一の務めは、帝のその一日一日をできるだけ楽しいものにしてさしあげることではないか。形は違うが、それも又忠義ではないか。自分が今怠ければ、帝はこの処女を味おうという今夜の楽しみに逃げられてしまう。今の自分の最大の忠義は、帝の……刺戟具としての任務を完遂することなのだ。……私の口の中のもの、漸く元……なり、生き物のように……し、本来の……な姿を取り戻す。私の……も苦しくなる……方だけで……になつた、この天下第一の人の天下第一の……ながら、私はいつか自分が寵妃の一人となつて、愛せられ、……しているかのような満足した気分を味う……。

思わず又筆が走り過ぎたらしい。この程度にしておくが、図らずも本項では受動的○○愛好者としての私の一面を筆にしてみました。この形でのみ私は男性の○○に接触することを望むのである。同好の方には項を改め詳述することを約すると共に、他のこれに興味のないマゾヒスト諸君に対しては、私自身の性癖から、

この「マゾヒストの手帖」に、将来も右のような多少の男色的色彩の入つて来ることにつきあらかじめ御諒承願つておく次第である。

第五十四 侏儒と道化

侏儒のことをもう少し一般的に取上げておこう。

漢籍では優倡侏儒とか、俳優侏儒とか熟せしめることが多いのは、俳優即ち役者と侏儒のような宮中道化とが分化していなかつた時代が長く続いたことを示している。五経の一である礼記（樂記）に「及優侏儒養雜ニ子女」とあり疏によると養雜とは獼猴のことである。（舞台において男子婦人の区別なく入り雑るさまが猿の男女別なきに似ているといふので現代人などこれによると、皆猿同然といふことになる。）とにかく、人の目を楽しませる存在としての侏儒は中国ではかように古くからあつたものだ。松下見林の異称日本伝に収められた魏志倭人伝によると有名な卑弥乎女王のいた女王国の南に「侏儒国」ありと出てくる。これはネグリートかも知れぬという人もある。

西洋においても、貴人の愛玩動物としての侏儒が古くから存在した。「不具者の製造」について別に一項を設ける予定であるから、ここに詳述はせぬが、エジプトでは王ファラオの宮廷に売りつけるために、赤坊を甕の中に入れて育てて侏儒を生産する御用商人が存在したのである。ローマの貴族も中世の封建領主も、近代の国王も皆「馬鹿」や「侏儒」を飼うのを楽しみとした。私達が九官鳥の馬



鹿話を喜び、狎やタツクスフンドの畸形を賞でるのと同様に、彼等は、「馬鹿」と会話するのを楽しみ、「侏儒」の姿態の見事に打興じた。これら宮中道化師を総称して jester とか Hofsnarr といった。

目でこれら jester どもの生態を味うのに恰好な一群の絵がある。イスパニヤ王室のお抱え画家だつたベラスケスの手になるマドリッド宮廷の道化師達の肖像画の数々だ。流布のベラスケス画集を見給え。「バレカスのエル・ニニョ」「コリアのエル・ボボ」「モラの

ドン・セバスチアン」「エル・プリモ」「イギリスのドン・アントニオ」……宮廷の爬虫類（！）とよばれていた彼等はこの大画家の神筆の故に不朽となつた。だが例えば自分の肩まである大きな牝犬の手綱を、まるで馬を牽くようにして握っている盛装のドン・アントニオを、その犬より以上の存在として見た人はなかつたのだ、これからもないだろう。不滅となつたとはいつても、それが侏儒の運命であるのだ。

このベラスケスの絵がそのまま動きだしたような映画がある。「女だけの都」と訳して上映されたジャック・フェデエの「英雄的祭典」。これはイスパニヤ王（フェリペ四世？）の軍隊の通過を恐怖したオランダのボーム市の市長以下役人達全部が仮病になると、市長夫人（フランソアズ・ロゼエ）以下市民の妻女達が、夫に代つて王の一行を接待し、肉体的魅力に物言わせて、閨房内で骨抜きにしていまい、翌日、事なく一行を送り出す、という筋書きだけでもかなりマゾヒスト好みのする映画である。将校や亭主の中には、女人達の男まさりの奮斗と対比的に、編物や刺繍を愛する女性化した連中の描かれているのもよい。

この王の軍中に、王のお相手をする侏儒が飼われている。慾が深くて市民から砂金の入った袋を捲き上げるが、一枚上手の従軍僧（ルイ・ジューベ）に見つかつて取上げられてしまうといった少し足りない奴として描き出されている。本当に軽蔑すべき畜生同然の存在と観衆には印象されるだろう。

序でに侏儒以外の jester のことにも少し触れておこう。jester は本来は「馬鹿」や「道化」を意味することばである。（強いて訳せば「幫間」である。）「馬鹿」と「道化」との区別は曖昧である。

本来は「馬鹿」の資格あるのは「白痴」や「低能」であつて、主人達の問に対して馬鹿な答えをして、彼等を面白がらせたのであるがこれは頓才ある「道化」の機智に富んだ答えが主人達を喜ばせるのと、効用に於て全く同じである。そこで両者は混同されてくる。寧ろ真に優れた「道化」であることは天才を必要とするともいえる。前項で「リヤ王」「道化」をあげたが、同じくシェークスピアの「十二夜」に登場するフェステなどは、「馬鹿」とはいつても、自らいうとおり

「伶俐な馬鹿は馬鹿な伶俐よりまし」

という奴で、才人である。漢武帝に仕えた東方朔とか豊太閤の側近に侍した曾呂利新左衛門とかのいわゆる滑稽者流は、この種の道化の高級なものとするのが妥当であろうと思われる。この位になると侏儒のような畜生的存在ではなくなつてくるので、マゾヒズム的意義も、彼等がその主人を喜ばせるという手段的存在としての生活を送つたという点のみに限局されてしまうのである。

本項はうまくまとまらなかつたが、この程度で切上げておく。

【読者通信】

本日、奇譚クラブ四月号入手いたしました。小生が最近特に気に入っているアメリカ式サデイズムが載っているので大喜びです。三月号の二頁大口絵「巧みな調教師」及び「ギャツグ六種」等も素晴らしいものです。殊に「ギャツグ」では、第三番目と第六番目のものは、いかにも金屑製のベルトがしつかり喰い込

んでいるか、が伺えて大変よいものでした。本四月号では「美しき小馬のセリ売り」が出ていますが、これもやはり首輪だけでなく、三月号にあるようなギャツグを掛けたらよいと思ひます。然し、吾妻新氏の「さるくつわ」が上下に亘つて書かれるように楽しみになっています。どうか今後もアメリカ版サデイズムの頁を増して下さい。

（東京 G・H 生）

☆ 忌わしい歴史の一面 ☆

奴^ど 隸^{れい} 加^か 虐^{ぎやく}

川 野 四 郎
杉 原 虹 児 画

(一)

一七世紀から一八世紀に渉る一世紀こそ人道上、許すべからざる、暗黒の時代であつた。アメリカ植民地へ、所謂「奴隸商人」の鞭に追われて多くの奴隸達が輸出されたのである。

新興の植民地は、開墾や鉱山に多くの労働力を必要としていた。

頑健な黒い肉体を持つアフリカ土人に目つけたのも、こうした理由からであつた。

奴隸商人達は、アフリカの沿岸に基地を設けて、文字通り土人達を狩り獲つて輸び去

つた。

アフリカの奥地から暴力でつかまつた奴隸は鎖で繋がれて、海岸まで連れてこられ、小さな船に、押し込められて、アメリカやその他の植民地へ輸出されたのである。

此の忌わしい事業に、一番熱意を示したのがイギリスであつた。

一七七五年、奴隸制度に対する反対の声が北アメリカを中心として起つた時、イギリスの拓務大臣ダートマスは「政府は、全国民にとつて、かくも利益のある商業に干渉せんとする企てを植民地側になさしめることを許すわけにはいかない」と宣告した。

これで見える通り、イギリスは真に文明国にふさわしからぬ行為を、自ら認めていたのである。

政府に於いてすら然りとすれば、実際に、

奴隸をあつかつた商人達が、如何に非道な暴虐の限りを無力な奴隸達に加えたか、察して余りあるものがある。

これだけの予備知識を提供しておいて、「奴隸加虐」の恐るべき二、三の実例について語りたいと思う。

(二)

ある時は、彼等奴隸商人の残虐と猟奇の興味は、アフリカの食人種族に向けられた。

自ら手を下す事なくして、奴隸を得る為に彼等は、食人種族を味方に引き入れて、奴隸狩りをさせたのである。

食人種の土人達は、温和な土人を容赦なく狩り立て、いくばくかの謝礼を商人達から受取つた。

塩、ガラス製品、武器と引きかえに、彼等は同じ肌の色をした黒人達を奴隸商人に売つ

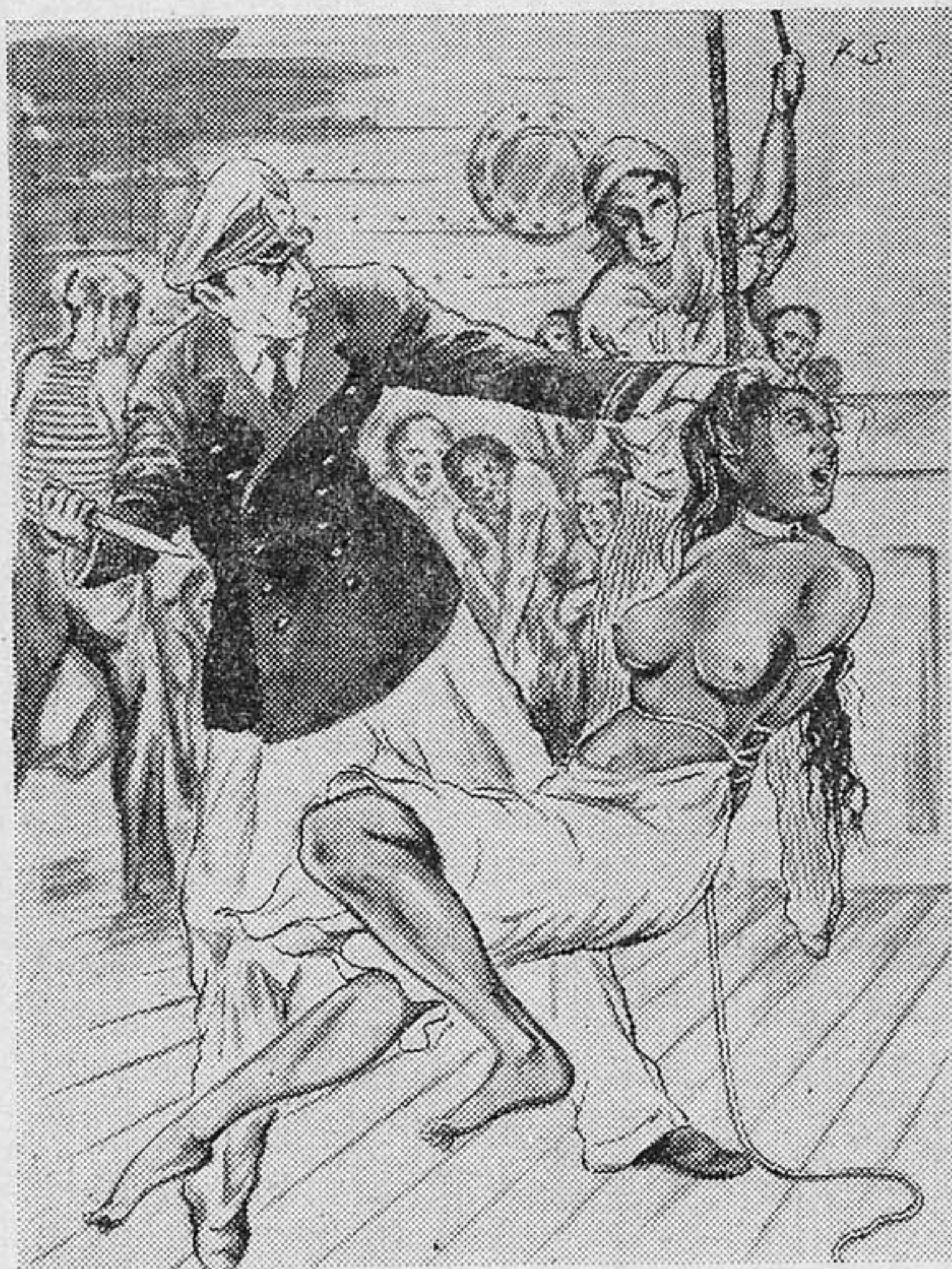
たのである。

のみならず彼等は報酬の一つとして、商人達から、一定数の奴隷を割当てられこれを貪り喰うのであつた。白人の商人達の目の前で惨殺し、その肉を喰つたのだと謂う。かくてしばしば食人種の土人は、眠つてゐる平和な村落を急襲し女や子供まで、さらつて来て、商人達の隷奴船を満たし、残つた同胞を、喰べてしまつたのであつた。

奴隷商人の中には、此の無残な光景に、猟奇の眼を見はると共に、自ら進んで罪のない土人に、殺略の刃を向ける者すらあつた。

こうして集められた奴隷達は、海岸で、小さな船に押し込まれ、手足を鎖でつながれた上、首には鉄の首枷がはめられ、それも各々に鎖でつながれ、身動き一つ出来ない状態にされるのが普通だつた。

狭まくるしい船底には空氣の流通が悪く、



その上、大小便はたれ流しと言つた具合なので、鼻をつく地獄の悪臭に覆われていた。

しかも看守の鞭は処嫌わず振り不され、皮の靴が、横腹を蹴上げるのである。

食物は殆んど与えられず、代りに看守達の罵倒と私刑リンチが与えられるだけであつた。

こうした奴隷船の一つ、ロバート号では遂

に奴隷の暴動が起つた。

死にかけた奴隷に、非道な看守が鞭を振つて、責殺した事から奴隷達は憤激し自由のきかない腕で、彼をひきずり込むと、よつてたかつて、撲殺してしまつたのである。

止めに來た二人の人夫も同じ様になぶり殺しにされ船長自ら短銃を発射して、ようやく暴動は鎮圧された。怒り心頭に発した船長は恐るべき復讐をもつて報いた。

まず若い女奴隷が引き出された。彼女は暴動に参加しなかつたにもかゝらず他への見せしめと、船長の嗜虐的な興味から非業の最期を要求されたのであつた。

黒人特有の、のびのびと均勢のとれた美しい肢体を持つ此の女奴隷は、素裸にされて、奴隷達の前に出された。

船員達が、麻綱で彼女を縛り上げると、天井から吊した。

長い脚が二本、しきりに空をけつたが、その度に太腿の筋肉が、ルズミカルに動くのを船員達は好色の目で眺めた。

くびれた胴体には、麻綱が喰い込み、女は顔を歪めて苦しがつた。

「ナイフを持つてこい」

船長が薄い唇を歪めて言つた。

船員達の好奇の眼。奴隷達の不安に満ちた眼、その中で、船長は、手にしたナイフを女の腹部へさし込んで、ぐいとえぐつた。

「ギヤー」

恐ろしい悲鳴と共に、女奴隷の脚が、船長の巨大な体をつきとばした。

さすが気の荒い船乗り達も此の船長の無道振りに、しばらく口もきけない位驚かされた。

内腿をつたつて流れる真赤な血が、床に落ち、女は苦痛で身悶えた。

次いで船長は二、三の船員にナイフで女の体を刺す様に命じた。

不安定につるされた女の体が、彼等の目の前で、ぶらりとゆれる。

挑発する様に、苦痛で引きつった腰が大きく左右に動くと、今や、淫虐の鬼と化した船員達は、めいめい手にしたナイフで、処かま

わず女奴隷の肉を刺し貫くのだつた。

「オーツ」

獣の吠える様なうめき声が奴隷達の口をついて出た。だが、彼等には、どうする事も出来ないものである。

誰かのナイフが、つるした綱にふれたのであろう。

女の体は一転し、どすんと床に落ちた。全身から血をふき出して、彼女の息は絶えていた。

船長は不様に投げ出された屍体の胸を、ナイフで一文字に引裂いた。

未だ微かに鼓動を続ける心臓と、くすんだ色をした肝臓を、引っぱり出した。

側に縛られていた二人の謀反人。逞しい肉体を持つ暴動の主唱者達であるが、船長は、今、屍体から取出した臓腑を、彼等に喰う様に命令した。

勇敢な二人の奴隷は、たゞ強く首を横に振るばかりだつた。

だが船長は、無理にそれを彼等の口に押込んだ。生温い血のしたゝる肉塊をはき出した彼等は何か土人語で絶叫した。

船長のナイフが一人の奴隷の胸に飛んで、ブルブルと柄がふるえた。

どざりと倒れた男の上に、続いて、もう一人の哀れな犠牲者が同じく胸を刺されて、崩れ落ちた。

三人の死骸は、無造作に、海中深くほうり込まれた。

そして、何事もなかつた様に、死の奴隷船は一路アメリカへと大西洋を西は向けて走つて行つた。

(三)

こうしたエピソードは、何もロバート号に限つたものではない。

総ての奴隷船が多かれ少なかれ、こうした非人間的な取扱をしていたのである。

そして、此の非道、残虐は、唯に輸送中のみならず、自由を失つた奴隷達の一生涯につきまとつたのであつた。

歴史学者であるジエームス・A・フロイド氏の著書や、有名な著述家エドモンド・D・モレス氏の書物に現われた、奴隷加虐のエピソードを拾つて見よう。

①バルバドーでは六万人の奴隷が酷使されていた。

彼等は一寸でも命令に叛くと、容赦なく殺された。木に縛られた土人が生きながら、焼き殺されるのも珍らしくなかつた。

鉄で作った籠に入れられ日干になるまで、水も飲物も与えない、と云う残酷な刑罰もあつた。女奴隷達は、狂暴な白人のサディステイツクな玩具であつた。彼女等は、白人に犯されるに必ずその後で、虫けらの様に無意味に殺されるのが常であつた。

フランス領やスペイン領では、此れらの奴

隷に対しても、種々の救済

がほどこされ、キリスト教の洗礼も許されていた。だが、生来の奴隷商人たるイギリス人は、彼等にキリスト教の洗礼を授けなければ救済の手もさしのべなかつた。黒人であれ何んであれ一度キリスト教徒にしたからには、彼等を奴隷の状態にしておく事はジョンブルの社会正義が許さなかつたのである。

あくまでも奴隷を、人間以下の単なる伕く動物と見做そうとしていたのであつた。

②一般に、英国を除く他



の国々の許にある奴隷は、良い待遇を受けていたと信じられている。そして一番ひどい虐待を加えたのが、英領西印度における英人達であると言われている。

こゝの奴隷達は、今迄述べて来た、ありとあらゆる暴虐を受けたが、D・モレル氏の言う次の刑罰の如き、その最たるものであつた

ろう。

即ち、沸騰した砂糖の釜の中へ投げ込むのであつた。

一人の若い奴隷が、主人に反抗したと云う理由で、いゝ加減鞭でたゝかれた後、煮えたぎった砂糖の釜に投げ込まれたのがそれである。

その他、手足を切られた

死骸、飢え死んだ死骸が、路に投げ出されているのを此の地方ではちよいちよい見られたと云うから物凄

(四)

こうしてアフリカの黒人に対する虐待が続けられたのと、ほぼ同じ頃、太平洋の端ではオーストラリア土人に対する、言語に絶する圧迫が行われていた。

一七七〇年、キャプテンクツクがオーストラリア東海岸を発見して以来、濠州は英国の罪人を流刑させる大陸になつた。

それと共に、開拓精神に

燃えた自由移民も渡つて来た。これら英人と土人との最初の出会いは極めて和やかに平和的に行われたが、やがて土人達は彼等の狩猟地から追い出されるに至つた。

羊毛生産の為に必要な広大な牧地を英人達は要求したのである。だが、その土地は遊牧民たるオーストラリア土人にとっては、命以上に大切なものであつた。

こうして白人対土人の血なまぐさい闘争がくりかえされたが、いずれも、土人達のみじめな敗北に終つた。

ボンウィツク氏の著書「タスマニア人の最後」を見れば分かるが、英人は十九世紀に至つて、なお暴虐の限りをつくし、遂にタスマニア地方の土人を一人残らず根絶してしまつてゐる。

こゝで、私は、奴隷への加虐の続きとしてオーストラリアの残虐を、二、三、の実例について語り度いと思う。

①白人移民の間では女の数が極めて少なかった。彼等は土人の女達を争つて鹵獲した。彼女等が娘であれ、妻であれ、容赦なくこれを犯して、邪魔立てする土人達を片端から射殺した。

偶に土人の一人が犯された妻の復讐をした

からと云うのに、その全種族が絶滅されたと云う例すらあつた。

ヴィクトリア地方の土人保護官をしたロビンソン氏の報告に依れば、白人と土人との間の闘争の九割迄は、白人の男と土人の女達との不法な関係が惹起したものだと言われている

②ヴィクトリア州のチブブランドでは、白人の女が土人に襲われたが、その嫌疑者一人を捜査する為に、五十人もの土人が射殺された事もある。

③ジョージ・チツプス卿の報告に依れば、ヘンリー・ダンガー氏の家の附近に、約五十名の土人が全く平和的に住んでいた。これを附近の白人達は、理由もなく殺戮する事を共謀した。ある日曜日の午後、彼等は一団となつて土人部落を襲ひ、三十数人の土人を綱で縛り、刑場で撲殺した。土人の女達は、その時、想像を絶する凌辱を受けて後、殺されたものである。政府の当事者は、この白人暴徒の中、七人に対して婦女子殺害の責任を問ひ法廷は、これに死刑を宣した。

だが、此の判決が白人達の間で猛烈な物議をかもしたので、残りの暴徒に対しては何んらの手段もとられなかつた。

④ドレツチ保護官は次の様に話している。

或る白人が、土人に一片の肉を与え、喜んで食事をする彼を、いきなり射殺し、その妻を撲殺した。

土人の死肉は、白人の犬の餌にされた。

⑤屯所に駐在している英国士官達は、日曜日になると銃をもつて土人狩に出かけ、女子供の見境なく、殺戮して引きあげるのが常であつた。

(五)

エドワード・カー氏の「濠州民族」に書かれている「種族分散」について紹介しよう。

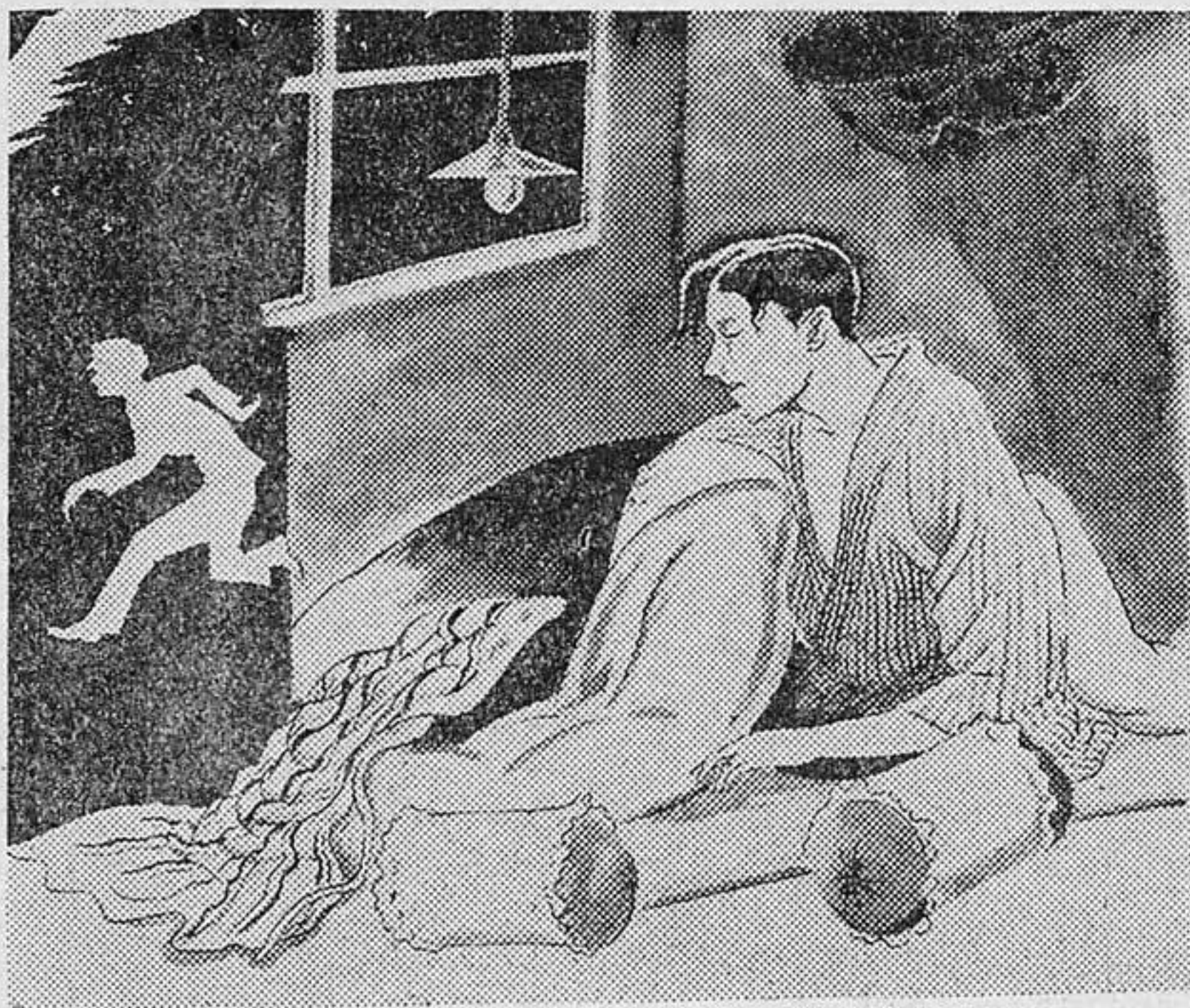
白人の所有になる家畜が、土人に襲撃されたり、或は単に土人の姿を見て家畜が逃げ出したりしても、所有者は直ちに警官を呼びにやる。急報を受けた警部は部下を率いて急行するが、まず附近で最初に出会つた土人達にむかつて軍用犬を放つのである。そして土人達の槍がとゞかぬだけの距離を保つておいてできるだけ多くの土人を射殺してしまふ。その中に犯人がおろうと、おるまいと一切かまわない。

かくて虐殺が終ると、指揮者は、部下の情慾を満足させる為に、逃げおくれた土人の女達を鹵獲する。男たちは直ちにその場で獣慾を満たすか、或は本部まで連行するか、或は

男性愛彷徨記

或る同性愛者の告白

小田 雅 春



面白半分に殺してしまふのである。

中に、美しい女がいた場合には、競争者が多くなり、あげくの果は、獲物にありつかなかつた男の嫉妬から、女は射殺されてしまふ

のであつた。

この大量殺戮の後で、それを管理した指揮者は、その地方を荒した狂暴な種族を分散させた」と報告して、事件はそれで決着する

のであつた。

参考 (E・オルバート「英国、奴隷商人、

奴隷所有者」)

私は私の生きてある限りをソドミアとして貫き通す事でしょう。私の愛の彷徨は更に続きます。

故郷に引揚げた私は中学時代の恩師で当時県の保険課長の地位にあつた方の世話で同課に勤務する事になり、昭和二十二年九月には、労務省設置に伴い其の地方出先機関に転属となり、翌年四月には県南の出先機関に転勤致しました。

そこは県内でも特に交通不便な陸の孤島と呼ばれた人口三万位の、近くに割合有名な漁港を控えた城下町でした。赴任当初は全く刺激のない単調な生活にうんざりして一日も早く転勤出来るようにと願っていました。その中に私はここで私の四人目の愛人を得ましたので今度は転勤しないようにと祈るようになりました。

彼を初めて知つたのも其の町にある映画館の中でした。私はいつも映画館に入ると、先ず周囲の観客の中に私の好みにあつた少年はいないかと、一渡り暗闇の中で探すのを癖としていましたが、其の日、私が観客席にはいつた瞬間、上映中の映画がエンドとなつて館内には電灯がパツと灯つたのです。其の時でした、私から二、三尺も離れない処に立っていた新制高校生が丁度私の前の柱

に私に横顔を見せてよりかかつていました。ハツと思うと私は息も出来ない思いで其の少年の横顔をみつめていました。

それは嘗ての安雄の面影にそっくりでした。忘れようとしても忘れることの出来ない安雄を更に無邪気にしたような少年らしい澄んだ瞳の持主でした、田舎の生徒にしては洗濯の利いた、こざつぱりした洋服であつた事も、私に好感を与えました。此のままでは別れない。何かの機会を得て話し合い度いと思ひ乍ら、全く未知の此の少年に、いきなり話しかける理由も咄嗟には見つからなかつたのです。然し此の時、神助とでも云うのでしようか、神は私に彼と話し合えるチャンスを与えてくれました。その少年に「おゝ安田」と呼びかけて近寄つて来た同じ学生が、偶然にも私が当時、借家していた家の隣家の生徒で時々映画見物に連れて来てやる少年だつたのです。

そして隣家の少年を中にして間もなく私は其の少年安田稔を得る事が出来ました。当時高校二年の彼を其の両親の許しを得て、私の家に同居せしめるようにしたのは、それから数日後でした。私は此の地に赴任してから私の勤務先に近い町中の隠居所を借りて自炊生

活をしていました。稔の家は町から約一里程離れた田舎の農家で、そこから交通機関もない地方の事とて毎日徒歩で通学していたので私の家に引取る話は、非常に順調に運んだのです。

それに田舎の人は純朴で役人は偉い者という旧觀念を捨て切れず、両親も行末は次男坊の稔を役人にする事を望み、稔も又百姓する事を嫌つていたので、私の希望は案ずる事もなく容易に達せられたのです。それから昭和二十六年三月、彼が卒業する迄、私は彼の学資から生活費の一切を負担しました。彼の家から月々二人で食べるだけの食糧と季節々々の野菜類は届けられましたので、實際の生活費は案外かゝらなかつたので、私の安い給料でも、どうにか満足し得る生活を営む事は出来ました。

然し此の愛は私だけの一方的な精神的なものに終止し謂わば片思いの切ない愛でした。彼はその面影に似ず同性愛心理は全く理解出来ない正常な少年だつたのです。して……も、……は極度に嫌い、一寸肩が触れても嫌がるという風でしたので、私は自分の思いの処置にどんなに苦しんだ事しよう。時に自省し切れず彼を抱擁したりすると、すぐ気付

いてどんな夜半でも、サツサと服を着て我が家へ帰つてしまうのです。そうした失敗を数回繰返す裡に、私も彼から………を得る事は断念して、唯精神的に愛する事によつて辛うじて生甲斐を見出すようになりました。

こうして唯彼が生活を共にしてくれる事だけに満足していたのですが、愈々来年三月は彼が高校を卒業するという昭和二十六年正月私は県北の都市へ転勤を命ぜられました。此の転勤は私にとつては榮進の途であり、喜んで赴任すべきでしたが、稔と別れ度くない思慕の情に遂に退官願を出して、赴任をけつてしまつたのです。此の行為は所属長の怒りを買ひ、すぐさま解職されましたが、私は生活の脅威より、後暫くで卒業する稔を待つて予て念願していた上京を執行する決意でしたより大なる夢と希望を抱いていたのです。

昭和二十六年三月、稔の卒業式の翌日、私と稔は東京の先輩を頼りに上京しました。幸い五月には前歴により神奈川の郷里時代と同じ労働省の出先機関に稔も共に採用となり、私の新しい希望に満ちた生活がスタートしたのです。

然し此の頃は私と稔の生活は行き詰まつた思いで、私の一方的な愛情も少しづゝ冷却し

唯情性で同棲生活とは云えない、単に同じ部屋に起居を一にしているに過ぎない味気ない感情に陥っていました。

私は其の頃から新しい相手を求めて、折にふれ時にふれ上野界限を彷徨するようになりました。

然し、私の愛の対象は十八、九才から二十二、三才位までの純情な少年か、青年であり、所謂プロの男娼は見るも嫌なので仲々思う様にそういう対象にはめぐり会えませんでした。

いつも空しく帰らねばならなと分つていても、私は飽きずたゆまず、相手を求めて歩き廻りました。それでも時には一夜だけの相手は得て、横浜鶴見の下宿まで連れて来てその夜限りの満足を満たす事がありました

が、私が全身全霊を捧げて愛し得るような相手は見付かりそうありません。浅草の東京クラブ（映画館）は同好の人の集まる処と知つて幾度か出掛けて見ましたが、それらしい人に今日まで会えません。僅かに立見席の混雑を利用して後方の青少年の身体にそれとな

くふれて儚ない満足を味つたりしました。

こうした時、昨年の四月十日でした。

高校を卒業した許りの新規採用者が署に挨拶に来ました。此の少年は私の好きなタイプ



の行為が彼に大きな屈辱を与えたとは思わず只単に、恥かしさで帰つたものと簡単に考え、その夜は何の気もなく休んだのですが、彼は翌日私の行為を学校の教師に訴え教師は私の所属長に私の処罰を求めて来たのです。事の重大さに驚きましたが、全ては後の祭りでした。

私の満たされない煩悶の生活は、私をして遂に強制解雇という破目に立ち入らせて了いました。心理学を大学で専攻したという署長から

「君のような変態性慾者は公務員としては不適格であるから、退職願を出すように」と宣告されたのです。

明日から、一体私にどうして生きて行けと言うのでしょうか。私のような性愛の異端者はこの世に生きて行く権利もないのでしょうか。僅かの退職金は一月で使い果し、貯えのな

い身は数多くもない身の廻り品を金に代えて生活費に充て、就職先を求め乍らも、尚且つ愛の対象を、一夜のかりそめの相手を求めて昨日も今日も、日比谷を、上野を歩き続ける私です。明日は腕時計でも金に代えて当座の小使銭に充てようと思ひながら。

（完）

★變態讚美論★

〔第三部 讚美論〕

鬼^き 山^{やま} 絢^{けん} 策^{さく}



第一章 變態は常態の上にある

第一部において論じ来つた諸項は、総て、變態性欲を通常性慾と比較して何等遜色なき性慾であることを立証するための論議であつたが、本項においては、これを更に一步進めて變態性慾は通常性慾より格式において数段上位にあるものであると云うことを証明する

と共に、その複雑微妙なる妙味を讚美するものである。

世に「變態」と名のつくものは数多ある。

例えば文字にしても、楷書が常態であり、行書、草書、と次第に變態と化し、隷書、篆書ともなれば完全に変態である。仮名にしてもそうである。通常の仮名文字の他「変体仮名」と自ら「變態」を看板にした文字がある。然して書を学ぶ場合、「變態」の形種は、常態を卒業して、更に一步深く進んだ種目である。

絵画にしてもそうである。ピカソとかマチスの絵は、立派な變態的な画法である。では彼等に写實的な画法は画けぬかと言へば、そんなことは言う迄もなく一通りの画法は疾くに修業しての後に、あの独自の觀かたが生れたのであろう。

文章にしても、作家は絶えず何か新しいものはないか、變つた書きかたはないものかと探求して止まない。

音楽にしてもジャズが誕生したばかりの時は、クラシックな音楽

家から「ジャズは真の音楽にあらず、邪道である」と迄非難された。にも関わらず現在の人気はクラシックを圧倒して居る。

このように「変態」は人生社会のあらゆる部門に浸透して居る。社会の機構が複雑になればなる程、物のみかたも考え方も複雑になり、そこに変態的現象が起るのは当然の結果である。

常態とは要するに単純を意味するものである。世の中があまり複雑化すると、我々は単純さを欲するが、さりとて、総べての部門が単純化された場合を想像すれば、いかに無味乾燥なものとなり、淋しいものになるか、たとえ悩まされても煩らわしくても複雑さの有難味が分るであろう。

要するに変態と常態とは、陰と陽の如く切離すことの出来ぬものである。

第二章 変態は常態より進歩したもの

さて変態性慾であるが、性慾の場合に限り、「変態」を拒否することは出来ない。然も「変態性慾」の方が「常態性慾」より複雑であり、「変態性慾」の大部分は、一度は「常態性慾」を味わつて次の段階である「変態性慾」に進んだのであるから、これは「常態性慾」よりも進歩したものであることは論を俟たない。

今一つの本能である食慾にしても、極めて常態な食物を求めるなら、日本人は日本食のみを食うべきである。蛇を食つたりくらげを食つたり、燕のザーメンを食つたりする支那料理は変態極まるものである。昔の日本人は肉食をしなかつた。肉と言えは魚と鳥に限られ、獣の肉は「四つ足」と言つて「四つ足を食う奴は畜生だ」と言

われたものである。又肉を食うようになつても、馬肉を食う者は下等な人間、犬や猫を食う人は一階級下の人種（同じ日本人の中に一階級下の人種があるなど若い人は想像もつかぬだろうが）が食うものだと言われて居た。肉も食えず、洋食も、支那料理も食えぬ食生活想像して見給え、何と味気ないものではないか。

そこで現代人は食慾の方面では、何を食おうと、個人的に好き嫌いはあつても、理解だけはして居る。

それがひと度性慾の方面となると「変態」だと頭から否定してしまふ。変態性慾者から見れば「こんな美味しいものを、お前は食べよう」としない。哀れな人々」と憐憫の情さえ起るのである。つまり性慾の方は食慾に比してまだ／＼開発されて居ないと言えるのである。

性慾の遂行行為が、もし常態な型でのみ行なわれるとしたら、非常に単純な原始的行為である。

上位者は常に上位であり、………

と、この三つの要素の埒を出でないのである。

これでは大切な性生活に飽きがくるのも当然である。





そこで「技巧」の必要が起る。

処がこの「技巧」なるものも煎じ詰めれば「態位の変更」と「緩急」と「異物の使用」の三種類に尽きる。

このうち「態位の変更」と「異物の使用」は極めて変態性慾の世界に接近してくる。恐らくこの二種の技巧が進歩し、複雑となれば変態性慾との間に塀を設けることは困難になるであろう。さすれば変態性慾は最も進歩した技巧に心理的享樂を加味した。更に一層進歩したものと言えるのである。

これ程進歩した快美な世界に入ることができ、そのよきパートナーを得られた人々こそ幸福そのものであり、獸類と何等変りない行為をくり返して老い朽ちて行く人々は何と哀れな氣の毒な人々ではないか。

第三章 変態性慾は哲学的心理を含む

変態性慾と言うものは常態性慾と比較して、「官能的快感」に複雑な哲学的心理が加味されて居る。

下等な生物及び動物の生殖及性慾は、下等であればある程相手が異性であれば何でも構わないと言つた単純なものであるが、高等な動物になるに従つて、異性の中にも好悪を感じるようになる。

人間の性慾にしても、性慾そのものに種々の好悪が生ずるものは単純なる常態性慾よりも生物学的に見ても、高度なものと解釈できよう。

由来偉大なる天才、英雄豪傑の中には、変態性慾者が多いことを例に徴して見ても分ることである。

その具体例は本誌、或は各誌に数多發表されて居ることであるから、参照されたい。

変態性慾の中でもマゾヒズムの如きは、非常に高遠な心理の影響を受けて居る。

元来「慾」は即ち「我慾」であり、自己を主体とした考えであるが、マゾヒズムは、強ち自己本意ばかりでなく、多分に相手の存在及び意志を汲んで居り、寧ろその度が過ぎて、錯倒的心理に立到るもので、その根源をつきつめれば、自己の見地からのみでなく、違つた面から自己をみつめる哲学的要素がある。

このように高遠な変態性慾の持主が、常態性慾者に対して、劣等感を抱くなどは、以つての他である。

自己の性行為を反省して見て、良心に恥じぬものがあれば何のために羞恥を感じ、隠ぺいを欲するのか、誤まてる社会的通念に圧されて、逡巡するのは、卑怯者と言うべきである。

第四章 変態性慾の利点

次に変態性慾が非常に有益となる一例をあげよう。

夫婦生活には、幾週期かの倦怠期がやつて来る。

この危機に際して男性は妻に倦きが来ると他の女性を物色する。

女性は夫に不満を感じると他の誘惑に陥り易い。

共に夫婦生活の破綻となる。

これはその夫婦が常態の性慾しか知らないからである。

このような場合に、その気分転換策として、各自の性向に適當な変態性慾の種型を選んで正しく応用するならば、又そこに甘美な世界を覗くことが出来て、夫婦生活の危機を救うことが出来るであろう。

「もうこの女の総てを知り尽してしまつた」と思つて居ても又この世界に踏みこめば、意外な魅力の潜んで居たことを発見できるかも知れない。

もう一つの利点は、相性型の変態性慾者同志は、一層性的に結合の深度が強化することである。

例えば、男性サヂと女性マゾ、男性マゾと女性サヂは相性であるが、この相性同志は他の剋性の異性からの誘惑から避け得られるからである。

変態性慾は前にも言つたように一種の毒藥である。用い方を誤まると破滅するが、適量に用いれば普通藥より効果がある。危険だからと言つて避けて居たのでは、新しい世界を見ることは出来ない。生れながら金持ちの家に育つて順調に成長した人間は、貧乏を極

度に怖れる。経験のない未知の人生だからである。

だが浮沈の甚だしい人生の体験を経た人は、「貧乏など些も恐くない」と貧乏時代を懐かしんで居る人もある。

筆が主題から外れたが、筆者もアブの世界には危うく溺れかゝる程耽溺したこともあるが、現在では「私は変態性慾者である。」と公言することに些かの羞恥も感じない。そして筆者自身の精神が既に麻痺状態に入つて居ると思つて居ない。

だが、まことに残念なことには、誰の前でも「アブニスト」であることを公言するには、まだ時代がそれを理解する点迄に到達して居ないことである。

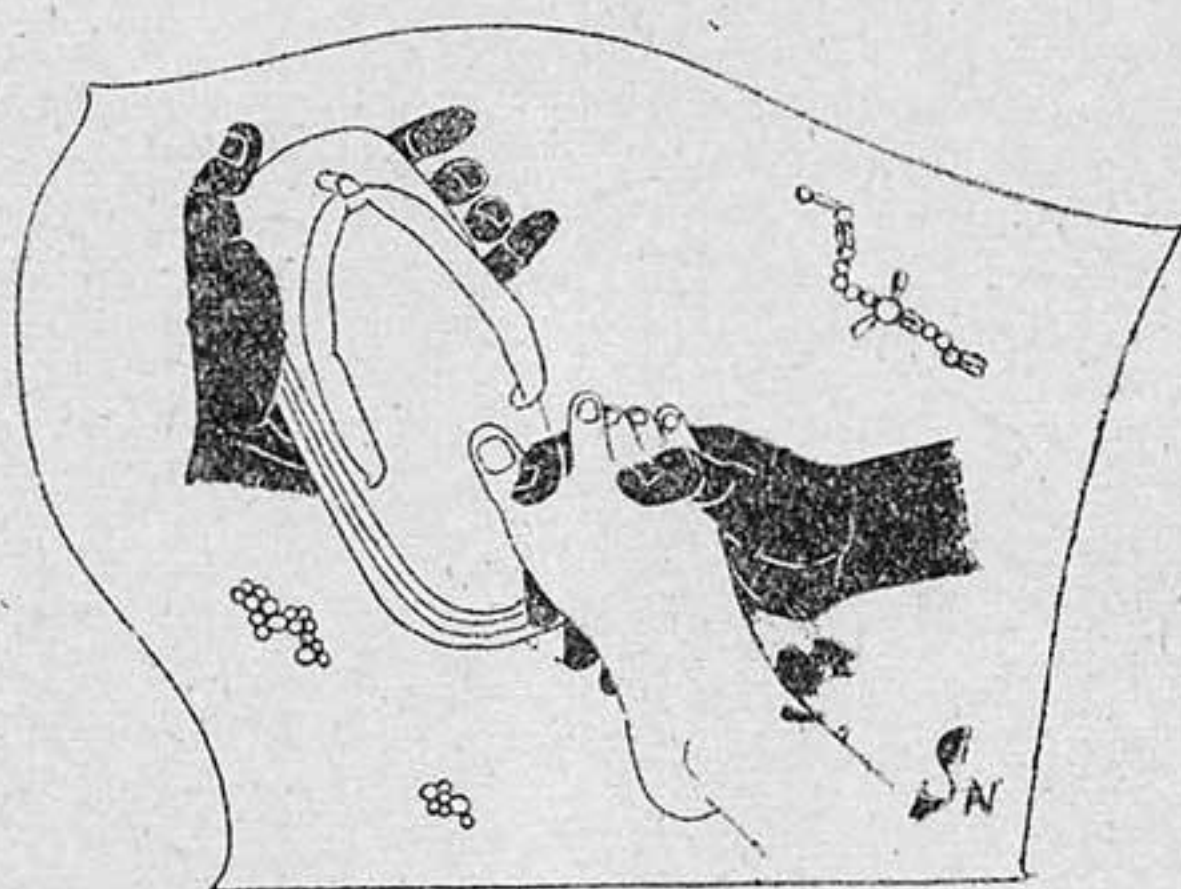
だからと言つて逡巡して居たのでは、いつになつても、変態性慾を誤解の殻からぬき出し得なくなる。

筆者は変態性慾を讚美はしたが懲過するものではない。

本論の使命とするところは、この一文を読んで、世の変態性慾者の悩める者、誤まてる者のペシミズム（厭世的）な精神が楽天的なものに一人でも多く変化せられんことを希うものである。

（完）





本誌創刊七周年記念

懸賞入選作品（三席）

『二百字讀歌』

眞砂 十四郎

1

奥様と旦那様は二階の寢室に、絹のお夜具の中で抱きあつておやすみになつています。私は階段下の三畳の部屋で疲れた身体を木綿蒲団にくるまつてぐつすり眠りこけるのです。思えばこの半年間の私のうつり変りはなんとという大変転だつたでしょうか。二階の御主人様御夫婦と私のはじめて会つたのが昨年十一月。それからいま初夏の六月、この半年あまりの一日一刻は私にとって「残酷な運命」だつた……のでしょうか、或いは「感激の運命」だつたのでし

ようか、私には判りません。ひよつとすると何処かしら私の夢想していた運命を現実として神が私のうえに具現させてくれたのかもしれません。

私は今の私の運命に甘んじて、毎晩、疲れてはいますが、しかし安らかに眠りにつくことが出来るのです。静かに目をつぶつて横になつてみると、こしかた半年の出来ごとが次から次へ走馬燈のように私の脳裡に浮びつ消えつ映し出されて、それを私は一つ一つ深く味わいながら眠つて行くのです。

2

半年前の私は、このスズラン書房の店主でした。戦災で家族全部を亡くしてから、一人とり残された私は、引続きしばらく勤めていた某薬品会社をやめ、当時値のあがつてきた田舎の土地、山林を売却つてまとまった金を手に入れたので、神戸へ出てこの家を手に入れた、以前からしてみたいと思つていた、書店営業をはじめたのです。他の商売とちがつて、本さえ並べておけば勝手に客が来ることだし、自分自身そうあくせく働く必要もなからうというのが書店を営んだ一番大きな理由だったのですが、一応の金もあるし、そうそう儲ける必要もなく、まあ最低限度食べて行けるだけの金さえ店からあがればそれでよしといった気持ちで開店した店であり、男の店員一人、女中一人を雇い入れて、書籍の仕入はその店員にまかせ、奥の洗濯、掃除、炊事は女中にまかせ、私はカウンターに坐つて新刊書でも読みながら店番をする。映画でも見に行きたいときは、あとを店員にまかせて出て行きますし、早寝したいときは普通九時までの営業時間を七時でも八時でもサツサと店を閉じて早仕舞するといったごくイージーなやりかたで営業していたのですが、おもしろいものでそれでも一応の売上げはあり、雇人二人の給料を払つたうえ、どうやら食べてゆけるだけの金は入つて来た、まことに結構なものな私のご身分だったのです。

その私のノンキさから、そのだらしなさから、私の運命がガラリと転換してしまつたのですが、今の奥様と旦那様がこの家へ見えたのが半年前の十一月でした。もつともこのお二人が私の店へ来たときは、もちろん、私にとつて奥様でもなければ旦那様でもありません。

いわばその反対で私が寛容な主人であり、彼らはペコペコと頭をさげ、私の店で仿かしてくれと頼みこんで来た哀れな失業者夫婦であつたのです。

彼の名は井上三郎、年は私よりたしか五つほど下で三十二才。彼女の名はその妻のかづ子、井上より四つ下の二十八才です。井上は私の郷里の家、今は売つてしまつて何もありませんが、旧家であつた私の家はその近辺で随一の、いわば「お屋敷」でありましたし、その家の近くに住んでいた縁故というわけで私の許に不意に訪ねて来て失業を訴え、その日の暮しに困つていたので夫婦二人でなんとかお店で仿かしてくれないかと頼みこんで来たのです。

私は井上から郷里の近所に住んでいたという話をきかされても、はつきり記憶にありませんし、彼が一体どういう性質でどういう能力をもつ男であるかも知りませんでしたので、彼の長話をきいたあと、いゝ加減なうけこたえをしておいて、雇つてやるともやらないともしつかりした返事はしてやりませんでした。

「まあ考えておこう」という私の言葉に彼は何度も何度も頭をさげてその日は帰つたのですが、その翌日、私は一人の女性の訪問をうけました。

二十六、七の背は五尺三寸ぐらいはありましようか、大柄で健康そうな体格をした女性で、胸のあたり、腰のあたりなど、和服でしたからハツキリとは、目立ちませんでした。それでも張りきつた曲線は、中に包まれた豊満な肉体を想像させ得るに充分でした。といつて、その服装は相当お粗末で、黒地に梅の花を赤であしらつた、倫子の羽織に、コバルト地に朱と薄鼠の色紙模様が大きく散らしてあるまがいもののお召の着物、薄茶色地に御所車模様の名古屋帯、

そのどれもがだいぶ古びた、よれよれというほどでもありませんが
いわばくたびれている代物で、それに袖口から薄地の白いメリヤス
シャツがチラツとのぞいていていつた、よくふんで薄給サラリー
マンの細君といったところでしょうか。それでも人を訪問するだけ
のたしなみにつけたお化粧は、ふとめの眉にうすくぼかしてひいた
眉墨、オークル地の粉白粉に、橙系統の頬紅と暗赤色の口紅など、
ちやうど「終着駅」のジエニフアー・ジョーンズを若くしたような
顔立ち、これといった美人型でない平凡な人妻の魅力があり、第
一印象は私にとつて悪くはありませんでした。

「御主人様でしょうか。わたくし、あの、井上の家内でございます
けど……」

「あゝ、井上君の……、そうですか、まあこんなところですが、お
かけ下さい」

客の少ない午後二時ごろ。所在なく一人で、カウンターに坐つて
いた私は、側にあつた小さな椅子をすゝめました。

「おそれいます。……はじめてお目にかゝります。わたくし、昨
日おうかがいいたしました井上の家内で、かづ子と申します。どう
ぞお見知りおき下さいませ」

彼女は何度も何度も私にお辞儀をして、椅子にかけました。話は
彼女の夫の就職のことでした。失職していかに困っているかという
ことをめんどりと訴えて、御主人様のお情けをもちまして、住込み
で結構ですから仿かしてほしい。住込みになれば夫婦二人で仿けも
するし、また店の合間には炊事もお掃除もいたしますからと頼みこ
むのです。私も最初はどうでもいゝつもりで応待していたのですが
彼女のものごしのしとやかさ、炊事も掃除もしますという言葉に、

ふと考えなおして、いまの店員と女中を解雇してこの夫婦を家に入
れゝば、二人一緒だけに給料もいくぶん安くなるし、それにこの女
の美しくしさ、これは一般的には決して美しくしさといえるほどの美人
でないことは前に申したとおりですが、人間には第一印象の氣にい
つた氣にいらぬという感情があるもので、私にとつてこの女性にな
かなか捨てがたい魅力がありましたので、ではこの夫婦を住込みで
雇入れようかという氣になつたのです。

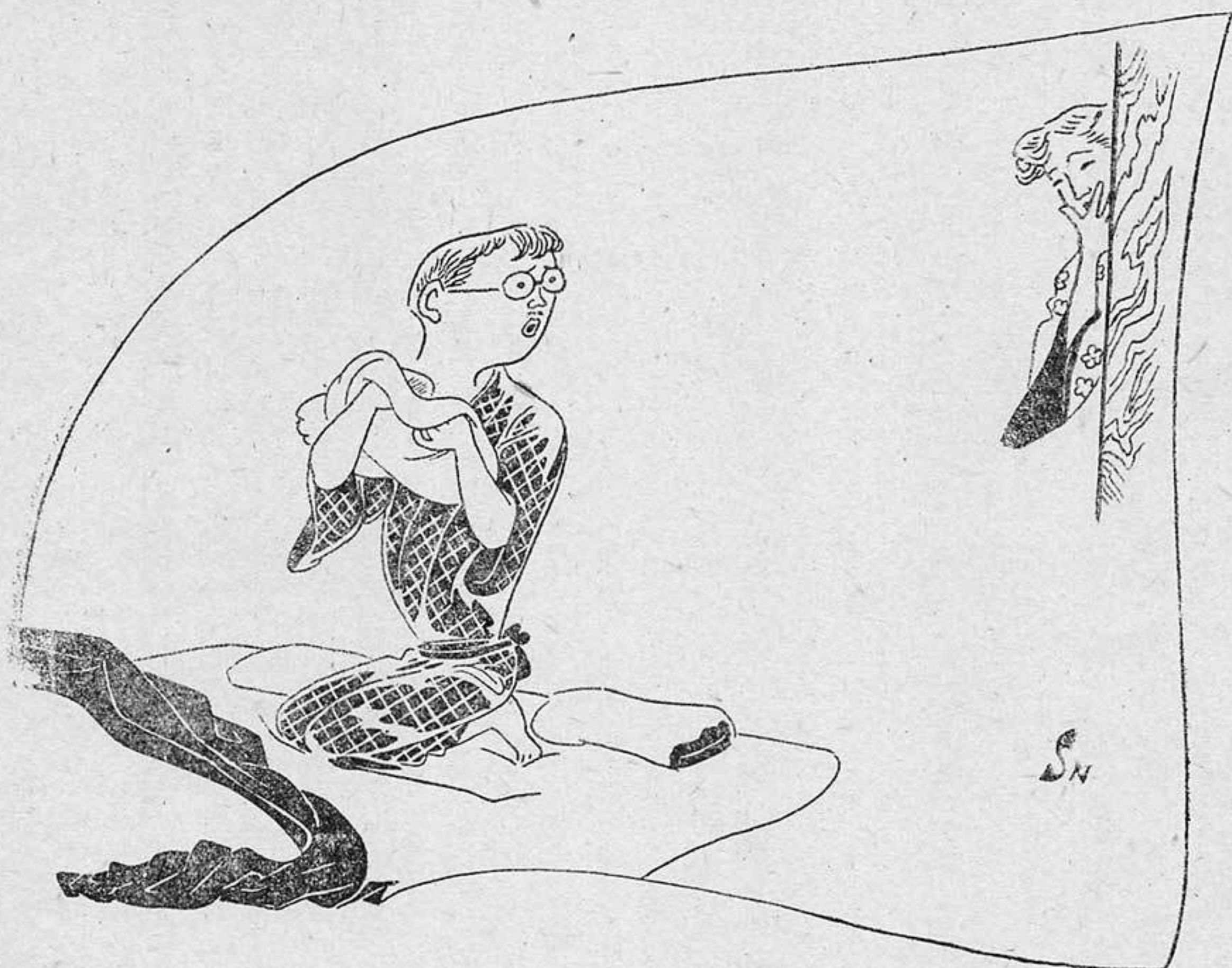
「お話をうかがうと氣の毒でもあるから雇入れてもいゝと思うが、
給料やら何やらの相談もあることだし、後刻ご主人にもう一ぺん来
てほしい」と言つてやりますと、彼女は大へん喜んで、お礼を百万
べんもくり返しつゝ帰つて行つたのです。

3

一週間ほどして井上夫妻は私の家へ住込むことになりました。二
人とも骨身を惜しまず仿くので、私も「これはいゝ拾いものをした
わい」と内心喜びつつ、仕入れは井上にまかし、奥向きはかづ子に
まかして、私は相変らずのんきに店番でもしながら日を送つたので
す。二階の八畳の座敷を私の部屋として、階下……は三間あります
が、店のすぐ次の間は仕入れた新刊書や返本の倉庫みたいになつて
いて使いものにならず、使用できるのは階段下の三畳と台所につづ
く四畳半の二間で、この四畳半に夫婦を寝かすことにしました。

午後九時半ごろには店を閉め、私は近所のパチンコ屋へでも出か
けますし、井上は仕入れ本の整理、売上げの帳簿つけ。かづ子は掃
除をすましてお風呂に、といった風で、お互いに床につくのは十一
時すぎですが、二階に寝ている私が夜中に便所へ行くときは、どう

しても彼ら夫婦が寝ている四畳半の間を通らないと行けないのはちよつと困りました。十一時、十二時ごろですと、彼らは眠りきつていないとみえて、私がおおりて行くと、お互いに背中合せになつたり、二人とも上を向いて静かに目をつぶっているといったつましい風景ですが二時、三時ごろ、彼らがすつかり眠りこんでからとなりますとひとり身の私にはいささか刺戟の強い光景にしばしばぶつかるのです。あるときはお互いに首と首に手をからませて抱き合つた姿で眠りこんでおり、あるときは蒲団のわきから赤いお腰と一しよにかづ子の足がのぞいていたり、思わず胸がドキンとなるのです。私はきわめて平然とよそおつて便所で用を足し、再び二人の姿を見ないようにして二階へあがるのですが、夫の首にかじりついたまま眠りこけているかづ子の数刻前を想像しま



すと、私は二階でしばらく眠れない夜がままありました。

そうした翌日のかづ子には、また一入の魅力があつて、何ごともないような顔をして朗らかに仿っているかづ子のひよつと歩く裾の乱れにも、なにか特別な匂いが発散しているようで、店のカウンターに彼女が坐つているときなども、私はなにげなく棚の本の整理をしているようにみせかけていながらも、私の視線は椅子にかけている彼女の腰のふくらみに注がれて、小さな椅子にはちきれるようにはみ出ている彼女のお尻の重みにぐつと圧迫されるような魅力を感じるのでした。

一方、彼女の夫の井上は井上で実に真面目に働く男で、私はいい奉公人を雇いいれたとひそかに喜ぶと共に、すつかり彼ら夫婦を信用してしまいました。その頃では一日の売上げの勘定も井上が全部計算して帳簿につ

け、私は翌日ざつと目を通す程度でしたが、次第にその帳簿も井上にまかせきりにして殆んど目も通さなくなりました。

これが私の第一の失敗でしたが、それよりも、もつと根本的な、ぬきさしならぬ大失敗を私が演じまして、それ以来急速に私の運命が転換してしまふ始末に立至つたのです。それは私がかづ子のあで姿に……、あで姿といつても、普通のお化粧をして普通の着物を着て、普通に仿っているいわばありきたりの人妻で、一向あで姿でもなんでもないのでしょうが、それが私にとつて次第にあで姿に見えるようになり、ことに彼女が私の見ていない隙を狙つて、店の奥の間できわめて短時間、夫の井上と事務服のガウン姿のまま抱き合つて接吻するのをチラツと見ることにありますが、そうしたあとの彼女が何もないような顔をして店の客と応待している姿に心を奪われるようになったのが、最大の失敗といつていいでしょう。

4

翌年の四月。おぼろの春の夜のことでした。店も終つて、跡かたずけもすみ、井上は銭湯に出て行きました。

「待つてよ、あたしも行くから……」と表口に出た井上に向つて呼んでいるかづ子の声が二階にきこえてから、下の部屋は人の気配もしなくなりました。二階にいた私はしばらくして階下へおりて行きました。ふと、四畳半の部屋を見ると、すでに夫婦の蒲団が敷いてあり、かづ子の赤い長襦袢の寝巻が蒲団のうえにしどけなく放りだされてあつて、そのかたわらに白いやわらかいものがまるめてぬきすてられてあるのです。

かづ子のブロース……。私は思わず表口の方をすかして見ました

が、すでに二人はお風呂へ出て行つて誰もおりません。私はくつとツバをのみこんで、夫婦の蒲団に近づきました。そして今ぬいだばかりとおぼしいかづ子の白いブロースをそつと手にとりあげたのです。まだ肌のぬくもりが感じられます。ぬき捨てて、新しいのと履きかえて、あわてて夫のあとを追つて出て行つたのでしよう、かづ子が今まで身につけていたブロース……。私はあたりを見廻しながらそのブロースを裏返しにして目的の個所を出し、両手で捧げ持つようにして私の鼻と口へそれを押当てました。なんとという強烈な芳香でしょう。じいんと下腹部にこたえる芳香です。私はしつかりと鼻と口をそのブロースで押えつけて、口も一ぱいにあけて、思いきり深い息を吸いこみました。あゝこれが人妻のブロース。夫と共に……人妻のブロースの匂いか。私は舌を出して……そのブロースの真中の個所に押当てました。そしてモグモグと舌の先でしめし……。味わいながらのみこみました。

あゝ、これこそ人妻の味です。ひとり女の味でない、ミックスさされている味というか、純粹でない複雑な、ほのかな甘酸っぱさと、舌にしみ出てくるかすかな塩からさ。この味こそ、この味こそ、私の手にとどかない人妻かづ子の味なのです。

ものゝ二、三分ぐらいでしよう、そのまま口の中に含んで坐りこんでいた私の背中の方で「ふふふふふふ」というしのび笑いをきいて私は愕然としてブロースを口からはなしました。私のうしろに当のかづ子が立つて見ていたのです。彼女は先に出て行つた夫を見送つてから、催していた尿意をはたすため、急いでブロースをぬぎ、便所に入つていたのでした。私は火のように顔がほてつて、そこへ立ちすくんでしまいました。

彼女は私の方を流し目に見ながら、唇に冷笑をうかべて「お風呂へ行つてきますわ」と言い残し、サツサと戸外へ出て行つてしまいました。彼女が出て行くやいなや、私は二階へ駆け上がり、寝巻に着かえるのもうわの空で、あわてゝ蒲団をひつかぶつてしまいました。

その翌日から私に対するかづ子の態度が少しずつ變つて来たのです。相変らず朗らかに立伏していることに變りはありませんが、店でカウンターのところにいる私の側の通路を彼女が通る時など以前でしたら「ちよいと失礼します」といつた風に主人に対する礼儀をとつてすり抜けて行つたものですが、あれ以来、突立つたまゝ「ちよいと」と言うだけです。私は私の方から氣をくばつて彼女が通り抜けやすいように身体をよけてやるようになってきたのです。あんな場面を見られた以上ぜひもない。私もなかば観念はしていたのですが、それにしても彼女は一たい私のとつた行動を彼女の夫に話したのだろうか。寝物語にでもあのとときの私のみつともない有様を報告して、二人でクスクス笑い合ひでもしたのだろうか。それとも彼女一人の胸の中におさめていて、井上は何も知らないのだろうか。もちろんお互いにあの夜の話にふれませんが、此方には全然わかりません。しかし知つてか知らずか、井上は相変らずよく伏いています。

5

私はどうもテレくさくて仕様がありませんので、しばらく彼らのそばから離れるつもりで、十日間ほどの予定をたて、東京へ遊びに行つてくることにしました。東京は戦前の二、三年、以前勤めてい

た会社の支社の方へ出向で勤務していたことがありますので、まだ二、三の友人もあり、この際久しぶりに訪問でもしてみようと考えて、神戸を發つたのです。店の方は井上がかつちりやつてくれますので心配はありません。私の実印やその他の書類なども井上に預けて、私は小さなスーツケース一つの軽装で東京へ旅立ちました。

予定が思はず延びて約二十日間を東京で暮し、五月に入つてから私は神戸へ歸つて参りました。東京で百貨店へ入つた私は、かづ子にはどれが似合うだろうか、長襦袢用の桃色地に深紅の大きな梅の花をあしらつた小浜縮緬の反物、これは相当高価な品で、人の細君に、ましてや自分の店の雇人にそんな土産を買つて来てやることはいささか不自然なのですが、私の関心がひとりでにその方ばかり向いてしまうので是非もなかつたのです。どれを着せたら似合うか自分の細君に着せるわけでなし、なんという阿呆なことでしょう、私は室町の三越百貨店で反物を見較べつつ彼女がそれを寝巻に着て井上と一しよに寝るしどけない姿ばかり想像しながらあれやこれやと選んでいるのでした。それともう一つ、本草の草履。これも少し贅沢品で、かづ子の草履ならばせいぜいビニールの千五百円程度のもので結構上等なのですが、あれこれと選んでいるうちに自然に五千円の本革草履を包んでもらつてしまつているのですから、世話はありません。店をしまつて三人で夜食を食べ終つたあと、私はそれらの品を彼女の前に並べました。

「まあ……素敵だわ」

朗らかに大声をあげて、かづ子は喜びました。反物をひろげて肩にかけて、彼女は鏡台の掛布をあげて、自分の姿をうつしてみながら、夫の井上に話しかけます。

「どう？ 似合う？」

「うん……」

井上はニヤニヤ笑つてかづ子の姿を見上げています。

「よく似合うよ。早速仕立屋に出して仕立てゝもらうんだな」

井上のかわりに私が合づちを打つのです。彼女は反物を肩にかけたまゝ、草履も履いてみようとします。素足ですし、鼻緒が固くて最初はなかなか履けません。

「あら、小さいんじゃないかしら」

かろうじて足指を鼻緒にひっかけて、爪先を畳の上にトントンと押しつけて履こうとしますが、よく入りません。

「小さいことないよ。最初は履きにくいんだよ」

私は思わず草履に手をあてて、左手で彼女の足の甲のところをおさえ、右手で鼻緒をつまみあげて押しこもうと試みました。彼女は立つたまま私の肩に手をあてて、足をまかせているのです。そうすると私もきちんと履かせてみせるのが私の義務のような気持ちになつて、彼女の足の拇指をひらき、その間に鼻緒の締革を当てがい、他



の四本の足指を痛くないように気をつけながら、そろそろと鼻緒の中に押しこみました。綺麗に揃つた彼女の足の指、桜色をした足の爪、九文半の小麦色の健康な足が（彼女の足の文数などすでに私は脳裡に刻みこんで承知していました）銀鼠色になめした本革の草履の上にどうやらおさまつたのです。

そのかづ子の足許を眺めながら、私はこの草履を買ってきたことに有頂天になつていましたが、ふと私の側に彼女の良人が居るのに気がつき、羞恥を感じてハツと手をひっこめました。かづ子はそんなことお構いなしといった表情で、自分の足許を見ながら畳の上を歩き廻るのです。

「どうもすみませんねえ、こんなことをして頂いて……」

井上は私に礼をのべましたが、冷静な私であつたならば、その言葉の調子が妻への厚意に対して主人に感謝する心からの謝辞でないことがすぐ判る筈なのですが、分を越えた不相応な私の贈りものに私自身、気恥かしさで少々あがり気味であつたため、井上の言葉の変調などに全然気もつきませんでした。

そして、それから十日ほどたつたある夜のこと。

5

この夜以来、私の地位が顛倒してしまつたのですから、この日の出来ごとは私の脳裡に深く刻みこまれて、決して忘れることが出来ません。私は帰神このかた、私の店へ来る問屋の勘定書や書籍の発行所から来る案内状、書類などがすべて私の名宛でなく井上の名宛料で来ているのに気がついたのです。その上、月末の電燈料、水道新聞代の請求など、今まで全然見てもいませんでしたが、気になつて調べてみたところ、なんと全部井上三郎宛に来ていたではありませんか。おかしい。一べん問いただしておかないといけないと考えた私は、その夜、意を決して、店をしめたあと、二階から彼らの寝室である階下の四畳半において行きました。

「ねえ井上君、ちよつと話があるんだが」

「はア、なんでしようか」

すでにタオルの寝巻に着かえて、これから寝につこうとしていた井上は、私の方に向き直りました。一しよに床に入ろうとしていたかづ子も私の改まつた調子に、これも寝巻姿で井上とともに私と相対しました。

「この間から一べんきこうきこうと思つていたのだが、問屋の勘定書、君の名宛で来ているようだね」

井上はかづ子とチラツと顔を見合せました。かづ子は一瞬ハツとしたような固い表情になりましたが、その表情がすぐ変りました。寝化粧のルーシユをぬつた赤い唇にかすかに冷笑をうかべて、井上の腰のあたりを軽くトンと押すのです。井上はかづ子のそのサインを受取つて、また私の前に向き直りました。

「はア、そうですね」

「そうですね、それはおかしいじゃないか。大体この店は私の店で、私が主人なんだから……」

「へーえ、この店が松崎さんの……？ 冗談言つちやいやだわ、この店は井上の店よ」

かづ子が咄嗟に言葉を挿しはさんで私の言葉をさえぎりました。

「えッ……？」

「前から井上が全部、経営しているじゃないの。問屋の仕入れだつて、店の勘定だつて」

「それは井上君にまかしてあつただけで、店は僕の店なんだから」
「やめてよッ」

かづ子は突然、大きな声をあげて叫びました。私は吃驚して言葉が途切れてしまいました。

「あんた、この店がとつくに井上の名儀になつてゐるの御存じないの。ちゃんとあんたが井上に譲り渡して、あんたが判を押して」

「ナニ、判を……？」

「嘘だと思つたら見せてあげましょうか」

かづ子は自分の箆笥の小抽出しを乱暴にあけて、書類入れらしいケースを取出すと、中から一通の書類を出し、ちようど切腹の場に来る上司お使者のような恰好をしてその書類を両手に持ち、手を一ぱいに伸して私の目の前に突きつけました。あゝなんということでしょう、それは私がこの家およびこの店のすべてを井上に売り渡した譲渡書であり、私の実印がペタンと大きく押してあるではありませんか。

「あッ、なんだ、これは……」

私はその書類を手にとろうとした途端、ドンと井上に強く肩を押されてうしろへ引つくり返つてしまいました。尻餅をついたまゝあわてゝ上半身を起こした私に今度はあられもなくかづ子が寝巻の裾を乱して足をあげたかと思うと、私の胸をいやというほど蹴りとばしたのです。私はもう一ぺんドスンとうしろへひつくり返つて、ちようど犬が腹をみせてバタバタしているような恰好になり、彼ら夫婦を下から見上げて呆然としてしまいました。

かづ子は冷然とその書類をケースの中にしまいこみ、元の通り箆笥の抽出しにおさめてから、井上と二人で私を見下して「あはゝゝゝ」と大きな声をたてゝ笑いこけました。

「ねえ、松崎さん、ごらんのようにこの店は井上の物なのよ。あんたの店じやないわ。だからこの家の御主人は井上で、あんたは主人でもなんでもないのよ。いわばあんたはこの家の奉公人……」

「ナニ、僕が奉公人？」

「そうよ、奉公人よ。あんたの御主人は井上で、そしてその井上の奥様のあたしもあんたの御主人よ。それがイヤだつたら、この家を出て行くことね。御主人様が置いておけないと仰有るんだつたら、あんたはこの家に居られないのよ」

私はかづ子に足蹴にされたときの感情がこみあげて、口もきけませんでした。憤りか。口惜しさか……。いや、それはなんともいえない屈辱的な、じいんとうづくような身ぶるいのする感激なのです。

「それでは僕は……」

「それではもこれでもないわヨ。どうなのサ。私達の奉公人として、この家に居るか、それとも出て行くか？ 出て行くつて、別におちつく家はないんでしょ。だからあんたさえ心を入れかえて、今までのことを私たちにあやまつて、この家に居させて下さいつて頼むんなら、それでいゝのよ。お情けで置いてあげるから……」

私は二人の前に首うなだれて坐りこんでしまいました。

「出て行くといつても、行くところがない……」

「そうでしょ。だつたらあやまつたらどう？ いままでは御無礼を仿いて相すみませんでした。これからはあなた様御夫婦の奉公人として一生懸命働きますから御かんべん下さいませ……つて」

「……」

「ほほゝゝゝゝ」

口ごもつてゐる私にかづ子はもう一ぺん嘲笑を投げかけました。

「それであんた、満足なんでしょ。知つてゐるわヨ、あたしのズロース、嘗めたくせに……」

私の頬はカツと紅潮しました。屠所の羊のようにすくんでしまい

ました。

かづ子は私のしおれ返つた姿を見下していましたが、井上に「ねえ、あんた。松崎さん、ご承知らしいわ。それだつたら、家へ置いてやりましょうよ。一生懸命働くつて言うんだから……」

「うん、それは構わないサ。それで不満はないというんだつたら」「不満はないんでしょ？ 松崎さん。………なんとか言いなさいよ」

「不満は……」

私の口からモグモグと、思わぬ言葉がほとばしります。

「不満は……どうなの？」

「ありません」

「あゝそう……」

かづ子は冷然と笑つて、乱れた寝巻姿のまゝ立ちはだかつていましたが、やかて私を見下してこう言うのです。

「それだつたら、証拠をおみせ」

「証拠つて？……」

「ふふふ……」

かづ子はいたずらつ子らしい含み笑いをしながら

「奉公人の宣誓をするのよ。そこへ四つ匍いになつてごらん、馬のように……」

私は驚いてかづ子夫婦を見上げましたが、かづ子は平気で私を見返して私の次の態度を待っているのです。一たい私はどうしたものだろう、私はどうしたらいいのだろうか。……しばらくためらつていた私は遂に意を決しました。なるようになれ。……私は二人の前に両手をついて匍いつくばりました。そしてこみあげてくる激情を

息をはずませて押ししずめたのです。

かと思うと、かづ子はどうでしょう、いきなり足をひろげて私の背中の上にどしんと馬乗りにまたがったのです。重みがずしりと背中にこたえました。私は両手に力をいれてうんとふんばりました。私の顔の両横に、またがったかづ子の両足が大きく開いています。小麦色の健康な素足。赤い寝巻の裾は大きく開いたかづ子の足のところに桃色のお腰と一しよにまくれあがつて、その乱れが私の視線の中にグラグラと注ぎこみます。

「あんた、ちよつとその私の腰紐とつてよ」

馬乗りにまたがったまゝ言葉をかけるかづ子に井上は苦笑しながら彼女の腰紐をとつてかづ子に渡しました。かづ子はその腰紐を私の首にまわしてかけて、その真中を私の口にくわえさせました。そしてその紐の両端を手にして、ぐいと引き締め私の横腹をポンと蹴りました。

「ハイ、ドウ」

不甲斐なくも私はかづ子のかげ声にちぢみあがつて、新しき私の女主人を乗せてのそのそと匍い歩きはじめました。

部屋の隅へくるとかづ子は手綱を引いて私の首を横へ曲げます。私はまたその方向にのそのそと匍い廻ります。かくて部屋の四隅を一周して元のところに戻りました。

かづ子は手綱を引締めたまゝ

「さ、わたしの言うことを復唱するのよ。いゝ？………これからは」「これからは」

腰紐で口を締められながら、ひきつったような声が私の咽喉から出ます。

「私はお二人様の奴隷として、お二人様の仰有ることは、いかなることでも服従いたします」

「私は御二人様の奴隷として、御二人様の仰有ることは、いかなることでも服従いたします」

「それでよし。……ちよつとあんた。あたんも御主人なんだから、この馬に乗りましようよ。きようは宣誓式なんだから」

「え、俺もかい？」

井上は笑い出して

「でも二人で乗つたら、重くてつぶれちゃうぜ。お前だけでも相当重いのに」

「重くても構わないわよ。それが奴隷の役目なんだもの。ねえ、松崎さん……、アラ、松崎さんじゃいけないわ。これから松崎つて呼ぶからそのつもりでいるのよ、二人またがつたら重いかい？ 御主人様は二人なんだよ」

「重くありません」

腰紐の間から、またもや私はひきつれた声を発します。

「重くないつてサ。さあ、乗りなさいよ」

「そうかい、じゃご免をこうむろうかな。おい、お前、もうちよつと前に乗れよ。俺がまたがれないぜ」

「こう？」

「うん、じゃどつこいしよ」

ずしんと私は二人の重みで手がしなないそうになりました。一生懸命力をこめて頑張りました。

「ふふふふ、いゝ恰好ネ、写真に撮つときましようか。奴隷の証拠として……」

二人は面白がつて、もう一ぺん私を一廻りさせました。

「これからは井上のことを旦那様つて呼ぶのよ。それからあたしのこととは奥様つて呼ぶのよ。いゝ？ わかつた？」

「わかりました」

「わかつたら、あたしの足に接吻をし」

図にのつたかづ子は右足を伸して足先を私の頬のところに持つてきました。

「さあつたら！」

私は観念して首を右へ曲げ、かづ子の踵のところを接吻しました「なにサ、それ。もつと叮嚀にしなきやダメよ。もつと叮嚀に嘗めるのよ」

はじかれたように私は舌を出してかづ子の踵の裏を嘗めました。うす塩からい味です。

「あんたも出すのよ」

井上もおもしろがつて、うしろからかづ子の背中をかゝえるように自分の腹をあてがつて前へ乗りだし、左足を伸して私の首のところに持つてきます。

「こんどはこつちよ」

かづ子は手綱を左へ引締めます。私の首はいやもおうもなく左へ向いてしまうのです。私は私の顔の前にある井上の少し汚れた足先に思いきつて唇をあてました。あてゝしまつたらもう破れかぶれました。私は犬のように井上の足の裏から踵からペロペロと嘗め味わいました。これからの御主人様の足の裏の味を。

「ふん、今度はこつち」

かづ子が手綱を右に引締めます。私はまた首を右へ曲げさせられ

て、かづ子の足の裏を嘗め廻します。かづ子はおもしろがつて一たん私の背中からおり、今度は井上と向い合つてまたがつて人間馬の上で二人しつかり抱き合いました。そして熱烈なキツスを交すのです。長い長い間でした。私は一生懸命に手を突張つて背中の上の二人のキツスのすむのを待ちました。

かくして私はさんざんかづ子夫婦にもてあそばれて、やつと許してもらつたのです。

7

それから以後、かづ子夫婦：

…もうかづ子夫婦などと言えません。かづ子様御夫婦は二階の

座敷におやすみになり、私は階

段下の三畳に寝ることになつたのです。夜中でも、かづ子様に呼ばれたらすぐとんで上つて御用をはたしに行かなければなりません。

おかしなことに私はもうすつかり奴隸としての自分の立場を觀念してしまつて、再び以前の状態にもどそうなどという気はひそんでしまいました。

昼間は旦那様は店の方を受持ち、奥様は二階で寝そべつて娯楽雑



誌などお読みになつたり、また旦那様が仕入れにお出かけになつたあとなど、普通どおり事務服のガウンをつけて店へお出ましになりますし、私は主として掃除、洗濯、炊事をしております。今までの怠惰な私のぐうたらが影をひそめて、生き生きと立伫くわが姿にわれながら呆れる次第ですが。殊に奥様の御腰巻、御ズロースのお洗濯を命ぜられるときなど、むしろ胸がわくわくと躍るような感激を

覚えるのです。布地がいたまぬよう、やわらかく、たんねんに、真中へんの少し薄黄色にしみのついている部分など、とりわけ氣をつけて丁寧に洗わせて戴くのです。

夜は私の仕事が一ぱいにつまっております。お二人様のお床を敷き、私の以前買ってきた桃色の縮緬のお寝巻におくつろぎ遊ばした奥様が床の上にお腹匍いにおなり遊ばすと、私はその傍に待つてまらずあんまを命ぜられます。新聞をお読み遊ばしている奥様のお肩。

お背中、お腰、おみ足と次々に揉んでゆくのです。

「痛いわネツ、もう少しやわらかく揉むのよッ」

お氣にいり遊ばさないと奥様はお腹匍いになつたまゝ、おみ足で私の顔をお蹴りになります。すぐ私は崩れた身体の態勢をとりなおしてあわてゝ揉み直すのです。

これからあと、旦那様が二階にあがつて来られて、お二人で床の中に入り、ぐつすりおやすみになるまで奥様と旦那様は一さい御自分で何もなさいません。すべてお側に侍っている私がそのお役目はたすのです。お二人様がお床の中でいゝ睦言をお交しになるのを傍で私はつましく待つており、そのあいだに次々お命じになる御用を果さなければなりません。

奥様は尿意をお催しになつても、御面倒なので階下へは下りられません。特に買い調えた朱塗りの上等の桶（中が漆の朱塗りで外側が黒塗りの、一人前用のお寿司桶ぐらいの直径で深さがあの二倍ぐらいの、蓋のある、ちようど特上の飯桶のような器）の上におまたがりになります。御用がすんだ桶は、お二人様がお睦言中に私が階下へ持つておりて、流して、綺麗に洗つてまた二階へ持つて上つておきます。

ときおり私がへまをやつたときなど、奥様は私にお仕置を加えられます。そんなときは私がつれづれのおなくさみものになるのですから、奥様は思いきつたいたずらをなされます。

たとえば私の……が悪かつたときなど

「痛いわつ、もつと氣をつけて……きやダメじゃないの。ボンヤリねえ」

恐縮してひきさがる私に

「その罰よ。それをお飲み」

奥様のお言葉に私は拒絶することは出来ません。もし愚図々々していたらそれこそ大へんです。一晚中床柱に縛りつけられて、お二人様がスヤスヤとおやすみになつて横で朝までじつと起きていなければならぬのです。これには私も肉体的に参りますから、そのお仕置だけは受けたくせむよう、私はオロオロして奥様のお言葉に従うのです。

私は桶を両手に捧げて口をつけ。中になみなみとたゝえているまだ温みのある液体を一口、口の中へ入れて飲みこみます。口の中一ぱいにしみわたる味は、そのときによつて多少の差がありますが、塩からさの濃いときと、さほどでもないときとあつて、殊にビールをお召上りになつたあとの液体はさほど塩からくなく、妙なるお味と申しましかうか、もつたいなさに身がふるえるような思いがするのです。

「もつとお飲み」

奥様の御命令は絶対です。私はまた口をつけてゴクゴクゴクと飲みこむのです。失業でその日に困つていた私の奉公人だつたこの平凡な人妻のそうした液体が、いま私にとつて至上の甘露とさせられ

ているのですから、私の馬鹿さ加減にも呆れてしまいます。身体が大柄で豊満だというだけで、特にとりたてゝ美人でもなし、大勢の中へ出たら目にもつかない一介の人妻が、いま私の上に御主人様、女王様として君臨しているのです。

「どう？ おいしい？」

「はい、おいしい御座います」

「それだつたらよく拝んでおき」

私はまたその桶の前にへいつくばつて最敬礼をし、二拝二拍手するのです。いやもうとんだ恥さらしです。

御用がすんで階下へおりるときは、近ごろ二百字の御讃歌というものを奥様の前で唱えることになっています。これを声を出して二度唱えてから階下へおりるのですが、もう口ぐせになっていますから一語のよどもなくスラスラと口から声がほとばしります。どう唱えるのかつて？……われながら恥かしくて人様の前ではよう口に合せませんが「旦那様と御一緒にやすみ遊ばされるかづ子奥様の尊き御姿を拝し奉りますれば、その御美しくしさ、神々しさは目もつぶれるばかりもつたいなき極みであり、旦那様と御一緒におもらし遊ばす奥様の玉の御声は麗わしくも妙なる極みで御座います。私は日夜奥様の尊き御姿を拝し奉ることの出来ます身のみようがを喜ぶとともに、その喜びのいつ迄も私の身につづきますよう、奥様の御汚れ遊ばした御ブロースを捧げ持つて毎夜余香を拝し奉つております」という、ひと夜、奥様がお慰みに私は唱えさせた奥様に対する私の誓詞、字で書いたら二百字の御讃歌をいつか毎夜唱えることに決められてしまったものなのです。私は奥様の前で手をつかえながらその御讃歌を二回繰返して唱えるとともに御二人様のお床の横に

かしこまつて、アーンと大きな口をあけるのです。奥様は笑いながらそれもぐつたりとお疲れになつたあとのことですから近ごろは笑つても下さいませんが、床からお手をお伸ばしになつてくしやくしやに……を私の口の中に放りこんで下さいます。私はそれを大事に口の中に含んでもう一度平伏をし、スタンドの電燈のスイッチを消して階下へ引下るのです。

しかしふしぎなもので、口ぐせになっていますので、昼間台所で一人で洗いのをしているときでも、お便所の掃除をしているときでも、小声でひとりでに口ずさんでいるのです。

事務服をお召しになつて、店で本の整理などされている奥様はごく当り前の本屋のおかみさんにしかすぎません。その平凡な後姿を伏し拝みながら私は二百字の御讃歌をいつも口の中で唱えているのです。

(完)

【読者通信】

貴誌四月号を何気なく買い求めて内容に目を通すや、年来の希望が達せられた感を深くしました。特に田谷先生の女性切腹断想「告白」私は切腹した。の文絵等一種云い知れぬ興奮にかけられました。

切腹の姿態は全裸よりも例えば女学生のスカートの下より喰い込んだ純白のパンティが見える程度のが、小生には非常に望ましく、若い女性特有のなまめ

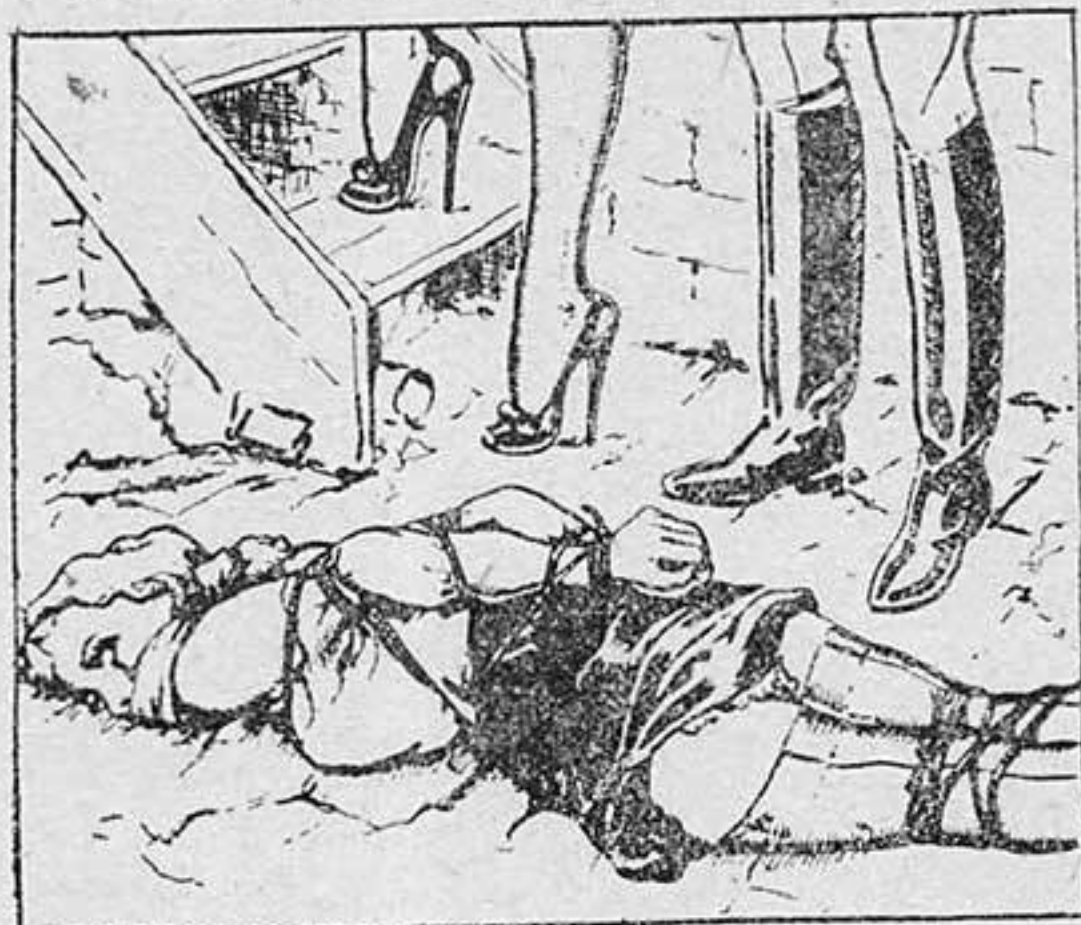
いた苦悶の状態がたまらなく迫つてくるものがあります。

(名古屋、Y・Y生)

価格の安価なるにも拘らず内容の優秀なることは只々感伏いたしました。編集企画の隔絶している事は、取扱う題材が特殊なものなのに、少しも暗くなくアイディアが常に新鮮なことは全く百パーセントの満足を得ました

今後の御発展を祈るや切

(東京 J・K生)



〔海外サディズム雑記〕

2

さるぐつわ

(下)

新妻吾

器具から布への移行

本誌三月号の口絵に、期せずしてギヤツグ六種が掲載されていますので、それを中心に話をすすめましょう。

まずその六種（以下三月号参照）の中、二三、六は完全な器具で、一、四、六は不完全な布です。器具のほうから言うと、これらは前稿にあげた古典的な猿轡の部類に属しますが、非情な機械化はやや緩和され、それだけサディズムの立場から近代化されているよう

にみえます。たとえば、二と三（Chien, Beanieと呼ばれるようですが）は一部に金属を使っているかもしれないが大半は革です。固定するのは尾錠で鍵ではありません。これは六（Roehampton）についても言えます。

そこで重要な相違が生れてきます。前稿挿画の古典的なものは、ひとたび嵌めて鍵をかけてしまえば絶対に自分で脱ぐことはできないが、これらの器具は、手さえ自由ならばじぶんで外すことができるのです。したがって、口絵には説明がありませんが、両手を縛るこ

とが「必要」となっています。

なぜ完全な機械化を好むヨーロッパ人やアメリカ人が、絶対的な古典型から不完全な型に移行するのか、きわめて興味のある問題です。つまり、幾度も述べたように、サディズムの窮極の目的は殺人でなく、生きた人間の反応を楽しむところにあるからです。

多くの奴隷小説に共通なのは、まったく動物化してしまった黒人奴隷よりも白色奴隷に重点をおいていることですが、これもサディズムの要求が自由を失った対象を求めることでなく、自由を奪うこと、そのために起る抵抗を克服することにあるからです。昨日までは高い身分と自由を享樂していた美しい白人の娘が、突如として奴隷の境遇に突きおとされ、悶え苦しむつつ服従してゆくという過程がこの種の小説の定着です。もちろんこれは通俗的な「くすぐり」で、ヨリ現実的な相互享受の快樂からみれば観念的ですが、すくなくとも単純な征服よりは一歩進んだ、複雑な近代的情感だと言えます。その意味で、絶対にあきらめざるをえないようなカギのかかった猿轡よりも、手さえ動かせるならば外せる猿轡のほうが、ずっと犠牲者に苦悩をあたえることは説明の必要がないでしょう。またこ

れによつて、縛ることと猿轡とはむすびつき苦惱は全身にひろがります。

六の場合には、おなじ器具でもさらに進歩しています。これは口の中に金属球を入れて言葉をふさぐのですが、布を押しこめた場合と同様、不明瞭な声は出せます。また努力すれば口をやや開くことができます。もちろん両手を縛られているので外すことはできませんが、二、三のように完全に顎の動きを押えられてゐるわけではありません。本誌二、三月号の調教師の口絵のように、こういう猿轡をはめた可愛いポニイを乗り廻したい方はたくさんあるでしょう。つまり、それだけ現代のサディストの好みに近づいてゐるわけです。

だが、これらの器具が精巧な器具であるかぎり、あまり一般性もないし、どこまでも冷たい感じがつきまとうのはやむをえません。そこで登場するのがきわめて東洋的な布で、これなら随時随所で使えるし、古川さんが詳述したような無限の変化を楽しむことができます。

布の猿轡のかけ方は、大別して二種あります。口または鼻口を掩うものと、齒の間にかませるもの。三月号口絵の四と五は、

BurlingtonとNautilusというふう區別

され齒の間と口唇の間に分けてありますが、実際には一緒にしてよいと思ひます。口を開けば四となり、あくまで抵抗して口を閉じれば無理矢理に布が食いこんで五となるようです。これらは口そのものよりも両頬に食いこんだ布の圧力で舌を動けなくするのですからよほど強く縛らねばなりません。またそれだけに、巾のひろい布の必要はなく、「ベンガルの槍騎兵」という映画に出てくるように、紐または紐のように細い布でも効果はおなじです、やはり言葉にはならないが声はでます。

この二や三が西洋の現代の猿轡の代表的なものです。Perfectoと称する一の型がいまでは新興花形となりつつあるようです。もつともこれは以前からあるにはありました。

活動写真華やかかなりしころ輸入された一篇二巻の連続活劇のヒロインは、ほとんどがこの型の猿ぐつわを甘受しています。ただ、いまの日本の時代劇もそうですが、映画では猿轡をはめるプロセスを省略して、いきなり完了した形で出る場合が多いので、この型を利用できたのだと思ひます。布を口に押しあてて縛るシーンも偶にはあるが、そのときはまちがつていても日本の観客は納得してゐるから

でしよう。

洋画が必ずしもリアリティツクだとは言えませんが、日本のような完全型ひとつではないから無理をする必要はない。それで、粗雑な活動写真時代には、いきなり嵌め終つたシーンを出せばすむから完全型を用い「巖窟の野獣」のように細かいプロセスをみせる映画では、いちばんやりいい四や五の型を使うのです。さもないければ一々口のなかに布を詰めこむ描写が必要になつてきます。

だが、いづれにしても器具から布への移行は決定的な大勢です。

日本型とサディズムの深化

布のなかでも完全型といわれる一の型が今後はますます盛になるでしょう。かりにこれを日本型と呼びます（アチラでは鼻を掩いませんが、このことは後に述べます）。

なぜこれがあたらしい花形になりつつあるかは、サディズムの深化と関係があります。いまや凌辱が肉体的苦痛に取つて代りつつあるからです。

とは言つても、不潔なもので汚辱するとか臭気を嗅がせるというところまで洗練されて

はいません。従来とくらべて手続きが複雑になつたことが、快樂のプロセスを増しているのです。ご承知のように、日本型はただ布で口を掩うのではダメです。かならず詰め物をして言葉の自由を奪うことが必要です。これは相手が抵抗する場合には手練を要するし、仕上げるまでには時間が掛る。いきなり齒の間にこませるようにはいかない。その間、相手がもがいたり呻いたりするので、猿轡をかけること自体が無味乾燥な手段からふかい楽しみとなる。これはヨーロッパやアメリカのネオ・サディストにとつて、きわめてフレッシュな発見のようです。

視覚も理由の一つです。口の間に食いこんだ布は一見残忍のようにみえるけれども、しみじみと観察しているとグロテスクで即物的すぎ、余情がない。ところがひろげた布で口一杯に掩うと（鼻にかけないのが残念ですが）醜惡な表情がかくされて、眼がすこぶる表情的になります。眉をよせたり、悩みの色をたたえて大きく開いたり、閉じたりするのはサディストのみの知る美しさです。また、かたく掩われた口は一種の欲情を刺戟するものです。古川さんの経験する充血感、猿ぐつわをはめた人間にも起ります。いまひとつ

は、布でかくされた口唇が実際は醜く歪んでいようと、みるものには平生の美しい唇しか浮んできません。それは我田引水のようにですが、私がズボンをはかせたときの想像の魅力の効果と共通するものがあるようです。

最後に、押しつぶされた声の特色があります。布を通して洩れる声はいわゆる「くぐもり声」であつて、これは日本型猿轡に独特の、かけがえのない楽しみです。しかも詰め物の量を手加減することによつてさまざまなヴァリエーションを味わえるのですから、この一点からだけでも日本型は在来ヨーロッパのどんな型よりも冠絶しています。サディズムが凌辱となり、さらにすすんで遊戯化され日常生活に取り入れられるようになれば、単純な発声防止器などは止揚されるのが当然です。そして簡易で、柔軟であらゆる変化に富み視覚と聴覚（嗅覚は論じないにしても）をたつぷり楽しませてくれる日本型が歓迎されるのも自然だと言うことができます。

では、その日本型猿ぐつわをどんなふうに掛けるかというと、一つは純日本的にハンカ



チその他の布片を口に押しこむ方法、もう一つは従来のヨーロッパ式猿ぐつわをして、さらにその上から布で掩う方法です。それを説明するために、絵画や小説にあらわれた猿ぐつわの掛け方の相違をそれぞれお目にかけます。

まずヨーロッパ式と日本式の折衷型。ここに掲げたのは、「ダアシー、ダアシー氏のエピソード」という連載サディズム絵物語から抜萃したもので囁かれて自動車にのりこんだ娘が、両手を縛られ、齒の間にこませる猿轡をかけられます。それから、運転手に化けていたダアシー・ダアシーに森の奥ふかい堀



立小舎に連れこまれるのですが、それらの場面ではすでに、その上から日本型猿ぐつわを掛けられています（二つの画の間にある二場面は省略）。つまり、従来なら1のやりかただけでよいのに、いわば二重に猿ぐつわをしているわけで、これは発声防止よりも（やはり声は出ます）最近のサディズムの好みを現わしているかと解釈すべきです。この場合、1は詰め物の代りとなつていゝのです。

次は、口に詰め物をしてその上から布で掩うやり方で、やはりダアシー・ダアシーもの一篇ですが、これは絵物語でなく、彼に弄ばれるグウエンドラインという娘の告白記に つています（次にのせたのはそのカット）左にそれを訳出してみますが、予備知識と

して申し上げると、これはさきほどの絵物語と関連しているので、絵物語では彼女がダアシー・ダアシーの求婚を拒絶したため誘拐されてサディステイツクな目に会い、むりやり妻にされてしまうのですが、ここでは妻になつてからの受難記です。

「彼女はいま

映画に出ている」

「ダアシー・ダアシーの撮映はその土曜日からきつちり始まつて、その後ずつと、ほとんど毎土曜ごとにつづいています。言うまでもなく土曜日は夫が事務所から戻つて家にいるので、撮映に必要な日光がつかえるのです。運のいいことに私たちはカリフォルニアに住んでいるため、お天気の際は心配ありません。

最初の土曜日に、その映画の背景を撮りに出かけました。私たちがロケーションにいったのは、昔からのお友だちの一人が持つている、どちらかといえば、荒れ果てた小舎で、町から数マイル離れたところにあります。夫は、私がすばらしい連続絵物語で皆さんに姿をみせたのだから、この映画

の背景にもグウエンドラインがいなくちやいけないと申しました。私の衣裳は古ぼけた花模様の服で、ネツクラインをうんと低く切り込み、しかもスカートから八寸ぐらいのところまでズタズタに破れているのです。きつちり喰いこむような長靴下に、五吋も高い黒革のハイヒールをはかされ、どぎついメイキヤツプをさせられました。そして、特別美しくみえると言われました。

まず、ダアシーのやつたことは、手頃の樹を探し出すことでした。それから私の両手をその幹にまわして縛りつけました。つぎに、ハンカチをまるめて無理矢理に私の口へぎつちり押しこみ、べつのハンカチでその上を掩い、首のうしろで結びました。猿ぐつわをはめられたのです。それも冗談事ではないのです。そこで私は必死に争つたのですが、争おうとすればするほど、ひしひしと縛り上げられることが分りました。私の出せる声は、むムム（註、又はうムム。英語では目を八つならべます）という呻きだけで、それも皆さんが聞き取れぬほどの声です。その間にもあの悪党は紐という紐をつかつて、皆さんが映画をみればおわかりのように、私をがんにがらめにしてしまいました。私は全くどうす

ることもできませんでした。できることといつたら、ただ指を曲げ、頭を動かすことだけでした。

私を完全に縛り上げてしまいう前に、ダアシイはもうカメラの用意に気をつかいはじめていました。それから撮映にかかりましたが、彼は「角度」だとかなんとか言うのが好きなので、いくども休息するのですが、その時間がおそろしく永いのです。それで私はたつぷり三時間樹に縛りつけられたまゝでした。もちろんその間じゆう、友人たちの間ではいま撮っている映画の種類がどうだこうだという話に花が咲き、十五人ほどのものが集ま



つていました。だれもかれもがノンビリと、自分たちは色彩監督だとか、セツト係だとか、第三補助監督とか主張しあっているのです。こんなに多勢の人たちの前で、縛りあげられ声も出せない恰好を曝しているのは、なんともいえない妙な気持です。いや、もつと奇妙なのは、かれらがカメラマンや観客のことまでありとあらゆる意見を述べ立てているのを耳にしなが、肝心の私はなんの問題にもならず、その話の仲間入りもできないということです。

さてダアシイはカメラを片付けおわつて、夕方もだいぶ寒くなつたから、これから料理屋にいつてなにか食べようじゃないかと言ひ出しました。この思いつきは皆にたいへんよろこばれました。

やつと天は近づいてきて、私の縄を解きにかかりました。そして、もうあとすこしで解き終ろうとするとき私にこう訊ねるのです。

「お前、猿ぐつわをはずしてもらいたいかい？ それとも、そうしていたいかな？」

私が狂気のように肯いたことは申すまでもありません。ところが、なんとおどろいたこ



とには、彼はやさしい声で、「ああそうか、外してもらいたくないのか」と言うではありませんか。彼が考えちがいをしたのだと思つた私は、こんどは一生懸命首をふりました。すると彼は言いました。

「俺の考えていたことと一緒にだよ。お前は猿ぐつわを外してはいやだと言うんだね。よしよし、お前がそんなに好きなら、俺は同意するよ。だが、手は縛つたほうがよさそうだな。お前自身は気付くまいが、よく切れるナイフなんか持つてケガをしそうだからね」

こうして、私がかほそい抵抗を試みるにもかかわらず、私の両手をうしろに縛りあげ、右の手首の左の腕に、左の手首を右の腕に結びつけました。これが私の姿でした。両脚を動かせるのは事実ですけど、無力だという点では立木に縛られていたときとすこしも変

らないのです。

それから私たち全部は料理屋まで戻りました。すぐわかつたことは、この慰安がたちまち宴会に発展したことでした。あらゆる人に酒と御馳走が山のように出ました——あらゆる人に。ただ、猿轡をはめられどうすることもできないグエンドラインをのぞいて。私は誰にも見られたくありませんでした。だが、あらゆる人が、とりわけ男の人たちが、私を眺めまわすのです。実際、私たちの主人（ダアシー・ダアシー）が言つたように、私は完全な笑いのものダンベル・オブ・ザ・ボール）でした。

残忍なダアシーの手中に陥つた私のもつと悲しい体験については次号でお知らせいたします。

これからどう変わるか

これでわかるように、口に布を押しこみ、その上から縛る猿ぐつわはすでにヨーロッパやアメリカに登場しています。そして、猿ぐつわは完全な防声具というよりも、言葉にならない呻きを楽しむ道具となり、それに伴つて精練されたサディズムが發展しています。こゝに掲げたダアシーものにしても、鞭打や

拷問は全然なく、肉体的に加えられるものはただ緊縛と猿ぐつわだけです。だが心理的凌辱はかなり深くなつています。立木に縛りつけてわざと撮映に手間取つたり、胸まで見えるようなボロボロの服をきせたりしていること、相手の希望をたずね、巧みに反対の意味にとつて無残にその希望を裏切ること、それを説明したくてもできずに狂気のようになること、公衆の眼に浅ましい姿を曝し、じぶんだけが食べられないこと、——すべてが古いサード型から脱け出ています。そして特に眼立つのは、いままでも欧米で比較的無視されていた猿轡が、非常に大きな役割を演じていることです。

だが、これほど脚光をあびてきた猿轡が、テクニツクの点ではまだわれわれの域に達していません。たとえば口だけを掩つて鼻にかけないのは、欧米人の鼻が高いからだと考えている人もあるようですが、私は誤りだと思っています。それは掛けいいか掛けにくいかの程度の問題であつて、日本人でも鼻は口より高いのだから、それを掩うには掩うだけの理由があるのです。また熟練した人間なら、アメリカの女の鼻口を外れないように掩つて完全な猿ぐつわをかけることができる筈です。

私でも出来るでしょう。だから、欧米の猿ぐつわが鼻を掩わないのはそんな愚劣な理由ではなく、猿ぐつわの日本型がニュー・フェイスであつて、まだデリケートな利用に通じていないからだと思います。

高い鼻に猿ぐつわをかけるには、鼻を痛いほど締めつけるよりは下方に重点をおいて絞るべきです。鼻翼の両側に隙間が多くできるのはむしろ汚臭を味わせるには好条件であつて、口の中に入り切れぬほどの詰物を口唇の上に沢山あつめることができます。天狗の鼻でないかぎり、それらの布は口の内外の詰物となつて鼻口を掩う布をたるませず、その上から一本ないし二本の紐で押さえれば床に擦りつけてもはずれるおそれはありません。

だから、いまに嗅覚の刺激が発見され——本誌が英訳されれば非常に注目されるでしょう——その方面からのテクニツクの要求が高まつてきたとき、欧米の猿ぐつわは鼻まで侵略する可能性があります。そのとき欧米の娘たちはあたらしいスリルを味わい、歓喜？に酔うことでしょう。いまのところは日本のサディストのほうが幸福であります。

サド女の人妻期 (Madam Diana)

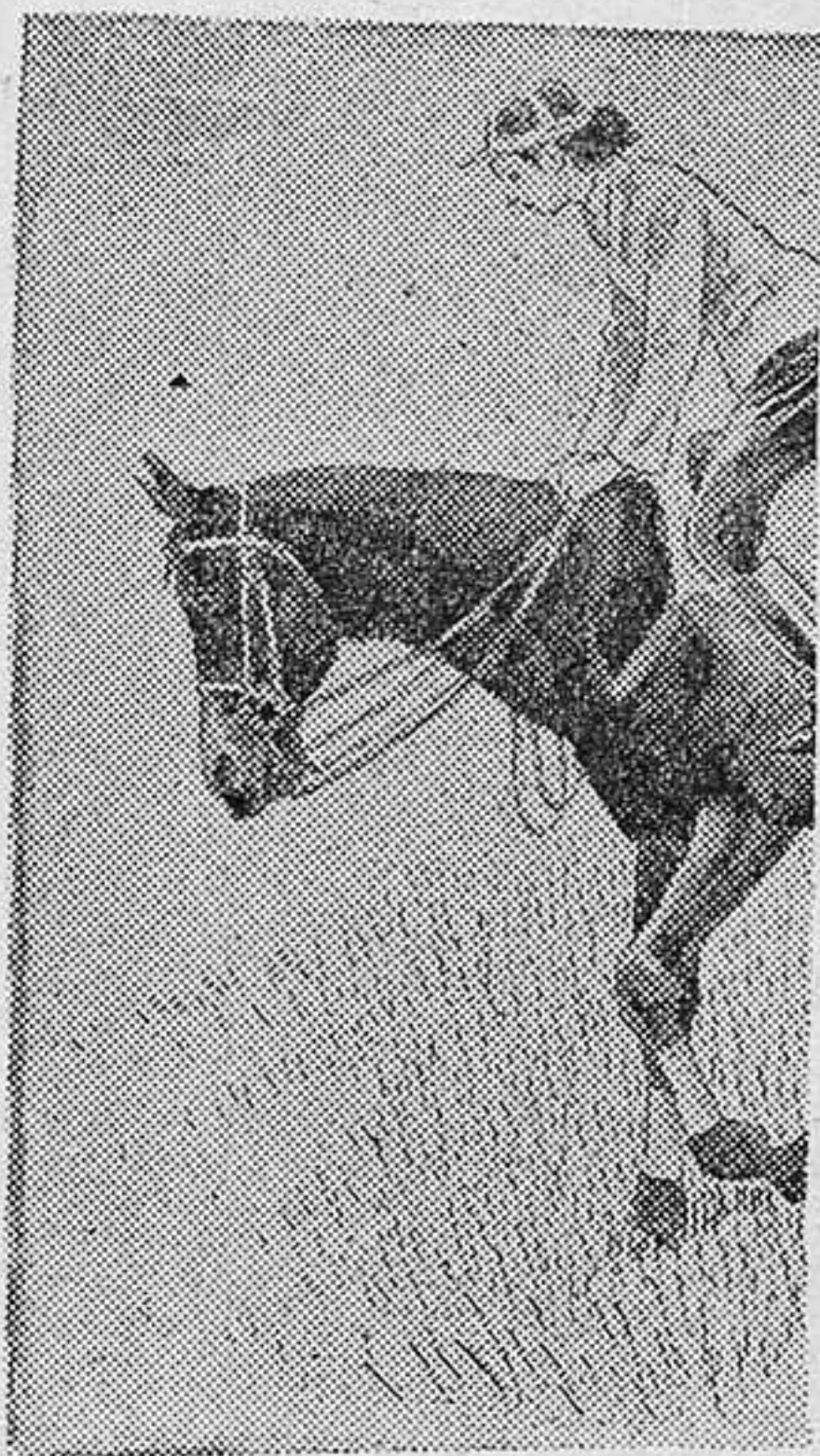
乗杉貴代子



ダイアナ夫人

二十才（はたち）といえど何でも楽しい頃です。私は正月の楽しみも一通り味い尽した頃、母に突然結婚の話がされました。勿論もう少し待つてもらいたいとの気持は十二分に伝えたくもありでしたが事態は私の考えているよりも遙かに早く進んでいる様でした。相手の人は山田大典という大柄な陸軍中尉で年は二十七才とのことでした。男といえど父と下男の武男しか知らない私には楽しい結婚の空想よりも何か空恐ろしいような悲しい様な、しかし心の奥底では何かを期待するような気持ちでした。イエスともノーともはつきりした意思表示をしないうちに早くも一カ月ほどたった頃、重ねて母からどうするかと、尋ねられました。写真で見る顔は先ず平均以上ですし身元もはつきりした人なので、それこそしぶしぶながら承諾しました。

これで私も乗馬ができなくなると思うと何か秘密の楽しみを結婚と同時に奪い去られる



ような寂しさに襲われました。それだけに結婚までの二月間ばかりは乗り納めとばかり乗馬に専念しました。大体毎日三時間はたつぷり馬を責めていたでしょう。馬術、障碍と一生の思い出をこゝで作つておこうと狂気じみた乗り方でした。馬が私の鞭と拍車を恐れないような行動をとり、私が跳ばせようとする障碍の前でたじろいだ時などは幾ら馬が疲れていてもこちらにも意地で根限り鞭打し、拍車で蹴りつけました。そうになると馬も反抗心を起し障碍の時で棒立ちになることがありました。

そうです。馬が棒立ちになつた時のスリルと快感は忘れられません。棒立の時は手綱を口も裂けようとばかりになゝめに強く曳きま

す。股から踵にかけては平常と違つて馬背に張りつく様にして馬腹を締めます。しかも内股へは鞍が絶対的な重量感を以て圧迫してきます。私の意思に逆らう股の下動物を有無をいわず鞭と拍車の

威力が屈服させるのですから征服慾、支配慾攻撃慾といった積極的な慾望の強い女性にはまたとない慰安でありスポーツでした。三時間も乗廻し四肢のつけ根が汗ばむ頃、やつと股の下動物を解放してやるのでした。恐らく健康な若い女性が十分に悍馬を御し通した後の気分は皆同じだろうと思います。それでこそエリザベス女王を始め王妹のマーガレット姫オランダの王女、或いはルーズベルト夫人といった積極的にかつ支配的、指導的地位にある女性は好んでこのスリルあるスポーツを選びかつ人間の本能的喜びを味つていゝのではないかと思つております。

話は横道にそれましたが、この様に最後の慰安に心身を傾けて練習し楽しんでいたある

日の午後でした。気温もすっかり春めいて何となく心の浮き浮きする日和でした。相変らず激しく鞭音を立てながら馬をあおつて一メートルの障碍を越えさせようとしていた所へ見知らぬ男が馬場の柵にもたれて私の一挙一動を見守つてゐるではありませんか。しかし他人の家にくる以上やはりなにか縁のある人には違ひないと思つて、鞭と拍車に手心を加え、おとなしい娘をよそおうとした時、母が厩舎の方からひよつこり現われ

「貴代子、お客様がお見えになつておられるからすぐいらつしやい。」と声をかけました。

馬の背の快感を中断され、何か物足りなさを覚えつゝも馬丁の武男を声高に呼びつけ馬を渡すとそそくさと部屋に戻りました。

母は追かける様に入つてきたかと思うと「貴代子、山田さんですよ、余り元氣のよいところを見られたから、いまからでもよい、少し、しおらしくなさい。」

とテレた様な顔をして日頃にも似ず注意をすますと私の部屋から出てゆこうとしました。その時

「そうそう乗馬の後は何んともなく馬くさくなるからよく御手入れをしてくるのですよ。」

とつけ加えました。

私はいつもの時なら女中のみよや、武男に風呂を湧かさせ汗ばんだ体をすみずみまで洗わせるのですが、今日はとてもそんな暇は無いのでみよに蒸しタオル三枚ほど命じて、着換えの準備を始めました。下着から始つて一通りの外出着をタンスから出し終る頃、みよが蒸しタオルを捧げる様にして持つてきましたので、早速素裸になつて拭かせました。上半身は自分でやりましたが下半身はいつもの様にみよにマツサーシ風にふかせます。特に………にかけては相当摩擦が激しく汚れ易い場所だけにしみる様な熱さを我慢しても、ふかせるのが何ともいえないよい氣持でした。

しかしこの日に拭かせたのが当分の最後となりました。というのはどうも山田さんは女の乗馬を余り好まない様に見えたため父母、とくに母が心配して私の乗馬を禁止したからです。その時は私も

「乗馬を続けるか、結婚か」

とその取捨に悩んだくらいでした。

でも物事は娘の悩みとは関係無いものの様に急速に進行し、三月の半ばには早くも挙式にまで進んでしまいました。そして挙式後は

一カ月ほど経た頃には夫大典（だいすけ）の技術指導が上手だったのと私自身性感の發育が良かったせいもあつてやはり

「乗馬より結婚の方が良かった。」

と思うまでになつていました。

そうそう言い忘れましたが、私は一月号でも記した通り一人娘だったので大典は私の家にムコ養子できたのです。それだけに私も世の常の様にしゅうと、こじゅうとといった心配もなく、また夫も私の父母とは実子の様にウマがあつたので私もどれほど氣が楽だったか知りません。そのせいもあつて夫と口をきくのにも割合氣易く語れました。

運動を規則正しくやつている者によくあることですが、それを急激に止めると体の調子が悪くなるものです。私も激しい乗馬運動が結婚を機会に突如止めたものですから、どうも無理にブレーキをかけた車の様に何か力が滞留している氣がしました。乗り続けた馬の方でもそう思つていたかも知れません。母は時々乗りますが私の乗り方の激しさとは比較になりませんし父も夫も忙がしくてそれこそ月に二、三度というところでしょう。そこで三カ月ほど経た頃寝物語に夫に恐る恐る「どうも運動不足で体の調子が悪い」

と暗に乗馬を始めたい内心を伝えたところ「それなら娘時代と同様馬にでも乗つたらどうだ。なんだつたらワシが本格的に教えてやる。少々早起きするのがお互いに辛いがね」

と百パーセントのOKだったのにはいさゝか意外でした。それからというもの、雨さえ降らねば、朝六時には起きて夫婦して乗馬のけい古でした。十五貫余りの大典と十四貫余りの私が入れ代り立ち代り馬を責めたてるのですから馬も一時間ほど経つと泡を噛んできます。またその頃が馬の背骨も軟かくなり反動は柔軟さを帯び、片や乗り手の腰も定つてくるのでその気分はとても止めようにも止められません。いつでも夫の下馬後も小一時間、乗廻し鞭を打つ手が疲れを感じる頃になつて漸く顔をほてらしながら下馬するのでした。しかもこの傾向は夫婦生活に慣れるに従つて強い慾望となり何か馬を乗潰したい慾望に変じ、氣がむけば三時間でも三時間でも私の全身に充満する征服慾を満たすため、何の罪もない股の下動物を乱暴に責め苛むものでした。そして毛衣をつけた肉体に拍車を蹴り込み、よく磨かれ氣持よく円みを帯びた尻に幾条かの鞭痕をつけたのを馬上から後向きに眺めながら

「お前は私を慰ぐさめるためにこの世の中に生れたのだ。造物主の神に感謝するがよい」

といった凡そ理性とはかけ離れた情感に心をふるわしながら解放（下馬）してやるのでした。

マリリン・モンローとかジーン・ラッセルといった肉体女優の臀部の動きを注視してごらんなさい。引締つた競馬馬の尻にも似た躍動を感じるのには私だけではないでしょう。よく発達したお尻というものは、あの様な動きを示すものです。私も歩くと大臀筋が右左に動くので当時としては下品だといつてよく母に注意されました。しかし男性は口は兎もあれ心はあの様なお尻を好むようです。夫も酔つて帰つたある晩に

「お前のお尻の発育はよいな、ピツチリした乗馬ズボンに包まれて馬上で馬と尻と交互に揺れているのを見るとどうも気分が出ていかん……。」

などと賞めたような冷やかしたようなそれでいて満足そうな笑を浮べていたことがありました。しかし、この笑みこそ殿方^{ジェントルマン}の期待を満足させた時の笑に違いないもので私もこの期待に添うべく活発に陽気に馬乗りの技術を高めてゆきました。そして技術の向上は馬

場における乗馬から野外における遠乗りの機運を夫婦間にかもし出してゆきました。

桜のつぼみもふくらみ切り暖風一度来ればドツと開くのではないかと思われる春の訪れを感じる頃の金曜日の晩でした。

夫は夕食の卓につくと顔を心持ち紅潮させながら

「実は同僚二人とその奥さん連、それにその妹、われわれを合わせれば七人となるが、これだけでこん度の日曜に遠乗しようというところになったのだ。同僚のマダム連はお前より下手だからお前がゆけば技術にかけてはフアースト・レディーかな……」

と誘いをかけてきました。勿論渡りに舟で異議なく、場所も富士山麓の山中湖畔というので話をきいたとたん鞭をビューピュー鳴らしながら山麓の火山灰地を疾駆する三人の乗馬夫人の姿を思い浮べました。その中で一際巧なのが……（自分かな？）など思いつく朗報を持込んだ夫にあられもなくすがりついて喜びました。

やがてこの日は参りました。春にしては珍しく気持のよいほど、空も澄み、午後七時新宿集合の約束には誰一人の遅刻者もなく三人のマダムは皆スポーティなスーツを着ていま

したが、殿方は背広の上衣に下半身を乗馬の服装で固めており只一人のミス、B大尉夫人の妹さんはまだ十七才の初々しさを、えんじの総裏付で黒ビロードのライディング・ハビツト（婦人の乗馬用上衣）に包み、はちきれそうな腰のふくらみはずかしそうにフランス綾の純白のジョーブス（婦人の乗馬用ズボン）でおおつていました。特に赤皮の細鞭と金色にメツキした鋭い拍車はその黒光りした黒長靴と共に一際はえて駅頭の人々の注目を浴びるに十分なものでした。

車中お互いの紹介が一通り済むと女は女同志で集まり後は同好の人たちだけですから、話は専ら乗馬の快味に集まり、特にB大尉一家は揃つて乗馬フアンのため専ら話の音頭取りの恰好でした。その中でもB大尉夫人は五尺四寸はあろうと思われるのに十一貫そこそこのスマートな体を乗出して鞭の使い方、拍車のあて様、駄匣の締め方など得意げに話しました。二時間に余る説明の結論は要するに

「馬上の人となつたら女性であることを意識せずに征服者として振舞い、馬の自由は鞭と拍車と轡で完全に奪うこと。憐れみの気持を持つことは馬術を進歩させないし快感も得ら



れない。」
といつたことはいさゝかお釈迦様に説法の

普通の洋風建築と大差ありませんでした。ただ応接間と風呂場の広いのには少々驚きまし

形でした。しかしこのB大尉夫人の持論は富士吉田で下車しハイヤーが山中湖につくと、鞭と拍車と轡の理論は現実となつて展開し始めました。

着いた先はT中尉の別荘でした。T中尉の父というのは日本でも一、二を争う財閥本社の理事をしている方で、このような別荘は軽井沢、箱根にも持つているということとはかねがね夫からも聞いていました。なるほど一見山小屋風に荒々しく丸太を組合せて丈夫一点張りに作られています。内部は

た。応接間は二十畳ぐらいあるでしょうか。

風呂場も八畳ほどあつて寝台、木枕などが備えつけてあり、カーテンで仕切つた中には水洗便所や洗濯器までも完備してありました。T中尉夫人の先導で屋内の紹介がすむと夕刻まで自由行動ということになりましたが、男性達は風呂とビールを所望したのに対し、女性達は異口同音に夕食までの乗馬行を希望しました。このため止むなくT中尉夫人のみホスラスとして男性のお相手をするにせし、B大尉夫人と妹さんと私は早速乗馬の準備を致しました。春といつても山中湖までくると薄ら寒い氣候でしたが乗馬の軽い興奮を味うのは恰好の気温でした。かねて準備してあつたと見えよく手入れの届いた乗馬が七頭裏庭に繋いでありましたが、B中尉夫人は大股を拡げて乗馬前の運動を一通り済ますと「どの馬を責めましようかね乗杉さん。私は悍の強い馬を乗り慣らすのが好きですよ、おとなしいのは刺戟がなくてね……」とはつきりとしたもので言い終るや、持っていた鞭を振り上げ

「ピシリ・ピシリ・ピシリ」

と続け様に自分の長靴を打ちました。驚いたのは居並ぶ馬で中には前足を上げて立とう

とするのも出てきます。B夫人はその立とうとした馬を見るや快心の笑を浮べて近寄り

「私はこれに致しますわ」

と決めてしまいました。実は私もその馬にしようかなと思つていたところでした。というのは皮膚の薄い黒光りする悍の強そうな馬でしたので、それに跨つて二、三時間も乗り廻したらさぞ鞭の振りがいもあり拍車を頻繁に使う機会もあるうと思ひ期待していたからです。何か先を越されてジーンとしてきた腰部が、心持ち冷却される感じでしたがそれは顔には出さず

「それでは私はこれに致しますわ」

と品のよい牡の白馬を選びました。B夫人の妹さんは鹿毛の牡馬を今日の慰安の相手と決めました。三人は旭ヶ丘を出ると対岸の平野部落をめざして歩き出しました。心持冷い春風が興奮した頬を吹き抜けてゆきます。幾組かのハイカーの群を追抜きながら若い三人は馬上の快感をむさぼる様に味つています。ふくよかなお尻は馬上の動揺で上下左右に揺れ内股がジツとりと汗ばむ様です。三十分ほど経たでしようか、湖辺の広い砂浜に出ました、松林の中には青や白のテントが早くも二つ、三つ見えます。私たちが馬上の快に酔い痴れる様に彼等は山のあるいは湖の精気に酔

つていたのでしよう。それでなくては余りに涼し過ぎる気温でした。そのうちに馬上の動揺もマンネリズムとなつてきたので一先ず、休憩し砂浜に障害をこしらへ跳ぶ準備を致しました。いつしか野次馬にも似た見物が三人五人、十人と増えてきましたが、そうなるに却つて誇らしげに鞭を鳴らす女の馬上姿を見せつけたくなるもので、三人は交互に障碍跳越を始めました。しかしB夫人の妹さんは年少のせいにか六、七十鞭のところまで危険と見て下馬し、専ら障碍用の横木の引上げを手伝つてもらふことになつて自然B夫人と私の競争となりました。気は兎も角、腕は何といつても私の方が上手であつたためか、B夫人の悍馬は横木を落し勝です。それがくやしいと見えて馬を励ますのを超えていじめぬきます。ピシリ、ピシリ、ピシ、ピシ、ピシリと尻といわず肩といわず荒れる馬を鞭の威力で鎮めようとしみますから、馬はますます荒れ狂い棒立ちになります。四足で立てば手綱を引き絞つて股で鞍を大きくあおりながら間断なく拍車で蹴りとばします。見ていても何か身体中の体温が昇つてくるようです。見物は見物でこのような激しい女の鞭打ぶりを見たことがないでしようから、荒れ馬の恐さを気にしつつも手に汗を握りながらどうなることかと見

守つています。この様な空気の中で突然十才ぐらいの男の子が

「おばちゃん、馬をあんまりぶつと可愛そうだよ」

とカン高い大声を出しました。これにはB夫人も何か内心の秘密を子供にズバリ見破られたと思つたのかも知れません。その大声を山にして鞭打も急激に減り野次馬も次第に減つてゆきました。妹さんは野次馬が立去ると姉のところへ馬を乗寄せて

「お姉様の鞭の使い方凄いのね。馬の腹から血が出ているわ。先生の話では鞭は使わないほどよいとおつしやつてよ」

とつぶやくようにいつていましたが、三十を過ぎた年増女の心理はティーン・エイジャーには分らぬものだとはその後しばらくたつと分つたことでした。

さてそれからです。障碍も飽きてきたので山坂の上下をしながら富士を眺めることに致しました。雄大な富士を馬に跨りながら眺める気分は空気の清浄と相まつてまことに気分よいものです。加えて山坂の上下を致しますと上りは鞍の前方が高くなりますからどうしても圧迫が激しくなります。下りは逆ですから摩擦と圧迫に軽く疲れた部分を休息させ

ることができる反面、平地を行く時より変つた刺戟が得られます。その時鐘から足を外して脚を自由にし、かつできるだけ伸ばしますと緊張していた腰、内股、脚の筋肉がすべてゆるみそれが馬背の上下動、左右動にマツサージされその気分は得もいわれぬものとなります。それで気分が一通り慰められたらまた鞭打して駆けさせるわけです。この様なことを続けながら三人は大いに楽しんだのですが特にB大尉夫人の乗り方は荒くさんごん馬をこづき廻し、打ちすえた後ギヤロツプで旭ヶ丘の別荘に駆け戻りました。勿論私も何か物足りぬ鞭打の味を残しながら続行しました。

静寂を破る馬のパカツ、パカツと矢つぎ早の足音に別荘の人たちも気がついたのでしよう。私たちが別荘の馬繋場に着いた時には入浴とビールで上氣した殿方とT夫人が出迎えており着くや否や

「どうだった？」

というのが挨拶でした。私は勿論気分の良かった事を伝えましたが、B夫人は

「あの黒馬は中々の悍馬ですね、御すのに一苦勞でしたわ。おかげで腕も膝も痛くなりましたわ。お風呂を頂いたらアンマにもませようと思つてますの。この間お世話になつた、

ほら、あの二十七、八の女アンマは今日来てくれるかしら？」

と、いいたいことを、流れる様に語り終るか終らないうちに軽々と馬上から跳び下りました。B夫人は鞭を馬丁に渡すと既に幾度か来て勝手を知つていたのでしよう風呂場にゆきましよう、と、私に誘いかけてきました。

B夫人の妹さんはまだ日没まで大分間があるというので、裏の馬場で暫らく乗り続けるといつて赤い鞭を長靴に差込んだまゝ出てゆきました。

脱衣場に入つたB夫人は、早速

「年のせいかしら、どうも馬に乗ると腰や股が痛むので、この頃、馬を責めた後は専らアンマ療法なのよ」

と話しかけてきました。その時見ることもなしに見るとジョーブスを脱いだ下には厚手で軟かい純毛のズボン下をはき、それを脱ぐと幾ら服を開いても窮屈にならぬピンク色のコルセットをつけていました。それは物々しくも美しいもので普通のコルセットの様に股下が空いたものでなく乳の下から腿のあたりまであり、腿のところもゴム入りでピツタリと引締りお小水するために下腿部のボタンを外すと後ろの方へ垂れ下つて開く様になつて

いました。それを脱ぐとタオル地の様なズロースをはき前に当たるところはガーゼが取り外しできる様になつていました。勿論ズロースもボタンで開閉式になつていますからジョーブスさえ脱げばお小水には困らぬわけです。けれども余りに物々しいので

「大変ですわね」

と声をかけると

「あらフランスや英国のレディは乗馬の時は皆これをつけるということよ。お腹と腿が引締るし、タオル地で厚地でしよ、幾ら汗をかいてもジョーブスにまで流出ないし、それにことによるとどうしてもパンティが汚れるので乗馬具や乗馬服の店ではどこでも作つてくれるんですつて。馬に跨つて気分が出るといふことはあちらもちろも、昔も変りないことらしいわね。日本でも明治以前は武士以外の乗馬を禁じていたでしよう。馬に乗ると人間の征服慾が高まるから下々には乗せなかつたのかも知れないわ。それが明治以後は貴族男女おかまいなしとなつたので明治の中頃には早くも女の乗馬熱が流行つたそうね。さあさあつまらぬ話は後にしておぶーに入りましょう」

とまた立板に水の雄弁ぶりでした。そして

お風呂に入つてからも、さらに女性乗馬論は続き、

「照憲皇太后様はやはり乗馬がお好きだつたようだけれど、あの頃のは婦人専用の横乗鞍だつたから味気なかつたでしょうね。やはり馬は跨つて股で締めないと、乗つた感じが出不いと思いますわ。それにやはり鞭や拍車も必要だしね」

といつているところへT夫人が「女アンマが来たけどBさんどうします」

との通知。T夫人は早速

「そうね、何だけれどこゝへ来てもらいましうか。お願いしますわ」

との返事、驚いたのは私です。B夫人の裸体だけで食傷しているところへ幾ら目が見えぬからといつて風呂場にまで来られては困惑の態度でモジモジしていると、それを察したB夫人は

「いいのよ、女で馬に乗る様な人はヒトを道具として使う位の勇気が無くちや駄目、賢夫人になるのには、こういうことも心得の一つよ。但し目上の人や同輩は別途取扱いが肝要つてわけね、ハハハハ」

と湯加減の適当もあつて、まことに天真爛漫な話術ぶりでした。その時

「御免下さい、失礼致します」

と膚シヤツにパンツ一枚の目の開いた女アンマが入ってきました。浴槽の中のB夫人は「ちよつとお待ち、すぐ上るから」

と傲慢な調子で命ずると、五分ばかりして寝台の上にゴムマットを敷かせ、その上にシートをかけさせました。

「どうも乗過ぎたらしく、また腰と腿が痛くてね、揉む前に少し温湿布で温めてちようだい」

といいながら寝台に横になると別に恥しい風情もなく………て待つています。アンマは湯気の立ちのぼるタオルを心得顔に………い所にあてがい………もみはじめました。揉みながらもタオルを頻繁に熱いのと交換します。三十分ぐらい揉ましたでしょうか「じゃ、この位でいゝわ、乗杉さん、あなたももませなさいな」

と否応なしです。もつとも私とても他人の見ていないわが家の浴室では、女中のみや下男の武男にマツサージさせたことがありませんから、万更その快味を知らないわけではな

です。私のは十分ほどですむと、B夫人は待つていましたとばかり

「では流してちようだい」

とアンマの前に脚を一尺ほど拡げて立ちふさがりました。アンマはこの様なことに慣らされていると見えて香りのよい石けんをB夫人の胸、腰、股と万べんなく塗り終ると大きな海綿に石けんを十分しみ込ませ念入りにマツサージ洗いを始めました。B夫人の目は生き生き輝き、まことに満足そうです。私も見ているうちにたまらなくなり、同様に洗わせようとしているところへ、T夫人が

「そろそろ食事の仕度もできますわよ」

と湯上りを促しに参りました。その時の心残りといつたら何といましようか、それこそトンビに油揚げさらわれたところではありませんでした。やがて食事時となりましたがこゝで三人の男性とB夫人の妹さんは仕事や学校の都合もあり明日の昼食を食べて帰京することになり、つまり三人のレデイだけがあと一日乗馬の快を味わうことに決まりました。この決定はかねて仕組んだB夫人の演出であることは後で分りました。というのは翌日の乗馬はウマにこそ違いありませんが、それはかねがねBT両夫人の異常慾を満足させるため

の人間のオスだったのです。話を端折りましょう。この夕食時から二十四時間後、つまり男気の絶えた翌日の夕刻でした。別荘の爺やが和服の二十五、六のちよつとハンサムな男を連れてきました。T夫人は既に面識があつたと見えて何か手真似で指図すると、その男は別に悪びれもせず応接間に入つてきました。私は何気なく、T夫人に

「あの人は誰？」

ときくと、T夫人は

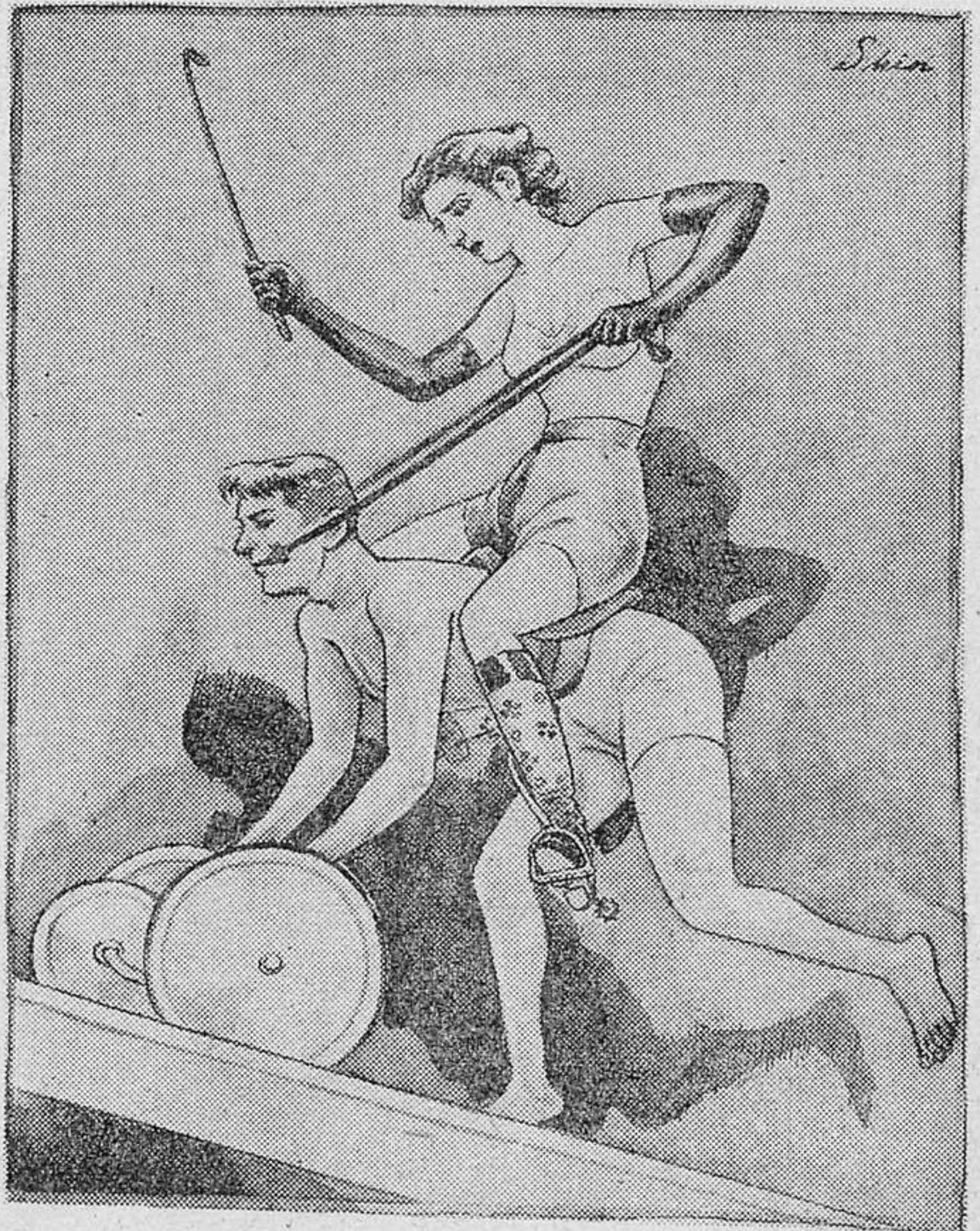
「あゝあの男、あれは私たちの娯楽物よ。私の主人付の兵隊の弟で啞だけど察しがよくつてね。いずれお望みならあなたも遊ばせてあげましょうね。少しお小遣をやるだけでよいのよ」

と意味あり気な微笑を浮べました。

啞男はお茶を飲み終ると一人で風呂へ行き

ましたが、啞男が室を出るや否やT夫人は

「あの男は私たち二人の夜のウマなの、折角こゝに来て、天気など悪くて馬に乗れなかつたり、夜分気が晴れない時は、あの男ウマに跨るのよ。気分は本物の馬と違つてまた格別の味よ。あのウマにつける馬具も揃つていゝるし、この静かな湖畔の家で一時間も乗り廻したらほんとにグツスリ眠れることよ。ねえ



「B夫人」

と呼びかけました。B夫人は

「そうね、最近暫らく乗つてやらなかつたけどよく走るかしら。室内馬場があるとほんとによいのだけれど、ちよつとこゝではせま

ぎて障碍など出来ないのが玉にキズだわね。きようは無理して少し跳ばせましょうか。」

とまことに楽しそうな面持でした。

そのうちにT夫人は轡と手綱、それに短かい鞭を持つてきました。轡は小さな玉子様の

ゴムに箸を通したようなもので一種幅のベルトがそれに連絡しています。鞭は馬鞭ほど長くなく人間馬の尻を打ちこらしめるのにちょうどよい長さでした。その時、先程の啞男がブリーフ一枚の半裸体で入ってきました。五尺五寸の十六貫ぐらいのよく引締ったからだをしています。I夫人は早速

「ホース！ 女王様の馬乗り準備」

と命令しますと、啞でも耳は聞えると思えて先ほどの轡を自分で口にとじつけ戸棚からスポンジゴムを真紅のビロウドで蔽った小型の鞍を持つて来てバンドで自分の腹に締めつけました。次に乳母車に使う様な車輪を三輪車風に改造し、ちょうど人が「形に体を曲げると手が届く所にハンドルがついていている車を持つて来ました。これなら馬上の女王様も膝を妙に曲げたりせず、それこそ馬上豊かに脚をたらしめてこの男ウマを御せるわけです例の啞男は準備が整うとI夫人の傍にやつてきて目で物をいうように顔を恐る恐る見上げました。I夫人は馬装の点検が終るとウマを待たせておいて隣室に消えましたが数分後には雪の様な膚に純白ブラジャーとえんじ色のサテンのショートパンツという華やかな恰好で出てきました。靴は西部劇に出てくる女の

乗馬靴のような三色皮に種々烙印模様のついた半長靴で拍車もついています。よく見るとこの拍車はゴムに銀粉を塗ったもので、これなら乱暴に蹴つても傷はつきません。そしてつかつかと人間ウマの所へくると勢いよく豊かな腰をドシンと下ろしました。しばらく鞍と股の密着をよくするため馬上で腰を動かしておりましたが、ビタリと気分の合うところへ来たのでしよう。手綱を引締め脚を引きつけて拍車を当てはじめました。ウマは本物の馬より鈍感なのか歩こうとしません。すると続け様にピシツ、ピシツと鞭の連打音が私の耳を打ち目を射りました。人間の皮膚にあたる細鞭の音。それは皮膚が滑らかなだけに毛衣をつけた馬とは違った悲痛かつ痛快な音が致します。ウマは手綱を引締めれば口が痛いのでしよう。半立ちになり鞭を続け様に使えば駆け方は早くなります。十六貫のウマは十三貫弱のI夫人の重味でも長くなればやはり疲れるのでしよう。三十分もたつとウマの呼吸は前上半身の支えに三輪車様の前脚を持つているとはいえ苦しいと見えて息づかいが荒くなります。その時B夫人が服を脱ぎながら「そろそろ代つて頂きましょうかね」と声をかけました。I夫人は概ね人間ウマ

の鞍味を満喫したと見えて、この申入れに直ちに応じましたが、その後のB夫人の乗馬ぶりが大変です。年は私より十才年上、I夫人とくらべても五才は上のB夫人です。半年ぶりのサシステイックな妙味をこのスペシャルホースで満足させようというのですから乗り方は始めから乱暴で、かねて準備した張板の片方を一尺ほどの台の上にねかせ、傾斜をつけておいてこゝを駆け抜けて跳び下りさせるというのです。幾ら目方が十一貫とはいえ人間ウマの背骨に相当な衝撃を与えることは事実です。ウマもこれを嫌がり避けようとするのを無理やりに手綱を引絞り股で背中を押出し或は拍車で蹴出し、鞭の連打で脅かすのですが、中々張板の傾斜面を上ろうとしませんが、中々張板の傾斜面を上ろうとしませんが、十分ほど女騎士と男ウマは争っていたでしようか。そのうちに女騎士は一人あきらめのか平たんな所を歩かせていました。が何を思ったか下馬すると例の真紅のスポンジ鞍をはずしてしまいました。正に裸ウマにパンティー一枚の姿で乗馬運動をやるわけです。ウマの背中からは汗がにじみ出てブリーフも汗に濡れています。女騎士は再び張板の障碍にウマを向わせ先ず静かに落差のあるところまで乗り上げました。第二回目からは漸次速力をつけ鞭

打激励も激しくなりましたが、その後はウマも慣れたのか案外素直に跳び越える様になりました。B夫人は四十分ほどの男ウマを乗り廻すことによつて快味を味つたでしようか流石の女騎士も疲れを感じたと見えて騎座の締りも思ひなしか緩んできた時です。男ウマは突然立上つてこの傲慢なレディを振り落してしまいました。B夫人は怒つて再び跨ると懲罰的な鞭を雨の様に打下し、快心の微笑を浮かべながら

「あゝ、好い運動になつたこと。乗杉さんお乗りにならない」

と呼びかけてきました。ウマはこの二人の女王様に連続一時間以上乗り続けられ鞭打たれているので汗と口の泡から見て大分疲れているようです。しかしその時の私はこの馬を可愛そうというよりも好奇的な楽しみの道具として強く惹かれていましたので、T夫人から例の夜間乗馬の服装を拝借して先輩の女王様たちに負けじと乗廻しました。かつてわが家の厩舎で武男に馬乗りになつたことはありますが、こんなに半公然と見よがしに秘密の快楽を追求したことはありません。そのため始めは何んとなく落着きがありませんでしたしかしものの十分と立たぬうちに心臓、大脳

と肉体の要部に伝播しその気分を仮に方程式に表わすとしたら

($\sqrt{a} \times \sqrt{b}$) + $\sqrt{c} \sqrt{d}$

といった感じてした。しかし惜しいことに両夫人はこちらもまだ新妻で僅かに二十才という配慮のためか私の本意に反してこの楽しい行為を長く続けさせてくれませんでした。

さてその後幾度かこのB、T、Nの三夫人は何かに事寄せては集まり、健康—性慾—乗馬—室内模擬乗馬等について語り、行動を共にしましたが先輩格のB夫人だけは昭和十四年の暮、ハルピンの特務機関詰として御主人が赴任することになつたため御一緒に渡満しました。そして三、四回帰国する人の手を通じ(郵便ですと検閲の心配がありましたので)夫の手助けに忙がしい旨を伝えてきました。

B夫人の手助けというのは捕えた敵性スパイの自白を強要させる役で専ら男女を問わずスパイ容疑者を人間用に作つた馬具で拘束し、

何時間でも飲ませず食わせず室内の乗馬練習に酷使するとのことでした。しかも時が時だつたのでスパイ容疑者が非常に多く、いきおい乗馬時間が長びくので食事が進む様になりおかげ様で十一貫強のからだは十五貫にもなつたと喜んでいました。またスパイの中には

女の私が、三十分間ぐらい跨がつて細鞭で痛い目に合わせるだけで潰れ、白状するものも出てくるなどとも書いてありました。B夫人にとつてはそれこそ趣味と職業と合致し夫婦協力してこの天職を遂行した事でしよう。昭和十八年頃から音信も絶え、B少佐(当時大尉から少佐になつていました)夫妻のその後を伝えるものがいまもつてないところを見ると彼等も余りにひどい乗馬練習に専念した結果、ひとのウラミをかつて殺されたのかも知れません。

それにひきくらべ、私はB、T両夫人から「乗馬を最大限楽しむ」教訓だけを学んだだけであくまで趣味として乗馬を続け、男ウマに跨つて快味こそ味いますが、他人を傷つけてはいけません。恐らく今後もウマになりたい男には大いに乗つてやりましょうが、望みは乗つて、その様な男を苛めかつ喜んでもらうだけに止めたいと思つています。

人妻期(終り)

次は未亡人期となります。未亡人期は孤獨に耐えかね、かつ馬術も上達して乗馬を乗潰したり、男ウマを気絶させたり、老人馬少年馬、女馬等の人間ウマの乗心地とウマの喜びを語ります。

奇譚クラブ最近号 主要目次

昭和二十七年

○十月号特集切支丹迫害史

口絵 責め場面挿絵集 喜多玲子・構成

切支丹迫害史 辻村隆・構成

縛られた女写真集 辻村隆・構成

切支丹迫害史 漆島 迫平

或る医師の告白 龜岡 恭二

大衆文学に現れた女の責め場 高月 大三

愛と苦痛の交錯 鳥上 源一

恋の烙印 松井 籟子

男色の海 井口 正憲

アブニストの記へばさうり 鬼山 絢策

夫婦愛と緊縛の考察 辻村 隆

宿命に哭く 浅田 正人

悪女 岡田 咲子

縛られた妻 早川新一郎

猿轡五態 喜多 玲子

○十一月号宗教刑罰戦慄畫譜

口絵 宗教刑罰畫集 風俗便所考 淫書開好記

緊縛の受難(縛られた女の写真) 松井 籟子

慈悲の管刑 鬼山 絢策

続・へばさうり 朝見 速夫

ストリップ変態記 岡田 咲子

続・変態艶書 藤安 節子

少年矯正院体験記 三村 幾夫

桃色の地獄 中河津 規男

夢性の美少年 桂 牧次郎

都会の異態交響樂 杉山 清詩

癡狂文学者の研究 井口 正憲

性愛描写の文学 紀市 郁栄

切支丹迫害史 漆島 迫平

○十二月号惑溺の愉快特集号

口絵 フランス貴婦人の変態性生活 耽美派小説名場面集 潤一郎の巻

折込口絵写真 縛られた女を写す 辻村 隆

濁れる愛執 松井 籟子

奴隷妻 片矢 薫

男裝寵姫伝 龜岡 絢七郎

孤獨なファンタジー 芳野 眉美

糊と泥と砂 長岡 愛一郎

非公開映画 世界の闇房 藤安 節子

囚衣(或る人妻の生活記録) 古川 裕子

ロマンチックなサディズム 森山 美歌

女囚私刑体験記 小坂多美枝

セックスの記憶 綾 久江

錯乱の倫理 近東 規矩也

狂い咲くカンナ其の後の告白 羽村 京子

昭和二十八年

○新年号 縛られた女を描く

口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子

中世紀の宗教刑罰畫集

色刷口絵 掠奪 鬼山 絢策

口絵写真 縛られた女を描く アブニストの記・らぶすれいぶ 鬼山 絢策

淫火(みだらび) 松井 籟子

桃色のベールに包まれて 川端多奈子

読者座談会 交悦に伴う責めの衝動心理 福田 英一

マゾヒストの果て 長岡 愛一郎

糊の執着 升岡 金吉

鼻腔礼讃 黒井 珍平

告白記 僕の記録 伊藤 晴雨

女の責め場を描く時の心境 角田 平八

あなたのムチの下に 上村 秀久男

赤につかれた男 堤 行房

男色の花道

○二月号責めの小説特集号

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻) スペインの宗教裁判

口絵写真 恋に狂ったワン・カット 羽村 京子

妖花(心の悪魔) 岡 真史郎

夜開く孤島 戸崎 平馬

若衆散華(同性愛欲史譚) 浮家 鷹三

変の字問答(第二話) 鬼山 絢策

らぶ・すれいぶ(第二回) 久留木 栄

燐光 仁比山 等

女嫌いの種々相 森山 美歌

悩ましのサディズム 漆島 迫平

切支丹迫害史 林田 澄子

しいたげられるよろこび 芳野 眉美

硝子便所 雲井 彰

映画とサディズム

○三月号 東西拷問くらべ

口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子

口絵写真 東西拷問くらべ

サディズムの精髓 吾妻 新

切腹史談 中康 弘通

同性的男性愛の謎 染田 玄

受難記(ある女の告白) 岡田 咲子

女囚私刑体験記(其二) 小坂多美枝

艶書通信(喜多玲子さまへ) 高野すみ子

文学・歴史のサディズム 仁比山 等

猿轡考 千葉 三郎

白い便器の幻想 芳野 眉美

緊縛女優列縛られた女優たち 升岡 金吉

アドニス灯 鷲巢 千芳

第七天国の夢想 梅井 清

○四月号 錯倒の告白特集

口絵 くすくすされる女 喜多 玲子

口絵写真 緊縛美の考察 後手と高手小手 獄 収一

搾衣(続少年矯正院体験記) 獄 収一

神の酒を手に入れる方法 沼 正三

肥満体への郷愁 麻生津和夫

乗馬服と長靴と鞭 森本 愛造

不思議な拷問 有馬 稲高

私の新婚生活 島村 康雄

開花の契機 信太 蓉子

キメラ愛好会 岡田 咲子

責めの美的表現 小此木 蘭一

新裸体狂論 七条 美樹子

続・囚衣 古川 裕子

地獄繪行脚 長岡 愛一郎

美少年の死 岡 真史郎

縛られた女優たち(二) 升岡 金吉

風流猿轡 吾妻 新

○五月号特集男性MASO

口絵 戦後の挿絵に現れた女の責め場

口絵写真 荒縄による緊縛感のスポット

怪奇畫集(ドイツのグロテスク畫集)

マゾヒストの会 沼正三・訳

風流責各態 吾妻 新

捕縛難考 獄 収一

僕の記録(完結篇) 黒井 珍平

雌獣の手記 近見 啓

女王様ごっこ 飛田 良二

続・硝子便所 芳野 眉美

私の欲び 瓜生 珠子

少年及び女性の切腹 中康 弘通

吊られた白鳥 川端多奈子

魔都上海の思い出から 姫宮 四郎

奴隷の安の記 中野 安太郎

縛られた妻以前 早川 新二郎

暴帝イワン罪悪史 高取 辰治

○六月号

口絵 お小夜嵐……………喜多玲子・画

地獄物語(往生要集)

口絵写真 緊縛による一表情

クリスチーナの受難……………吾妻新・訳

ヴァンブ女優列伝……………朝見 速夫

アブノーマル・ファンタジー……………岡田 咲子

責 苦……………竹谷 十三

廓の灯影……………片矢 薫

出獄(少年矯正院体験記)……………獄 取一

由紀子のお仕置……………大川由紀子

若衆武士道……………戸崎 平馬

あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三

其頃を語る(一)新派劇の賣場……………伊藤 晴雨

文芸に於ける切腹描写……………中康 弘通

我が告白の断章……………須藤 律夫

第二回読者座談会……………松井籟子女史を囲んで

○七月号

口絵 百鬼夜行の図

口絵写真 猿ぐつわ五態……………吾妻新・訳

クリスチーナの受難(二)……………岡田 圭介

妻は縛らず……………亀岡 絳七郎

切腹本願……………馬場 保弘

祭壇に君臨する脚……………窪村 三郎

片耳伝……………千葉 弘

女体縛美について……………篠村 三郎

因縁の思い出……………宮内 義雄

歌舞伎とサジスム……………伊藤 晴雨

辻番附の話……………水内 武郎

切腹願望……………浮城 鷹三

変の字居答(第二話)……………毛利 綾子

裸になつたお姫様……………山本 百合子

くすくすされるよろこび……………小坂 多美枝

女囚私刑体験記(三)……………岡田 咲子

私の主題……………吾妻新・訳

新しいサディズム……………新

○八月号

口絵 戦前戦後の挿繪に現れたる責め……………村田 誠一

及び縛り繪……………及ぶ縛り繪……………村田 誠一

口絵写真 被縛女体の研究……………辻村 光隆

色 狼……………児島 晴雨

明治期の被縛画家……………伊藤 晴雨

アリスへの讃歌……………住田 英一

苦悶する裸像……………福田 弘志

悦楽秘帖……………信太 啓一

クリスチーナの受難(三)……………妻新・訳

公妃の復讐……………沼 正三

被虐の愛情……………若林 啓子

甘美なるアリスの降伏……………寒川 緑

アブノーマル・プレイ……………吾妻新・訳

女のズボンについて……………佐治 須新

古川裕子さんへ与える……………天泥 盛英

ある被虐性愛者の手記より……………天泥 盛英

○九月号

口絵 本紙の旧号に現れた責め……………辻村 隆

口絵写真 縛られた女の美しさ……………南川 和子

折込写真 緊縛美のオンパレード……………吾妻新・訳

切腹願望と女性心理……………中康 弘通

京子の生活と意見から……………羽村 京子

両棲動物(男色夜話)……………岡 真史郎

縛られた女ばかりの座談会……………鐘坊 巡

幸福なる隷属の告白……………南川 和子

私は何故責め繪を描くか……………川合 伊都子

燃ゆる糾纏栗……………川合 伊都子

孤児院での経験……………野々村 紀夫

れ記……………中川 秀夫

め手……………増 不二子

秘手……………古川 裕子

長期刑……………越野 義夫

責めの自画像……………森山 美歌

続・悩ましのサディズム……………森山 美歌

○十月号

口絵 安達ヶ原一つ家の図……………南川和子・画

針に刺された女……………南川和子・画

戦前に現れた責め繪……………東西風俗画報襲う男と襲われる女

東西風俗画報襲う男と襲われる女……………滝 麗子・画

体操倉庫……………塚本鉄三・撮映

写真 野外的責め場……………久留木 栄

現代のサジスム……………岡田 咲子

私の想い出……………近見 啓

聖画の誘惑……………近見 啓

る記……………大島 達也

偽告白……………小暮 達也

告白……………水上 流太郎

サジスムの芽生え……………土井 慎夫

大阪陸軍幼年学校……………白石 悠

呪縛……………辻村 隆

蜘蛛と蝶々……………飛田 良二

哀艶責め場……………岩 広志

悦楽に哭く……………野村 恵美子

悦楽に哭く……………川端多奈子

臨時増刊号

アリスの人生学校……………吾妻新・訳

第一部 純潔教育

第二章 秘密の本

第二の犠牲……………最初犠牲者

アリスの誘惑……………継母の楽しみ

客間の教育……………甲斐なき同情

客間の教育……………小間使の折檻

客間の教育……………マリアの結婚話

客間の教育……………マリアの結婚話

客間の教育……………マリアの結婚話

客間の教育……………マリアの結婚話

客間の教育……………マリアの結婚話

客間の教育……………マリアの結婚話

客間の教育……………マリアの結婚話

客間の教育……………マリアの結婚話

客間の教育……………マリアの結婚話

○十一月号

口絵 棒と柱を用いた縛り方……………拷問部屋

私刑五態……………滝麗子画集蛇男の幻想

砂にまみれて……………砂にまみれて……………滝麗子画集蛇男の幻想

女が縛られるまで……………女が縛られるまで……………滝麗子画集蛇男の幻想

バレード……………バレード……………滝麗子画集蛇男の幻想

白へのノスタルジヤ……………河村 哲夫

に記……………河村 哲夫

まの……………河村 哲夫

あや……………河村 哲夫

現代文芸に現れた責め……………村田 誠一

悦楽の旅……………青山 三枝吉

まさひつと……………富田 陽夫

女を縛つた経験……………富田 陽夫

口絵……………富田 陽夫

柱とテコを用いた縛り方……………滝麗子

女囚処刑の図……………都築峰子・画

美少女折檻……………南川和子・画

新しい縛り繪……………強制・脱獄

滝麗子画集……………強制・脱獄

差らい……………差らい……………強制・脱獄

アルバム……………アルバム……………強制・脱獄

用……………用……………強制・脱獄

の女の縛られシヨ……………三人

細とマゾヒズム……………那須不二夫

淫火(完結篇)……………松井 籟子

映画に現れた猿轡……………鳴山 能平

春風座の秋……………青山 三枝吉

錯園……………沼田 扶二

倒花……………住田 弘志

る花……………芳野 眉美

味の……………川合 伊都子

甘の……………多山 皓

らぶ……………若杉 早苗

後辱の幻想……………鬼山 紬策

女奴隷の手記……………古川 裕子

女奴隷の手記……………北山カオル

続・女装への憧れ

重田正和

女装マニアの告白



新婚当初の交情に際しての女装は前回に述べた通りで、どんなに私の長年内攻していた欲望を充して呉れた事でしよう。あの縮緬や錦紗のぞろりとした肌触り、何本かの細紐で

そんな衣裳をしつかり身に纏いつけられ、厚い巾広の帯でぎゅつとお太鼓結びに締めつけられる時の何とも云えぬ心のときめき、そして色とりどりの華かな衣裳で盛装した自分の

姿を、鏡台にうつして眺める時の面映ゆい様な嬉しさ。昼間、仕事をしながらも、こんな事を考えると、もう胸がどきどきして、夜になるのが待遠しくて仕方がないのです。

この様に夜毎下着や帯や衣裳を取り替えては女装する楽しみにひたつていた私に反し、最初の間は、新婚当初の遠慮心より、私の云う通りに女装を手伝ってくれていた妻も、だんだんこんな事を喜ばなくなり、或る晩とうとうこう云い出しました。

「私、今晚、疲れたわ。貴方、着物着たいなら、どれでも簞笥から出して着て頂戴」

私もどうやら見真似でお太鼓の帯も一人で結べる自信があるので、

「じや独りで着るかわり、お化粧もするよ」

「えゝ、貴方の好きな様にして頂戴、私、先に寝るわ」

と云つて、妻はツンツンして先に床に入ってしまった。

私は早速次の間へ鏡台を運び、簞笥から好みの衣裳や下着類と、女装するに必要な紐や止金などを乱れ籠に入れ、これも次の間に運び、いよいよ独りで女装にとりかかりました。今までは、誰も見ていない、とは云うものの、やはり妻の前では余りな恰好も出来なか

つたのですが、今晚はどんな事も出来るし、それに初めて自分で化粧するという楽しみがあります。

隣の部屋からは、もう妻のいびき声が聞えて来ます。以前から一度は化粧して見たいと云う下心から、それとなく妻の化粧の仕方に注意していたのが役立ち、先ず鏡台の引出しからクリームを取り出し、ベタベタと多い目に顔一面にこすりつけます。次に粉白粉を、これも多い目にパフで、顔中真白になるまで叩きつけ、クリームや白粉から発散するなまめかしい女特有のにおいにひたり乍ら、次に眉墨で細く長い目に眉を引き、濃い目に口紅をつけ、頬紅さえつけると、流石にいかつい男の顔も、どうやら女らしくなつて来ました。こうして化粧した顔を眺めていると、どこか姉の顔に似ている様で、やはり姉弟は争えぬものだと思つたりしました。

どうにかこれで化粧も済んだので、早速着ているものをパンツまで全部脱ぎ、真赤な腰巻、長襦袢と、いつもの様に、心よい絹の感触を全身に味い乍ら、鏡台の前で、なまめかしい女の姿に变つてゆく様を心ゆくまで観賞します。今夜の着物は絵羽模様の派手な長袖の訪問着、苦勞してどうにか帯を結び、日本

手拭で姉さんかぶりして見る。きつく締めつけた帯の下では歓喜の鼓動が聞える様です。

暫く行儀よく坐り鏡台にうつる女装姿を眺め乍ら、もしこんな恰好で、荒くれ男達に縛られ、胸や裾を露わにされた末、

「何だ此奴、男じやねえか。女の着物なんか着て白粉までつけやがつて、これは何の為に付けてやがるんだい」

と罵倒され、嘲弄されたら、どんな気持ちだろうと空想したりします。

そろそろと起ち上り……實際女装して見たら活潑な動作が出来ない事がわかります。……鏡台を全身がうつる位置へ移し、丁度吊り下げられた恰好に、鴨居にぶらさがります。

そして体をくねらし、両足をひろげたりすると、裾が割れて真赤な長襦袢がちらちらとなまめかしくのぞく。今度は柱の前で、丁度逆吊りされた様に、頭と肩で体を支え、両足で着物の裾を挟み、思い切り両足を上げる。そして鏡にうつるそんな姿を眺めながら、そろそろと両足を広げると、先ず着物がぞろりと捲れ、続いて長襦袢も腰巻もずれ落ちて、股の辺まで露わになります。こんな事を二三回繰り返しては、逆吊りされたらこんなになるのだろうと想像したりします。そしてだんだん

ん着くずれて来るにつれ、ストリツプで見た様に、女のしなをつくつたり、踊つたりしながら帯をとき、着物を脱ぎ捨て、長襦袢一枚の艶な姿になり、胸の辺りを広げたりしている間に、とうとう我慢出来なくなつて………しまいました。

それから云うものは、妻との営みよりも独りの女装遊戯の方が楽しみで妻の方も昼間の疲れで早く寝たがり、私の変態遊戯を黙許している様子でした。

或る日、街で洋装の髪を見かけるや、欲しくて堪らず、とうとう無理して買い求め、鬼の首でもとつた様な気持ちで、その夜のくるのもより入念に化粧し、すつぽりと髪をかぶつた時の嬉しさ。あゝこれでどうやら私も完全な女装が出来るのだという喜び！ その夜はもうへとへとになるまで、自虐的遊戯に夜の更けるのも忘れてしまいました。

こうして妻の衣裳を殆んど着尽すと、今度は街を通る若い娘達の衣裳が目につき、「あんな着物が着られたらなあ」とかなわぬ欲望を起したりするのです。ですから、私の目をひくのは、異性の容貌や美醜ではなく、衣裳そのもので、しかも上品なものより、女給や

娼婦の着る様な、けばけばしい派手な衣裳なのです。勿論、お正月やお祭などで、奇麗に着飾った娘達の姿を存分に見られる時は、どんなに私の眼を楽しませ、悩ましたか知れませんが。そして相変らず、古本屋で婦人雑誌などの月遅れを買って来ては、着飾った女の口絵や写真を切りとつてスクラップし、その衣裳を倦かず眺めていました。

又、百貨店や古着屋で自分の好みの派手な衣類を、資力の許す限り買い漁りました。けれど数多く欲しい私には、高価な物には手が出ず、安い人絹錦紗などの派手な柄の反物を買って来ては、私の女装遊戯用として妻に縫わせ、時には畳にずる程長い袖にしたり、長襦袢のような柄の反物を着物に裁たせたりもしました。

大体、私の好みは和服なのです。が、夏などは洋装もして見ました。妻の地味ですので、若い娘の着る様な赤い花模様のあるドレスを買い求め、下に絹のシュミーズや、ナイロンの靴下などもつけては苦心して洋装するのです。

この様に苦勞して入手した衣裳を着、化粧もするのですから、こんな女装ぶりを写真に撮って置いたら、どんなにいい記念になる事だろうと思ひ立ち、無理してカメラを買い求めました。そして化粧も一層入念に、時には



つけたり、おちよぼ口をした様に、上下に小さくつけて見たりしては顔の感じを変えたりしました。そしていつもの様に好みの女装し髪をつけていよいよ撮影にとりかゝります。併しこれだけは流石に妻の前では出来ず、

自動シャッターを使つて撮りますので、ポーズなどに苦心しました。レンズは勿論開放で、百ワツトの電球をつけ、冬でしたので、コートの上からシヨールをかけたまゝ、半身、全身と二三枚撮り、次にシヨールをとつて二枚程、次にコートを脱いで羽織姿で又二三枚、立つたり、坐つたり、袖を前に重ねたり、両手を左右に拡げて両袖一杯たらしたりして撮ります。次に羽織を脱ぎ、帯つけの着物姿で撮り、両足を拡げて長襦袢をのぞかせたり、芸者の様に襟をとつたり、片袖脱いで長襦袢の袖を出したり、又苦心して机の上に仰向けに寝て横から撮つたり、長襦袢に伊達巻姿のなまめかしい所も撮ります。

最後に腰巻一枚になり、両手で乳房を持ち両足を大きく拡げた所も撮りました。縛られ

堅練りで顔中真白に塗りつぶす事もあり、眉もある時は細く長く、ある時はお姫様のように額の上へ点を二つ書いて見たり、三日月型にして見たり、殊更鼻柱だけ一きわ白く塗つて見たり、口紅も娼婦の様に真赤に口一杯に

たり、吊下げられたりした所も撮りたいのですが、これは独りでは不可能なので、これは後手にしたり、鴨居に下つたりして、表情だけ苦しうにして撮りました。この様な写真は勿論現像も、焼付も自分でするので、きれいなものは出来ませんが、よい記念にはなりました。前回にお送りしたのは、その中の一枚です。

その内、少々無理をしても、何とか日本髪の髪を入手したいと思つていますので、いずれ日本髪の女装姿もお目にかけると存じます。

四、五年前になると思いますが、「ペーゼ」という小冊子に、「女になる苦痛」と題した読物があり、青年が長襦袢を着ている図を見



——作者の女装ぶり——

つけましたので、早速買つて読みましたが、その時の感動は今も忘れられません。ポロボロの小冊子ですが、未だに秘蔵し、時々出しては読み返しています。内容は、ある祭礼の余興に若者が花嫁に扮する事になり、踊の師匠から女になる心構など教えられ、お蔭で祭礼の三日間、毎日花嫁の衣裳を変えて街中に繰り出し、大喝采を博するのですが、祭礼の終りの晩、師匠からまだ未熟だと花嫁衣裳を剥がれ折檻されるという筋ですが、微に入り細にわたり、女装ぶりを描写してありました。伊藤晴雨氏の文章にも、女形が女装の儘男から責められる所がよくありますが、一度同氏の挿画と共に艶麗な筆致で、心ときめく様な文章を奇ク誌上をお願い致します。

最後に私の夢の様な空想を述べて見たいと思います。それは男娼の様に性的行為や営利を伴わぬ女装愛好者同志のクラブ（集会）の結成です。そこでは誰慮る事なく自分の好みの女装ぶりを、心ゆくまで観賞出来、自分の好きな女装者が見つければ、カメラで撮ったり、衣裳の取り換えも出来、意気が合えば、別室で縛り合つたり、も出来るのです。会場には数ヶ所に大きな鏡を備え付け、自由に自分の姿を眺める事が出来、無名投票で最も優

秀な女装者に賞を与えて、女装の苦心談を聴いたり、終りに一人一人、皆の前でストリツプして男である事を確認して貰うのです。

若し右の様な夢が実現したら、どんなに楽しい事でしょう。全国の奇ク読者の内には、必ず私の夢に賛同して下さる方もあると思います。私程な変質者でなくても、盆踊りと云えば多数の女装者が現れ、サンドウィッチマンと云えば花嫁姿で人目をひき、仮装行列と云えば必ず女装者が出る事を思えば、女装に興味を持つ者が決して少くないという証拠だと思います。私の様な変質者を真に理解して下さる方との文通交際を望みます。衣裳を借して頂ける様な女の方があれば、どんな遠い所でもお訪ねしたいと思えます。そして女装して縛られた所を、いろいろなポーズでカメラに撮って頂いたら、どんなに楽しい事でしょう。

以上で私の女装告白を終わります。

(終)

×

×

×

×

×

×

私の求めた男

(五)

松井 籟子

瀧 麗子・画

〔松井籟子自伝的小説〕



私はエピソードの様な恋の話を書くのはやめにして、もつと、一年なり二年なり続く恋の話を書きたいと思ひながら、自分をみつめ自分自身気のつかない悦唐への夢を、あかるみへさらけ出し、自分がどうして、真底惚れこめる相手にぶつからないかを考えていくと、どうしても、いくつかの恋のエピソード或はエピソードのような恋の話を書いていくより他に道がないのだ。

沢渡や小松に会つた夏の海の話に、ひとは多分、それが私にとつて何らかの恋の形に、発展していくと思つたに違ひない。私自身もそれをのぞんでいた。私もいまだに、若い日の海辺の一と時に、私の瞳とからみ合つた彼等の瞳の色を、昨日のことのようにはつきり思い浮かべることが出来る。

砂に埋められたまゝ、まるでさらし者のように首を出していた小松の顔は、生き生きと目の前に見えてくるし、その顔を想い、姿を思う時、私の体は今でもきゆうと締つてくるような気がするのだ。

昔、徳川家康の子の信康が岡崎の城主であつた頃、大賀弥四郎重

秀という人が、武田方に通じた罪で処刑された時、土の中に首だけ出して生き埋めにされて曝されたという。両手両足の筋を切つて首に枷をはめ、その首だけを土から出して、通行の人に鋸でひかせたのだそう。両手両足の筋を切るのに、今のような外科手術のようにはいたした血を見ずに行われたとは思えない。すでに手も足も、血みどろにされていたのではないだろうか。息の根がとまるような苦痛ではないにしても、それだけでもどんなにか苦しかったろうと思う。枷をはめられた首は、すでに苦悶の表情をあらわしていたことだろう。それは、砂に埋められた小松が、顔や頭を這い廻る蟹に、眉をよせるどころではなかったかもしれないし、鋸でひかれるまでもなく、罪人の顔は血で汚れていただろう。私は大賀弥四郎重秀という人の風貌をさだかに想像することは出来ない。ただ小松の顔からさらにそれに首枷をはめ、血みどろにし、凄惨な姿に粉飾することは出来る。すると、鋸でひかれたらどんな声で呻めくだろうと、その呻めき声まで耳に聞えてくるような気がするのだ。

それならいつたい私は、そうした姿に人をして、苦しめることに自分の官能が刺戟されるのか、それとも、自分が苦しめられたいのか、どうもわからなかった。わからないというより、何かそれはむしろ不快な感じで、顔をそむけたいのだ。映画で手術する場面があったりすると、私は見ていられない程、その場面が厭なのだ。決して好ましいと思つて見るのではない。眉をよせ、頬を引きつらせるような気持で、早く明るい場面になつてくれと願いながら見ているのだ。それなのに、家へ帰えつて、いざ寝る時になると、快く思われなかった惨酷な情景が、妙に私の体の奥を疼くように刺戟し出す

のだ。

砂に埋められた小松が、私の視線をからめるようにとらえると、かえつて私はどきまぎして、その遊びをたのしむ気はなくなつてしまふのだ。むしろ小松から顔をそむけ、早く家へ帰りたいと思つた。そして、二度と小松に会いたとは思わなかった。

それなのに、夏が終つて東京へ帰ると、映画の中の惨酷なシーンが、あとから快い刺戟になるように、沢渡や小松にもう一度会つてみたくなつた。

私は誘われるまゝに、小松と二人で映画を見に行つた。

その頃芝園館という映画館が洋画のいいのをやつていた。今でもあるかどうか、私は知らない。その芝園館の二階が今でいうアベツクシートになつていた。私は小松と肩をすり会うようにして映画を見た。夏以来、小松から手紙をくれるので此方からも返事を書き、文通は何度かついていたが、会うのは久し振なのだ。たしか小松の学校の運動会が芝公園にあつて、それを見に来てくれと誘われたのだ。晴れた秋の陽の下で会うつもりで行つたのが、運動会は途中からぬけて、映画を見ることになつてしまつたのだ。

夏の陽の焦けつくような白砂の上で、裸体で見た彼と違つて、学生服の彼は妙に不健康な感じがした。人には、乾いた感じの人と濡れた感じの人がある。乾いた感じは健康で明るい、濡れた感じは不健康だ。女の場合、その不健康な感じの中に美しさがある時があるが、男の場合は薄汚れた感じを受ける。小松がそうだった。しかし性的魅力というものは、乾いた明るさの中にあるよりも、暗い濡れた感じの中にあるのかもしれない。しかし、それは性の喜びを知つてはじめて性的魅力というものはつきりわかるので、その頃の私

は、むしろ性的魅力のない男の方が好ましいタイプとしてうつゝつたのだ。

だから、私は学生服の小松の暗い感じを、あまりよくは思わなかつた。言葉つきからして、口の中で云っているようで、聞きとりにくいようなことがあつた。真中に腕木のない席に、体をよせ合つて腰かけると、右隣の小松の胸から、ドキンドキンと心臓が脈打つ音がはつきり聞えた。私はその音が気になつて、映画の方へ身が入らなかつた。私ははじめ小松が、ただ私と並んでいることだけで、そんなに激しく動悸を打っているのかと思つた。しかし、今考えると、多分彼は暗い中で私の手をとつていいものかどうか、そんなことを迷つていたのではないだろうか。私は最近、或る歌舞伎役者と知るようになった。歌舞伎を見に行つて、その役者に声をかけようとする、胸がおかしい程ドキドキするのを経験した。それは女があまり大きな声で役者の名を呼ぶようなことはなかつたし、歌舞伎のかけ声というのは、役者のせりふとか動きの間にピタツとうまくはまらないといけないので、その呼吸がむづかしい。だから、それをねらっているうちに心臓がドキドキと大きく鳴り出すのだ。

小松の胸が私に聞える程大きく鳴つていたのも、ただ並んで見ているからではなく、手をとろうかどうかと、迷っているうちに、心臓が勝手に大きな音をたて出したのに違いない。

けれど私はまだ映画館で男の人に手を握られたこともなく、察しもつかなくなつた。小松の動悸が私の体をふるわせるようで、何となく息苦しくなつて来た。

「出ましようか？」

私は小松の興味が映画にないのが解るのでそう聞いた。映画に興味を持たなくても、私と並んで、手をとろうかしらうかと思つていることは小松にとつてつまらないことではなかつたのだろうが、私はそうした場所で恋を語ることになれていなかつた。映画館へ入つたら映画を見るものと思つている。だから映画に興味を感じていない人と並んでいてもただ気がねに思うだけだつた。

「つまらない？」

小松が聞いた。

「いいえ、でも小松さんつまらないんじゃない？」

私が言う。

「僕は……」

と、言いよどんだ。彼にしたら、目はスクリーンを見ていても、おそらく、どんな筋に發展しているかさえ、見ていなかつたのかもしれない。急に面白そうな顔も出来なかつたのだろう。

「出ましようか」

重ねて私が言うと、彼は私が映画をつまらなく思っているのだと思つたらしい。私は彼さえ、ちゃんと映画に心を向けてくれていたら、決してつまらない映画ではなかつたのだ。もつと見ていたかつたのだ。しかし、若い男と女の心の違いをどうしようもなかつた。

私はいい映画を、同じように陶醉して見てくれて、映画が終つてから、「よかつたわね」としみじみ話合える相手を望んでいたのだし、小松は映画よりも薄暗い映画館の席で恋を語ることが望んだのだらう。私は小松に失望し、小松は私に失望したらしい。

まだ夕陽の色が街を黄色く染めている中を、何となく満ち足りな



い心で別れて帰えつた。私は私の体の奥底の欲求の刺戟されただけでは、恋に燃えることは出来なかつた。

それから何度か瞬間的に人を好きになつたが、一目惚れというのは、いわば、肉体的にひかれた時が多いらしく、精神をとまなわな

いのか、飽きることが早かつた。
私が最初に夫としてえらんだ人に会うまでの短い恋は、もうとばしてしまふことにしよう。

二

私は十三才で異性を好きになるという氣持に芽生えてから、二十才までの間に、何人心の対象をとりかえたことだろう。あの顔、この顔と思ひ浮かべると、十五ぐらい指が折れる。唇一つ汚したことのない恋だつた。そのくせ私はそのめまぐるしい自分の想いに疲れ

ていた。
「私はどうしてこう、ひとりの人を一生懸命愛することが出来ないのだろう、もうくたびれたわ、そのくせいくらでも人を好きになるの長続き出来ない想いなら、好きになんかならなければいいのに、すぐ好きになつてしまふのよ」

私はそう入江寛二郎に話した。

ある新劇団の稽古の帰えりによつた喫茶店での話だつた。

いつもは稽古が終るまで四五人の人が残っているから、お茶をのむのも四五人が一緒だつた。それが丁度その日に限つて私と入江と二人になつてしまつたのだ。

女学校をおえて、洋裁の学校へ通い出した頃、私は友達のお兄さんに頼まれて、素人ばかりで組織している新劇団へ女優として出た

のだ。もとより学校時代から芝居は好きだった。学芸会があれば、小学校、女学校を通じ出されないことはなかったくらいだ。それを知っているからこそ、友達の兄さんに頼れたのかもしれない。そして二度三度と舞台をふむうちに、別の劇団から手伝つてくれと言ってきたのだ。

顔も知らない手紙の上だけの話で、私は銀座のコロンバンで先方の男に会った。それが入江寛二郎だった。コロンバンの二階のすみの卓で、赤い表紙の演劇雑誌を持つて待っている、という約束だった。わざと約束の時間より十分おくれて行つたのは、私の舞台顔を知っている先方から、私を見つけてくれるには、あとから入つて行く方がわかり易いと思つたからだ。

明るい硝子窓の前の卓の上に、わざとのせてある赤い表紙の雑誌は、すぐ私の目に入つた。学生やサラリーマンでやつている、アマチュア劇団ときいていたので、私は漠然と学生服を想像して行つたが、その人は薄茶の背広を着ていた。ただベレー帽をかぶっているのが、何となく芝居でもやりそうに見せていたが、そのベレー帽が似合うという顔立ちではなかった。鼻すじの通つた細面の、一重瞼の顔は日本風だった。私はべつに好ましいとは思わなかった。すぐ人を好きになる私だったが、一と目惚れするタイプではなかったのだ。ただ立ち上つて私を迎えてくれた時、その丈が、私より二三寸高かつたのに一寸安心した。

入江寛二郎と二人きりでお茶をのむのは、その最初の日以来二度目になるのだが、毎日稽古場で、芝居以外の話をすることもあつたから、私の少女時代の恋の話をするくらい親しくなつていた。けれど私はその時も入江に対して恋心に近いような好意は持つていなか

つた。ただ今まで私の知つていた人よりは文学にも演劇にも造詣が深かつたから友人としての好意は感じていた。しかし、その一重瞼の目と、女のような富士額に、肉体的な好意は感じられなかったのだ。

それなのに入江寛二郎は、私が、飽きやすいのに惚れっぽいと言つた言葉を、遠まわしの愛の告白と思つたらしい。

「僕はとてもうぬぼれの強い男だ。うぬぼれやと言われるのが厭な程、うぬぼれが強いのだ」と私に言つた。

けれど私はまさか私の言葉を、「あなたを好きになつたのよ」と言つたと同じ意味にうぬぼれられようとは思わなかった。

それから又四五日して、私は又偶然入江と二人きりになつた。

あるビルディングの四階を会場にして、演劇の研究会が催され、おくれで行つた私は、偶然同じようにおくれた入江と、ビルディングの入口でばつたり会つてしまつたのだ。

エレベーターはあつたが、時間はずれで動いていなかった。四階まで階段を上つていなくてはならない。ビルディングの各部屋は種々な会社の事務室になつていたが、夜はシーンとして、廊下も暗くただ階段だけにぼうつと灯りがついていた。

コトコトと、靴の音が天井にこだまする。四階の会場ではすでに講師が何か話しているのだろうと思うと自然私は靴音を盗むようにして、手すりにつかまつて、爪先で立つて行つた。

すると、二階から三階へうつる階段の中途のおどり場で、いきなり入江が私を抱いた。上背のある彼に引きよせられて、私は思わず一寸よろめいて、彼の胸へ体をつけた。ハイヒールをはいていた私

の唇の位置が、彼の唇とほんの僅かしが差がなかった。かぶさるように、彼の唇が私の唇をとらえようとした。

瞬間、私はすりぬけるように入江の手をのがれて二三段かけ上った。しかし、そのまゝ後をも見ずに四階までかけ上ることは出来なかつた。私は次のおどり場まで上ると振返つた。入江は下から見上げて、子供が甘えるような視線を私になげた。私はニヤツと微笑んでしまつた。

入江は私の瞳を見つめて、私をその場へ釘づけるように強い視線で押さえておきながら、一段一段、手すりに片手をおいて、体をくねらすような歩きつきで、私のいるおどり場まで上つてくると、又とびかゝるように私を抱いた。

私は又、彼の手をすりぬけた。

入江のいう「うぬぼれ家と思われたくない程のうぬぼれ」が、思い切つて私を強く抱いてしまえなくしていたのだろう。私がどうしても厭だと言え「冗談なんだよ」と、笑つてごまかせる程度の力しか出さなかつたのだ。無理やりに唇をうばうよりは、誘いかけて女の方からも、その機会へ身を投げ出してもらいたいと思うのが、彼の自尊心だつた。

男と女が本能的にわかり合えるような理解のしかたで、私は彼のその自尊心に気がついていてた。だから、私はあわてなかつたのだ。そうした瞬間に男と女というものは、違ふ性を持つている立場の上で敵同志のようになれるのだ。男と女というものは、ある意味では永久に戦い合つてゐる敵同志なのだ。

私は又次のおどり場までかけ上ると、振返つてニヤツと笑つた。私の体のどこか奥で、そんな風に彼を颯るのを面白く思つたとし

たら、私は被虐ではなく、加虐者の立場に立つていたわけだ。

入江の目に動物的な色が流れていた。それは瞳の光にあるのか、ぼうつと赤く上気したような臉にあるのか、わからない。ただ、その時の入江の体から、私がそれまでの男からも感じなかつた異様な電気のようなものが漂い出したのだ。それは私にとつて、快とも不快とも名づけられなかつた。ただ、そんなものが漂い出しているのに気がついただけだ。

三度、入江は私を抱いた。

三度、私は入江の手をすりぬけた。

それなのに、入江の体から漂い出したものは、研究会の会場に入つても消えていなかつたのか、おくれて入つて行つた二人が、何か平常の状態でおくれたのではないと、敏感に察した人がいた。

緒方勉という、同じ劇団で、芝居の上では私の恋人役をやつてゐる学生だつた。しかし、緒方勉が一緒におくれて入つていつた入江と私に、焦けるような視線をなげたのを、私は幸か不幸か知らなかつた。私は講師に目礼すると、急いで入口近い席へ腰をおろし、ノートをとり出すのに心がせいていたから、重なるように並んだ椅子の一つから、緒方勉の目が光つていたのをはつきり見ることは出来なかつた。ただそんな場合、強い視線というものは、まともに視線がぶつからないでも、片頬を射られるように感じるものだ。そうしたものを感じなかつたわけではなかつたが、三十人あまりもいる研究生の中から、私の頬に感じる視線の主が、緒方勉だと断定することはむづかしい。

そして、その研究会が終ると、お茶をのみに行こうと誘う緒方勉は、私達に何故おくれたかとも聞かなかつたのだ。

二

入江や緒方の劇団は毎月公演を持つようなことは出来なかつた。

春秋二回がせいぜいだつたが、一つ公演をやるのに三月位は稽古をやり、二回の公演の間には、勉強会のようなものをやるので、劇団の人達は毎日のように誰かしらんが集つていた。公演間近には稽古場として、広い所を借りたけれど、ふだんは緒方の家の応接間を劇団事務所のようにしていた。男の人たちは劇団の維持費として毎月いくらかづゝ出し合い、公演の時は百枚、二百枚と切符を引きうけていたが、女優連は出費しなかつた。今のうちに、ラヂオでアルバイトするということもなく、みんな貧乏していたが、大たいめぐまされた家庭の坊ちゃん連中だつたのだ。そしてそんな風な新劇団が、東京だけでも大変な数があり、それぞれ一応の演劇理論をふりまわして覇を競つていた。

けれど今ほど女がそういうことをするのに理解のある家庭が少く一番困るのは女優をどうするかということらしかつた。プロの女優をたのむには御礼がいる。喫茶店の女の子などを安いお礼でたのんできても、主役をふるのはむづかしい。そんな中だつたから、素人の私でも、芝居の数は沢山みているし、演劇雑誌も一と通りよんでいて、祖父はやかましかつたが、理解ある母親を持つてゐる。稽古にもかかず出て来られるという好条件は、劇団の女優としては、重い存在にならざるをえなかつた。

その頃私達は次の公演に、芥川龍之介の「地獄変」を脚色してやる計画をたてていた。頂度先代の左団次がやつた後だつたが、芥川龍之助の小説を愛する劇団の男達はそれにあきたらず、自分達で脚

色して、もつと芸術的香りの高いものにしようと大きな望みを持つていた。

緒方勉は絵師良秀をやることになつてゐた。

この地獄変という小説は、奇巧の読者のように、悦唐に興味を持つ人達は、すでに知つてゐることと思うが、簡単にすじを書くと、筆をとつては当代随一といわれながら、貧しく、変り者で、人々とも思われぬ絵師の良秀が、大殿から不意に地獄変相の絵を屏風にかけといわれる。良秀は引受けて製作にかかつたが、地獄の責苦をうける亡者のモデルに、弟子を鎖で縛つたり、わざと鳥に突つかせてみたりする。そして最後に、その屏風の真中に、地獄の業火に焼かれる御所車をえがきたいとて、大殿に「自分は見たものでなければ画けないから、檳榔毛の車に上臈をひとりのせて、自分の見てゐる前で火をかけてくれ」と申出る。大殿はある夜、洛外の荒廃した山荘の庭で、常用の檳榔毛の車に自分が召し使つてゐる良秀の娘を鎖でしばつて、火をかけさせた。これを見た良秀は、一度は恐れと悲しみと、驚ろきのために、正気を失いそうになつたが、やがて自分の娘が火焰につつまれてゐるのを忘れたように、この世ながらの地獄の光景にながめ入つた。そして、世にも稀な傑作を完成したが、翌日、自ら縊れて死んでしまうという筋だつた。

此の最後の場面はとても素人劇団でやれる光景ではないのだ。先代左団次がやつた時、舞台の真中にひき出された御所車が、本当に燃えているように工夫され、御所車の御簾に焰がとどくように見える中で、胸高にしごきで後手に縛られた良秀の娘が、下げ髪にした長い黒髪をふり乱して、苦悶する様を見せたものだつた。

去年東京で同じ芝居が上演されたが、脚色が前とは変り、最後の

火焰車も、前よりは大がかりだったが、前ほどの官能美は感じられなかった。

緒方勉や入江寛二郎の劇団では、舞台の真中で御所車を焼いてみせるなどという程装置にお金をかけられるわけのものではない。ただ舞台のそでに近いかげで御所車を焼くことにして、パチパチと燃える音や、娘の苦悶の声は聞かせることが出来る。そして良秀の精神的苦痛を何とか演技によつて出そうというのだからむづかしい。それをやるような錯覚をおこして張切るのも、素人劇団の特徴らしかった。

何はともあれ、私は良秀の娘の役をやることになつていた。厭がるのを無理に後手に縛られて、引きずるように車へのせられることに脚色された。

舞台の上手のかげにある車にのせるのに、下手から縄をかけられて歩かされてくる。車と、まわりに積んだ焚木を見ると、娘は足がすくんで歩けなくなつてしまう。許してくれと嘆願するのだが、さ



つさと歩けとこづかれて、膝をついてしまう、そのまま立ち上らず這うように身をすさるのだが、後手にくくられて悲しさに、縄尻を引かれれば、泳ぐように身をのけぞらせ、裾もあらわに、ずるずる、ずるずると、引きづられ、ちぎれるような腕の痛さに思わず

「ああつ！」

と、呻くのだ。

「ああつ、待つて、待つて下さいませ」

縄尻を引く手に声をふりしぼる。

「おとなしく歩くか」

「あい」

と、やつと立ち上つて、よろめくように舞台をひっこむと、蔭の
声になつて

「さあ、その車へのれ」

「……」

「のらぬか、のらぬとあらば」

「ああつ！」

「おとなしうのるか」

「は、はい」

「恐いか、恐くとも逃れらぬぞ、此の鎖でそなたの体を、しつかり
と車にくくりつけるのだ。そら、手もこうして……」

「ああつ！」

「足もこうして……」

「ああつ！」

「痛いか、苦しいか、もつとしつかり締めてやろうか」

「あ、あつ！」

「動けまい、そのようなみじめな姿になつても、そなたは美しいの
う。その美しさも間もなく消えよう。やけただれ、醜くなるのだ。

そして醜い屍が、鎖につながれたまま、土くれのように残ろうぞ……

……」

そんなセリフのあとで、良秀が呼び出され、車に火をかけられ、
再び声をふりしぼつて苦悶に叫び出さなければならぬのだ。

公演の時にやる芝居は、その「地獄変」の他にがらりと気分の変
つたフランスの翻譯劇があつたので、緒方の家では翻譯劇の方から
さきに稽古にかかつていた。どうも苦悶の叫び声などというものは
普通の家の応接間では稽古しにくかつた。

頂度、入江が私に唇を求めた日から二、三日たつて、私はいつも
のように緒方の家へ行つた。劇団の人達の都合で、その二、三日は
稽古が休みになつていたから、緒方に会うのは研究会の夜以来のこ
となのだ。

私は緒方勉が、私と入江とおくれて研究会へ入つて行つた時に、
鋭い視線を投げたことを知らなかつたから、緒方に対しては何のこ
だわりも感じていながかつた。むしろ入江寛二郎が、どんな顔で現れ
るかの方が興味があつた。少くとも、無理やり接吻をしようとする
ようなことを、一度ならず二度、三度こころみた後なのだから、今
まで通りの平気な顔でもいられないだろう。私の方は平気だつた。
入江に対して恋心を秘めていたわけでもなかつたから、高見の見物
のような気持でいた。接吻しかけたことに、憤りも感じていながつ
た。その日緒方勉の家へ行くと、まだ誰も来ていない。

「速達つかなかつた？」

と緒方は言つた。

「いいえ」

と、いうと

「今日は都合の悪いという人が二、三人あつたので、休んだついで
にもう一日稽古を休もうということになつただけだ……」

「じゃあ、私が学校へ行っている留守に速達来ているのかもしれない。私、学校から家へ帰えらずに此方へ廻つて来てしまつたから」
 そう言いながら私は帰りかけた。すると

「まあ、いいじゃないか、お茶のんでいかない？」

というので、そのままいつも稽古場に使っている応接間へ通つたのだ。

「ねえ、折角、君来てくれたんだし、〃地獄変〃の方を一寸も稽古してないから、少しやつてみないか」

緒方は言つた。

「そうね」

私も〃地獄変〃は家でひとりで稽古して、母にでも見られると困るという気持もあつて、一寸もやつていなかった。いかに責められるのが芝居の上であつても、あまり大勢いる前でやるのも何となく恥しい。恥しいと思うのは、縛られるということに気持の抵抗があつたからだろうが、手を後にまわして、縛られたつもりでポーズをとつてみるのさえ、私はやりにくかつた。

だが、芝居は気になつていた。その役をあたまから厭だと言いきれなかつたのも、自分の感情にひとり相撲をとつて、さりげなく断るすべがなくなつてしまつたからだつた。そして、引きうけて、やるからには、やはりうまくやりたかつたし、縄をかけられて引き出される姿や形も、美しさを考えて、練習してみないといけな思つていた。

緒方が〃地獄変〃の稽古をしようと言ひ出した腹の中が、もし私にわかつていたら、応接間へさえ通りはしなかつたらうに……。

大体私はその頃、その劇団の人達とは全然関係のないある縁故か

ら、恋を語り合う人を持つていた。それは一週間に一ぺんぐらい、一緒に散歩する位の仲だつたが、私は一週間が待ちきれない程の慕情を持つていた。そして相手が一週間に一ぺん会えば満足して、それで好きだとか愛しているとかいうのを不思議に思う程だつた。それにしても、そんな心の対象があつたから、緒方にも入江にもその他劇団の誰にも、心を燃しはしなかつたのだ。自分の言葉が入江をうぬぼれさせるなどは夢にも考えていなかったし、緒方が私に激しい恋情をよせているということも気がつかなかつたのだ。

緒方は立稽古が出来るように応接間の椅子を片側へ片よせた。

「読み合わせするんじゃないの？」

私がいふと

「君の役がひかれてくる所からやつてみようよ。僕は大体せりふが入つてゐるし、君のせりふはたゞ呻めき声だけぐらいだろう。僕はね、いつたい御所車を舞台へ出さずにくまうかどうか心配なんだよ。もし〃地獄変〃が無理なら、今のうちに他のものと変えることを考えておかなければならぬだろう？」

「そうね」

緒方の言葉は私のあやしむ余地がなかつた。

「さあ、手を後に廻わして」

緒方がいつたのに、私は少し恥しさを感じたが、
 「そつと縛つてね」

と言つて、素直に手を後にまわした。

切腹研究夜話

(四)

——切腹の文献——

中 康 弘 通

成竹成太郎画

冒頭まず、本誌気付で筆者あて書信を賜わった読者諸兄姉に対し厚く御礼申上げると共に、今後も一層の御叱正をお願いすると共に、次第である。さて、多数の通信で、文献の解説を望まれる方も少くないので、今回は研究文献を列記して御参考に供したい。

——というと筆者が、如何にも群書を渉獵したかに聞えようが、実は直接、合戦記の類に当つて実例を探し求めたにすぎない筆者の過去である。尤も一面には、従来の文献には、肝腎の腹の切り方よりも礼式作法——故実の類を説いたものが多く、飽足りぬことが多かったため、切腹の実相を研究したいと努めて来たからである。(旨くゴマカしたな、と思召さるゝ方あるべし)

こゝに、山名正太郎先生の著「自殺につ

いて」より文献目録の引用をお許し願ひ、その他気付いた二、三を補うことにする。

まず、単行本からいえば、

和田克徳「切腹哲学」昭和2年博文館?

谷田佐一「敵討と切腹」昭和9年11月

秋文堂書房

萩原新物「武士道散華」昭和17年7月

牧書房

和田克徳「切腹」昭和18年9月青葉書房

新渡戸稲造「BUSHIDO」一九〇五年

(邦訳「武士道」岩波文庫にあり、英文

は研究社より刊行されている)

松波治郎「妙国寺の切腹」昭和18年

切腹のみではないが重要な文献として

中村古峽「自殺及情死の研究」大正13年

高田義一郎「自殺学」昭和5年3月

山名正太郎「日本自殺情死記」昭和3年

山名正太郎「自殺に関する研究」昭和8

年6月

山名正太郎「自殺について」昭和24年10

月北隆館

次いで雑誌所収論考では

横山健堂「切腹論」明治39年中学世界

南幸夫「切腹の歴史」大正15年4月騒人

南幸夫「切腹雑考」大正15年5月騒人

三上参次「江戸時代の殉死」大正15年12

月史学雑誌

井上花劇坊「武士道切腹史」昭和5年1

月日本及日本人

坂の上言夫「切腹・切腹刑」昭和6年2

月犯罪科学

金塘珠江の死



公論

壬生三郎「芝居の

切腹」昭和12年

11月演芸画報

龍野一雄「芝居の

女切腹」昭和14

年10月演芸画報

龍野一雄「切腹す

る少年達」昭和

14年11月演芸画

報

龍野一雄「僧尼の

切腹」昭和14年

12月演芸画報

三田村鳶魚「大名の女切腹」昭和15年8

月大日

中山博道「切腹の作法」昭和19年5月青

年読売

波多吾部「切腹の奇談」昭和27年4月講

談秘話

発表年月号不明のもの左の二文がある。

高坂太郎「切腹考」江戸文化四巻三号

土師清二「切腹雑話」日之出

月号も筆者名題名すら記憶に無いもので

高田義一郎「江戸時代の切腹」昭和8年

江戸時代文化

松尾如風「切腹考」昭和8年2月人情地

理

角岡良知「割腹した少年刺客」昭和9年

3月日之出

土師清二「切腹と介錯」昭和10年3月大

衆クラブ

北垣隆一「自刃の心理」昭和10年5月精

神分析

龍野雄一「切腹風景」昭和10年9月医事

は昭和十七、八年ごろ講談倶楽部に収めら

れていた論文は「逃げず降らず腹を切る」

というテーマを至上命令としてやゝ讚美的

ではあるが、切腹の精神を総括して、よく

訳述していた。同じ趣旨は、同じころ中正

夫氏著「切腹殺法記」の冒頭にも説かれて

いたと記憶するが、只今手もとに同書を持

たぬため、分明ではない。

雑誌「うきよ」が大正年間に女切腹の特

集を行つたことは、再三述べたところであ

る。

さて上記の文献に就ては御存知の方も多

いと思うが、未見の方のために、筆者が一

読したものだけ簡単に解説しておきたい。

谷田佐一氏の「敵討と切腹」は、四六判

二〇七頁の前半は敵討に就て述べ、後半切

腹を説き、よくまとまつた本であるが、切

腹よりも敵討に詳しい。実話は少く切腹の

刀法も山岡俊明の「腹切考」に従い一文字

と十文字を挙げるのみ、切腹の精神的理解

に重点をおいている。

その点、和田克徳氏は永年の研究だけあ

つて（「切腹哲学」は筆者未見）「切腹」

は正に百科全書的内容を持つ好著といえ

る。B 6判二八〇頁の内、八割までを切腹の歴史作法実例等に費し、殊に作法の内でも、実際に屠腹するに当つての刀法まで種々解説すること懇切である。

即ち一文字の法を説いては、五分突立て四五寸引廻せば見事な切腹なり、とし一説には血が絹糸ほどに滲み出る程度に切ると儀礼中心の切腹法にも触れる。

十文字の法には三形式を紹介し、①にはまず左股を縦に切り、次いで左腹部から右腹部へかき切る、②には一文字の最後の切先を上へ挑ねて十文字とする、③には是も山岡俊明の「腹切考」に従い、まず左下腹部へ突立て右へ引廻し、その刀を一度抜いて取直し更に鳩尾の個所に刃を下方に向けて突込み、柄頭を握つて下へ押下げる。是にて胸から臍まで縦に切下げる、袴の横紐の所までは慥かに切れる、とある。

実話では赤穂義士、清水宗治、堺事件土佐烈士、乃木將軍、青島健吉中尉、菅長崎丸船長と壮烈な最期を解説し、特に「杉山藩士の切腹」なる一項を設け、氏の郷国杉山に於ける山右与右衛門の賜死切腹、新海八良左エ門の遵法切腹を詳述する。

此の内で青島健吉中尉のことは、従来拙稿では一度も触れていなかったかと思ふ、二・二六事件当時、平常、首謀將校と親しかつた中尉は連帶的な責任感から自刃を決意し、軍刀によつて腹一文字にかき切り咽喉を突いて果てた。同時に喜美子夫人も日本刀を以て咽喉をつき夫君に殉じられた由である。

本書の説くところを一言にするならば、「切腹の真義」の章にある。

切腹に貴ぶところは見事に腹かき切り且つその死に様の立派なところにある、という一句に尽されるであらう。

是より先に出た萩原新生氏の「武士道散華」はB 6判三四八頁、冒頭まず「切腹武士道の神髓」と題して二〇頁に亘り切腹の作法から説き起し、高山彦九郎、長井雅楽、武市半平太、長州三家老、畠山勇子の切腹を解説している。作法は「自刃録」に基いている。

高山彦九郎は寛政五年六月二十七日未明四十七才で切腹、端座して尊皇の大義を説き、辰の刻に至り医師の治療を受けた。医師の屈け書によると

疵口凡そ五寸程にて大小腸膀胱出で殊に大小腸共に破れ、左右脈共に細微絶脈同前にて、

とある彦九郎も流石に戌の刻に至り氣力衰え倒れ伏し、二十八日辰の刻に落命した。

従つて一昼夜以上も腹を切つたまゝでいたわけだが大小腸破れ膀胱まで露出する疵とあれば、下腹部を相当深く切つたものと見え、腸管を傷付けた苦痛は甚だしいものだと言ふから、よほど剛勇の士であつたに違いない。

尤も、嘗て田谷敬生氏も説かれた如く、十八才の女性でさえ腸の溢れ出るほど割腹した例があること故、必ずしも稀ではないが、割腹後十余時間端座を続けた、というのは驚嘆に値しよう。

次には渡辺華山、吉田松陰、大村益次郎、西郷隆盛等の死生観、最後の模様を説き、特に乃木將軍夫妻には三〇頁ほどを費して詳述、筆者の読んだ範囲で將軍に関する限り、本書が最も詳しいと思われる。

即ち將軍の腹部には、臍の上三指横径のところ長さ十七纏の傷、その上約一纏の

ところに左上から斜右下に向い正中線に於て第一創と交叉する長さ十五糎の創、第二創の中央部から斜めに右上に向う長さ七糎の創、計三創。深さは何れも皮下組織に達し、第一、二創の交叉点は深さ二糎、筋層に達す。他は約半糎に及ばず、創の縁は何れも鋭利で僅かに血が着いていた。という凄烈な最期であつた。

長州人の武士道精神を説くに就て玉木文之進翁の切腹は余り類書に無いが、萩原氏によれば、明治九年十一月六日萩の乱破れるの日、菩提寺に赴いた翁は跡を追ひ来た姪児玉芳子、妹佐々木ささ、その嫁、の三女に切腹の理由を説いて去らしめた後、祖先の墓前に端座、両肌を脱ぎ腹十文字に切り、六十七才で畢つた。時に午后三時半という。

松波治郎氏の「妙国寺の切腹」は筆者未見だが、小説風の読物なので御存知の方も多いであらう。過日、切腹願望に悩んで相談的なお手紙を寄せられた若い女性の読者に、最も感銘した切腹描写に就て質問したところ、本書の描写は印象が深かつた旨のお返事を頂いている。

新渡戸稲造博士の英文で発表された「武士道」も切腹の精神を説くのに可成りの頁を費し、殊に英人ミットフォードの手記から滝善三郎の切腹を詳述し、少年の例として氏家兄弟の悲壮な最期を取り上げた世界的な好著である。

次に列举した自殺

の文献の内、「自殺学」「自殺について」の二書を除いては筆者も未見であるが、何れも定評のある好著である。勿論切腹だけではないが、何れも参考になる実例談や文献解説が豊富である。

雑誌論文は単行本以上に入手困難なため、筆者は此処に挙げたものの内、半分くらいしか読んでいないことを、まずお断りしておく。

坂上言夫氏の「切腹——切腹刑」は三方を前に刃が突込まれ血の流れ出る腹部を部

鏡山下女お初の死



分的に描いた凄惨なカットで眼を驚かす。菊判二段組で約十頁に亘り自殺形式の刑罰史を説きつゝ切腹の起源に触れ、歴史を述べ、

まことに切腹は武士の最後として名誉であつた。切腹させる方では情であつた。

戦国時代では女人の身を以て能く男子に倣い切腹する豪氣の輩もあつたという。

と記述して居られる。是より論旨は主と

天草四郎妹
妙姫之死

して刑罰としての切腹に移り「武学拾粹」
「凶札式」等により、切腹の介錯に就て種
々故実の異同を比較検討しつつ述べてあ
る。此処にも「腹切考」により一文字、十
文字の法を記している。

松尾如風氏の「腹切考」は、やはり菊判
二段組の八頁、まず切腹の精神を「嚴肅勇
壯壯烈、世界万邦に比なし」と讚美的に説
き、「割腹は嵐に散る花である」とまで力
説している。ただ

同じ割腹にも憤腹、窮腹、自棄腹、苦

を「川角大閣記」により詳述する。

定法の無い頃であるが、沐浴して準備を
整えといつても白装束などは未だ用いられ
ず、ただ脇差の切先三寸残して紙で巻き、
腹切り刀にするという点などに、次第に作
法の整う端緒が見られる。

以下、当時日本一の美貌を謳われた不破
万作を始め悉く十文字切腹を遂げる状況を
伝えている。もともと十文字の切腹は介錯
無しに自ら生命を絶つの法である。然るに
十文字に切りつつ介錯を受けるという風が

痛、歓喜、満足等
種々の事情が推想
されるのは大いに
味うべきである。

と切腹を必要とす
る因由に就て考察を
向けてあるのは、興
味深い。然し是も深
く説述せず、専ら作
法の整備に就て検討
し、その始原期と見
られる、豊臣秀次以
下高野に自刃の状況

始まつて来たのは、やがて腹を切るのは形
式だけで専ら介錯に頼る後代の風を予見せ
しめて、興味深い。

土師清二氏の「切腹と介錯」は、同じく氏
の「切腹雑話」(目之出發表後、隨筆集「米
のなる木」に収録)で切腹の歴史(殊に滝
善三郎の切腹が詳しい)を述べられたに対
し、儀式としての切腹を、むしろ腹の切り方
よりも首の打ち方を主体として解説したも
の、主として、甲賀三郎氏が江州水口藩の
家老の家柄として伝つた写本「介錯大概」
を土師氏に賜つたものより解説、更に「凶
札式」により補っている。最後に明治に入
つての切腹実話が引用されているが、是は
実際には打首に斎しいので此処には省く。

壬生三郎氏の「芝居の切腹に就て」は、
芝居の腹切場は殺し場の一変型、という解
釈に立つて、歌舞伎に於ける腹切場の種々
相を簡単に解説する。殊に桜丸や久我之助
の型の美しさを讃え、桜丸は人形浄瑠璃で
もすばらしい凄愴美である、とする。更に
女の腹切は、剣劇女優が女形より美しい
が源之助の長町女腹切は例外の立派さ、と
讃える。尚、文末血のりの扱いは本誌にも

書かれていたから略する。

龍野一雄氏の連載三篇、まず、芝居の「女腹切」は写真入りで、先代筑波澄子の「明月女造酒」を、実見したまゝ解説している。澄子は女ながら、大刀逆手に立ち腹の凄艶な姿を見せている。尚、氏によれば、明治大正期、新聞に出たものの女性のみで六十余例、臨月近い妊婦もあり、創口も男も及ばぬ大きい切り方をしているのも少くない、という。

次いで「切腹する少年達」では、史上の少年切腹例二三を取上げ、猿之助らの「白虎隊」に於ける切腹場の写真を掲げる。明治大正期の十九才以下の男女切腹例を解説、殊に三人の娘の切腹を取上げ、三人とも目的を達して死亡したことを、一時の興奮というよりも前々からの覚悟が積み重ねられていたことを物語つていて傷ましい、と結ぶ。

「僧尼の切腹」では、まず源実朝の死に際し出家した津戸三郎為守が、厭離穢土欣求浄土の思想を突き詰め、遂に一夜、腹一文字に搔切り、腸を取出したが死ねず、月余の苦しみを経て目的を達したこと。腹切典

乗とて芝増上寺の僧が寺内の確執から切腹したこと。昭和十二年宗教団体死のう団が、東京市内主要官公署で一齊に割腹を計つたが、概ね創は浅く生命を取止めたこと、等を記している。

此の龍野氏、筆名であろうが、当時青年医学徒とのこと、御健在なれば斯道の先覚として御教示を乞いたく思いつゝ日を曠しくしている。

三田村鳶魚氏の「大名の女腹切」は、封建期の精神と女性の切腹の関連を、武家義理物語の小吟及び、長町女腹切の伯母に於て捉え、その時代的悲劇性を説き、名誉保持の切腹精神を明らかにしつゝ前田節子夫人の切腹に筆を及ぼしている。是は村上元三氏の「加賀騒動」にも出ているから御存知の方が多いであろう。ただ、女中が二人まで、即座にお供を、と腹一文字に搔切つた節子夫人の姿のまゝに切腹した。というのは戦陣に於ける武将の最期に殉ずる幕下の士を思わせ、更に悲痛を深めている。

中山博道氏の「切腹の作法」は、戦時中の「青年読売」に、死生観の特集に加えられたもの。当時の青年教育の倫理を今更の

如く偲ばせるが、切腹の作法を、介錯のみでなく、腹の切り方各様を図解入り（武士が着衣の腹を寛げ、短刀で切り了えた型）で説明し、介錯なしに自ら首を掻き落す方法まで書き加えたのは、一種の復古思想の流れを感じさせ、注目に値いする。流石は剣の道を究め尽くされた氏にして始めて書くことの出来る切腹要諦といえよう。

波多吾郎氏の「切腹の奇談」は、筆者未確認の女腹切を掲げている。即ち源為朝の臣藤原時元の妻たえは、敗戦の乱軍に夫を討たれ悲憤の極、腹一文字に搔切り腸を敵兵に投げ付けて果てた、というのである。随分勇烈にして、見ごと十文字腹を切り腸を自ら引き出した女性もあるにはあるが、敵兵に投げ付けた、というのは珍しいと思ひ、文献を探しているが未だ出典不明。他に切腹の作法に触れてある。

その他の文献は未見に付き、今後も鋭意探究し、入手次第御紹介しよう。文中に名を挙げた古文献に就ては筆を改めて解説する

数多い読者諸兄弟からのお手紙の中から、広くお伝えしたい事例を序に記述した

い。

まず島根県のA氏より送られた新聞の切抜きは、非常に稀らしい少女の切腹である。簡単な記事であるし月も不明ながら、昨秋のことである。

中学三年になる農家の娘が、午後七時半ごろ小刀で腹を切り、苦しんでいるのを発見された。手当を加えたが間もなく死亡した。というから、小刀が切出し程度のものを指すとすれば、余ほどの覚悟を決め思い切つて切腹したものに見える予ねて心臓弁膜症で学業も意に任せず、学友や知人に顔を合わすのも厭がり、「もう駄目だ」と云つて医薬をも絶つほどだったという。僅か十四才の少女のこと故、憂悶の極切腹を撰び、苦痛に耐えて死んで行った心事は哀れ深い。

野戦看護婦の死



次に福岡のH氏が齎らされた中国婦人の例は、昭和十七年頃の華字紙に載つたものゝ由。大略は、三十六才の農婦宗氏は近隣の趙婆さんと犬猿の仲だったたが、一日婆さんが宗氏に盗癖あり、と言ひふらしたの

で、憤慨した宗氏は婆さんと口論の末、有り合ふ麵棒で打つて婆さんを昏倒せしめた。驚いて家へ逃げ帰つた宗氏は、人々が騒いで押寄せたので、切羽詰つて菜刀を我と我が腹に突立てた。鮮血淋漓として血に

倒れた、というから立腹である。結局入院したが、趙婆さんは一週間、宗氏は一ヶ月を要する傷であつた、というのである。

H氏によれば菜刀は日本の菜切厄丁と異り刃の厚みは倍以上、巾四寸位で、重みで切るもの故、傷は相当大きくなるのであるうとのこと。一体中国女性の自殺は縊死か投身が多く、稀に吞金死がある。自刃は少く、況して切腹は類が無いであろう。宗氏の場合、昂奮の極、殺人を犯したものと早合点し、心気転倒、一旦逃げ帰つたものゝ、やがては罪になる身と観念し、といつて首をくゝる間も水に赴く隙もなし、有り合ふ菜刀を自暴自棄な気持で腹へ突込んで了つたものだろう。昂奮の余り刃を加える部位を撰ぶ余裕が無かつたのではないか。KK通信にも十七才と十九才の娘が切腹した旨の新聞記事のことが出ていたが、木谷秀峰氏から承つた日赤看護婦の自刃は、哀れ深く感銘を受けた。

即ち戦時中外地の陸軍病院で二十一才の看護婦が、日夕点呼のため全員集合の際に切腹したのである。彼女は平常より婦長と快くなかつたが、

たまたま誤つて体温計を破損し厳しく婦長から叱責されたのを悲しみ、遺書も無く割腹して了つたものである。

当夜午後九時半ごろ、まず昇永を多量に服用した上、患者用被服庫に入り患者用白衣と着更えて蒲団を布き、その上に端座した彼女は、偕行社製の白メリヤスの下着から腹部のみ露わし、西洋剃刃で臍下二寸位のところを左脇腹より右へ行くほど斜め上に、約五寸余り切つた。深さ約一寸、出血は多量ながら内臓は露れず、同僚看護婦に発見された。軍医の手当も及ばず約一時間半後、絶命したが、若し服毒して居らねば助かつた見込だというから誠に哀れである。

昇永は多量に服すれば単独でも自殺の目的を達せられるのに、切腹をも敢てした心情は、遺書が無い以上不明だが、毒物保管が婦長の責任だつたというから、取扱不注意の責を婦長に負わすのが彼女の精一杯の抵抗であつたものゝようである。決して苦痛の時間を短縮するためではなからう。刃物や服装の準備から推しても、そう考えられる。とまれ戦時のことであり、女の身な

がら潔く切腹することを以て唯一の雪辱と覚悟したものと思われ、きびしい叱責に対する自責自憤の余り、服毒の苦悶を耐えて着衣も腹部を露わすに不向きな看護服を避けて白衣をまとい、シャツを捲くりズロースを押し下げ、死後の名誉を堵して腹一文字に掻き切つて行く姿は、その心事の哀切さと共に、まことに悲愴の極みと言えよう。その死が悼まれる次第である。

尚、木谷氏から御注意を受けたのだが、昭和十二、三年頃の婦人倶楽部若しくは主婦之友に、末森の勝女の切腹を描く小説が載つた由である。此の勝女のこととは井上耳子女史の「烈女大和撫子」にも見えるし、明良洪範や大東婦女貞烈記、野史にも載っている。然し是等によれば自刃の方法は不明で、一夜秘かに居室で自刃した、とあるのみである。

勝は夫と定めた津田八弥が、恋の恨みで佐久間七郎左衛門に惨殺されたので、織田家に趨つた佐久間を刺し、徳川家康の許に身を寄せた。信長怒つて勝を求め、家康の拒否するところとなつた。こゝに両家争闘の端を聞かんことを恐れ、勝は自刃したの

である。木谷氏の読まれた小説では、勝は秘かに腹十文字に掻切り白布で疵を締め、信長の面前に舞いつゝ絶命した、という。

然し最近読んだ直木三十五氏の「稲葉山桜吹雪」では頸動脈を断つて果てた、とある。講談社の「講談全集」中の「白刃の舞」でも切腹ではないが舞いつゝ死ぬところを扱う由。長谷川時雨女史の戯曲には、やはり切腹ではないが彼女の死を描いている。

是非、此の婦人雑誌の小説を一見したいと思つている。

序に、奈良義成の妹の切腹を、直木氏の「本国寺合戦」では、心臓を貫いたものとしてゐる。

また木谷氏によれば、会津の娘子軍の内、乱軍中に捕われるのを恐れ、敵中で立ち腹を切つた女のことを書いた記事がある由、恐らく創作と思われるが、是も探究の価値がある。

}}

}}

懸賞「告白と手記と体験」入選

(秀作)

M S ・ プ レ イ 中 谷 冷 一

(1)

最近入手した奇譚クラブ三月号の鬼山絢策氏に依る「変態讚美論」を読んだ時に私が受けた感銘は、未だ絶切れる事なく私の胸に波打っています。私の思っていた事をズバリと見事な文調で述べられているのを見て如何に嬉しく思つた事か。そして又、自分の異常な性格をいたずらに悪癖と蔑ずみ、他人から隠そう隠そうと努力し続けて来た私自身を何と馬鹿者であつたと感じたことか。私は孤独ではないのだ。隠す必要もないのだ。私は此処で、私の全生態を皆様の前にさらけ出して遅ればせながら同好の方々へ仲間入りをさしていただき度いと願うのです。私は最近、東京

某大学医学部を卒業して、現在近畿某大学病院法医学教室に籍を置いて居ります。

幸か不幸か私は強烈なマゾヒストであり、時として私の良き相談者であり、友人であり又時としては私が絶対的に服従を要求されているサチストである私の女王様的美佐子は一方向羽村京子さんと同様相当強度の人体内臓及び外陰部に関する愛好者なのです。

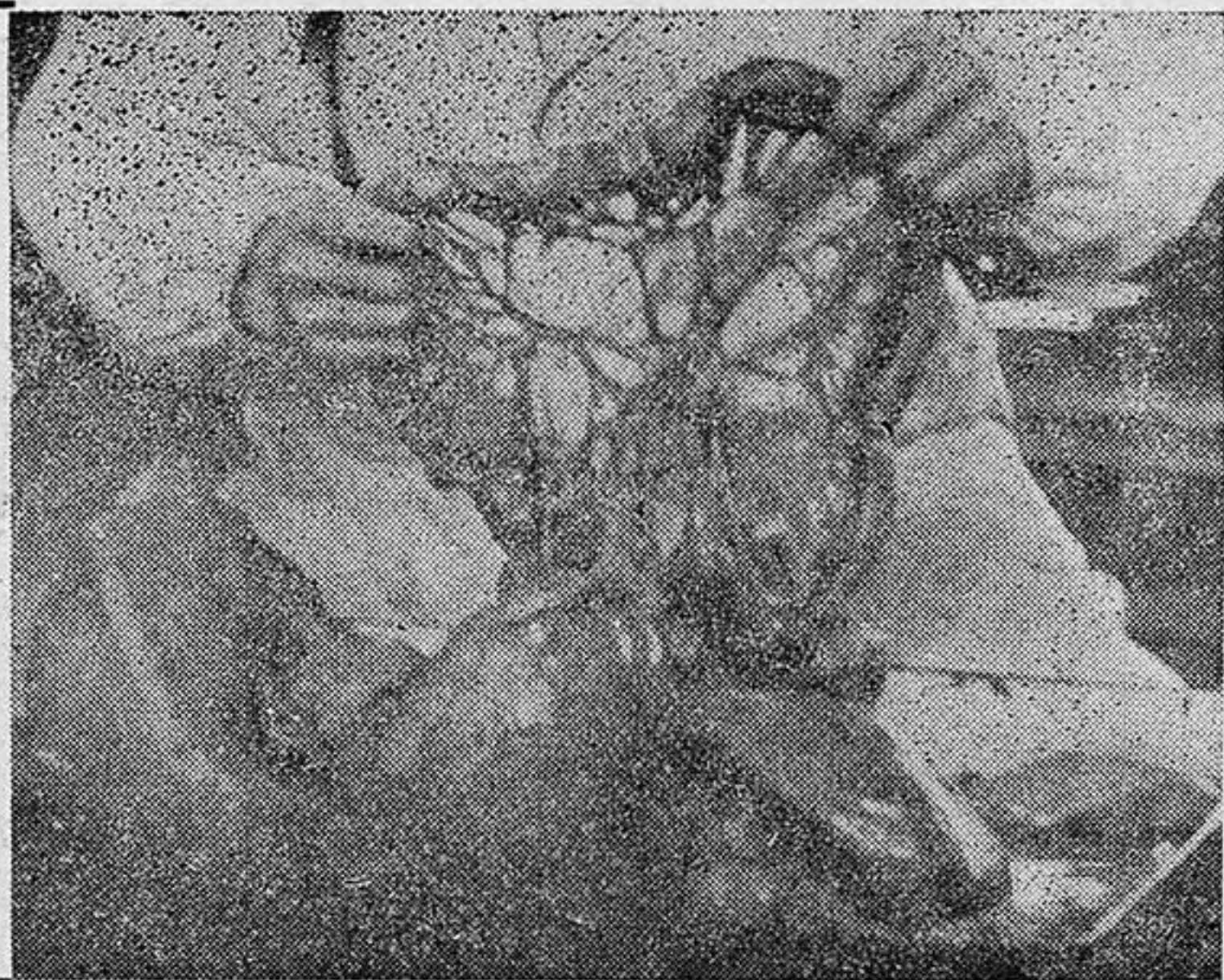
私が此れから書こうとする事は後者、即ち人体解剖に関する美佐子の性癖に就いてではありません。(この側の手配を、望まれる方があるかも知れませんが) マゾヒストとしての私とサチストとしての美佐子とのプレイ(Play)は関してです。勿論、私と美佐子とが一種のカプルの存在となつたのは、私の

専門としている解剖学、法医学というものを通じてですが、又美佐子が前述した性格をサチズム以外に持つているため、彼女の私に対するサド的な仕打ちには充分にその方面の性格が現われて来ますが、私には自分の専門でありながら此の種の意味からは全くそちらに興味がありません。

(2)

美佐子と知り合つたのは私がまだ医学部の四年、学生の頃の事でした。現在でもずっとひき続き行われていますが、恒例の秋期大学文化祭に医学部としては毎年、三年生か生理学展示会を、四年生が解剖学展示会を受持つて行ふ事になつていました。私は選ばれて級

【右に掲げた写真は、これから書く私の文章の真実さを説明するために挿入したもので、研究写真の一枚。私が摘出された腸（人間のもの）に就いて観察しているところです。腸の左前に見えているのが脾臓であり、左部に見えているのが肝臓です。】（尚、この写真掲載についての作者の承諾を得ましたが、上半分は編集部の責任に於てカットしました事をお断りしておきます）



居りまし委員をしてたので、当然指導的立場に置かれたわけです。

ここで都合上、解剖展示会の内容に就いて述べて置きますと、展示は三日間にわたつて市民一般の方々に開放して見学自由とするもので、私達があらかじめ展示場に準備して血管系、神経系、組織系、筋肉系、内臓系、骨系、発生学系（胎児発生）と分類し陳列したものを公にするのであり、各系統の標本、人体実物、顕微鏡プレパラートに、平均二—三人づつの説明者が四年生の中から選ばれて配属し、見学者の質問等に答えて理解を深める様に導く仕組みになっています。

奇しくも私がこの時に受持つた系統が内臓系中の腹部内臓系（肝、脾、腸、胃その他）に関するのだつたのです。

展示会は三日間とも（土曜—月曜にわたつて行われました。）実に盛況でした。それは日曜日の事でした。私は次から次から出される胃潰瘍に関して、又胃癌に関して又、子宮の手術法等に關しての質問に答えてゆくのに勢一杯で汗だくの状態でした。しかし朝からひっきり

なしに続く問いに休む暇もなく応待していた私も、やがて、もう午後の一時近い事に氣付き、一応、説明を中止して昼食をとる為に食堂へ行こうとした時です。突然、後から若い女の人の声が遠慮勝ちな、幾分どもり氣味に流れてきました。「あの、もしもし一寸」私は振向いて二度びつくりしました。年は私より上の様でしたが、割合に美しい女の人だつたからです。

やがて私は学生の開放的な氣持から、彼女の言うままに肩を並べて歩きながら話し始めていました。暫くの沈黙の後まず彼女が小さい声で口を切つたのです。「私は小学校で生物の教師をしているのですが、一度、腹部内臓系の臓器を手にとつて観察したいと思うのです。どうか許可していただけないのでしょうか。」と。所でこの瞬間に私の頭に浮んだものは何だと思ひになりますか。実は羽村京子という名前（失礼）だつたのです。此の事は今考えて見ても不思議な事です。彼女の聞き方が少し上づつていたからと言つて、又若い美しい女の人の質問としては、それがそぐわないものであつたからと言つて、突然な事が頭に浮んでくるなんて。でも私自身先天的なマゾヒスト（自分ではその様に考えていま

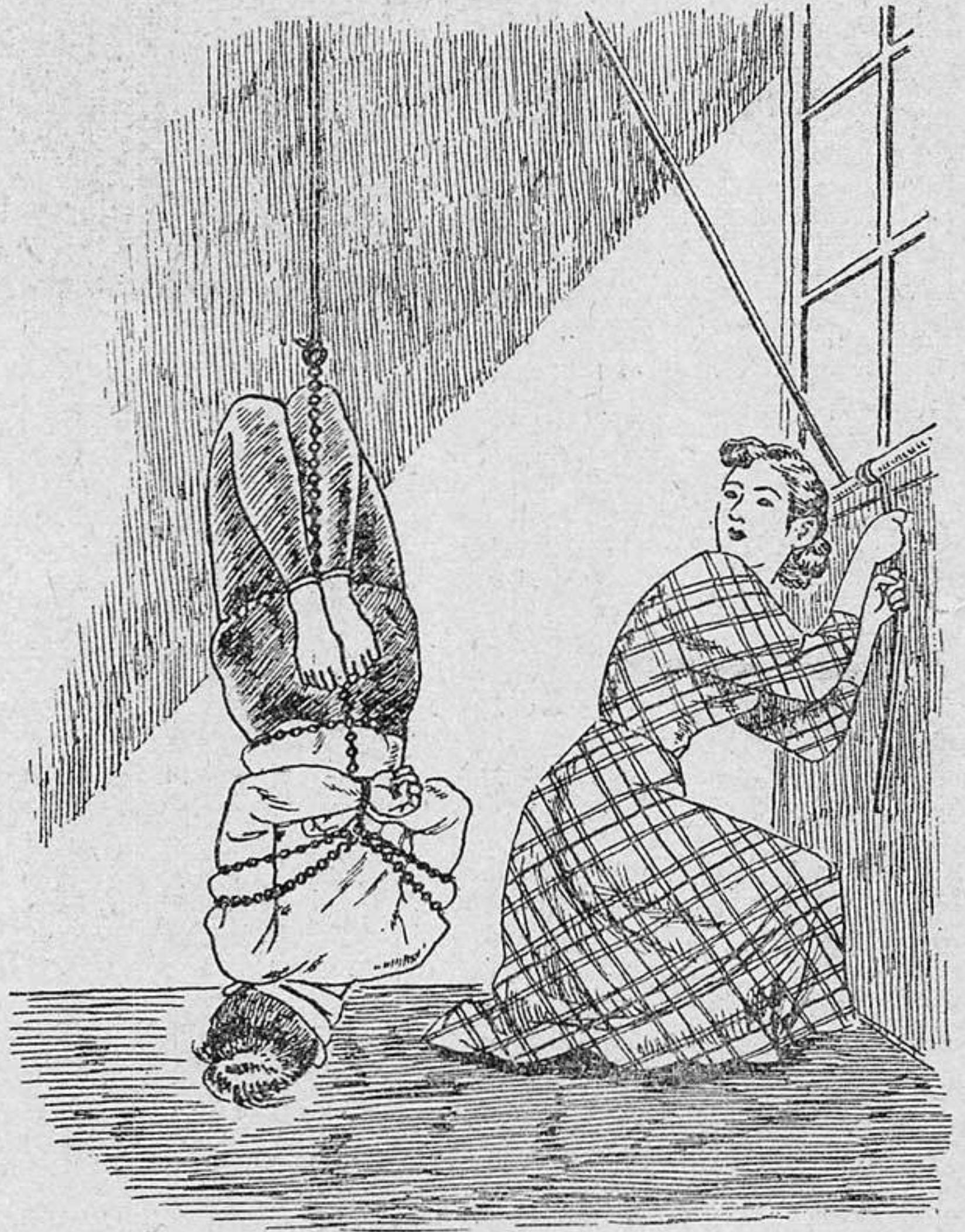
す。)である事が何かしらそこに共通した或る物を見出していたのかも知れません。

兎に角、その時、私は知らず知らずの中に次の様な実に無謀極まる「問い」を彼女に投げかけていたのです。

「あなた、奇譚クラブって雑誌御存知ですか。」

もし事態急変した時には医学的見地から、その事に関して彼女を煙に巻こうと思ひながら。しかし「命がけ」の態勢を取っていた私は、その時、その瞬間、彼女の顔が目に見えて赤くなりコラツプス様の状態に陥入つた事を見逃しませんでした。

此処で(この時分には私自身も幾分興奮していた様でした。)私は今から考えると、体中から冷汗が湧出て来る程の向う見ずな勇氣をもつて、私の期待がはずれない事を祈りながら「私が例の道の間人である」由を彼女に



告げたのでした。勿論この時にはまだ「マゾヒストです」とまでは言いませんでしたけれど。彼女は急に「ドキッ」とした様子で立止り、私の顔をじつと見つめて居ましたが、やがて笑顔を作ると一言「よかつたわ」とつぶやきました。

その時の嬉しさ。私は同好の人、しかも若

い女の人と生れて始めて友人になれそうな喜びに胸をふるわせながら、彼女の申出を承諾する旨、伝えたのでしたが、間もなく、二人して一度に「ドツ」とふき出してしまいました。何と私達は話をしながら、電車の停留所二ヶ所も歩いて来てしまつていたのでした。やがて二人は次の再会を約して別れました。

(3)

次の日曜日、私達は約束どおり、春日町近くの喫茶店で合いました。彼女は先日学校で始めて会つた時とは打つて、変つて明るい表情で、定刻より十分も早くから来て待つていてくれました。何もかもうまく行く様な気がし、又奇譚クラブを此の時程有難く思つた事はありませんでした。この日彼女に会う迄はともすれば沈み勝ちであり、彼女とこの様な関係になつた事を後悔することも屢々でしたが、彼女に会つて

見て一度にそれらの心配が吹き飛んでゆくのを覚えました。

こうして私達は、お互に自分に就いて打明け合つたのですが、やはり二人とも同じ道の人間同志という事が分つていても、その性癖を目の前にその相手を置いて話す事は、やり難いもので結局、その時分喫茶店も非常にすいていましたし、二人して夫々必要な事を紙に書いて、互にそれを交換する事にしました。

私は与えられた紙に次の様に書きました。

「学生、医学部四回生下宿牛込、両親も東京在住、年令二十三才、マゾヒスト」

私が彼女から得た紙には次の様に書いてありました。

「洋裁店勤務、住所新宿、日曜日が暇、年令御想像にまかせます（後で二十五才とわかりました）好むところは、あなたの御存知の通り他に少しS的（少しでないかも知れないわよ）傾向あり。」私は初めこれを読んだときは、最後の「S的傾向あり」というのを「レスボス」の事と感違いして、いささか失望しましたが、話をしてゆく中にそれが「サチズム」の事だと分つた時には、無上に嬉しくて思わず腰を浮かした程でした。この気持はMの諸兄には分つていただけたと思います。

又、彼女は私の書いた紙を読み終ると、

「何だか、あなたは私の為に生れて来たみたいねえ。いちめるわよ。」と言つて少し大きいめの唇を、ゆがめていちわるく笑つて見せました。——ああ、何と言う幸福感。——

それから一時間程、私達はもう十年も前からの友達のように親しく、いろ／＼と話し合いました。私が冷一、彼女が美佐子。

早速、私が、「今日から僕は美佐子さんのスレーブ (Slave) です。どんな事でも嫌とは言いません。」なんて言い出すと、彼女も真面目な顔をして先程の「いちめるわよ」を繰返していました。

やがて二人は、期待に胸をふくらませながら、互のアンノーマル・プレイについての計画を立て、結局一ヶ月約四回の日曜日をフルに使い、第一日曜に「M・Sプレイ」をすれば、第二日曜には美佐子のいま一つの嗜好である「アナトミカル・プレイ」(Anatomical Play)をするという風に交互に二種の満足を満す事にしました。

尚、前にも一度言いましたが、私が此れから話そうとしている事はこの中の「M・Sプレイ」のみに関してであつて後者に関してではありません。

(4)

こうして、その後、日曜日毎に、此れ迄は、ただ単に想像する事しか出来なかつた、そして又時には夢に迄見た事柄が、現実の世界のものとなつたのでした。どんなものでもそうですが、私達のプレイも、何遍も繰返している中に次第にお互の「好み」というものがわかつて一度目に不満だつた事は、二度目にはその「好み」に合わせるといふ風にして、次第に充実してゆきました。二人の間でまず、問題になつた事は「仕置着」に關してでした。この事は美佐子自身、異性を責める事に興味を持ち、その上アナトミカルな嗜好を持つているにも拘らず、男を素裸にしてそれを行うことをあまり好みませんでしたし、私も又、素裸にされる事は嫌でしたので考えられた事でした。「仕置着」は、美佐子が得意の洋裁で早速、彼女の意図に従つて縫いあげられましたが、しかし初めてそれを彼女に見せられた時は、その作られた「仕置着」があまりにも奇抜なものと、又充分に男というものを辱しめ、且奴隸的な気持を倍加する様案されているのを知り、驚きと嬉しさでしばらくは口もきけない有様でした。こんな風に

書いてくると皆様には私の「仕置着」というものがとても風変わりである様な感を抱かせるかも知れませんが、それは決してそんな変わったものでも何でも無いのです。

即ち、上半身には美佐子の古いブラウスを改良したものを着せられます。頭からスツポリかぶつて背中の部分で、チャックで、しめあげる様になつて居り、腕は長袖で手首のところをホックで固定し、腰まわりの部分は少し短い目に截断してゴムを通してあり、適当に上腹部を圧迫する様になつています。

ですから女の服に縁のない私には、もうこれを着せられただけで、頸、手首、腹部等に緊縛感を感じ、自由を奪われた様な気を起させます。下半身には私の体にピッタリと合わせて作られたズロースをはかされます。このズロースは赤、緑、白の三つが作られてあり、これはこの順序に罪の軽重を示していて、しかもズロースの腹部と大腿部とに通されたゴム紐がやはりこの順に短いものが使用されているのです。

赤いズロースをはかされた時等は、そのきついゴムの為に、五分もたたない中に、足の先がしびれて来て、感覚がなくなつてゆきます。が、この事も私にとって幸福な隷屬感を

強める以外の何物でもないのです。

此等の他、私達は太い針金で首枷、手枷、足枷等を作りその三つのものを互に丈夫な山羊鎖で適当に連結したのも作りしました。この物も又、美佐子の考案に依るもので、これに自由を奪われると、最大限、ヨチヨチ歩くアヒル位の運動しか出来ず、(腕は勿論後手です)その上、腕と腹には夫々二まわりの鎖が、喰い込み、又無理に歩かされて、よろめく度に、首枷の背部から股を通して腹の前部で固定された鎖が深く刺戟を与えるのです。まだまだ、この他に色々の道具を作りました。そして、それはそのまま、全てが、二人の楽しみの為に使われていったのです。

(5)

私達の秘密のプレイは、主として私の下宿で行われました。当時、私はアパートの一室を貸りて居りましたし、又その二階にある私の部屋が階段の位置の関係上、それを隔てて、丁度他の部屋から隔離された形になつていましたので、実に、うつつけであつたからです。

では、ここで、現在までに私がうけた耽美

な拷問の中から非常に印象に残っているものの一つを披露致しましょう。

その日も何時もの通り九時半頃、彼女の特徴あるノックの音に急いで戸を開けました。部屋に入ると、常とは違つた、むっつりした表情で早速私に「仕置着」に着換える様に命じ、隅に用意されている彼女の食卓の前に陣どつて黙つて朝食をとり始めるのでした。そこには、私が朝早くから一生懸命に作つた朝食が並べてあり、それは彼女のものであつて、私が先に手をつける事は固く禁じられているのです。

私は「仕置着」の絹の感触がひんやりと素膚にまといつくのを暫くの間じつと味つていました。が、やがて美佐子の投げかける一声にはつと我に帰りました。

「何してんのよ。誰が白いズロースをはけて言つたのよ。今日はめちやめちやに、いぢめてやるんだから、赤いズロースにきまつてるじゃないの。あたしは昨日から仕事の事で御機嫌が悪いんだから、何をするかわからないわよ、冷坊」

情無いことに、普段は学校でも人一倍偉そうにしている私が、又人に頭を下げる事もめつたにしない私が、彼女と二人きりになつた時

には、何と変つてしまふ事か。ただこれだけの言葉にも体中が快く、ほてつて来るのを覚えるのでした。

「冷坊にはそのピンクのズロースが良く似合うわよ。馬鹿、何をじろじろ見ているの。私が御飯を食べ終るまで壁の方を向いて両手を上げて立つてなさい。いいこと、私がいいつて言うまで立つてるのよ。言う事をきかないと御飯食べさしてあげないから。」

それから約三十分。腕は勿論の事。軀幹も脚も「仕置着」の圧迫のために、しびれて感覚を失い、その上、絶え間なく流れ出る汗のために、全身じとじとになつた私は、例の太い鎖の固定器で後手に縛られ海老の様なつて美佐子の脚もとにころがされて居ました。そんな私を革靴の先で軽く蹴りながら、暫く見下していた彼女は、「今日は吊し上げるわよ。覚悟なさい」



と途方もない事を言い出すのでした。自分の専門の関係上、肩関節が案外その体位でははずれ易い事、それでなくても胸から二の腕にかけて喰い込んでいる二まわりの鎖のために、又それは連結されている首枷の為に、吊されたらどんな結果になるかを咄嗟に想像した私は、思わず声を荒げて歎願しましたが、その声も彼女が用意して来た、はき古しのズロースを口一杯に押し込まれては、ただただ呻き声に変わるのみでした。ズロースは如何に無理に突つこまれても、その半分も入りません。美佐子はその食み出た部分を顎の方へ垂し、その上から靴下をぐるぐる巻きつけて、しめあげました。(いつもならズロースの食み出た部分は上へ折り曲げて、すつかり鼻部をおゝわれてしまうのですが。)

「今日は良く言う事を聞くし、一寸苦しうだから鼻だけは開

けといたげる」と言いながら、うつとりと眺めている彼女をただ呻きながら睨み返している私でした。心の中では、狂喜と恐怖が入り混つて騒ぎ出すのを覚えながら。

やがて彼女は、手枷の鎖、腹部の鎖、足枷の鎖、の三ヶ所に縄を結び付け、その先を部屋隅のスチームの管に通して、少しづつ芋虫の様な私を吊り上げ始めました。瞬間いままですつかり興奮に酔いしれていた私の頭に再び「吊られたらどんな事になるか」という心配が呼び掛けました。私は夢中になつて出来る限り左右に体を揺り動かして吊るされる事から逃れようと思いました。思い切り呻き声をなげました。でももうすつかり弱つた私には、不自由な体に最後に残された、その振動する事さえもが億劫になつていくのでした。「何を、そんなに怖がつているの。私がそんなに怖い。誰も宙に吊り下げるなんて言つてないじゃないの、逆立ちをさしたげるだけよ。」

彼女は私の体を唯頭と肩だけで支えている形にして縄を固定しました。

「苦しい? 可愛そうだから、今御飯を食べさせてあげるわね」

そう言う声を聞きながら吊り下げられる心

配から逃れた安心の為か、知つていて、そんな事をした彼女への、あてつけの為か、私は知らず知らずのうちに、あふれ出る涙に両頬をぬらししていました。

「泣いてるの。だから私は、冷坊が好きなのよ。おなががすいたんでしょ、さあお食べなさい。」

柔かな唇を私の頬に接した美佐子は、静かに「猿ぐつわ」をはずしてズロースをぬき取り、吊り下げられた体を必死に支えている私の頭を両腿の間に挟んで動かぬ様にすると、彼女の食べ残しの朝食を「サチ」で手あたり次第に、私の口に投げ入れるのでした。

私は、いままで非常な恐怖を味あわされただけに、今や、それに倍加するマゾヒストの喜びを感じながらただただ無言で、次々と、入れられる物を夢の中の事の様に思いながら無意識の中に噛みくだいていきました。

(6)

私は、現在は近畿某大学病院に関係している為に、京都に住んで居ます。しかし両親兄弟等は東京に居りますし、又大学の都合上、毎月ひと月の三分の一は東京に出る機会を持つています。そして相変らず美佐子とのプレ

イを続けているわけです。でも此頃は次第にこちらでの仕事に忙がしくなつて来て、あまり屢々上京することも出来なくなつて来ましたが、そして特に土曜日、日曜の夜等、夜半を過ぎてから、一人蒲団の上に坐つて東京での出来事をあれこれと、なつかしく思いめぐらす事が多くなつて来しました。

そんな時に、三月号の鬼山絢策氏の「変態讚美論」を読んだのです。そして、こんな時に、やはり私と同じ様に思つていられる同好の方々、もしや文通だけでも出来たら、どんなに楽しい事だろうと思つたのです。

今日も、もう十二時はとづくに過ぎていきます。そして私は一人で星を見ながら、美佐子も今、やつぱり、あの星を眺めているだろうか、なんて考えています。

(終)

◎懸賞告白と手記と体験の原稿は今後毎月誌上に掲載してゆきたく考えておりますからどうぞ、奮て御投稿下さるようお願いいたします。

(編集部)

×

×

非 小 説

性

液

伊 藤 晴 雨

話は再び明治四十年時代に戻るが、其頃漸く有名人となつた泉鏡花の小説『三味線堀』は此開盛座をモデルにしたと思われる節々が多く、柳盛座の看板には女が縛られて居る//という本文の柳盛座というのは、向柳原一丁目に柳盛座という定員千余名の小劇場があつて、舞台の幕吊り五間、木戸大入場は開場当時金二銭で、茲に出勤して居た坂東和好という役者が九代目市川團十郎に似て居るので俗に二銭団州と呼んで名物になつて居た。座頭の中村梅雀という役者の伴が前進座の中村翫右衛門である。昼は旧劇、夜は新派で巻野憲次という東北訛りのある役者が座長で、此処でも盛んに女の賣場の芝居が演ぜられた。座附作者は後に松竹の新派附きとなつた竹柴鶏三で現在劇聖と云われて居る渥見清太郎氏が処女作『根元紅葉江戸限』を私の紹介で上演したのが此柳盛座であつた。そうした古い歴史をもつた小劇場で此座と開盛座とは俳優が交互に入れ替りをやつて居たので、豊吉も開盛座から此座へ移つた山崎長之輔（後年大阪道頓堀の角座で素晴らしい人気を得て晩年発狂して松沢病院で死んだ）に附いて柳盛座へ出勤する事になつた。

//主思ひ//七幕九場、お定期のお家騒動劇

で、悪人の弁護士が富豪の未亡人と通じて遺産の所在を白状させ様として家付きの娘を責めるといふ紋切型の狂言である。娘おかつに扮したのは細野勝次という娘形で桃割れの鬘のよく似合う可憐な娘形であつた。

「梅堂さん本統に縛つておくれよ、それでないと心持ちが悪いし、責められて居る様な気がしないからサ」

まだ此頃は気分なんて言葉が無かつた頃であり、女形には一種の女形らしい艶があつて女物の和服を着て茶屋入りをする俳優さえあつた時代で

「もつと強く縛つて頂戴、構わないから、それから私を打つ時、帯の上斗りでなく肩の骨の処を叩いてね」

豊吉は賣場の快感を得てから此座へ来て又女を責める書生の役を買つて出たので、責められる女形に異常な性の衝動を覚えた。それは開盛座の友江は自分より若くて旦那のある女でもあり、高嶺の花といった感じがして居たが此座の細野は自分と同年輩の廿四才である処から何となく親しみ易いし、第六感というのか縛られ乍ら豊吉を見る勝次の眼に云い知れない艶つぽさを感じた。

柳盛座の並びに小泉という小料理屋があつて其頃一寸一合位は徳利を倒して飯を喰つても十四五銭もあれば足りる時代であつた。

「勝ちやん、私につき合つてくれないか、一寸そこ迄」

「あゝ、でも今日はタロセコなんだもの」

「御飯たべに行かないか」

「豊ちやん持つてるかい」

「番附をもつて行つて貰つたから大丈夫さ」

「嬉しい、今日は豊ちやん奢つてくれる？」

「あゝ、此間、うまい事を云つた人があつたよ、呑みに行こうといった時は会計は頭割りにするもので御飯たべに行こうといった時は云い出した方が会計をもつんもんだつて」

「成る程そりやいゝ事だね」

二人は連れ立つて小料理屋の暖簾を潜つた。

「入らつしやい——」

女中共は二人を見て妙に笑つた。

「蒲団敷かない？」

「まだ昼間だよ」

「昼間だつていゝじあないの、あら薄い綿だねえ」

「だつて貸ぶとんだもの」



あんな

のけい

部巨

りる

う

「教えて上げようか、…を」

「ナニさ」

勝次はグルリと後ろ向になつた。微かな小声で

「……てこ…

…るものよ」

「御免なさい梅堂さん居ますか、蒲団屋です。」

ミシミシと

音を立てて上つて来たのは貸ぶとんやのおかみさんで三日目毎に貸ぶとんの損料をとりに来るのであつた。二人が夢中になつて居たのでふとんやのおばさんが二階へ上つてくるのを気が附かなかつたのだ。

「アレツまあどうしたの細野さん、舞台でも無いのかつらを冠つておまけに縛られて、どうしたつていうの、可怪しいね」

豊吉は真ッ赤になつてモチモチして居る。

「あんな蒲団持つて居ないの」
「あゝ」
「汚すといけないね……アアいゝやあたしのインパネスをこう敷いて、……」

勝次は豊吉の首に手を掛けて自分の脱いだ外套の上へ豊吉を倒す様にして寝かせた。そして上から煎餅蒲団をかぶつてしまった。

「誰も来ない？」

「アゝ」

枕が転がつて枕から少し斗り荒糠が飛出して居る側には……が散らかつて居る。

「梅堂さん此間の分と一しよに勘定して貰おうと思つて来たんですが、お邪魔をしましたね、蒲団は汚してもいゝ様なものゝ損料の方はキチンとして下さいね、此前のと合せて二十六十二の五厘が残つて三銭と合計して六日分で十三銭になりますよ。」

「済まないがおばさん、此次にしてくれないか」

「駄目々々、今日は是非払つてくれなくつちやあ妾の方が困りますよ」

「豊ちゃん、私持つて居るワよ、サアこれとつて」

細野は女持ちのガマ口から白銅を三つつまみ出して貸蒲団屋の女に渡した。

佐竹の馬肉屋といへば桜屋という屋号より通つて居る。其佐竹ツ原の馬肉屋の二階で馬肉鍋を突ツ突いて居るのは勝次と豊吉の二人切りで昼の佐竹ツ原は夜の雑踏に引替えて静かで広い馬肉屋の二階にはまだ一人も客が無いので二人にとつてはいゝ都合なのだ「相談というのは其処なんだ。少しお金を出してくれる人があつてね、今度一座を組織してあんたと一緒に旅に出ようと思うんだが、どう？」

一緒に行かないかい」

「そりやあ行つてもいゝさでも女を賣める芝居斗りして居て大丈夫かしら」

「大丈夫サ、一と所で一週間も十日もやるんじあなし精々二日づゝだもの、責め場のある芝居を外題丈け替えてやりさえすればいゝんだもの」

「そんなら行つてもいゝが其一座を組織するお金を出すてえ人は誰だい」

「オヤイケすかない人だよ妬いてるての」

「妬いてるツていう訳じあないが、誰なさ、話したつていゝだろう、私にだけ」

「此先きの莫大小屋丸十大旦那さ」

「何んだあの親爺かい、それでお前と一しよに行くの？」

「行かれないさ、お神さんがあるんだもの」

「そんならいゝけど」

「台本はもう出来上つて居るし、座員も揃つて居るから六月の一日から上野原を振り出しに信州から越後、それから仙台から北海道へ行こうと思うの、背景は伊東の貫ちやんを連れて行こうと思つて、モウ手金を渡しておいたんだよ」

「ソリヤ早手廻したつたね。そりやそうと舞台本の筋の責場はどんな所があるんだい、聞

かしておくれよ」

「アゝ話すとも、姐さん、肉のお替り、それからお銚子も」

最近吉川英治氏のの住居であつた奥多摩梅園村の少し手前に鳩の巢という字の村がある、此村の旧家で大野という村長の家は旧幕時代からの名家であつたが、何の因果か啞の娘が生れた。此娘が至つて醜婦、我儘者で持参金を付けても貰い手が無い。手先きが器用なので村中の娘の髪を結つてやる。髪結賃が出ないので皆な此啞娘に髪を結つて貰つて居たが一つ困る事は村内に婚礼があると此の娘は性の悩みから来る嫉妬で花嫁の高島田をワザと変てこな形ちに結い上げるといふ悪い癖があるので村の娘達は婚礼の高島田に限つて青梅の町に出て、町の髪結に頼む事になると此娘が納まらない。片田舎の村長は大正時代になつても相当巾が利く処から小前の百姓をイチメル手段を講じるので村内の娘達が困り抜いて居たといふ実話から材料を取つてこれに鏡花風の怪談を加味した責場の芝居をもつて巡業の途に上ろうという相談をしたのは其頃として珍らしい被虐性の女形であつた。豊吉は下地は好きなり、御意はよし、一も二も無く賛成してしまつた。

一口に地方巡業といつてもピンから切り迄あつて現在の松竹合名社の市川猿之助劇団のようなものや新国劇のような大一座もあれば、東北に根を張つて居る月岡誠なんという小劇団もある。千差万別で其組織も亦異つて居る。豊吉と細野の組織する劇団は極めてチャチなもので狂言は口立て

背景や大道具は出た処勝負、役者に喰い物は附いて廻る時代で、手空きの連中の給金の前渡しといつても其頃の事で五円か十円で事が足りる嘘の様な時代であつたからヒイキの女から出して貰つた三百円で一座を組織するには十分であつた。

其頃の新派俳優には教育のあるものは極めて稀で「お父様が横死を遊ばしまして」というセリフの書き抜きを貰つた或る俳優が作者に向つて「横死」とは何の事でしよう「横に死ぬと書いてあるから倒れて死ぬ事だろう」

「ハムアンでは啞（オ、シ）と覚えて居



ればいゝ」ナント此役者が華族の令嬢に扮して居るんだから笑わせる。こうした時代の俳優に中学校の教養など有る可き筈はない。現在でも剣劇役者の梅沢昇などは仮名が読めないなので仮名に自己流の符牒をつけて居る（それで一番記憶がいゝのだから驚かされる）が其頃の役者では作者の渡した書き抜きに仮名の傍に又ふりがなを附ける位は当然の事で如何に当時の俳優が無学であつたかという事が此事を以てしても知られるであろう。

そうした時代にあつて新派の頭領川上音二郎が夙にフランス文学に眼をつけ、三十六年の二月、明治座で沙翁のオセロや本郷座でハムレットを演じたのだから見物が面喰つてしまったので、俳優の技術其物は大し

たものでは無かつたと思つた。

豊吉と細野が組織した「女の賣場劇」の脚本というのは大略次に記す様な特殊なものであつた。其表題は「島田に結えぬ村」というのである。序幕は日光街道草加の宿に近き松並木で茲に東京を駆け落ちした一組の男女が立場茶屋に休んで居ると、遙かの街道を婚礼の行列が通るので二人は感慨無量といった形で其行列を眺めて居る。馬に乗つた花嫁が高島田に振袖姿というお約束の風俗でなく、下げ髪に水干という子の様な風俗なので其訳を茶店の老婆に尋ねる、老婆は答えて曰く此村では昔から嫁になる巫女が島田に結えないのです、と答える。何故かと聞くと花嫁が島田に結うと必ず凶事があるというので下げ髪にする習慣になつて居るのだと答えて「其訳というのは」と語り出す処で木かしらで幕を引くと舞台一面の竹藪の物凄い道具、中央に辻堂の様な小祠があつて其横には種々奇怪なる石像が並んで居る舞台面に変つて、木無しで幕を開ける。

村長の息子と継母にいじめ抜かれて居る娘と相思の仲になつて居る男と二人で出て来て男は女に向つて一生に一度島田髷に結つたお前の姿が見たい、二人は世間晴れて婚礼の式



を挙げる事さえ出来ないからせめては島田に結つて一目丈けでも嫁と呼んで自分の母親に紹介したいという。女も私だつて嫁と呼ばれるには晴衣はななくともせめて島田に結つてあなたのお母様に見て頂きたい、併し母親がどういふ訳か妾に島田を結う事を禁じてあるのは、腹を痛めた実子の妾には妹に当る和子という娘をあなたの嫁にしよう下心で妾が島田の髷に結えば美しく見えるのを嫌うのでありましょう。それに島田に結うのには「かもじ」を買うお金さえ貰えないのですという、幸いな事には此お宮の狐格子に奉納の髪の毛があるからこれを「かもじ」の代用にして島田に結つて見ましよう云つて、社頭に掛けて居た奉納の切り髪を取つて行く、此の後姿を見送つた娘の継母が社の後ろから出て二人の

姿を見送る処で舞台が廻ると娘の家の庭先きの場面になり、高島田に振袖姿の娘を荒縄で雁字がらめに縛り、これを折檻して居るのは継母で「あれ程結つてはならないと云いつけた髷を誰に頼まれて結つた。サア誰に頼まれた、男の名前を云え」と烈しく折檻するので娘は村長の件と云い交した事を白状し、折角結つた高島田の髷を只一目好きな男に見せてから死にたいと云うので継母は益々怒り、打つ、蹴る、散々に責める。髷が段々壊れてくる、娘は此姿を一ト目丈け思う男に見せたいと哀願する内、髷は散々に壊れて散し髪になり、娘は絶望して死んで了う。其後の幕は娘の幽霊が妹に乗り移つて妹が発狂し、村内の娘の島田髷を見ると飛びついて掻きむしるという病氣になつたので此村では婚礼の夜にも一人として島田に結うものがなくなつたという筋で其後の幕で田舎の商人宿へ泊つて宿屋の女中から此村の伝説を聞く、男は女の髪を眺めてア、お前も島田に結つて居たという怪奇劇を中心にして一番目は其頃から流行り出した立廻り芝居（まだ剣劇なんていう名はなかつた）を呼び物にして旅興行に出る事になつた。

本誌創刊七周年記念

懸賞入選作品（三席）

小説

童貞作家

淡 美一郎

1

「RIVERA」と謂う雑誌がある。

所謂、エロ雑誌と呼ばれる種類のものであるが、その範疇にある雑誌の中では可成りの水準を保っていた。

編集部は大阪にある。



春の増刊号の発行を間近に控えて、篠原編集長は原稿の整理に没頭していた。

何しろ、こうした雑誌には仮令、頼んで見ても一流の名の通った作家が原稿を渡してくれる気遣もなく、亦その必要もない。

文壇の中心から去った嘗つての流行作家、新鋭作家や、新聞雑誌記者くずれ辺りが、まず最上の、いわば此れら雑誌の呼物であり、その他は、無名の投稿家の作品で誌面を埋める。

だが、一度でも、まともな原稿で飯を喰つた事のある連中は、文章こそ手の込んだ巧みな表現を用いるが、内容は雑誌の性質を充分計算に入れている筈なのに、どうも中途半端で、読者に与える刺激が弱い。

一方、全国、いたる処から郵送されてくる原稿は、その大半が自己の異常な体験を基にしているだけに、アブノーマルな、どぎつい印象はあつたが、何分、文章が未熟で、訴える迫力に乏しく、中には、普通の便箋に、区切りもなく、だら／＼と書いて寄こす者すらある位いだつた。

しかしその内容は、変態性欲の記録、なかんずく、サド・マゾの実例、女の縛り方等々、常規を逸した現代の性異端者の告白であるから興味はある。

そこで、これらの原稿を、雑誌を求める読者の眼先に提供するとなると、寄稿者の真意を失わしめない様に気をつけながら、手を入れる必要があつた。

第一、検閲に引つかゝりそうな個所を、あらかじめ削除しなければならぬ。

せつかく書こうと云う気になり、しかも自分の体験したものであ

る以上、もつと巧く、まとめたらどうなのだろう。

下手くそな、だらしのない悪文では仮令、

「RIVERA」がエロ雑誌であろうと、そんなに舐めないでもらいたいと憤りにも似た気持になつてくるのだ。

だが、あくの強い強烈な刺戟の要素は、こうした下手くそな投稿に多く、少しでも名の知れた作家のには少いのだから仕末が悪い。

昨今の読者は単なるエロ小説に食傷して、なまぬるいものには刺戟を感じなくなつていて、惨虐、悲惨、目を覆わんばかりの、どぎつい亢奮を求めているのである。しぶしぶと編集長が赤鉛筆を走らせる結果となる。

全々、手を入れないで済む様に、文体の確かりした、しかも猟奇、変態の妖しい刺戟を湛えている。更に、発禁にならぬ様に巧みな技巧がこらしてある——こんな原稿はないものかと、虫のいゝ事を考えていた。

赤鉛筆の手を休めて、篠原は煙草に火を点じた。

ゆら／＼と物憂氣に立昇る煙の中で、見るから精力的で直線的な魅力を持った編集長の中年の顔があつた。不思議な事だが、こうした風俗雑誌の仕事に携わっている人達は、皆んな、普通の人より、どこか異つていると思われがちだが、実際はそうではない。

寧ろ真面目な風格の人が多いものである。彼は、長い両脚をぽんとデスクの上に投げ出すと、先刻、郵送されて来たばかりの大きな封筒を開いた。

「黄昏の肉体。」と大きく書かれた題目。

ペラ／＼と二、三頁めくつて見る。

原稿の良し悪しは、これだけですぐ判ると彼は信じている。

そして、此の場合、彼が始めから改めて腰を据えて読み出したのだから、気に入った証拠である。

2

波奈は盛りを過ぎた美貌のストリップティザーである。

ある日、偶然、彼女は舞台の上から、客席の一隅で起つた殺人を目撃する——と謂う書出しも流暢であつた。

波奈は舞台に上つた時から、ある二人連れの客に注目していた。

社長タイプの肥満した中年の紳士と、女と見間違ふ様な、色白の美青年が並んで腰掛けていたのである。

紳士は青年の肩を抱く様な恰好をしており太い掌は、青年の華奢な手を優しく愛撫していた。

ソドマイト（男色者）

波奈は何か汚ないものを見た様に一瞬、目をそむけたが、美しい青年が気になつて仕方がなかつた。

紳士は、青年の指先を握つた。……

波奈はストリップを見ながら、変な仕草をする男をよく見て知っている。

だが、此の変態紳士の様に、男色者が、相手の手で亢奮を呼び起そうとしているのを見るのは始めてだつた。

「おつ。男色か。流行だな」

篠原編集長は、苦笑する。

——次に、波奈が二人に視線を向けた時であつた。

青年は紳士の耳の中に、何か小粒な丸いものを、押し込んだのである。

「おや。」

波奈が不審に思う間もなく、青年は、つと席を立つて姿を消す。と、紳士の体がぐらりとゆれて座席の前にのめつた。

「人殺し。」

波奈は直感的にそう感じて叫声を上げた。

此の辺りから探偵小説的な興味も加つていつたが、それはあく迄もハードボイルドな悲情極まりない描写であつた。

さて、警察の連中も引上げ、波奈が自分の控室に帰ると、そこには件の青年が、ひそんでいる。

先刻から青年の美貌に心を奪われていた彼女は、彼を匿つてやる追われる明日なき男と、中年女の、ねばつこい愛慾の描写が書き馴れた筆に乗つて妖しい亢奮を呼ぶ。

「ミツキー・スピレーンだな」

編集長は顔をほころばす。

波奈は、肉体だけが元手のストリップティザーとして、己れの肉体の黄昏に人知れず焦慮していたので、早く足を洗い、恋しい青年と新しい生活を始めたいと思う。

だが、青年にとつてはしよせんこんな話は夢物語でしかなく、且つは、たるみかけた波奈の体を嫌つて、同じ劇場のメリーと云う娘と出来てしまう。無論、メリーは、青年が大それた殺人犯だとは知らない。

痴妬に狂つた波奈は、青年とメリーの殺害を企てるのである。

ありとあらゆる惨虐な復讐の図が、彼女の頭の中で描かれ行く。

「ホーカム（場当たり）だ」

編集長は原稿から目を放して呟いたが、彼の目には、此の原稿が

活字になつてゐる有様があり／＼と浮んだ。

「受けるぞ、こいつは。何しろ読者は犯罪がこの上もなく好きだからな」

しかし篠原にはこの小説の底を流れる冷やかな人間軽視と、覆い隠すべくもない作者の自嘲、自虐のポーズに気がついていない。

唯、長年の経験から、「受けるぞ」と感じ取つたのである。

一方、波奈の素振りから怪しいと勘づいた青年は反対に、夜の祕戯にかこつけて、女を殺してしまうのである。

青年は両の太腿で女の首をはさんで絞殺する。そして、女の首はそのまゝ、ぐにやりとして彼の下腹にぶつかつたと云う様な恐るべき描写もあつた。

「こりや発禁だぞ」

だが編集長は嬉しそつた。

その時、青年は断末魔の女に抵抗され、腿に深々と噛傷を記される。

小説の最後はこうである。

メリーが舞台で踊つてゐる。

青年が、ふら／＼と入つて来ると蒼白な顔で、メリーを喰い入る様に見つめてゐる。ゆつくりと、アンチビタール系の毒薬を腿の傷に擦り込む。

此の劇薬は人体の傷口から浸入した時にのみ急速に猛毒性を発揮する。

「デイクソン・カーの探偵小説にも、こんな種類の薬が出て来たと思つたが、はて、アンチビタールなどと云うのが、実際にあるのかな。」篠原は首を傾しげて考えたが、思い当らなかつた。

青年が先に、中年の紳士（青年の勤めていた会社の重役であつた）の、あくなき愛慾の手から脱れる為めに使用した薬もこれであつた。紳士は中耳炎を患ひ、完全に治つていなかったのである。

探偵小説としても、可成り面白い着想である。

客席のざわめきで、メリーが舞台から飛んで降りると、今しも青年は、海老の様に身を曲げて床の上に倒れた処であつた。

編集長は此の幕切れが、すつかり気に入つた。

同時に、全篇のプロットを肉付けしてゐる悪魔の妖美な感覚に惚れ込んでいた。

「黄昏の肉体」は「RIVIERA」春の増刊号のトツプに掲載された。

新進異色作家、淡美一郎はこうして特異読物界にデビューした。

3

今後の物語の展開について淡美一郎に対する、ある種のイメージを得てもらいたいために、彼の処女作を、かなりの誌面をさいて紹介した訳だが、篠原編集長の睨んだ眼に狂いはなかつた。

「黄昏の肉体」は、その象徴的な、余りにも文学じみた題名にもかゝらず、多くの新らしいファンを獲得した。

非情で、つつばなした様な人物の扱い方が甘ちよろい普通のエロ小説と違つた何か新鮮な魅力となつてゐた。

珍らしく篠原は、作者の淡に長文の手紙を書き、今後の執筆を依頼した。

返事の代りに、淡からは、二、三篇の原稿が届けられた。いずれも風変わりな、興味本位らしい書振りの中にも、変にえこじ

で高踏的な処があり、残虐な描写のくせに、ふと寂しさがあると言った不思議な魅力を持った短篇小説だった。「RIVERA」とは、一寸肌合いの異つたものだだったが、こうした変質的な小説は結局、こんな種類の雑誌以外には発表出来ない性質のものであった。手馴れた筆のはこびからも、よほど小説修業に年期を入れたらしく、うかゞえ、しかも猥奇耽美の淵に自ら身を沈めて、浮び上る事の出来ない異常な感覚が感じられた。

淡美一郎の小説は「RIVERA」のヒットとなり、同様、執筆陣の手薄に悩む同業の雑誌社をうらやましがらせた。

そうした雑誌の中に「MONTE・CARLO」があつた。

これは東京に編集部があり、編集長の小沢は、戦前「犯罪風俗」と云う発禁すれすれの雑誌を主宰した事もある、その道のベテランであつた。

彼も亦、淡美一郎の小説に魅された一人であつた。

彼は戦後、急激に氾濫した薄つぺらでチャチなエロ雑誌の時代は既に終つたと考えている。

これからは、がつちりした構成の、しかも刺戟の強いエロ小説を主体にしなければならぬと云うのである。

淡の小説が、作者には迷惑かも知れなかつたが、その条件にぴつたりなのであつた。

手をつくして彼は淡の住所を調べ上げた。横浜市のはずれ、湘南と呼ばれる地方に淡は住んでいた。

一日、小沢は単身、淡を尋ねて行つた。K急行電車をO駅で降りて、しばらく歩くと小奇麗な一軒の家がある。

玄関で刺を通じ「淡先生」に会いたいと言つた。

出て来た老婆が不審気に引込むと、入れ変りに未だ若い男が現われた。

色が白く彫の深い美男子の彼は、小沢の用件を聞くと、気の毒そうに留守だと言つた。

仕方なく小沢は後日を約して玄関を出た。後で取継に出た老婆が若い男に「どうしたんです淡さん？」と言つてゐるのが聞こえた。

淡の弟なんだと小沢は思つた。淡の小説に出てくる美貌の青年は、いずれも此の弟がモデルなんだと考えた。

その後、何度、足をはこんでも淡には会えなかつた。

弟——（小沢は勝手にそう決めていた）——だけがいつも出て来る。

ある時は学生服を着ていた。ボタンのマークと襟のローマ字から彼がA大学法科の学生だと知つた。

淡の家に日参したのは、小沢だけではなかつた。

他の雑誌社の記者も、どこで嗅ぎ出したか、入れ変り立ち変りやつて来たが、結局、誰も会えなかつた。

そのくせ「RIVERA」には毎号かゝらず淡の作品が掲載されている。

「篠原の奴、淡を、どこかに軟禁しやがつたな——」

小沢は、昔馴染のライバルがしそうな事だと思つた。

だが実を云えば「RIVERA」の者も淡には誰も会つていなかった。

原稿は直接、編集部に郵送されてくるのである。

「よし、それなら、あの弟から、ぜがひでも淡の住所を聞き出してやる。」

小沢は腹を決めた。
直ちに編集部員の品川美和子と呼び寄せた。彼女は、どこか、と
つきにくい厳しさがあつたが近代的な美貌と、均勢のとれた見事
な肢体を持つていた。



三十才と云う年令で、未だ独身であるのも彼女程
の美人では全く珍しい事であろう。ともあれ、名
実共に「MONTE・CARLO」社の女王でもあ
つた。

編集長は彼女に、ある目的の為に、ある種の怪し
からぬ秘策を授け様としているのであつた。

4

スタイルブックから抜け出した様な美和子が、小
粹に身をかがめて淡の家で案内を乞うた。

淡さんとは昔馴染みだと、ハツパをかけると、出
て来た好男子の学生が、クスリと笑つた。

「お兄さんに取継いで下さい。お留守なら行先を教
えて下さいませんか。」

美和子は理由もなく笑われた時一瞬、美しい眉を
逆立てたが、言葉だけは丁寧と言つた。

「兄さんですつて。どうして兄だと云うのですか。
新進作家だから未だ若いのだらうと言うのですか。

淡美一郎は僕の父かも知れませんが。それで、貴女
は、どんな御用なのでしょう。兄は——そう、兄で
したね。貴女を御存知ないと思いますよ。」

「知らなくつても平気です。唯、お会いしたいのです。私、ファン
ですもの。」

「えゝつ、貴女のような方が、残虐小説のファンなのですか。」
見かけによらず青年は、皮肉たつぷりな表情をした。

「およしになつた方がいゝですよ。淡美一郎は、貴女の想像している様な男じゃありませんよ。」

何がおかしいのか青年は美和子をのぞき込んで笑つていた。

「酸も甘いも弁えたフランス風の紳士、いや、こんなタイプは艶笑小説家でしようね。容貌魁偉、どこか非情の冷たさがある。レアー・クレガー、貴女は此の若くして亡つたアメリカの俳優を御存知ですか。そんな男こそ、怪奇残酷の作家に似つかわしいでしょう」何を、こんな小僧に甜められてたまるものか、と美和子は唇をかんで、くやしがつたが、どう見ても相手が一枚、上手であつた。

「処がですよ。タイプだけじゃ人柄が分らない様に、残酷作家だからと云つて、恐ろし気な容貌をしているとは限りませんよ。貴女の様な美しいフアンの為ならばこそ言いますがね。淡美一郎は、若冠二十二才。未だほんの、ねんねでしてね」

一寸、得意気な表情を浮かべたが、すぐに自らを賤しめる様な自嘲の苦笑をもらした。

若いのに似ず、これは、どうして大した男だと、男を見る目の肥えた彼女には、すぐピーンと来た。

「では貴男が、淡さん」。美和子は大きな声で言つた。

「そうです。此の家に間借りしているのは、僕一人だけですからね。」

淡美一郎は不気嫌に答えた。

こりや、大した特種だ。編集長が驚くだろう。にわかに美和子の胸が高鳴つて来た。

「フアン第一号の貴女の為に。」

淡は、そう言つと、奥の居間に彼女を案内した。

小さな机、本棚、そして法律の本が積んである。ただそれだけの部屋であつた。

普通の学生部屋と違ふのは、机の上に、書きかけの原稿用紙が散乱している事だけである。

小沢編集長の言葉が思い出された。

「色仕掛けでも良い。とにかく淡を探し出し、原稿を頼んで来てくれ。君の事だ。万が一にも失敗はあるまいが」

だが、その相手が、想像した様な男ではなく、学生なのだ。さすがの美和子も勝手が分らない。

まゝよ、やつて見る迄だ。学生だからと言つたつて立派な男であり、しかも、あんな凄い小説を書く程だから。

彼女は片膝をずらすと、程よく肉のついた片脚を、そつと横に伸した。ナイロンの滑らかな光りが、極めて肉感的に見せていた。

淡の視線が、ちらりと流れる。

「ね、先生」

組し易しと見てか、美和子は淡の学生服にとりすがつた。

「お願いがあるんです」

大きな瞳が、うるんで熱っぽい。こんな技巧は手馴れたものである。

だが意外にも淡の目は冷やかで頬は、微かに笑っている様だつた。そつと背筋に冷水をかけられた様な不気味な感じた、美和子がハツと身を起すと、淡は左手で彼女のポケットから身分証明書を抜きとつていた。

「MONTE・CARLO」編集部、品川美和子「こりや僕の失敗だ。貴女は雑誌社の人ですね」

淡の蒼ざめた顔は憤りで歪んでいた。

端正な容貌だけに一層、凄味があつた。

しかし、美和子の方は、バレてしまったからにはと、かえつて度胸がつく。

襟を正すと、改めて臆面もなく原稿を依頼した。

淡は大きくうなづいた。

「よろしい。書きましよう。実は、もう少し時期を待っていていようと思つたのですが。と言うよりは、こんな青二才が作者だとバレルのが恐ろしかったから誰にも会わなかつたんだが、とにかく書きましよう。そのかわり、貴女の体を先ず提供してもらいましようか」事もなげに戦後派の青年はこう言つた。

「よろしうございます。私の体で済む事なら——」

一回位いなら大した事はない。

美和子にとつては、さして重大な決意も要しなかつた。

「それはどうも、早速承諾して下さつて有難度う」

淡は腰を上げると、紅茶を入れて来た。

「それで何時ですの。肉体の贈呈式は」

美和子も、はつきりと聞く。

淡は黙つて紅茶をすゝつた。こんな平然たる態度に出られると、かえつて美和子の方が、てれくさくなつて、慌てゝ、ぐつと一思いに飲み干してしまつた。

と間もなく、彼女の目の先が、ぼやけ始めて、意識が朦朧として来た。

「麻醉薬」そう思つたが遅かつた。

底知れぬ深海に、ひきずり込まれる様に、そのまゝ気が遠くなつ

て行つた。

淡は、じつと塑像の様に黙つて見ていたが、いきなり女……

……を抱きしめた。

始めて……であつた。

信じられない事だが、評判のエロ作家、淡美一郎は未だ童貞であつた。

彼の小説は、凡て虚構も虚構、全くの空想が生んだ所産に過ぎなかつたのである。

いつか、肌柔らかな女体を現実に抱きしめて見たい。

その切実な願望が彼の小説となつていたのである。

遂に機会は訪れた。

だが、なぜ麻醉剤などを使用したのか。

既に相手は承諾しているのではないか。

それは、彼の豊かな机上の知識をしても、実際に、果して、うまう行えるかどうか、全く不安だつたからに外ならない。

童貞だつたと、女から嘲笑されたのでは、彼の自尊心が許さないのだ。

現代の青年は、必要以上に、己れの純潔さを卑下しているものなのである。

女の知らない内に、こつそり慾望を満たしてやろう。

彼の眼は、珍らしく、ギラ／＼と油ぎり、喉がごくりと大きく鳴つた。

亢奮に、震く手が、次々に美和子の衣服をはぎ取つて行く。

純白の肌が、おしげもなく、……は、畳の上で無心に転つていた。

先刻、老婆は買物に出ているのを知りながら、なお、淡は不安だつた。

ふつくらとした女の肌を指先で押すと弾力でふわりと、もどつて来る。

女の身体からは、特有な甘酸っぱい臭いが彼の鼻を快よく刺戟した。

「くだらない」

一言呟やくと、いまいまし気に立上つた。

「こんなものを快楽と云うのか」

彼の幻想した処では、文字通り桃源境をさまよう感じがする筈であつた。

奔………に………たした後に、この様な救い難い嫌惡の情が湧こうとは考えても見なかつた。

余りにも、どぎつい彼の小説が、作者自身の神経を麻痺させて正常な官能を既に狂わしていたのかも知れない。

「何と云う醜い肉塊」

いらだたし気に、彼は正体のない女の体を、どすんと足で蹴つた。ごろりと不様に、むちりした尻を見せて女の体が一転した。

「畜生！」

悪鬼の形相と変つた淡は、手頃な縄をとり出し、きりきりと女の体を縛つた。足で、ごろ／＼と部屋の中を転がして廻る。

女の顔が下向きになる度に、畳の目にすりつけられて醜く歪みくつくつと無意識に、苦痛のうめきをもらす。

その醜惡な様子を見ると、彼の憎惡は、益々、変態の度を加えて行つた。

女の体を、かゝえて、部屋の端に立てかけると、いきなり手を放す。

形の良い足の指が、ぐつ／＼と畳にめりこむ間もなく、どすんと体が倒れる。

それを、ひき起すと、今度は、両足首を持つて逆さにして、そのまま手を放す。

首を不自然に折り曲げたまゝ白い肉体が、もんどりうつて、ひっくりかえる。

「ウツフ……」

淡が奇妙な笑いをもらした。

同時に、先刻、あれほど憎くかつた美和子の体が、一瞬、何故か愛しく感じられた。

物言わぬ女の体を縛つたまゝ抱き起すと、処嫌らわず接吻した。顔から胸へ、……脚へ、なめつくすと、体を裏がえしにして、

白い尻に………する。

ざらつとした女の舌が、舌端にふれると、彼は、ぶるりと身震い

し、女の口からは、生臭い

女の香気が嗅つて来た。

女は苦しうに口を歪め

喉が鳴つた。

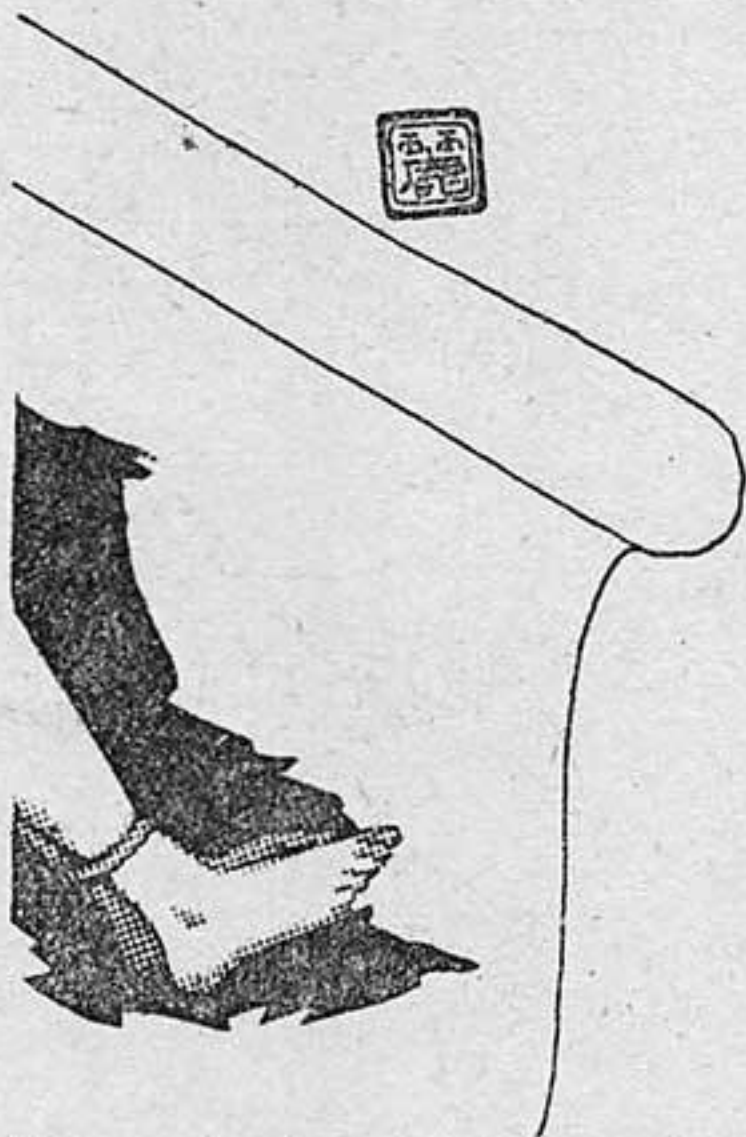
その中、美和子の体が、

むく／＼と動き、薄つすら

と目を開いた。

半ば、開かれたその眼が

淫らじみて見えた。



淡の憤怒は、訳もなく爆発した。

全く、此の時の衝動は、彼自身にとつても理解出来なかつたに相違ない。

彼は眼をらん／＼と光らせ、革のベルトを手にして立上つた。

だがその時は、既に、女の目が再び物憂げに閉されていた。

5

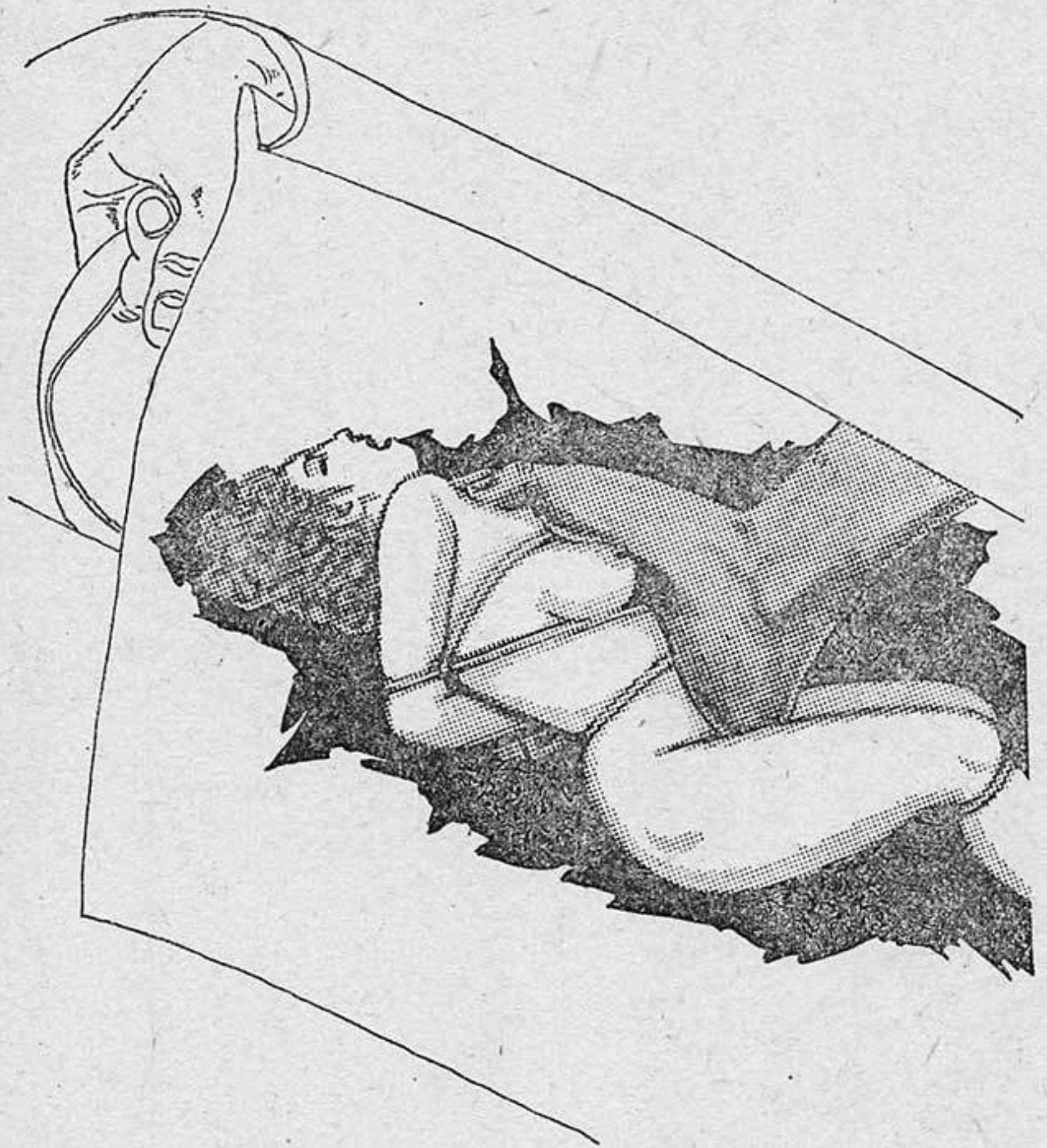
骨を刺す様な痛みで気がついた時、美和子は自分が……なつて縛られ、しかもベルトで打ちすえられているのを見た。

彼女には、淡が何故、そんなに憤っているのか見当がつかなくなつた。

「どうしたんです？」

彼女は必死になつて叫んだが、淡は「裏切られた。女の体に」と呪文を唱える様に呟いてはベルトをふり上げるだけであつた。

「肉の快楽」が意外にも彼にとつては恐るべき自己嫌悪となり、それが、女体への不信と変り、遂には、女体への侮蔑となつたなどと



は知る由もない美和子にして見れば、彼を単なるサディストだ、と解釈したのも無理はない。

処嫌らわずふり下されるベルトの鞭に彼女の体は、のたうつた。

その上、縛られた縄がギリ／＼と肌に喰い込み、何故か体中の節々に鈍痛が絶えなかつた。

「悪魔の巢め」

憎々し気に云うと、淡は洋服掛けの太い柄を、ぐつと縄の間にさし込んで、こね廻した。

形容も出来ない激痛に、殆んど失神せんばかりになつた彼女は、それ故、淡が言い知れぬ自己嫌悪の為、眼に涙をためていたのを見る事は出来なかつた。

彼は、その日以来、小説の執筆をふつりと止めてしまつた。

己れの描く、余りの虚偽に満ちたテーマでは、もう変態の世界など書けなくなつたのかも知れない。

しかし、あんなにも虐待された美和子は、其後も、執拗に訪づれて来る。

約束した原稿の督促の為ではない。それが証拠に、彼女は、淡の事を一言も小沢編集長に話してないのだ。

女性の奥深く内在するマゾヒズムの悪の華を開花された彼女は、淡の足下にひざまづいて再度の折檻を哀願するのであった。

だが一度、こじれた精神の異端者にとつては、女が頼めば頼む程反対に、限らない嫌悪と反撥を感じさせ、も早、彼女の存在など完全に無視してやれと云つた気持になるのであつた。

とは言ふものの、彼の情慾は、理性を超えて、嘗つて彼が書いた小説の耽美な世界に彼をひきずり込むのである。

そして、その幻妖な夢に、必ず、美和子の豊満な肢体が現れ、これでもか、これでもかと、いやらしい媚態を示すのであつた。

それが一層、彼をいらだたせた。

美和子の存在がある限り、自分は救われない——こんな妄想が、何の不自然さもなく、「そうだ、殺してしまふのだ」と云う恐ろしい考えを生むに至つた。

ある日、例によつて、淡を慕う自分の気持を、どうする事も出来ずに、訪ずれた美和子は、その日に限つて、淡が上気嫌なのにとまどつた。

「どうです、映画でも観ませんか」

そう言ふと淡は、さつさと一人で歩き出した。

不審と喜色の複雑な気持で、それでも美和子はいそ／＼と後に従つた。

二人は伊勢崎町の近くにあるE劇場に入つた。

清純な魅力が売物の伊勢京子が主演していた。

「ほれ、口をあけて」坐席につくと、淡が言つた。

飴でも呉れるのかと無邪気に口をあけた美和子の喉深く、淡は、アルカロイド系の劇薬を抛り込んだ。

「あつ」

軽い叫声をあげたが、不気味に暫く沈黙が続き、彼女は闇を透して淡を見つめていた。

そのまゝ大きく見開かれた瞳が凝固し、体は、ずる／＼と席を滑つた。

淡は横からぐいと、女の体を支えると、突然、大声をあげて笑い出した。

「死んだ。死んだ」干上つた様な声が館内にこだました。

驚いた観客が、総立ちになつて声のした方を見ると、若い男が女の死体を抱きかゝえながら、左手で何かを自らの口に抛り込んだ処だつた。

スクリーンでは、伊勢京子の神々しい迄に滑らかな顔のクローズアップが写し出されている。

「小説の最後に、こんなのは素敵にいゝぞ」ふと彼はこう考えてニツコリしたが、次の瞬間、女の上に、崩れる様、重なつて、床に倒れた。

その時、偶然にもスクリーンの京子は「これで凡ては終りね」とこんな科白を静かに喋つていた。

翌日の新聞は、狂つた大学生が、女記者と無理心中をしたと簡単に報じたゞけだつた。

「ふーむ」

MONTE・CARLOの小沢編集長は、側の品川美和子を見た

あでやかに笑った顔に、えくぼが一つ。彼女は、片目をつぶって見せた。

「どう思った？。此の原稿、君、さつき読んだんだろう？。」
小沢はニヤ／＼する。

編集部のある日の午後であつた。

「ひどいわ。私と貴男の事を知つていながら、此んな小説書くなんて、人権問題よ」

美和子の美しい顔が小沢に甘えてすねる。

「淡君も仲々やるね。勝手な事を空想して、しかも我々の実名を使うなんて。知らない人が読んだら本当だと思わないかな。だが、今度の増刊号に出してやろうか。RIVIERAでも増刊号を出すらしいからね。今度こそ、変つた原稿を乗せなくちやあ。エロ小説の作者が童貞で、しかも普通のこうした小説と違つて、変態の讚美じやなく、寧ろ否定的だから面白いと思うね」

「でも厭ですわ。私つたら、淡さんと心中するんですもの」

「ふん。厭なのかな。何しろ相手は今売出しの美男でおわす文士さんだぜ」

「馬鹿ね。何よ。私は貴方だけのもの。それに淡さんたら、実際には、ね、あんな人ですもの」

その時扉を開けて、若い学生服の男が、おず／＼と入つて来た。丈が低くて浅黒い、およそ風采の上らぬ醜い顔をしていた。

「どうでしょう。MONTE・CARLOには採用して頂けますでしょうか？」

圧しつぶした様な声が、厚い土色の唇の間から、ひつかかり／＼出て来る。

美和子は、ぶるツと身振いして肩をつぼめた。編集長は言つた。

「面白いよ。RIVIERAには見せたのかね。何、こんな我々の内情をぶちまけたような物は誤解をまねくからいけないつて。何を言つてゐるのだ。こんな物が——いや失礼——本当だとは誰も思わないよ。よしんば、そう思つたつて平氣じゃないか。だが君も大分強勉したね。ストリップテイザーの話など、巧く小説中の話として片づけて肩をかわした辺り一寸したもんだよ。同様、童貞作家と美和子の一件も、もう少し道徳的に逃げを打つてもらいたいね。幻想だつたとか、話だつたとか、よくアメリカ映画がするりと逃げる様にね。何しろ大分、この処、やかましいのでね。下手をすれば発禁さ。処で、兼々聞きたいと思つていたんだが、君は、学生のくせによく、こんな雑誌に寄稿するね」

淡美一郎は、彼の小説中の主人公とは似てもつかない、貧相な顔でニヤ／＼と笑つてゐるだけであつた。

「この小説の通り君は童貞かね？」

編集長はすかさず、ずばりと聞いた。

淡美一郎は一瞬、世にも哀れな表情で、ちらりと美しい美和子を見た。

「僕は、僕は、生来、どうも女に興味がないんです」

だが美和子の鋭く不遠慮な視線は、醜い青年の、いじらしい勢一杯の虚勢を、無残に打ち崩してしまつた。

(完)

懸賞(告白と手記と体験)入選

優作

半 公 刑

篠 原 咲 恵

畔 亭 数 久・画

私が突然半公刑という題を持ち出し、妙に思われる方が多いと思います。勿論これは私刑と公刑の中間にあるのです。何処の会社でも官庁でも皆例外なく服務規律と、それに伴う罰則があります。しかし此の罰則には決して体刑はありませんし、許されもしない事です。此の服務規律が非常に拡張され、体刑をも含む罰則が作られたのが、昭和十五年から二十年にかけての軍需工場でした。

昭和十四年三月、某県立女学校を卒業した私は、家業である菓子屋を手伝いながら兄が北支で戦病死した関係上、将来は適当なるお婿さんを探す積りでした。しかし養子という

ものには、何となく反撥を感じていました私は、未だ知らぬ男性を夢の中で探して居りました。丁度その頃、昭和十七年で、戦時徴用令によつて私は海軍第二航空廠に徴用されました。家業の菓子屋も、その頃はもう閉鎖同様で父を早く失つた私は、一家の支柱だったので、まさかと思つて居りましたが、此れも致し方なく。母と祖父母に見送られながら航空廠に参りました。

航空廠には私と一緒に徴用された者が百人程居り、年令は三十前の者許りでした。寄宿舎に入り、次の日から訓練期間一週間は、徴用の意義、戦局の重大さ、仕事の内容、そし

て服務規律等を教えられました。仕事は墜落機の解体作業から始まりました。真夏の太陽の下で汗にまみれながら男子工員の壊したジュラルミンの屑を工場迄運びました。しかしこれが国の為だ、戦勝への陰の力だと思えば自ら力も湧き、当時は力の限り頑張る覚悟でした。

しかし一月经ち、二月と過ぎ、三月目頃から私達の気持は変つて参りました。人間の力には限度があります。味噌汁に沢庵で飼ひ殺しにされた奴隷であるという現実、如何におだてられても反感がつのる許りでした。そして私が第一の罪を犯したのは昭和十七年の

秋でした。墜落機の中に絹のマフラーを見付け、そつと作業衣の下に巻きつけて寮に帰ってから着替えの下にかくして置きました。これが、それから三日程して突然の室内点検で発見され、守衛長室に呼ばれた。

作業止めというのは寮で謹慎して居るのですから、考えように依つては楽なような話ですが、実際は全然反対で、一日中寮の廊下に正坐させらるのですからその苦痛は大変なものです。私の班長は元看護婦だったそうですが、特に現場作業に直接入る事を希望して来たという三十に近い眼の吊り上つた中性的な感じの女でした。名前は康江といい班員には一種の威圧を与える程にらみをきかし「我が班の名譽」という事を常に口にして居りました。

守衛長から二日間の謹慎を命ぜられた私は康江に引渡され寮に帰りました。寮に帰ると私は寮生が物置に使つて居る四畳半に入ら

れ、外から心張棒が掛けられました。心張棒を掛けてから康江が外から「夕飯の時までそこに居な、今更じたばたし たつて仕方がないんだから、よく覚悟してお



んが、友人達の話では女にも行われて居るとか、倒れるまで尻をぶたれとかいう事を聞いて居ります。或る時、男子工員が飛行機の中で昼寝して居る現場を見付けられ、二人の守

衛が左右の手を握り一人が赤い櫓の棒で尻を打ちのめすのを見た事があります。あんな惨めな姿を此れから皆の前にさらすのかと思うと胸がしめつけられる思いでした。

何時の間にか私は正坐して居りました。自分の犯した罪を悔いる気持と、之れからは決して二度と犯すまいと誓う気持と、少しでも罪が軽くなる様にといいう恐怖に対する気持とが、私を敗け犬の様に

いで」

と言ひ捨てて言つた言葉が、時間と共に胸をしめつけて来ました。よく廠内で見かける精神棒の制裁は女には未だ見た事がありませ

しおらしくしてしまつたのでした。二日間の謹慎を命じ柔しく今後をさとしてくれた守衛長は、なるべく、微罪ですましたかつたのでしようが、弁護に当るべき康江が逆に罪を主

張する様な口振りに、どうしようもなかった
のでしよう。そして罰の実行は康江に任され
て居るのです。

やがて戸が開けられ、康江と若い守衛とが
入つて来ました。秋の陽は早くも落ちて外は
真暗でした。

「お立ち」

康江の厳しい口調に私はふらふらと立ち上
りました。康江が私の手を握つて戸の外に引
き出し、私の後に立つて小突きました。

「さあ、第二倉庫迄行くんだよ」

若い守衛も興味が手伝つてか、態度は決し
て親切ではありませんでした。第二倉庫は寮
の裏手にあり此の寮から百米程の所にありま
した。夕食を済した班員達が集つて居りまし
た。班員二十名が二列横隊に整列してこれか
ら行われるお仕置に期待して居たのでした。
若い守衛が班員の前に立ち、私の刑の宣告を
するのです。私は皆の前に引出され背を向け
て立たされました。

「篠原咲恵、右は九月二十五日、廠内物品を
盗用したる廉により二日間の謹慎を命ず」

判決は終わりました。極めて簡単な此の文句
で私は一生を失つたのでした。

「では班長、後は自主的に処理して頂きま

す」

守衛はそのまゝ出て行きました。班長とし
て後は康江が私の運命を握つてしまつたので
す。女班長としてその厳しさを廠内に轟かし
て居る康江が、次に皆の前に立ちました。

「咲恵は正坐しなさい。皆はそのまゝ聞いて
欲しい。」

私は、コンクリートの床の上に正坐しまし
た。丁度康江の足下に土下坐させられた恰好
でした。

「皆には未だ話してはなかつたけれど、篠原
咲恵の今度の出来事はうすうす知つて居た事
と思う。毎々注意して居る様に、廠内の物品
は何一つとして国家の為、戦争に勝ち抜く為
の品物であつて持ち出したり、盗んだりして
はならぬ事は今更言う迄もない。今度の咲恵
の行為は全くの非国民的行為、利敵行為であ
つて断じて許されるべきでない、しかし、若
し咲恵が今後を誓い、行いあらためるならば
又班員としての生活を許したいと思うが、皆
も此の際自主的に咲恵の行為に対し如何に処
罰したらよいか考えて貰いたい。」

康江の言葉が切れても、誰一人発言する者
は居りません。

「では班長が班の名誉を汚した罪を罰する。

咲恵、皆に班の名誉を汚した罪を謝りなさ
い。」

「申し訳ありません」

「それだけか？」

「……………」

「今後の誓いを言つて見なさい！」

わあーつと、私は突然泣き出した。

「泣いたつて、許される様な事じゃないんだ
よ。黙らないか。」

康江の手が私の手を顔から引離しました。

此の時、私は耐られない反抗心がムラムラと
首を持ち上げ、涙の中から康江をにらみ付け
ました。

「何んだ、その目付きは、よし未だ改心しな
いんだね、誓えないのか」

私の無言の反抗が康江や班員を刺激しまし
た。それ迄黙つて見て居た班員の一人、大木
園子が

「誓う迄、懲してやつた方がいゝ」

「そうだそうだ」

女が同性に対する惨虐心は環境が許しさえ
すれば、底なしの淵の様に飽く事なく続けら
れます。園子と今一人大崎弘子が康江に手を
貸すと、後は私を取巻いて終わりました。園子
と弘子に命じて正坐して居る私の左右の手を

捻じ上げさせると

「さあ咲恵、誓いなさい。それとも海軍式に精神を入れ替えて貰いたいのか」

「……………」

「よし、立て」 「……………」

「両足を開いて上体を倒せ。」

言われた通りの浅間しい姿勢になつた私の後に康江が、ゴムホースを持つて立ちほだかりました。

「ピシリ！ ピシリ！」

私の尻に打ちおろされる度に私の体は大きく揺れました。尻は一面に火の様に熱してきました。全身を走る痛さに、私は園子と弘子に取られた両腕に、やつと支えられて居りました。十二、三、叩かれてから康江が

「さあ、いゝ加減に誓つたらどうだ。」

私は只首を縦に振りました。
「では皆に手をつけて班の名誉を汚した罪を詫び、今後の覚悟を言いなさい」

私は皆の前に正坐し、両手をついて
「私が悪うございました、どうぞお許し下さい」

と言いつつ同時に、泣き崩れてしまいました。此れで許されゝば良かったのですが、此の時弘子が、康江への忠義立ての積りか

「泣いたつて、しょうがないじゃないの、兵隊さんはね、精神入替えの後に敬礼を言うんだよ。」

此の言葉に、私はかつとなりしました。此の上私に

「班長殿精神を入替えて頂いて有難うございました」と言えと言うのです。こ

れは海軍では普通行れて居つた事ですが、血気な青年が初年兵当時よくベッドの中で泣いたという話を聞かされますが、皆この一言の口惜しさからだそうです。私の頭から全ての理性が消え憎悪の感情だけが康江に向つて爆発しました。

「わあつ」何か分らぬわめき声と共に、私は康江に武者振りつきしました。康江は驚いて防ぐ間もなく、どつと横倒しになりました。見て居た同僚も止める事が出来なかつたのでしよう。只



わああ、騒ぐだけでした。

それから後は全然判りませんでした。気の附いた時には私は寮の、前に述べた物置きに縛られたまゝ転がされて居りました。後で聞いた話では、私は康江の眼をひつかいて左眼が失明したそうでした。

此の時の罪で私はとうとう廠内営倉に入れられました。「廠内物品盗用、上長反抗の罪に依り云々」という宣告文を読み上げられ、航空廠内に作られた営倉に入れられました。

廠内には約一万五千名からの工員、女工員が居り、常時男子百名、女子五十名位が此の営倉に入れられて居りました。営倉といつても元は発動機試験室として作り始めた建物を中途から営倉に改造したもので、中は窓一つない陰気な建物で三十坪位の広さです。入れられる前に女看守が私を裸にして身体検査をしました。意地悪く全裸の私を二十分位も検査してからいよいよお仕着せを着せるのした。このお仕着せはカーキ色の水兵服の様な恰好のもので此れを後前に着せられるのです。そして背掛は真赤な布で作られ此れに墨で「百二十七号」と書かれて居りました。セーラー服を後前に着せるという着想は誰の考えたものか知りませんが、戦時の事として此の航空廠

はサボリが多く、少しも能率が上らず、遂に廠罰主義を取り上げ、私達囚人を工員の前に見せてサボを防ぐ事になつたのだそうです。要するに原始的刑罰が丁度私を待つて居たのでした。そして世論も或程度、此れを黙認させて居たのでした。

背掛が丁度乳房の上にかゝり、真赤な札の様でしたので、私達の事を「赤札」と申して居りました。何と変つた姿になつた事でしよう。下は勿論モンペで腰に巾二寸位の廠丈なズツクのバンドをしめられ、髪は鎖編みにされ黒布でつまれました。腰のバンドは自分で取はずし出来ない様に鍵が附いて居り、女看守が意地悪く音高く腹のバンドの鍵を掛けてから、私にその鍵を見せる様にポケットに入れた時、何とも言えない悲しさがこみ上げて来ました。

「何だい、泪なんか溜めて、今頃泣くんなら始めからしなきやいゝんだ。此れからうんと泣くんだから泪は取つておきな。さあ此方においで」

女看守に小突かれながら、私は営倉に入りました。女看守が営倉の中へ「新入りを頼むわよ」と声を掛けると中から「わあー」という歓声が起りました。

私が此処で受けたリンチは全く此の世の地獄でした。室長は操という、元は田舎廻りの女役者だつたそうです。年は三十二、三、だつたでしょうか、私は早速室長に挨拶させられました。

「未だ娘つ子だね、ツルはお持ちかえ」

私はパンツの下から五円札を取出して渡しました。

「なんだ、今時分、金なんぞ持つて来たつて役に立たないよ、やつぱり一働きして貰わにやいかんね。」

私はがたがた震え出しました。かねがね「赤札」のリンチは友人から聞いて居ました。

それが今現実に私の体に加えられるのです。操の合図で三人の「赤札」が私の側に来て両手を捻じあげて腰のバンドの所に持つて行きました。此の時迄気がつきませんでした。此のバンドには更に小さな革のバンドが附いて居て、此の小バンドに私の手を結えてしましました。

「さあ、立つて」

立ち上つた私の腰からモンペがはぎとられました。此の時、私は無意識に身をもがきましたが、途端にキメ板が私の尻に激しく鳴りました。

「あゝ許して下さい」
「許して貰いたかったら、大人しく一働きするんだ。」

操の声に私は全てをあきらめ、言われた通り実行する覚悟をきめました。赤札の一人光子が一尺角位の二分板を持ち出して来て

「しつかり股の間にはさむんだ」

と云います。私は何をするのが分りませんが、板を股の間にはさんで落さないようにして居ました。すると光

子が二米位離れた所にローソクを一本立てました。

「さあ、あのローソクの火を消してくんな、早くしないとトボレちやうからな」

「トボレる迄消えないと、もう一働きして貰うから、しつかり、やんな」

操の言葉に私は只恐怖だけがつのつて参りました。同室の女囚達は此のリンチに淫虐な

眼を光らせて居ます。羞恥の極恐怖の絶頂とは此の事でしよう。私は眼前の苦痛を只逃れたい一心でローソクの火めがけて風を送る為に腰を振り板を左右にあおぐのですが、風は少しも起らず火は揺ぎもありません。

「何だい？ その腰つきは」

ピシヤリと尻をキメ板で打たれ「ヒー」と声を立てて私は股の間の板を落してしまいました。「確つかりしろい」声と同時に二、三

人の女囚に押えられた私の尻に、キメ板が続けざまに飛んで来ました。

「ヒー、許して下さい、許して下さい」

「じゃ、しつかりやるんだな」

「はい」

私は再び板を股にはさんで涙をボロボロ流しながら、ローソクの火を消そうと一生懸命腰を振るのですが、どうしても火は消えません。少しでも腰の振り方がゆるむと、キメ板

が飛んで来ます。その度に板が落ちそうになつて、落すまいとする丈でも大変苦痛でした。股はすれて血が滲んで来ました。とうとう私は倒れて終いました。

「やいやい、誰が勝手に寝ていいつて言つた。未だ火は消えねえんだぞ」

「許して下さい、他の事なら何でも致します」

「じゃ、他の事をもう一つやつて貰うかな、それ迄少し休ませてやろう。保子、少し休ませてやんな」

私はほんとに休まれると思



Suk.

つて居ましたが、それはとんでもない間違いでした。保子が私の手をバンドからはずすと私は坐り直させられ、私の左右の眉の間に燃え残ったローソクを立てました。

「そうやつてロウソクが消える迄休みな」

私は顔を天井に向けてじつて熱い蠟涙を耐えました。蠟涙はやがて私の顔を伝つて膝に落ちて来ました。此の時、私は股の傷に気がつきました。女囚の一人が此れを見つけて、許してやろうという事になり、どうやら入倉第一日は許されたわけでした。

前にも申しました通り、私達赤札のそももの始りは、工員のサボ抑制が目的ですから勢い私達は人目につく様な所を歩かせられました。

或る時、それは寒い北風の吹く日でした。私達赤札二十人は女看守五名に監視されながら、防空壕掘り作業をさせられました。女看守は女だてらに皆、棒を持つて居り、忸きの悪い赤札には容赦なく棒を見舞うのでした。赤札は二人づゝバンドとバンドに鎖が結ばれ顔をかくす為に、眼の所だけ開けられた袋の様な帽子をかぶせられて居ました。工場にいて居る男女工員が自由に動いて居るのが、此んなにも羨しく鎖に縛れた我が身が悲しく

感じられた事はありませんでした。作業衣ながらも男の眼を引かんが為の女工員の化粧も今の私の身の上には到底望む事さえ出来ないものでした。じつと工場の方を放心した様に見て居た私の尻にピシリピシリと棒が鳴り

「此の野郎何してんだ。さつさと忸くん」

もう一つピシリと叩かれて私はシヤベルを土に差し込みました。此の時動員女学生が五六人此方を凝つと見て、お互に何かさゝやいて居るのが眼に附きました。きつと彼女達は今の私の姿を見たのでしよう。セーラー服を後前にして赤札に番号を記されバンドに鍵を掛けられ二人づつ鎖で縛れた女囚の姿はきつと彼女達の好奇心を刺激した事でしよう。私は急に悲しくなり涙が流れて出ました。

「この野郎又サボツてるのか、未だ懲りない人に見られて恥しいつて柄かい、此方へ来な皆の見て所で精神を入れてやるから」

彼女の見幕に私は一生懸命哀願しました。

「どうか許して下さい、一生懸命忸きますから、どうぞ許して下さい」

「うるさい、此方へ来て四つ這いになるんだ」丁度胸位の深さに掘られた防空壕から私は引ずり出されました。私と同じ鎖に縛れて居た八十三号の美代子も連帯責任で私と同じ罰

を受けるのが此処の慣いでした。私と美代子が壕を出ると、もう浅間しい姿を隠すものは何もありません。

「両手について尻を持ち上げるんだ、ぐずぐずしてると余計痛いよ」

私と美代子は地面に四つん這いになり、両股を開いて尻を突き出す様にしました。

「覚悟はいゝ、バツタ七つ」

彼女の声が終ると檣の棒が飛んで来ました。ピシ「一つ」ピシ「二つ」彼女が数を数えますと、それにつれて私の非鳴が彼女の声をかき消す様に響きました。「お許し下さい。お許し下さい」私の出来る限りの哀願も彼女には蚊の食つた程にも響きませんでした。隣の美代子はやはり四つん這いになつて打たれる番を待たれて居ましたが、恐しさにがたがた震えて居ました。こういう打たれ方は作業中の威しと違い痛さが全身に響くのです。今度は美代子の番になりましたが、美代子は私より軽く「三つ」打たれて許されました。

「バツターは此れで許してやるが、少しそのまゝの恰好で居な」

気が附くとさつきの女学生が呼んで来たのでしよう。二、三十人の女学生が一齊に此方を見て居ました。私と美代子の惨めな姿は何



元憲兵の手記

本誌昭和二十八年二月号の「しい
たげられるよろこび」の筆者林田
澄子さんの嘗ての夫君の手記より

林田 真樹

過ぎ去った悪夢のような苦しさも、骨を砕く様な悔恨の情も月日の経つと共に、何となく、やるせない思慕の念と交つてゆく。

現役兵として入隊以来、満州での三カ年の軍隊生活、更に戦後の激動期に俘虜としての

程此の刑が続けられたのでした。

一つ隠す術もなく公然と晒し者の刑にされたわけです。世にも恥しい服装「赤札」。そして四つん這いの姿勢で鎖に縛れたまゝ私達は多くの男女の侮蔑の目を受けながら、三十分

此んな地獄の様な生活を終戦迄続けましたが、良く行れた刑罰は晒しの刑でした。近代法治国には全く皆無、勿論、私刑なんて存在

する筈もない晒しの刑が、最も多く用いられたのが此の「赤札」の特長でした。工員のサボ防止策とは言え全く恐しい刑罰が行われたものでした。

ているだろうか、そして俺の部下の手によつて満ソ国境の白樺の下に眠る名も知らぬ異国の乙女は果して怨讎を越えていてくれるだろうか、胸の疼きがようやく平静をとり戻し得た頃、奇ク九月号ではからずも南川和子さんの「私は何故責絵を描くか」の一文を読んで異常な血汐が音立てゝ体中を駆けめぐるのを制することが出来なかつた。

人それぞれ、大なり小なり女を責めて羞恥に苦しみ身悶えする姿態を眺めたいという欲望は心の奥底に秘めているものであるうが、たまたま戦争という人間の心を失わしめる生死の境に突込まれた時、何かの動機で胸底の夢が現実となつて爆発したということは、日本人も又交戦国であつた他の国の人々も一率であつた。これは論ずるまでもなく幾多の事例が証明しているところである。戦敗れたため日本人の残虐性が殊更大きく取り上げられているが、私は私の体験から、ソ連人は勿論の事満人も、終戦後は日本人婦女子に加えた

シベリヤ抑留の三カ年、よくこそ日本の土を踏み得たものと、しみじみ故郷の山河を眺めながら懐旧の思いにかられる。

あれから六年。あの時の友は、あの夜の彼女は今も元気で何処かの国で今宵の月を眺め

云うに忍びない残虐行為の数々を実際に此の眼で見、この耳で現地の情報を集めては切齒扼腕したものだった。

南川さんの一文を読み、次に述べる一つの事件も度重なる邦人女性惨殺事件の怨みが骨髄に徹した一つの現れであつたと私は私なりに弁解したい。そして現在の私の倒錯性が此の間に於いて芽生えたということも否定出来ない。私の倒錯性は相手の女性が責められるのを喜ぶに至つた時、即ち羞恥を忘れ果て、あらわな姿態を露出させて歓喜の叫びを上げ次の責苦を期待する女になつた時、私は彼女に対する興味を失つてしまう。私の女性責めに対する喜びは、南川和予さんがいみじくも喝破された通り、——女性が責めを喜ぶ場合男性は少しも責める興味を覚えないのです——（九月号九十一頁上段一行目）男性の心——というものはあの様なものでないかと思う。だから現在の私の責めとは、相手の女性の肌を傷つける事ではなく、如何にして羞恥に身悶えさせるか、という所にある。私のイメージの中の責められる女は、可憐な谷間に咲く白百合の様な清楚な女学生が紫紺のスカートをはくがえして悶える羞恥であり、大都会の歩道を颯爽と闊歩するニュースタイルの美

貌の令嬢が、自由を奪われたその身体から一枚一枚と剥ぎとられてゆく全裸への過程に於ける怒りであり、怨みであり、最後のパンティが白々と床に投げすてられる瞬間に於て初めて見える全身紅に染まる羞恥と悲しみに感ずるのである。

社会に於いては善良な一公務員として勤務している私は、現在、此の様な夢を実現する機会は余りにも少い、従つて勢い想像的サディストたらざるを得ない。前に述べたように相手が責めを喜ぶに至つた時は彼女と別れる時であるといった私の性癖から云つてもそうならざるを得ない。現在の事はあとで書くとして、こゝで過ぎ去つた悪夢の一端を記してみよう。

昭和二十年八月七日、当時満洲国派遣第二×五部隊の憲兵曹長として東満の××に駐屯した時だった。この街はソ連領と指呼の間の地続きの国境の街で、すでに二十八年の初め頃から、共産匪の暗躍が最も激しかった土地であつた。憲兵という職務については、巷間よく語り尽されているが、其の中には誤解されている点も少くなく、私はこゝでそれに対して弁明しようとは思わないが、現役兵である

自分達は、只ひたすら純真な心で日本の勝利のみを信じて真剣に課せられた任務に邁進していたという事は、何等他の兵科の諸君と変りないことを断言出来る。否、その職務の性質上、日夜治安維持のため、眼に見えざる敵と取組んで激務に挺身していたといえる。

運命のこの日、ソ連軍は一齊に国境線を突破して我々の駐屯していた街へも、濁流のように入進してきた。忽ち銃砲火に包まれる市街。その瞬間まで、ソ連参戦を予想していなかつた一般邦人は何の準備もなく身体一つになつて逃げようと右往左往するのであつた。

国境守備隊の果敢な防戦も、ソ連進入と呼応して蜂起した満人の挾撃によつて街は一日にして敵の手中に陥つてしまつた。

当時、内地から赴任した将校が「内地は国防色とモンペ一色で何のうるおいもないが、満州へ来て初めて日本婦人の美しさを見たよ」うな気がする、素足に蹴出し緋のまつわる美しさは久しぶりだ、〃としみじみ語つた事があつたが、B29が飛んでくるではなし、裏面はともかく表面は平和な別天地だったのだ、それが敵の蹂躪に委ねたのだから、邦人特に婦女子の悲惨さは目を掩うものがあつた。

大陸性気候といつて、満州の冬期の寒さも



さることながら夏は夏で激しい暑さだった。折柄、暁方を襲われた婦女子は浴衣の裾を乱しながら、炎天に乾いた道を逃げまどつたのであろう、凌辱の跡も生々しく、着物の裾をまくつて、下腹部をあらわした半裸の惨殺死

に乗じて退却、幾十里の山道を踏破して、敵の駐屯部隊を襲撃しては再び山へ入るという既に組織的な戦いを継続する力のない私達は、ふリラ戦術をとらざるを得なかった。この間道なき山中を彷徨して、思わざる深山の満人

体が犬か猫の死骸のように累々と横たわっている。昨日までは、大東亜の盟主と自負し、高貴な手の届かない憧れの的として眺めていた日本女性の肌を思うがままに弄ぶことが出来た満人達の歓喜はどんなものであったろうか。

私達はこのような邦人婦女子の惨殺死体を眺めて口惜しさに切歯扼腕しながら、三々五々に逃れて、山又山の密林地帯へ夜陰

小屋から邦人女性の惨殺死体を発見しては、その度に憤激を新にするのであった。

一週間程経つた頃、今にして思えば終戦の大詔の発せられた頃だと思うが、遊撃作戦に出た歩兵約一ヶ分隊の兵隊達が、息も絶え絶えの二人の女性を護送して帰つてきた。一人は兵隊服こそ着ていたが、腰のたくましさと胸のふくらみといふ、明らかに邦人女性の男装姿であつた。今一人は××軍の軍服を着た女兵で後手に固く縛られていた。

「おい、どうしたのだッ」

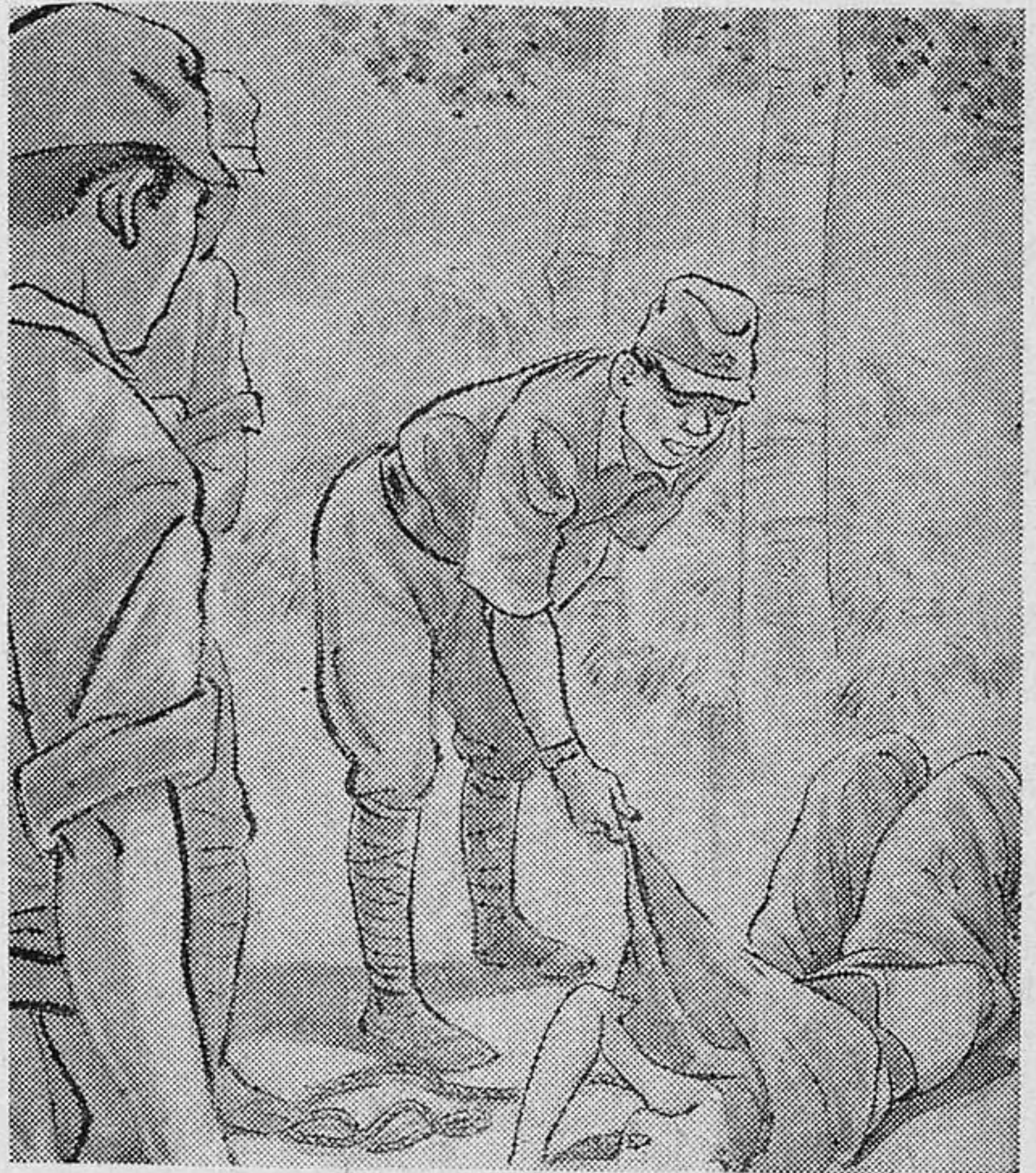
私は分隊長のK伍長に問いかけた。彼が真赤に興奮しながら語つた所によると、豊昭という小さな部落を襲撃したところ、敵は事前に日本兵の攻撃を察知していたらしく、激しい逆襲を加えてきたので、さんざんな敗北を喫した挙句、コースを変えて遠廻りをしての帰途、谷間にある数軒の満人部落から断末魔を思わせる女の悲鳴がきれぎれに聞えてくるので早速偵察してみると、一人の若い女が死んだようになつて全裸で土中に打つた杭にながれ、汚れた日本の軍服と、これだけは女性らしいシユミーズとブローズが満人の手に握られている、そして数人の満人がその女を取り囲んでいるのだ。

すべてを察したK伍長以下の分隊員が物も云わず躍り出して彼等を皆殺しにしたのは勿論であるが、その時彼等を指揮していたのがこの女兵士であつたというのだ。日本の女は満人たちの飽くなき凌辱の結果、すでに息絶えていたので、捕虜にした女兵士を連れて引き上げようとする、一軒の小屋から頭を丸坊主にした日本の女が半狂乱になつてとび出してきた。

姉が殺されては自分も死ぬといつて泣き騒ぐのを無理になだめてK伍長が連れて帰つたというのだ。私は彼女が收容されている紅生班の天幕へ足を運んだ急いで切つたのだろう、虎刈のくりくり坊主、泣き疲れて真赤

に腫らした臉にも、女らしい色気を残している。女らしい風をさせたら、どんなに美しい少女になるだろう。

押し広ろげられた胸には乳房をしめつけていた晒布がゆるめられ、薄紅色の乳首がかすかに息づいている。私はじつとその寝顔を眺



めている中、はつと或る面影を思い起した。

もしや、彼女ではあるまいか、満鉄官舎の柴

田さんの妹さんの冷子さん、今春女学校を卒

業したばかりの――

深い眠りからさめた彼女が側にいる私を見た時の驚き、殺されたのはやはり冷子さんの

姉の絹子さんだつたとは、うら若い女性が皆髪を切つて男装の上、山野を彷徨している中に絹子さんだけは、日本婦人として女らしく死んでゆきたいと最後まで髪を切らず、下着だけは女の物しか身につけなかつた為に余りにも痛ましいこの最後だつたのだ。

とぎれとぎれに泣き乍ら訴える彼女の言葉を聞いて私の断腸の思いは、度重なる邦人女性の惨殺事件に対する彼等への怒りが、知人の娘を弄り殺しにされたことによつて頂点に達した。

「よし、敵がその気なれば、此方も其の気になつてやるぞ！」

天幕を出た時の私の顔は、恐らく興奮のため蒼ざめきつていたことだろう。

幸い敵の女兵が一人捕われている、又ない機会だ。絹子さんの受けた責苦の幾層倍かの凌辱をこの女の身体に加えてやれ、簡単に死なせてなるものか、まだ見ぬ異国の女の裸

体が眼の中へ一ぱいに浮き上つてくる。

二人の兵に監視された女は、後手に縛られたまゝ白樺の幹に括りつけられていた。泥まみれに汚れた顔にも四肢にも、さすがに憔悴の色が濃かった。大柄ではあるが、身体の線はどことなく固く感じられる。恐らくまだ二十歳にならないだろう。通訳の沢田上等兵に型通りの審問をさせる。何を聞いても答えない。只じつと睨みつけるような蒼味勝ちの眼が敵意に燃えている。

「糞ッ」

私はいきなり女の頬に烈しい平手打ちを二つ三つくれた。

「この女に何を聞く事がある、聞く事は身体に聞け！」

私の怒声に沢田上等兵はニヤリと微笑を浮かべながら、

「曹長殿、脱がせましようか」

「よし、ゆつくりやれ、………を最大限に利用するんだ」

沢田の手が縛られた女の上衣にかゝつた。ブツブツとボタンが一つ宛はずされると女の片肌を脱がせにかゝる。何をされるのか初めて察した女は、はッとして大声でわめく。

「おい、縄なんか解いてみんなでやれ」

私の命令に部下の四五人が蝗のように飛び

かゝる。解かれた縄がぐねぐねと地面に這うと、………つけられた女の体から、ゆつくり一枚又一枚と………ゆく布片、恐ろしく念入りに………あらわれる。………がブルン………、涙をためた哀願の瞳、あの蛇のような残忍な眼つきは、今は恐怖にふるえている。

ぐつと横に張つた腰を包んだズボンに手がかゝる、「アーツ」とたまげる悲鳴、狂つた………。

「やれ、それも脱がせろ、全部とるんだ」

私はそう命令せずにはおれなかつた。身体中を妖しい血がたぎつた。兵隊たちはピチピチとはねかえる………しんで、ずるずると両足を伝つて最後の布片が大地に投げ出された時、………焼きつくような………中されて、今は力尽きた女は身悶えして泣いている。夏の太陽がきらきらと照りつけて、白樺の梢が不思議な明暗をその肉体に影を落している。生れたまゝの姿に返つたとき、それは何れの国の女であろうと、羞恥は共通のものなのだ。

絹子さんが辱しめられたと同じ姿態に女を

大地に縛りつける。

「曹長殿、此奴、………やりましよう。おい誰か獣医の所へ行つて××を借りてこい」

抜目のない沢田の言葉に一人の兵隊が走つてゆく、兵隊たちに囲れながら、羞恥にうちふるえる女の悲鳴と号泣が暫くつゞいた。三日二夜、私の部下たちによつて責められた女兵はとうとう息を引きとつた。

最後に私は本誌とのつながりをちよつぱり告白する義務がある。私の妻は本誌二十八年二月号に「しいたげられるよろこび」を発表した林田澄子であつたが、私達は過日合意の上離婚した。理由は彼女がマゾヒストとして成長したためである。彼女は彼女なりによりよき伴侶を得るであろう。又は澄子に対して一沫の道徳的な責任を感じつつも、澄子とのこれ以上の前進を好まない私は、今こそ二人の生活を精算すべきであると思つたのだ、願わくば澄子のためにも、又私にも共鳴を得る志のあらんことを。

(了)

×

×

×



二人の湯女の責められる物語

北 国 湯 場 哀 話

吉 野 朝 夫

一年の内三分の一近くを雪に閉じ込められるこの北国の山間地帯は、里では紅葉の盛りと云うのに、早や雪に野も山も閉ざされてしまふのです。ですから百姓の農仕事も雪に閉じ込められる迄は目まぐるしい程の忙しさでその疲労を慰すために、湯場の湯治を唯一の楽しみにして居りました。

これは、その北国の温泉場（湯場）にあつた二人の湯女の悲しい哀話です。

この湯場の宿の主は藤三と云う冷酷な、欲の為には何物も犠牲にして顧みない男で、百姓相手の宿（湯場）を経営すると共に、多少の金子も融通しては貧農の無智につけ込んで悪どい捲き上げ方をして居りました。女房のお兼もこれ又何かの上り者らしい莫連者で、亭主に輪をかけた様な女でした。この宿の雑男として働いている権次も、藤三が博徒の小親分時代飼いなした乾分らしく、親に似た子の譬、色と欲とにかけては藤三によく似た陰険な男でした。

この藤三、生来の欲深さは湯治に来る百姓達の手慰みを煽らせて、賭場を開帳し、権次にイカサマ賽子を使わせて絞り上げる事も抜目はありませんでした。この湯場に権三の金のかたに連れて来られた他国の女らしい娘が

二人、客の接待から湯殿、勝手炊事と凡ての雑用に使われて働いて居りました。娘達は鄙にはついぞ見かけられない綺麗な顔立ちの故に、幾度か藤三のため、危い目に遇いそうになつた事もありましたが、女房のお兼の鋭い目が光つて、色欲の虎口からは危く脱れていました。

其の為、欲望を満たせぬ藤三と、嫉妬に狂つたお兼のため、慣れぬ他国のこの山間の温泉場で朝は暗い内から、夜は真夜中過までも体の休まる隙も無く追い使われ、自分達の身の不運に悲歎の涙に暮れ乍ら、泣く泣く働いて居りました。娘の一人はお露と云い、一人はおみよと云いましたが、気の弱い二人は幾度か逃げ出したいと心では思い乍らも、藤三とお兼の鋭い監視の目に逃げ出す機会もなく又下手に逃げ出して捕つた時、藤三やお兼にどんなひどい目に遇わされるか知れないと、それを思うと足が辣んで泣く泣く心が挫けて仕舞うのでした。

今夜も今夜とて、客の寝静まつた夜半過迄追い使われて、やつと自分達の体になつた身を薄暗い階段下の女中室に横たえて、同じ繰り言乍ら、悲しい身の行方、来し方を互に語り合つては郷里に残して来た両親や幼ない弟

妹の事など思い浮べ、余計溢れ出でる涙を押さえ様も無く、互に抱き合つて泣いて居りました。

暗い行燈の明りが余計二人を哀れに照し出し、外は今宵も又音も無く降り積る雪に覆われて、紙張窓の破れ目から冷たい雪を含んだ風が吹き込んで居ました。火の気もあたえられぬ室で二人が涙に濡れ乍ら相擁している所へ、コツソリ忍んで来たのは権次でした。かねてから二人の容姿に獣欲の炎を燃していた権次は、この二人の娘を己が淫欲を満たした上で甘言をもつて連れ出し叩き売つて高飛びしようと考えていたのです。

貪欲な藤三夫婦の下で、こんな辺鄙な北国の湯場に何時迄も燻つている気はなかつたのです。前にも幾度か、厭らしくお露にもおみよにも云い寄つて、激しく二人にハネられた事のある権次なのに今迄殊更、機嫌をとる様にして来たのには、一にこの下心があつたからなのです。今が今、部屋に入つて来て後に立たれる迄知らずに泣き伏した居たお露とおみよは、ハツとして互に放れると身を部屋の隅にすり寄せました。

「お露、おみよ、何もそんなにこの俺様が来たからつて怖がる事はあんめえ」



「……………」

「ええ、お、俺らあなあ、外で手前達のずかる相談を、みんな聞いちゃったんだよ」

「嘘です嘘です、そんな事、相談なんかしてはいません」

「お露さんの云う通り妾達何もそんな…」

「オイオイ、何もそんなに隠さなくたっていいんだ。まあいゝや、俺りや、お前達に同情してるんだぜ、あの藤三親分とお兼姐御に使われちや、全く命が二つ有つても足りねえや

お前達を、俺ら可愛想だと何時も思ってたんだ、だからよ、此処から逃がしてやろうと思つてやつて来たと云う訳よ」

「権次さん、それほんとうですか？」

「誰が嘘なんて云うもんか、だが、俺様だつて、藤三親分に叛いてまで、お前達をずらかせてやろうと云う危い橋を渡る以上は、満更只じや、かなわねえからなあ」

「じゃあ、どうすればいいの？ 何にをあげたら？ お金もそんなにないし、でも妾達で出来る事なら」

「そうそうエへ、お露もおみよにバカに物判りが良くなつたなあ、お前達にたやすく出来る事だよ、と云つても何も取つて喰つちまうと云う訳じゃねえ、お前達二人を今晚一晚しつぽりと、この俺様が可愛がつてやろうと云うだけさ。手前達もたんまり楽しんで、其の上、この地獄から連れ出してやろうと云う寸法さ、だからよお、手前達の量見に依つちやあ、末永く権次様が可愛がつて、絹づくめで遊ばして置いてやつてもいいと云う訳だ、どうだ、俺の云う事を聞くか」

「いやです、そんな事。死んだつて、いやです」

「何に何に、死んだつていやだと、ようし、その言葉、忘れるな、今に咆え面かゝせてやるからな」

権次はいまいましたに、障子を音荒く閉めて出て行きました。

「まあ、ほんとに怖かつた事」

「妾、権次さんがゝつて来たらどうしようかと思つたわ、でもよかつたわ、お露さん」

二人はホツと胸を撫で下しました。然し次の日から藤三夫婦に加えて、権次のネチネチしたいびりが、二人の上に加りました。

或る晩、客の背を流し乍ら、客の口から同情につれて洩れたのは、何時の時代からこの湯場にコンコンと沸き出で止む事を知らぬ湯！ 天の恵みのこの湯も、馬の骨を湯船の底に投げ込む時は神の怒りに触れてピタリと止つてしまふと云う事を聞いたのは、おみよでした。其の晩早速二人は相談しました。

怖しい事だけど、そつと知れぬ様、湯船の底に馬の骨を投げ込めば、そして湯が止まれば、この湯場が廃めれば、危い逃亡を考えなくともこゝから抜け出す事が出来ると思ひ、お露とおみよは二人しめし合せて、それから幾日か経た或る日の真夜中過ぎ、丑刻頃寝しすまつた廊下をこつそり忍んで湯船の中に、



どこで見つけて来たのか馬の骨を二本投げ込みました。二人とも後を見るのも恐ろしく、逃げる様にして部屋に戻りました。そして二人抱き合つて今して来た事の恐ろしさに、考えつめてした事ではありましたが震えて一晩中まんじりともせず夜が明けました。宿は大騒ぎになつて居ました。不思議不思議何百年止む事なく湧き出ていたあの湯が、ピタリと止まつてしまいました。藤三は青くなつてがなり立てます。客はガヤガヤ云つて騒いでいましたが「はあ、こりや、どうしたちゆうこんだんべえなあ」「こりや、何か神様の祟りかも知れねえだよ」「今に何かある前兆かも知んねえだよ」など話し合い乍ら一人帰り、二人帰り、長湯治の客もみんな帰つて行きました。お露とおみよは権次に追い立てられ乍ら湯船の湯のかい出しに青くなり震え乍ら手伝つて居ました。そしてカラカラになつた湯船の底から馬の骨が二本出て来たのです。権次はにたりと薄気味悪い笑みを浮べて二人を見ました。二人とも、もう生きた心地も無く、部屋に帰つてからも抱き合つて震

えて居りました。だがあの渾々と湧き出ていた湯がピタリと止つたのも僅か一日で、又元の様に汲めども尽きぬ天然の湯が湯煙りを上げて吹き出したのです。(何かの機みだつたのかも知れません)

藤三は生き返つた様に元気になり、又以前の様に客足もボツボツ戻つて、山峡の辺鄙な温泉場なりに繁昌して行きました。然し藤三やお兼は何も云いませんでした。今にどんな酷い目に、何時呼びつけられるかと、生きた心地もなかつた二人はボツとしました。然しとう／＼藤三や権次の鋭い監視の目に遇つて逃げ出す機会も失つてしまつたのです。そして前にも増して酷使の明け暮れが過ぎて行きました。

それは旧正(昔はみな旧正)をあと五日で迎えるという前の晩でした。湯治の客も正月を迎える準備で殆ど帰り、湯場は閑散として二人の仕事も少なく、早目に自分達の居間に帰り、薄暗い行燈の火をかき立て乍ら身の上の話は落ちて語り合つて居りました。奥の藤三の部屋ではお兼の酌で長火鉢の前で藤三が呑んで居り、権次が下座に坐つて流れを貰いながら、三人で何かヒソ／＼話合つていました。三日許り前から激しい吹雪になつて、外は

白魔が、吹き募る風に乗つて荒れ狂つて居りました。ガラリと二人の部屋の戸が開いて何時の間にか酒臭い息を吐き乍ら、真赤な顔をした権次が入つて来ました。二人はハツとして、恐怖に怯えた目をして権次を見上げました。

「オイ！ お露、おみよ、旦那が呼んでるんだ、俺と一緒に来い」

そう云つて二人を引きずる様にして部屋から連れ出しました。二人とも権次に追い立てられて、屠所に曳かれる羊の様に、うな垂れて、藤三の居間の前に連れて来られました。

「サア、トットと入えるんだ」

権次に突きとばされて、お露とおみよは敷居際に崩れ伏してしまいました。お兼の酌でチビリ／＼やつていた藤三は、お兼と互にニヤリと顔を見合つて笑を浮べ、

「ヤイ、お露、おみよ、手前達はよくもこの藤三様を、ひでえ目に遇わせやがつたな！

さあ、これに覚えがあるだろう、とうから、手前達の仕業とは知つてたんだ、が考えがあつて今迄黙つてたんだ、今夜と云う今夜は許さねえ」

「……………」

「さあ、さつさと白状したらどうだ」

「ほんとうに図々しい阿女達だよ、黙つてちやあ解らないよ！」

お兼も憎々しげに二人を睨みつけて、どなりたてます。と権次が藤三の投げ出したその馬の骨を取つて二人の肩を小突き乍ら

「さあ、早えところ白状しちまえ」

と責め立てます。お露もおみよも、ワツと泣き伏して

「私達が悪うございました。どうぞ勘忍して下さいまし」

と涙に掻き暮れ乍ら藤三とお兼の前に打ち伏して歎願哀願しますのを、冷やかな目で見下し乍ら

「よし／＼、よく白状した、と云つてこのまゝ手前達を許す訳にやあ行かねえんだ。そのお礼に、たんまり楽しい思いをさせてやるんだ。おい、権次、この阿女達を裸にひんむいちまえ」

「へえ、合点でやす、ヤイ／＼さつさと着物を脱いで裸になるんだ」

「あれ、そればかりは許して！ 勘忍して下さいまし」

「何に、そればかりはだと、えへへ、そればかりはつて、裸になりさえすりやあいゝんじやあねえんだ、ぐず／＼云わずと脱ぐ

んだ、脱げなきやあ、こうして脱がしてやるぞ」

と先ず、お露の帯に手をかけると「あれツ／＼と立ち上つて逃げようとするので、権次に握られた帯は体からする／＼と落ちて行きま



権次

す。向側にはお兼が立つて居て、権次の手から逃げて来たお露の下紐に手を掛けて解きま
す。又お兼の手から逃れて走る僅か八畳の部
屋の中、藤三が着物に手を掛けて引剥ぐ、そ
して長襦袢、下襦袢とだん／＼お露の体から
落ちて、赤い燃える様な絹の湯文字一枚にさ
れてゆくのでした。

捕われた哀れな小雀を鰯り物にして楽しむ
様に、次のおみよも同じ様にして赤い薄物の
湯文字一枚にされてしまいました。そして泣
き叫ぶ二人は、かねて用意してあつた荒縄で
後手、高手小手にキリ／＼と縛り上げられて
真白な雪を欺む様な其の肌に荒縄が七重八
重と、ひし／＼と喰い込んで、ぽつちりと盛
り上つた、まだ十九と二十のツブラな隆起は
無残にも荒縄に二つに割られて、見る目も痛
々しそうです。

髪は乱れ、縄尻を長く権次に持たれ乍ら、
恨めしそうな目をして藤三とお兼を見上げて
います。顔にかゝつた乱れ毛を唇にきつと噛
みしめた顔の凄艶さ！ 藤三の情欲の炎がメ
ラ／＼燃え上りました。

「サア、何をそんな怖い目をして睨むのさ、
今夜は一時、旦那様をお前達に貸して上げる
から、冥途の土産にたつぷりと可愛がつてお

貰いよ！ まさか死ぬ前にこの世の楽しみ
を知らずに殺すのも可愛想だから、妾しや
あ、今夜は思い切つて嫉妬の心を捨て、や
るよ。その姿で可愛がつて貰うのも亦乙
なものさあね」

「サア、お前エさん、向うの部屋で心ゆく
まで楽しみを知らせておやりよ！ 妾が承
知なのだから心配おしでないよ」

「お兼！ すまねえ、それじゃあ、どれ、
そうしうか」

「こりやあ姐御、凄いい思ひ付きだ。後でお
下りをこちとらにも、エへ、へ、」

「黙つてさつさと連れてお行きよ、後は仕
置から何から何に迄、お前に任せるんだ、
どうなと、煮ようと焼こうと勝手にするが
いゝやね」

「有難てえ！ おつと合点、承知の助と来
まさあね」

そして権次に縄尻を持たれ奥の間に曳き
立てられたお露とおみよは、赤い腰巻一枚
の丸裸の男の肌を知らぬ蕾の身を、藤三の凡
ゆる陰険なそして残酷な方法に依つて散らさ
れて行つたのでしよう。お兼姐御と権次の酌
みかわしている部屋へ藤三の貪欲の生簀とな
つてゐる世にも悲しい二人の叫声が聞えて来



ます。

その中、にやりと笑い乍ら藤三がぐつたり
とした二人の縄尻を持つて引きずる様にして
現れました。

「どうお、お前さん、大分お楽しみだつたわ

告白の子

篠原幸雄

ね、この阿女達もさぞ楽しい思いをしたことだろう。だが、もうこれつきりで妾に隠れた浮気はさせないよ！」

「馬鹿なことをいうんじやねえ、誰がお前を置いて浮気なんぞするもんか、こいつ等は唯随分に責めてやつた迄ヨ。さア、権次、手前に二人共呉れてやるから、好きな様に、恋の恨みも序でに晴してやれ」

「へエ、有難うござんす」
「だが、この吹雪、誰にも知れはしめえが、

裏木戸から引き出せよ、わかると土百姓奴らがうるせえからなア！」

お腰一枚のお露とおみよは、馬の骨でこずかれ乍ら、勝手口から縄尻をとられて、素足のまゝ吹き狂い降り積つた雪の中へ連れ出されました。雪は容赦なく二人の白い肌、赤い湯文字に針のように突き刺つて、素足はもう何の感覚もなく、打倒れると権次の手にした鞭が苛責なく見舞つてくるのです。

其の後、藤三、お兼、権次の三人は何喰わ

ぬ顔をして過していましたが、やがてこの雪国の湯場にも春が訪れてきました。お露とおみよの哀れな、そして輝くばかり美しい凍死死体が、解け初めた雪の中から、村民たちの手によつて発見されたのは雪解水が川の水嵩を増し出した頃でした。三人の悪事も遂に暴かれて、この平和な山家の村を追われると共に、獄門台の露と消えていったのも当然の事でした。

終り

一

東京の中心から少し北にはずれた隅田川のほとりに一寸した洋館風な建物が並んでいます。その端にあるアパートの管理人の小母さんの所に私は娘分になつて住んでいます。

このアパートには色々な人が住んで居りますが皆女性ばかりで、男と云えば私だけ、私と云つても現在は女なんですもの、文字通りの女人アパートつて云う訳ですわ。// どうして男のお前が管理人の小母さんの所に住んでいるのだ//と思われるでしょうが、だつて色々なわけもあるのよ。

第一アパートの規則には、四十才迄の女性

たる事。それから現在の生活に満足している事。ようするに仿ける四十才迄の女性で犯罪なんか、しない様な人なら誰でもよいのですわ。このアパートは、私の小母さんが終戦前主人が亡くなられた頃頂いたお金で、ある会社が寮にするつもりでしたのを安く買取つたのだそうです。平家建ですが地下室もあり、しつかりしたものですわ。

それから、私がどうしてこのアパートに住む様になつたか、お話し致しましょう。

私の父は或る小さな会社の重役でした。そして母は父と恋愛結婚しただけあつて美しい人でした。私の上に姉が三人あつて、その末子として生まれました。男として生まれはしま

変性男

したが、女姉弟の中で育つたせい、非常に女じみたのも無理はなかつたと思います。私の両親は私が服だとか、身の廻り等は、いつも綺麗にしていなと大変に叱りました。三人の姉も両親に負けず美しい顔立をしていて、気立もやさしく、私をとて可愛がつてくれました。

ある時、盆おどりで仮装おどりがあつて、この時すぐ上の姉キヨコ姉さんが、「幸雄さん、あんた私の洋服を着ておどりに出て見ない？」

と云われたので、私もその気になつて「姉さん、出て見ましようか、そして一等を

取つて来ますよ」

と、張切つて云いました。そして直ぐさま風呂へ入り、上るとそこにはもう、姉がよそ行きに着る真赤なバラ模様をあしらつたワンピースを持つて待つていました。さつそく、姉に手伝つて貰つて着ようと思ひ、パンツを採しましたが、いつの間にか、私の洋服を何処かへ持つていつたのか見当りません。すると姉は、私が面くらつてゐるのを見て、面白そうに、

「さあー、これを穿いて」

と云つてズロースを

差出された時、私はなんだか変な気分になりました。意を決してその中に足をつゝ込みますと、グーと太もゝに喰い込むゴムのしまり具合、腰にはふつくらさせる為にでも入れた

のか、綿のような物が入つていて気分は高なるばかり。乳バンドにやはり綿をつめてふくらませたのを胸にきつちりはめられ、その上からやわらかなピンク色のシユミーズをかぶ



谷彦
後

り、ワンピースを着せられました。

この時が私の女装した最初で、勿論その日の仮装おどりでは、一等を取りました。後になつて、ずい分女の姿に気を引かれたのも、この時の事があつたからだと思います。

その後二、三年の間に三人の姉はそれぞれ嫁入つてしまい、家には私と両親の三人だけになりましたが、この頃から、倦怠期と云う

んでしようか、年中母が

父にいじめられていま

した。ある時、私は自分

の居間で本を読んで居り

ますと、居間の方で父

と母がいさかいを始めて

いる様子です。私は又か

と嫌な気持ちになつて隣の

部屋へ入つてそつと覗い

てみますと、もう問答無

用とばかり、父が母に跳

びついて帯をほどき始め

ていました。逃れようと

もがき続ける母、だがや

がて追いつめられて、母

の体から蛇の様にずり落

ちた帯、剥ぎ取られた着



容彦

物、目にしみる様な真赤な長襦袢一つにされ

た母、父は何を思つたか腰紐の一つを手にし

ますと、いやがる母を後手に縛り上げ、ズボ

ンのベルトをはずし、

「どうだ白状するか、あくまで白をきるつも

りか」と、どなる様に言いました。

「何を云われても、申し上げられません」

と母の口が固くしめられますと、やにわに

父のびしりツと打ちすえるベルトのひびき、

「あーッ」という母の悲鳴、この時程、私は

何となく母としてより女性としての艶めかし

さ、と云いますか、マゾ的な美に魅かれた事

はありませんでした。その時を期に両親は離

婚、私はおきまりの不良の道へ――。

二

その日、朝から何も喰

べず、場末の安宿の日当

りの悪い二階で寝そべつ

ていますと、昨日会つた

三郎の言葉が思い出され

て来ました。三郎は私の

軟派の相棒で、話と云う

のは隅田川ぞいにあるア

パートの管理人の所への

たゝきの計画だつたので

す。幸いにも昼間の内は

他の者は皆出払っている

ので、管理人一人と云う

話に勢いづき、私も落ち

る所迄落ちてやれと云う

ヤケな気持ちから相棒を引

き受けましたが、何とな

く軟派以外の事はやらなかつた私は、足ががた／＼してしうがありませんでした。飯もどが通らず、そのまゝ出掛けました。

松屋デパートのそばで落合つて、話合い乍ら行くと、アパートが見えました。彼の後に従つて裏口から庭づたいに管理人の室の下まで来ますと、下調べがよくついていると見え、丁度室を出て行つた様子でした。彼は物慣れた調子で室内に入り込み、私も続いて入り込んで物色を始めました。が、室の調度を見渡しますと、女物ばかり、

「はゝあ、それで此処をねらつたんだな」

と一人合点をしていますと、いきなりドアが開いて管理人が帰つてきました。三郎はいち早く身軽に窓から跳び下り逃げましたが、運悪く私は朝から何も喰べていなかったので一瞬、ふら／＼として机の足につまずき、起き上ろうとした処を難なく首の根つこを押さえつけられました。女だな、と思いました。が意外に強い力に驚きました。そのまゝ腰紐やロープでがんにがらめに縛られ、猿棒まで噛まされ戸棚の中へ押込まれて、外から心張棒をかつて彼女はまた外へ出て行つたようでした。私は警官でも呼んで来て引渡されるのかと思いましたが、なる様になれという捨鉢な

気持で、緊張が解けたゆるみからか、何時の間にか寝入つてしまいました。

する／＼という、ふすまを開く音に目が覚めますと、電燈の光がさし込んできました。

「あゝ、いよ／＼警官に引渡されるのかな」と思い乍らびく／＼していますと、意外にやさしく小母さんの手が私の体を抱き上げ、座敷の真中に出されました。手足はしびれ切つて感覚もなく、あたりを見廻すと警官の来ている様子もありません。何時の間にか夜が更けていると見え、あたりは皆、寝しずまつているようです。やがて猿轡も体に巻きつけられたロープも取りほどかれ、傍らにあつた食卓を取り寄せ

「さあ、お上り」

と云つて差し出された時、私は何となく涙が出て困つてしまいました。朝からの空き腹にむさぼる様に食べ、ほつと一息つきますと小田さんの視線がじつと私の顔にそゝがれています。私は何だか羞かしくなり、下を向いて何とお詫びをしようかと思つていますと小母さんが

「何だつて、お前の様な体質の弱い者が荒くれ仕事の泥棒なんか、やろうとしたんだい、何かわけがあるんだらう。あるんだつたら話

してごらん？」

と親切に云われ、私も何だか、この小母さんが本当の母親のように思われ、今迄の身の上話をしますと小母さんも涙ぐみ乍ら、

「実は、お前の顔を見て驚いたけれど、なんだか、私の娘が会いに来たと思つた程娘に似ているんだよ。考えて見ると私は馬鹿だつたよ。丁度お前のお父さんやお母さんの様に喧嘩ばかりしていた時があつてね。その日も朝から始まり、それが娘に八ツ当り、慣れない娘に親類へ、使いにやらせたのが過ちの因、電車に乗る時ホームと電車の間に落ち、白木の箱になつて帰つて来た時は、それこそ私は半狂乱になつて泣いたもんだよ。主人に「死んだ娘は帰つて来ないんだ、あきらめろ」と何度どなられたか知れなかつたけれど、私に取つては可愛い一人娘。その事で又喧嘩を始め、わざわざいらしたのか今度は主人が会社の現場で仕事中に足を取られて胸部に鉄材のかたまりを受けて、たんかて帰つて来た時、何とも云えない自分の馬鹿さ加減に気がついたが、もう遅かつたの」

と云つて涙を拭きました。

「その日のうちに私の看病の甲斐もなく、あけ方に主人に死なれる前に泣いてあやまつた

わ。勿論主人もいゝんだ〜と云つて息を引
き取つたの。それ以来私は人とは喧嘩はすま
いと思つたのよ。所でお前はこれから悪事を
絶対しないつもりなら、小母さんと一緒に暮
して見ないかい？」

と云われました。私もあの不規則な生活か
ら足を洗い、この親切な小母さんと一緒に暮
せるならと思ひましたので「えゝ」と返事を
しますと、小母さんの喜びようつたらありま
せんでした。ふと小母さんが困つた様な顔を
しましたので、

「どうしました？」

と私が聞きますと、

「実は困る事があるの、私のきめたこのアパ
ートの規則では、女以外入れてはいけないと
云うのがあるんだよ」

と云われた時、私は

「あーあ、私はやつぱりあの泥沼生活から出
られないのかな」とつぶやきますと、

「そうだ、いゝ考えがあるよ、お前本当に泥
沼生活から出たいのなら、女になつてこのア
パートで一緒に仲よく暮さないかい？」

と云われた時、一寸、嫌な氣持がしました
が、ふと浮び上つたのは幼い日の女装の思い
出でした。今迄だつて皆から女みたいだ〜

と云われていましたが、一そ女になつてしま
えばいゝかも知れないと思ひましたので「う
ん」と二つ返事をしますと

「娘の着物も大切にしまつてあるし、丁度い
ゝ、今を境いに心から女に生れ変つたつもり
になるんだよ。」

と云われ私もその氣になつて喜びました。
氣がつかますと窓の外は白々とすでに夜が明
け始めて来ていました。

「あら、もう夜が明け始めたわ。」

と、私がからかい半分に小母さんに云いま
すと、小母さんは

「その調子その調子」と云つて笑い乍ら

「名前は幸子つて呼ぶからね、もう今日はお
休み。」

と云つて蒲団を引き出して貰い、私はその
中へ体を横たえました。小母さんはもう朝の
仕事を始めたらしいのを寝たり覚めたりして
夢うつゝにおぼえて居りましたが、疲れた体
はいつしか深い眠りに陥込んでいました。

昼過ぎになつてやつと目覚めますといつも
の安宿とちがいますので「あれ！」と思いま
したが「あゝ、そうだ、今日から女になる筈
だつたんだな」と思ひ出し、本当に女になり
きれぬかなと、不安になつて考えこんでいま

すと

「幸子や、起きたのかい！」

と呼声がありました。その小母さんの声で元
氣つき「はあーい」と返事をしますと「その
調子〜」とにこにこし乍ら部屋の中へ入つ
てきました。起き上りますとすでに私の為に
娘さんの形見だという服類が置いてありまし
た。小母さんが手伝つて着せてくれましたが
「これから女としての修業をみつちり、あた
しが仕込んであげるから、お前もそのつもり
でね、言葉づかいや、態度はその度に注意を
するから氣をつけるんですよ。」

と云いました。私は「はい！」と云います
と「さあ、御飯をお上り」と云つてお膳を出
してくれました。早速あぐらをかいて座り込
みますと「これ！」と云つて腰をいやと云う
程つねられたのには閉口致しました。喰べ終
ると早速お台所を手伝わされ、しばらくす
ると小母さんも終つて入つて来て、

「今ね、隣のおかみさんに私が要るつて云つ
て貰つて来たけど、これを頭にお巻き」

と云つてネツカチーフの様なものを取り出
して、私の頭を上手に包んで下さいました。

(つづく)



私の悦虐ノート

妻 木 満 三



私が自身の異常な性癖について目覚めたのは小学校の五年頃で、その頃は「サジズム」だの「変態」だのという言葉さえ知らなかったが、新聞や小説等で「虐待」とか「拷問」とかいう活字を見ただけで私の身体中がぞくぞくする程嬉しくなつて、その新聞や雑誌をそつと二階の自分の部屋へ持つて行つて読むのが楽しみであつた。「虐待」の見出しがあれば継子いじめが多かつたが「拷問」はまだ昭和七、八年頃で警察で人権を無視した刑事の女被疑者に対する拷問が公判延で問題になり新聞はその拷問の模様をつぶさに述べたものさえあつた。

私はその記事を読み乍ら虐待や拷問が生ぬるく思えたのだが、これが小学校五年生の考えたから末恐ろしい。どの様に手ぬるく思えたかという点、例えば継子いじめであれば、継母は継子に対して、灸、焼火箸、煙草等で肌を焼くのがおきまりのようであるが、私の考えは単にそれらを肌にあてるだけでなく、焼火箸にしても肌に幾遍も当て、肌穴がいく位にしなければ気がすまない。それ上、アルコールやヨーチンの様にしみる薬を注いで苦しめる。又寝小便をする継子に継母が子供の大切なところにゴム輪をはめておいたという三面記事があつたが、私はその継子の大切

なところを切りとつてしまつたら、とその時の光景を妄想に耽つたりした。

当時、キングに江戸川乱歩先生の連載小説で美女が磔の人形に変えられて、同じ電気仕掛の刑場役人に生ながらにして、竹槍で乳の下を突かれる一節が大いに気に入つて何回となく読み返えたものだ。同じ頃、他の小説家の時代小説に爪を一枚一枚はがされて拷問される場面が刻明に描写されてあつたがそれも非常に好んで読んだものゝ一つである。

当時露店なんかでよく売つていた豆本に、「継子の悲哀」「みなしご」「生さぬ仲」とかの題をつけ（中には折檻や拷問の場面の殆

どないものもあつた。表紙に赤い腰巻一枚の娘が帯で後手で縛られ、後にキセルを持つた女が立つているのや、髪を掴まれて今まさに焼火箸をあてがわれようとしているや、雪の積つた井戸端で冷水を浴びせられている図なんか描かれてあつた。私は自分で、そんな絵を描いてみたいと思つたが、生れながらに絵は下手に生れついていたので、せいぜい写し描きをする程度であつたが、それとても意に満ちたものは一つも出来なかつた。

小学校六年頃から中学三年頃迄は、腰巻に

執着を覚えた。それ迄も腰巻を見るのは好きだつたが触つた事などなく、女中が風呂へ入る時の腰巻姿をのぞき見る位が関の山であつた。その中私は今迄読んだ小説の中の苛められている女になつて見たく、その頃より次第にマゾヒズムの傾向を帯びてきた。線香の火で二の腕を焼いてみたのがやみつきで、最初、細い線香を使つていたのがいつしか蚊取線香に変つていった先ず自分が今、人に虐められ

ているのだという妄想で裸になり、足を細引で縛つて畳の上に寝ころぶと、線香をとり上げて、それを股のあたりに押し当てる。

自分乍らその熱さに耐えかねて「ウーム」とうめき声を挙げた程だつた。

その中、素裸では面白くなり、女が責められているのなら腰巻をしていなければと思つて、それから腰巻探しを初めた。然しそれは容易な事で、姉の行李の蓋をあけると赤ネルと絹モスの上等なのが簡単に手に入つた。私は赤ネルの腰巻を素肌にまきつけて鏡

の前に立つた。この時が私が腰巻に触れた最初であつた。次には猿ぐつわのつもりで絹モスの方を口にくわえたり、顔一面に覆面のようになきつけたりした。

腰巻だけではなく、其の上に毛糸のセーターをじかに着て畳の上にくるげ廻つたこともあつた。毛糸が素肌にチカチカしてある程度の興奮を覚えた。

風呂へ入れば又責場があつた水道の栓をひねつておいて、手を後に組んで縛られている思いで頭から水を浴びたりした。次に腰台の上



上に両足を揃えて正坐し、太股の上に洗面器をおいて一杯水を入れた。家の洗面器は大きかつたので満水すれば相当な重さになり、坐っている足に腰掛の角が当つて、次第に痛さが増して遂には痺れてくる。しばらくして「許してやるから、その水を浴びろ」と命ぜられた様な気になつてざあアと全身に浴びせかける。一度は水に浸されたつもりで湯の中へ頭を突込んだ事があつたが、水中で息をして鼻の

穴からいやという程湯をのみ、頭の心までジーンと痺れる思いで、それにはさすがの私もこたえて二度としない様になつた。(便所の思い出は省く)

中学四年の頃から煙草を吸う様になり、煙草の火で肌を焼く事を覚えた。今迄二階の私の部屋の隣りには姉がいたが、姉が嫁いでからは二階は私の独り天下で思う存分好きなように自分の身体を虐げ楽しむことが出来た。

その頃、隣家に十五、六の寝小便のくせのある少し足りない女中がいて、主人夫婦が恥しめて直そうとしたのか、オシメを当て、おくことが、隣家といつても長屋の壁一重であるから私の方へ筒抜けに聞えてきた。

「ねえや、オシメを持つておいで」から始つて「何時もの通りするんだヨ」「腰をもう少し上げて」「股を開いて」等という言葉から私は確かに女中にオシメをさせているという想像には間違ひはないと思つた。現に赤ん坊のいないのにオシメが洗濯場に干してあるのを見た。私は蒲団の中でその場面を想像して花恥しい十五六の小娘が他人の目の前にお尻をさらけ出しておしめを当てられるのは、どんなに辛い思いだろうかと思つた。そして私は其の場面を実際にやつてみた。絹モスの方

は姉が嫁ぐ前に返えしておいたが、ネルの方はひそかにかくしていたので毎晩着用に及んでいた。オシメには適当なボロシャツ、布切は昼間から用意してあつたので実行は簡単であつた。

先ず寝転ぶとあれや、これやと想像してみた。腰巻は、はぎとられるのかまくりあげるのか？ 私は腰巻をまくり上げた。そして両足を揃えて高く上げ、腰を浮かして、長目の布で丁字形に尻の下に敷き込んだ。そしてボロぎれを前に当てがつて尻の方から締め上げると、その上を細紐で縛つて、オシメカバーのつもりで、股引の膝から下をチョン切つたのを穿く。股引をはいた頃からなんとも云えない気持ちになつた、腰巻をもとの通りにすると、私は布団の上に腹這いになつた。この時は私が今迄経験した中で最も愉快なものであつた。

私がこういった遊びに耽りながら、毎日の新聞から切り抜いてスクラップしていたコレクションは相当になつた。「事實は小説よりも奇なり」というが実際にそうだ。その一部を挙げてみれば、――

「継母の本性をあらわす、継子を虐待、頭部を薪で打ち、腹部を焼火箸で折檻、寒中素裸

にして二階に監禁」「美貌の女中に嫉妬、顔に焼ゴテ、耳をひきちぎる」「〇〇署で人妻を拷問、ゴパンにすわらせ、その上着物の裾をまくり上げる、腰巻の紐まで解かれ刑事に両足をつるさる、物差しを局部に差し込まれ出血さゝる、股に木刀をつゝこまれてかつがれる。片足を捕縄で縛られて吊される。」

「十五年も継子を納屋に監禁、納屋は大小屋より不潔、空樽に用便があふれ、係官もあきれる。」「妾の子を小屋に十年余も監禁、胸に残る頭大のあざ、便所の水を飲んだ為に再び縛らる、首に巻いた縄が命取り、解剖の結果胃袋に一粒の米もなし、至る所に灸のあと赤紫のあざ」「継子の寝小便に手を焼き局部にゴム輪を、継母は連子と共に映画見物、さるぐつわをかましておいのに何故泣き声が洩れたのだろうかと平然と語る継母」「サジズム夫婦、女中を虐待、犬より劣る扱い、手足を縛つて土間に寝させる。留守中、手足の縄を切つて逃亡、隣家にかくれているのを発見され、狂人といつわり連れ帰る、腰巻一枚にしてつり下げ、足の裏に二銭銅貨大の灸を据え歩行の自由を奪う。」「素裸でつるされていゝ娼婦を臨検で発見、毎日八勺程の塩水を飲ませ、革バンド青竹で毎夜叩く、客もまじり

折檻、娼婦は死一步前、寝過したと手足腹部に焼火箸」「野良犬の如く街をさまよう少女継母に虐待されて家出」「素裸で手足を縛られた少年、背中一面蚊取線香の火傷」「生々しい焼印のある、サトカス少女保護さる」等々、当時の新聞はセンセーショナルな見出しで書かれていたのでサジズムの血を湧き立たせるに十分であつた。

中学校を卒業するとT市の専門学校の寮に入つた。寮では私的制裁の華やかな頃であつたが、不思議に一度もそんな目にあつたこともなく、卒業後、海軍の官庁に就職、次いで現役で海兵団に入団、海兵団は生地獄と云われていたが、ここでも一度もなぐられた事もないままに終戦直前に帰郷した。寮生活、海軍官庁に奉職、入団と其の間、あれ程責めに耽溺していた私だつたのに、そんな事はさっぱり忘れ果てた様に平々凡々たる生活であつた。

終戦直前にT市へ帰つたが、母はすでに病死して居り、家は焼けていなかったが、疎開させておいた荷物は疎開先で戦災で焼かれていたので、責めのスクラップブックや腰巻等はすべて烏有にきしてしまつた。

終戦直後の混乱期、私はなすこともなく、

戦前に遊んだA町がなつかしく、ブラブラとあてもなく見物に行つた。有名なA観音は焼けてしまつて、あたりは見る影もなかった。映画でも見ようと盛り場を歩いてゆくと、——因果はめぐる——と題した毒々しい看板を掲げた見世物小屋があるので、気を引かれて中へ入つてみた。

其処は驚くなかれ、責め絵の展覧会場ではないか、拷問、私刑の絵がずらりと並べてある。其の中で一番気に入つたのは、「紅血、かけ血」であつた。赤い腰巻一枚の女が吊されて打たれているところ、梯子に逆さに縛られて、太股もあらわに口のあたりを鉤のようなもので突かれて血が流れている図、蛇を巻きつけられようとしている図、これ等を見ている中に、今迄忘れていたサジズムの血が湧き立つのを覚えた。特に腰巻をまくり上げられ後手に縛られた女が木馬に跨がされている図を見ると、いよいよおさまらない気持になつてきた。

其の晩、久しぶりに自分の身体を虐めてみた。母の箆笥から桃色の腰巻を見つけ出すとそれを腰に巻きつけ、木馬の代用に探した本箱を室の真中に持ち出してその上に跨つてみた。手を後に組んで縛られている気で股の痛

くなる迄跨つていた。翌日は股が痛んでビツコを引いて歩いた程であつた。

当時、一軒家にたつた独り住んでいて、誰一人訪ねてくる者もない安心感から、日中でも雨戸を閉めきつて、マゾの快感に浸つた。残念な事に相手がなかつたので、他人から残酷に扱つて貰うことは出来なかつたが、モグサを用いて腹部に灸をすえ、焼火箸で太股を焼いたりした。脛に据えたソラマメ大の灸が膿み焼火箸の跡も膿んだのには弱つた。その傷が治る迄は銭湯へも行けず、家で行水した。膿んだ後は治つた今でも、はつきりと傷跡を残している。

間もなく故郷へ引揚げたが、その家も私の住居であつた。戦後、ずつと失職していたので退屈なまゝ、一時氾濫したカストリ雑誌に興味を持つて、あらゆる雑誌を漁つた。その中で「東洋のサジズム」と題した一篇が今でも忘れられない。私の氣にいつたのは女工虐待である。私は「女工哀史」の本を探して、むさぼり読んだ。雑誌の広告で「責めの本」のある事を知り早速申し込んだ。その時伊藤晴雨先生のように、責め画を専門にしている方のある事を知つて意を強くした。

世の中も落着いて、私は官庁に勤めたが独

り身の気安さから、手当り次第に責めに関した本や雑誌を取寄せて、相当な量に達した。二十八才で結婚したが、妻にはそれらの本を秘していた。暫くして新婚生活も過ぎたある晩、思いきつて、その中の一部の絵や本を示して、この様なことをやらせて呉れるか、

或は私を虐めて呉れるか、と頼んだが、早速手きびしくはねつけられてしまった。もとより、気の弱い私は、無理にそれを実行すること、又させる事も出来ず、日夜煩悶した。私は何故、この様な妻を娶ったかと後悔した。そして、もつと相手の性格を見きわめて

から結婚すればよかつたと残念に思った。サジ的か、マゾ的な妻であつたなら、私も心から愛することが出来たであろうに。そして、今、私はこの妻と別居生活を続けている。誰か、サジ的かマゾ的性質を有する女性はいないものだろうか。



— 獵奇マニアの手記 —

眼帯に憑かれて

菅野 朔朗



世間には種々な変つたものが好きな方が居ります。例えば女性のお尻に、憧れたり、汚物愛好家や、女の責め等にわたつて居りますが私は眼帯に大層魅力を感じて居ります。皆様には何のかわりもないあの眼病の後に掛ける眼帯が私には非常に刺戟的な物となるのです。私は幼時より、眼が悪くなり易い性質で春秋等の季節の代り目には何時も眼を悪くし

て、常に眼帯の厄介になつて居る關係から、此の眼を圧迫する眼帯に非常に魅力を持つ様になつたのです。あの真白な、セルロイドで出来た眼帯を見ただけで私の胸はうづくのです。殊に女性のこれを掛けたのを見るともうたまりません。それもガーゼの大きさも眼帯にぴつたり合つてゴムの紐がきつちりとしまつて居るのが素晴らしいのです。

私は何時しか眼科医院の横の木の蔭に立つて居りました。それは先程若い女性が（私の想像ではどこかの店に勤めている人らしい）この医院の門をくゞつたのです。〃彼女はどうしたのだろう〃とか〃今頃はあの眼科医の前に坐つて眼帯を掛けられているのだ〃等と考えてさつきより胸がわくわくしてきて居るのです。やがて入つてから十五分

位して彼女は案の定、全く私の期待通り、左の眼に真白な眼帯を掛けて出て来ました。門から出た時、片眼の為、見にくそうでしたがやがて歩き出しました。早速私は後をつけます。彼女は眼帯が気になるらしく、盛んに眼帯に手をやります。お化粧をした顔に白いガ―ゼの上から真白な眼帯が左眼を覆っています。ぴつちりと眼に合っていて、片眼だけでうつとおしように、又何となく不自由そうに歩いて行きます。オーバーの襟を立てた彼女には、もうすっかり眼帯が合っていて真白な眼帯が、彼女の一つのアクセサリーみたいに実によく似合っているのです。もう私はこれを見ただけで何とも表現出来ない激しい興奮におそわれました。

昔から「眼病み女に風邪ひき男」という言葉がありますが、実際眼を患って眼帯を掛けた姿は何となく、せつなさ、そして不自由さ（か弱い女の身にかけた眼帯は）を感じさせます。女学生の間でもこの眼帯は一時相当流行した様で、私の知っている女学生も何時も眼帯をポケットに入れて、時々それを掛けては「どうよく似合うでしょう」等と私に云ったものでした。

所で私が後をつけた彼女は銀座のお店に勤

めている人で、その日私はその店の前を行ったり来たり、又前のコーヒー店に入つて一心に彼女の姿を凝視していたのです。店の洋服に着かえた彼女はしばらく姿を現しませんでした。きつと鏡の前で新しく眼帯を掛け直したのでしよう。一段とその眼帯が印象的です。その日は彼女は一日中眼帯を掛けばなしで全然はしませんでした。盛んに気にはなるらしく眼帯に手をやつてはいましたが、大抵の人は眼帯を掛けられると、私の見た上では、十分間に一回位は眼帯に手をやります。動かすわけではないのですが、眼に何か押しつけるような、うつとおしい眼帯を掛けられていると自然に手が行くのだと思います。

確かに眼帯はうつとおしく、又不自由なものです。それが又何とも云えぬ素敵な興奮を私に与えるのです。はずしたいが、而し掛けていなければならぬ。この強制的みたいな所が、一種の責めなのです。眼帯を掛けていると直ぐに見立ちます。それが一種の羞恥感みたいな気を与え、これが皆の前で裸にされ後手にしばられ、恥辱を受けている様な一種のマゾヒズム的な雰囲気になるのです。女性是一般にこういう眼帯とかマスクとか繃帯等がお好きの様です。冬になると大抵の女性は

真白なガ―ゼのマスクを掛けています。これも只一重に防寒用、衛生用だけとは云えない様です。とにかく日本の女性の方は、こういう病氣のものに憧れを持っている様です。

古川様等もマスクに特別の魅力を持つていられる様に、私は眼帯に対して、世間一般の人と異なる、激しい憧れ、興味を持つています。私の此の眼帯、マスク、繃帯に関する異常な程の刺戟は皆様には御解りにはならないと思います。

殊に眼帯は、長期にわたつて掛けられているのが良いのです。店で眼帯を掛けた女性を見ると、「あの人は朝十時頃掛けられているのだからもう随分長時間掛けているんだな、つらいだろう」と考えたり、その人が一週間近くもかけているのを見ると「もう一週間も眼帯を掛けている」という考えだけで、私の興奮は絶頂に達してしまうのです。是は實際の話ですが、私の下宿していた家の前が映画館の並びで、その中の一映画館の切符りの女の子が眼を患って眼帯をしていた時のことです。私の部屋からその女の子が見えるので、もう毎日毎晩じつと見ているばかりで何の仕事も手につきません。初めは左眼に眼帯をしていました。盛んに気になるらしく眼帯に始

◇告白と手記と体験◇

懸賞募集

★賞金★

優作	一篇に付き	三千円	若干篇
秀作	一篇に付き	二千円	若干篇
佳作	一篇に付き	一千円	若干篇

規定

- 一、枚数は一篇十枚から二十枚まで、若し超過しても三十枚を超えないこと。
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は別に定めませんが、入賞作品及びその経過は誌上に発表します。
- 一、賞金は入賞作品発表と同時に御送りします。

●告白記の募集●

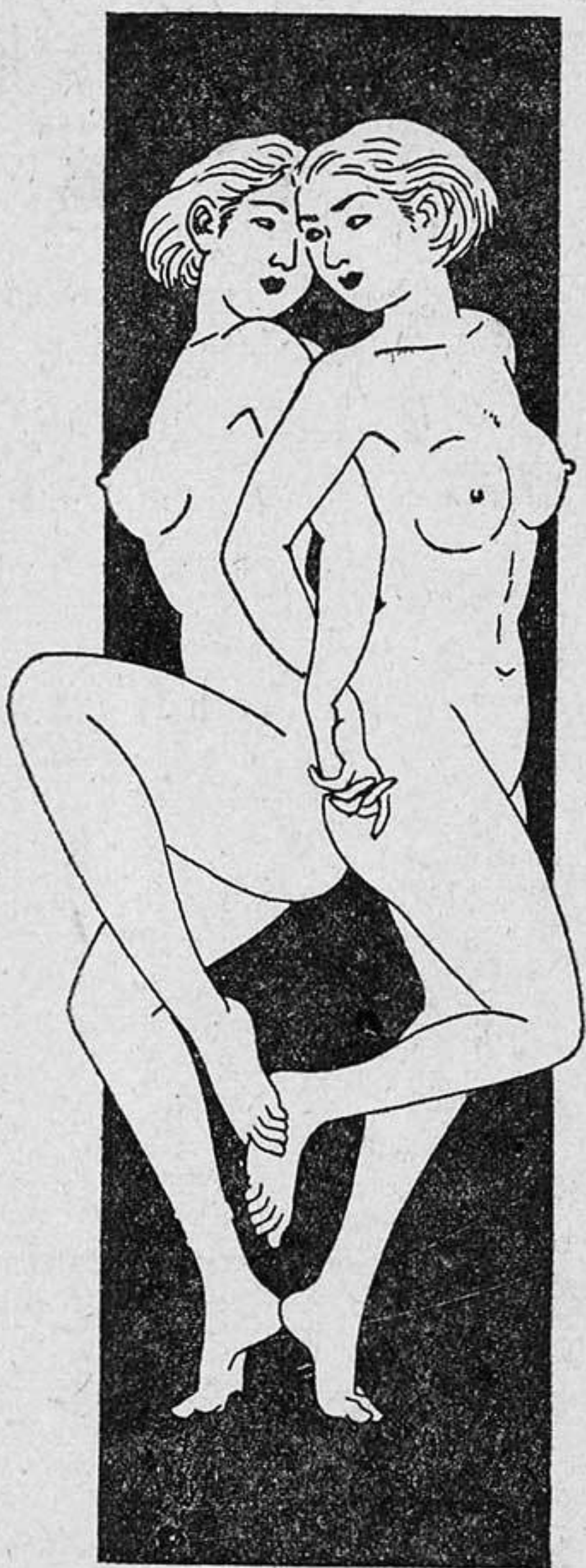
- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます
- 一、原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便百瓦まで八円にて御願ひ致します。

(編集部)

終手をやつていました。そして映画館はもう八時頃になると、入る人も少くひまになり、彼女は所在なさそうに映画館の中を歩いたりしています。しよつちゆうガラスに顔をうつしては、眼帯を見ているのです。そして彼女も事実眼帯が気に入つてゐるらしく、病める眼も又楽しいといった風なのです。彼女は五日位左眼に掛けていましたが、翌日からは右眼に眼帯をしていました。そしてそれが二週

間近く続いたのです。朝十時頃から来て、眼帯をした上にマスクをして、掃除等をしていきます。そして夜映画が終つてから帰る十一時頃迄、何時私が見てもその眼にはあの真白な眼帯がきつちりと掛かつているのです。片目の不自由なのと、又別に而し何となく甘い、楽しい様な光景でした。確かに女性には眼帯が好きな様です。マスクも同じで頸に真白な縋帯を巻いて、そして更にマスクを掛けている

人を良く見ますが、こういう人等はやはり私共と同じ様な考えの人ではないでしょうか？只感冒の為に縋帯を首に巻いているだけではいい様です。少くとも好きであることには間違いない様です。私も古川様と同じ様に確かに異常な性格の持主かも知れませんが、今夜も私は眼帯をきつちりかけて、片目だけでこのペンを走らせているのです。



終りなき敗北

—死せる友への艶書—

笈川 悠岐子

レスビアン。ホモ・セクシュアル・インタレスト——あゝ、そんな術語などどうでも好い！君が死んだって？ 君が……いや、ミサオ貴女が自殺したって？、何という事だ、私にこんな花蜜の腐臭のようなどうしようもない疼痛

を残したまま、冷酷な貴女の微笑はもう永遠に此の世から喪われてしまったのか？——ミサオ、貴女の御姉様から長い／＼悲しみのこもったお手紙を受取った。貴女のはほとんど無意味な自殺について人々は神経性疾患を云々

したそうだね、でも私は知っている私だけが知っている貴女の唐突な死の理由を。そうだミサオ、貴女は私との闘に勝った。その征服を未来永劫完璧なものにするために私に再び反逆を許さないために、唯それだけのために自分の現存を絶ちきってしまったのだね。今、私は救い難い暗憺の中ですでに死者である貴女への手紙をしたゝめて居る。貴女は賢明な方法をえらんだ。復讐の対象を失った私は、こうして永遠に答えのない艶書をかきつけ一夜の芳香に満ちた敗北の記憶になづみつゝける俘囚となり果てるだろう。

君、かつてそう呼んでいたように私はこの呼びかけを用いよう。短い髪、黒い洋服、スラックス、友情のしるしには千切れる程の握手をかわすのが習しだった貴女と私なのだから、私はいまでもはつきりと思い出す。君と私とが始めて互に相手を識った時のことを。あれは学年末の卒業生送別会のため演劇の練習が盛んな時だったね。君は変人だったから校内あげてのあんなお祭りさわぎには加らず

に図書室へとじこもつて何かの書物を読んで居たのだ。私と来たら堂に入つた陽気さでお先棒をかつぐ性質だ。文芸部に籍を置いてゐる癖に演劇部の友人から援助出演を頼まれるまゝ、妙な時代劇に役買つて着物に袴、ふところにも真白な懷紙を挟んだという恰好だつた。そんな紛装の最中に君が、何かの用で準備室へ入つて来た。そして偶然その応対に出たのが私だつたという事——それはやはり宿命だつたのだろうか。君は用件を告げてしまふとつくづく私の姿を眺めて

「面白い？そんな下らない真似をするのが」と皮肉な笑を浮べた、何とその時君の眸が惘鬱な惶きをおびたことだつたか。一切を侮蔑しつくした様な君のほゝえみは私の驕慢な偽悪の演出を幽かに移動させたのだ。

「下らない、とわかりきつてゐる事を実行する勇氣さえあれば面白い」

そう私はこたえた。

「そう。風紀委員長にしてこの言ありか」

男の子のように両手をポケットへつつこんだまゝ君は右肩をあげてじいつと私をみつめたつけね。そしてふいにこういつた。

「美しいね、君の睫毛は、眼鏡をかけていない君を始めて見た」

覚えてゐる？ 私がその時妙にとまどつた表情で視線をそらしたのを思えばすでに其処で私の敗北は決定して居たのかも知れない。

しかし私はそんな事を感じなかつた。たゞあまりにもおろかしく平凡な女学生の集團の中で、何となく清冽な若さを撒きちらしてゐる君の存在に、わけもなく魅かれて行つたのだ。それは又君も同じだ。自惚だと云う、恐らく君はあの冷たい微笑で容認するだろう。君は私の知性のありかを知つてゐた。愚劣を装ふことによつて青年期にありがちな智慧の痛みをまぎらそうとする私の演技をほゞ完全に理解した。だから君は私を憎んだ。同性間に於ける全く等質の価値は憎悪と愛着とを相関的に生み出すものだ。私達は互に相手を讃え乍ら懐惨に挑みあつた。知能、生活意識、人生観、そうしてその悪行も！ そこから私達の恋は芽生えた、憎しみと愛とが激しい征服の意志となつて現れる象……それが恋、いや愛欲でなくして何であろう？、不倫といわばいえ、私達にとつてはまさに墮すべき必然だつた。植民地風の華美な服装をした女生徒の間ではつまはじきされそうな、殆ど男装に近い身なりの君が同様に男の様な恰好の私に向つて幾度か接吻を求めた。異様な恋、君

は追い、私は拒みつゝ二人とも自分が女である事を完全に忘れきつてゐたのだ。そして尚友人達の前では君はメラソリックな変屈屋であり、私は陽気な優等生で風紀委員長とやらであつた。それがあの夢魔の様な追憶の夜までつづく。その間私は頑強に君の能動的な愛撫を拒否しつゝけたのだ、受身になつて愛されることは私にとつて最大の屈辱だつた、君がひそかに杉中みち子というレスビアン・ラブアをもつてゐた様に、私にも伶子という美しい同性の愛人があつた。人形の様な従順な彼女を一方的に愛することだけが、私の愛情生活の一切だつたのだ。少くとも、ミサオ君を知るまではね。——夜が更けた長い前奏曲はもう終りにしよう。そしてついにあの夜がやつて来る。ちよつとした親族間のごた／＼を片附けるため私の厄介になつてゐる兄夫婦が九州の郷里へ発つたとき、独りになる私のため、単なる親友だと思ひこんだ君を泊りに来させる様にすゝめたのが事の起りだつた、君は勿論承諾した。下心があつたなどと邪推するのはよそう。とにかく始めて私達は二人だけの夜をもつたのだつた。あきらかにあの夜、君はいらいらしてゐた。君の切長な暗い瞳にはいつもより冷い翳が走つてゐたし

うすい形のいい唇は結ばれたまゝ時々歪んだ
何故私はそんな君を怖れなかつたのだろうか
？、恐らく私には抵抗の自信があつたのだ。

何をされたつて拒みとおせるといふ思いがあ
つた、私はもつと私自身の官能に対して謙虚
であるべきだつたのに、私は伶子を思いのま
ゝに服従させるサディストの自分を識つてい
ながらそれと平行して潜在するマゾヒストと
しての自己を理解していなかつたのだ。つま
り私は私の黙殺して来た自分の中のマゾヒス
トから見事に裏切られ報復されたわけだ。な
にしる思い返して語るに堪えないような馬鹿
々々しさだつた、君の悪強いする洋酒を意地
で飲み乾したのを覚えて居るが、そのあと数
分の記憶が途切れる。机に俯伏したまゝ眠つ
ていたのだろうか、気がついた時には、君の
腕の中だつたね？ やせ型の君にあんな力が
あるとは思わなかつた。息のつまりそうな程
抱きしめる君の腕で私は喘いだ。
「離して、止し給えつたら、息がつまりそう
だ」

「いやだ」

君の声は鋭くつてつめたい意識の遠くで、
美しい声だなと思つた私は、やはり酔つてい
たにちがいない。身動きすれば反つて苦しい

のがわかりきつているので、酒のための上気
と脈の高調がおさまるのを待つてゐる私を、
君はますます激しく締めつける。思わず堪ら
れなくなつて肩で吐息をつくとき、
「苦しいの？ 苦しければ、いう事をきゝ給
えよ」

耳もとで君のさゝやき。

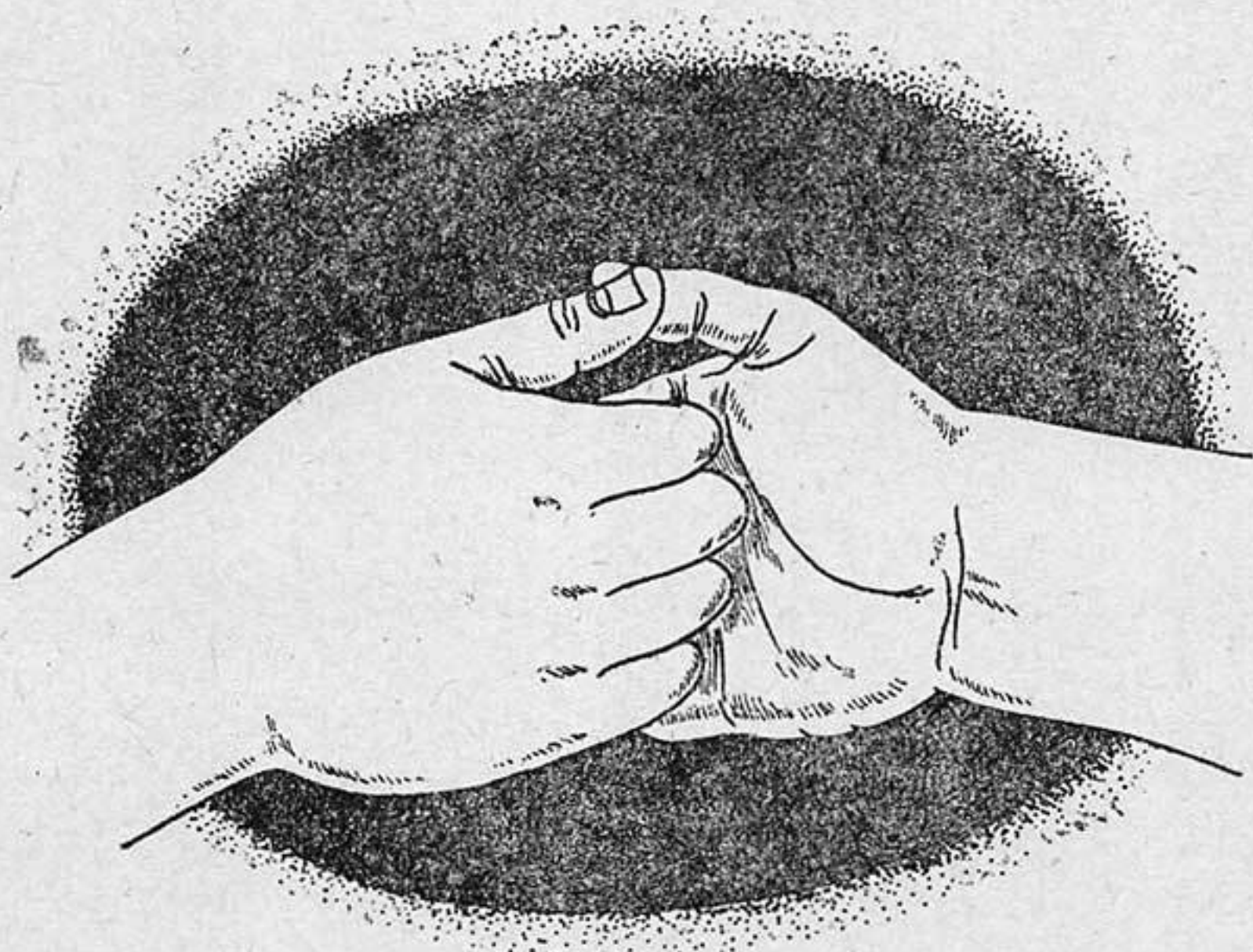
「いや。そんなこと

いやだ」

「強情だな――」

そういつて君は、
私をしぼらく眺めて
いたがいきなり右手
を頸へかけて私の顔
を乱暴に仰向かせた
「あつ、馬鹿！」

私は本能的に身を
よじつて君の顔が間
近に覆いかぶさるの
を避けようとした。
無駄な抵抗だつたこ
と、君がよく御存知
だ。くちづけは甘い
……つて？、嘘だ。
未熟な果実の様な青



い匂いがする。かすかに歯が触れてなつた。
君はあれを接吻だと思ふ？ 私の舌をどろど
ろに溶かすほど激烈な吸引――君は、私に声
をたてさせないためにくちづけしたのではな
いのか？ 唇を合したまゝで君の手は乱暴に
私の上着をはぎ、シャツ、ブラウスの衿をさ
いた、一度抵抗の意欲をなくすると人間はも
ろいのだ。漸く唇を

解放された頃には、
私は蒼ざめながら目
を閉じて君のなすま
ゝになつていた。ね
え、ミサオ、私に何
が出来たろう？ 君
の無表情に近いつめ
たさは、美しすぎた
のだ。後に廻された
手に細引がからみつ
くのを私はやるたか
ない惑乱と諦念とで
感じとつた。屈辱の
想いが私に唇を噛ま
せた、手首から腕に
まつわりはてはひし
ひしと胸に喰い入る

縛しめの痛さに眉をよせながら頑なにうつむいたきり、……断髪が乱れて額に覆いかぶさっていた。

「君、伶子と別れたまえ、私のものになるんだ」

「——」

「返事したまえ！ さあ！」

君の手で肩をゆすられる度に、薄いシャツをへだてて肌に触れる細引の結び目がますますかたくなつて来る。私は、痛い、といいそうになる声をあやふく呑んでは又唇をかみしめた。

「何故黙っている、悠岐」

興奮すればするほど君の声調はつめたくさえる質なのだね。ミサオ？ それに君の眸の光も？ あの夜ほど君を美しい人だと思つたことはなかった。君は私の前に突立つて真黒なセーターの腕を組んで見下していた。強靱な肩と引締つた腰、君の少年の様な清潔な皮膚には黒がとてもよく似合つた……。しかし君が、私の縛られた姿に興奮していた事は、異常に蒼い顔色でわかつた。強い刺激に蕩揺しているのではない限り、人間があんなに異様に蒼ざめる事は無い。それを私はふと顔をあげた瞬間に感じとつたのだ。私は思わずくせ

になつてゐる苦笑いを浮べた。君にそれがどう映つたことだろう？——知らない。だつて次の瞬間には君の火みたいに激しいつつけさまの平手打が私の両頬に爽快なほどの音をたて、いたから、頬に急速に血の氣がのぼり熱い痛みにかつと火照つた。後手に縛られたまゝいずまいを乱すまいとして、私は部屋の壁にもたれたが尚も続く平手打に堪えかねて上半身を大きくそらしてしまつた。君はその体の崩れるのを待つていたのだ。重心を失つた私を片手で抱きとめると、あつというまに、あいた一方の手を袷にかけてぐつとはだけさせた、あゝその時の私の羞恥と屈辱——君にわかる？ 男仕立の縞のシャツの下に忘れよう／＼と努める女の、誰にも触れさせた事のない処女の豊かな丸味。草の芽のように柔らかで生硬な形の乳首が、糊のきいたカラーのわきに洩れのぞいて、私はかすかに身震いした。何かの過失で持つて生れたとしか思えない呪わしい此の女体、どちらかといえば肉附きのいい女の曲線をもつた自分の体がいやらしくて、晒布を巻いたりコルセットでしめつけたりして男性に近い装いをして来たものを君の手でその恥辱の象徴ともいうべき胸のふくらみをあらわにされた私の気持は——、そ

の屈辱の報酬だけでも君に投げつけてやりたかつたのに、君は……ミサオ、君は死んでしまつた……。すべてはもう虚しいのだ。君はいない、君は居ない！ 私の若い生命に深い傷痕を残して、そのいたみを常に新鮮なまゝ保たせたいばかりに、ミサオ、君は自殺してしまつた。嗟呼——君の計画通り、私の追憶は敗辱にまみれたまゝ永久に新しいだろう。一夜まさしく君の手に売り渡された魂と牀とを。今もかつてと同じく男仕立の背広に包んで私は夢もなく大学の生活を送つてゐる。奇妙な女という称にも馴れきつた。古文書を調べる事もたくみになつた。ミサオ、ミサオ！ 高校時代は君あるが故に苦しくもなつかしい古いファイルの色となつて、時に私を茫莫と死へまで誘う。だが私は死ぬまい。君に先んじられた死を、ふたたび私がくり返すのはおろかしい。

ミサオ。お姉様のお手紙にはこう書いてあつた。

「机の上に、鋭いナイフで生々しく木肌をみせて、貴女の御名が刻んでありました。悠岐——と。遺書もない妹の死のこれが唯一の形見なのかもしれません」

(終)

Das Grausame Weib

△ 残虐なる女性達 △

1901年刊行の独文絵入単行本より

森 本 愛 造 訳

「私が此の農園に来てから四十日もたゝない或日の事でした。イエツテ YETTE という名の混血の女奴隷が、鞭打たれた事があつた。刑を受けた理由は、女主人に向つて「だつて、奥様もやつて居なさる事でしように」と云つたという事であつた。彼女は一糸も纏う事を許されず、素裸で、二人の頑丈な黒人によつて、家の扉の前で、地面へ伏せる様に命ぜられ、全く人間的な取扱を一切受ける事なく、両足を、地上に鎖で結びつけられ、太腿にも尻にも肉がなくなつてしまふ程に鞭打たれた。五日の後に私は彼女を鉄の枷から解放してやる事が出来たが、よく見ると枷は斜めに彼女の脛骨の上にはめられて居た。併し、解き放された彼女を見つけたヴァン・アイス夫人 (FRAU VAN EYS) はゲツツエ夫人 (女主人) (FRAU GOETZEE) にすゝめて、アイス夫人を侮辱的な眼で見たという理由の下に、同じ週の中に、前述と同様の厳しい革鞭を与えたのであつた。

シュテツドマン (STEDMAN) はパラマリボ (PARAMARIBO) で起つた一つの事件を報告して居る。彼は其処で会つたストークール (STÖCKER) という男について語つて居る。その男は彼を自分の家の三階案に

内して彼に云つたのである。

「この窓から二、三日前に、奴隷の一人が飛び出して、下へおちたのですよ。私の妻の鞭から逃げようとしてですよ。私は丁度そいつが失神したただけだったので、口の辺りを鞭で引張たいて、目をさましてやりました。こないゝかげんなやり口で私の妻を驚かした奴隷でしたから、妻は怒つて、そいつをフオルト・ゼランディア (FORT ZELANDIA) に送りしました。うまい具合にそこではそいつにスパンソ・ボツコを加えてくれましたよ」

「シュテツドマンは更にスパンソ・ボツコ (SPANSO BOCKO) について述べている。この「刑は最も苛酷な刑の中の一つで、囚人は手を縛られ、地面に横向きにねかされ、無理矢理に膝を腕の中に押し込まれ、その間に太い竿が挟み込まれる。竿は膝と手の関節とを離す事によつて苦しめる為に用いられる。この竿が地面に直角に立てられると、囚人は死んだ様に、一寸も動けないのであつた。」

「鳥の串刺しの様なこの姿勢で、あいつは、節の沢山ある印度椰子の枝で、思い切り、肉がはげおちてしまふまで打ち叩かれたのです。片方に肉がなくなつてしまふと、向きをかえて、又も鞭打が与えられ、血塗れに

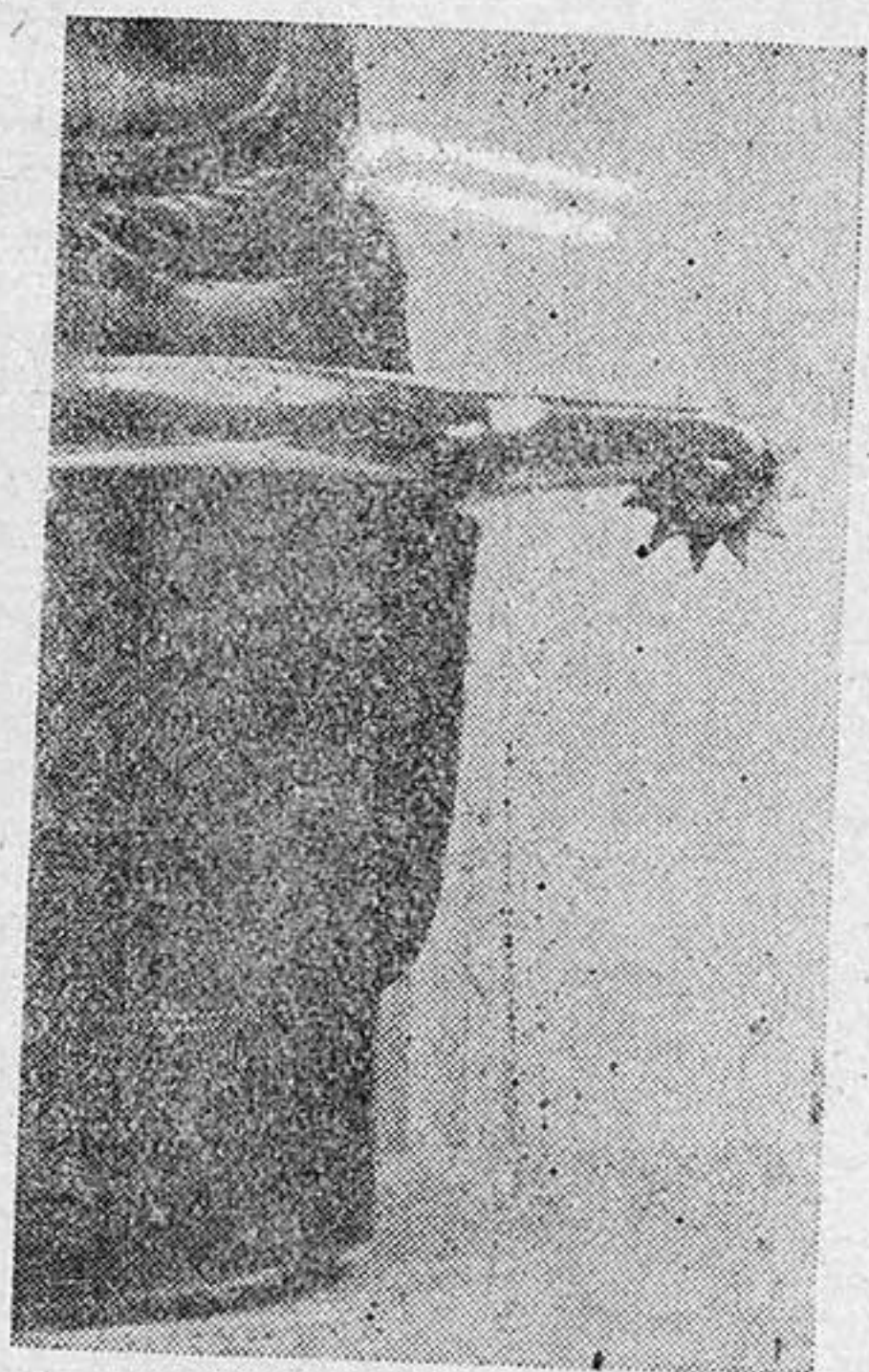
なつてしまふまで繰返されるのです。鞭の痕は、病気を起さぬ様にシトロンの果汁と、火薬とで洗滌され、出来るだけ傷を早く直して使役される様にこつちへ送り返されたのです」

と、多くの農場主の妻達が、如何に無情であるかという事は、一八三三年—三九年のジョージア (GEORGIAN) 農園滞在記 (PLANTATION) の一節にも現れてくる。この

日記の作者は、フランセス・アンヌ・ケムブル女史 (FRANCES ANNE KEMBLE) は K 氏によつて孕まされ、且つ重い産の為に産後四週間の間入院しなければならなかつた一人の女隷について述べている。

「女女隷が病院を出るとすぐ K 氏の妻である白人の女性が遠い路を乗馬でやつて来た。

「拍車」H 某氏より提供されたもの、(実物)
靴は女性用のものらしい。拍車は通常のものではなく刺輪が鋭い。特に付言するが、此の靴も拍車も、人間に対してしか用いられた事がない」との提供者の付言がある。マゾヒストの方で、これで恐気を振わぬのはまだ、軽症の方であろう。



彼女は埃だらけの乗馬靴のまゝどろ／＼家の中へ這入つてきて、手にしていた革の乗馬鞭——それは今直前まで、彼女の愛馬を急がせる為に用いられ、馬の尻を責めつゝけて来たものであつた。——を振つて女女隷を打ち始め、遂には乗馬服のポケットから、犬鞭を取り出して、打ち据え、埃だらけの乗馬靴でふみにじり、蹴飛ばして帰つて行つた。

すでに之まであげた諸則によつて、婦人の残忍性は、婦人の本性が慈悲と、同情とに如何に相反したものであるかについて例証したと思われる。白人の婦女達が、女女隷に同僚を鞭打たせる事が容易であつたにも拘らず、屢々自らの手で鞭を振つ

たという事は更により例証となるのである。つまり、彼女達にとつては、単に自己の命令が「苦痛」を惹起するというような觀念だけでは、誠に物足らぬものであつて、遂には自ら手を下さねば満足を得られなかつたという見方が成り立つのである。

彼女達は常により強い刺戟が齎らされるべく、加虐慾望の具体化に於て、斬新さを狙つていた。この考えの到達したところこそ「自ら手を下した烈しい懲戒」であつた訳である。

例えば、ジョングラハム卿 REV. JOHN GRAHAM の一八三年の手紙の一節は白人女性達の鞭打慾望を特色づけるものであろう。「貴方がお訊ねになつた女主人は私を招待して下さつた方です。」そしてグラハム卿の手紙は次々と彼女の性向を述べ立てた後に、「今日、彼女は家内女隷の一人を考えられる最も苛酷な方法と道具とで三百回以上も打ち据えたのでした。」と云つて居る。

同様な性格の女性について屢々引用するクーパー (COOPER) は次の様に述べて居る。ピータース夫人 (PETERS) と彼女の義弟とは、セントルイス (ST. LOUIS) で一人の女女隷を酷く虐待した科で罰金刑に処せ

られた。この事件というのは多くの白人女性達の集会のあつた日に、その集会場の近くで起つたのである。集会は度々烈しい殴打の音によつて妨害された。一同は誰か全く容赦のない遣り方で馬を鞭打つて居るのだと思つていたが、その騒音は正しく、二時間以上に涉つてつゞいたので、一部の人が原因を探しに出て行つた。その人達が丁度隣りのピータース夫人の邸の内庭を覗いたとき、驚きの為に流石鞭刑に慣れた人々も足を止めて一切を見届けたのであつた。内庭の中央には十八才の少女が全裸にされて地面に這いつくばつていた。少女の頭の処にはピータース夫人が怖ろしい形面に歡喜の感情をこめて、立つて居た。彼女は朝早く遠乗りに來た立派な婦人用乗馬服を付けたまゝの姿で、その薄く美しい裾から、拍車をつけたまゝで乗馬用の長靴が見えており、その一方は少女のうつ伏せになつた頸をしつかりとふみつけて居るのであつた。騒音の原因は彼女の右手に振り上げてゐる、狩用の犬鞭兼用の乗馬鞭であつた。夫人は犬用の部分（即ち鞭全体を用いて）で少女を力一杯に打ち叩いて居た。彼女は声高に鞭の数をよみ上げて居た。夫人が余り長い間の鞭打で腕が草疲れた時、近くに居た彼女の

弟がすぐさま、代つて革鞭を振うのであつた。少女の背は夫人の革鞭ですでに全く血の塊りであつた。血はダラ／＼と少女の身体を伝わつて周囲の土を朱に染めた。暫くの間、殺人にも等しいこの凄まじい鞭打がつゞいた後、少女は漸くにして許されたのであつた。この鞭打刑が一部のカトリック教徒の間で問題になつたのであつた。

更に他の実例を挙げよう。(AMERICAN SLAVERY—COOPER) 私がジェファースン・カウンティ(JEPHERSON COUNTY)に居たとき、ジェイムズ・トウルリイ(JAMES TRULY) という旅館主の所で世話になつて居りました。此処にルシイ(LUCY) という部屋付の女奴隷が居た。或る日、丁度昼食がすんだばかりのとき、トウルリイ夫人は彼女の奴隷を庭へひきずり出した。私が見ていると、夫人はルシイの両手を結んで松の木の枝に吊るした。そうして、愛用の乗馬用の革鞭を振つて打ち始めた。夫人はくたびれると椅子を持出して、暫らく腰を下ろして休み、又鞭を与えるのだつた。こうして休んだり、打つたりして一時間もたつてからルシイは許された。私があとで夫人に何故あのようにむごくルシイに鞭を呉れたかをき

いたところ、ルシイはまだ二本ローソクが残つてゐる事を忘れて、二本も新しいローソクを買つて來た事を懲らしめられたのであつた。私はその一時間の間、若い少女の死ぬ様な叫び声、しなやかな乗馬鞭の唸り、肉を打つ革鞭の鋭い音に悩まされたのであつた。(訳者註。此処に幾つかの実例がある。その中で、使用された責道具の中でよく出てくるのが狩用鞭(FOX HUNTING WHIP)及乗馬鞭(RIDING CROPS)である。之等については別項に、詳しくその形状、作用、等について、述べる心算であるが、こゝで一、二何故これらの鞭が愛用されるかについて、一言述べておこう。狩用鞭は乗馬鞭(CANE)に犬鞭(DOG WHIP)が付加されたもので、烈しい唸りと、手厳しい苦さと共に、大きな対象でも小さな対象でも同時に、適宜な強さで打つ事が出来る事。そうして、乗馬鞭と異なり、革紐が長い為に、遠隔操作が可能であるという長所がある。乗馬鞭は細く且つ狩用鞭が芯なしの革を編み上げたものであるのに反し、鉄等の芯を有し、デリケートな形状と、痕を残す事の為に喜ばれるのである。

(未完)

京子の浮囊

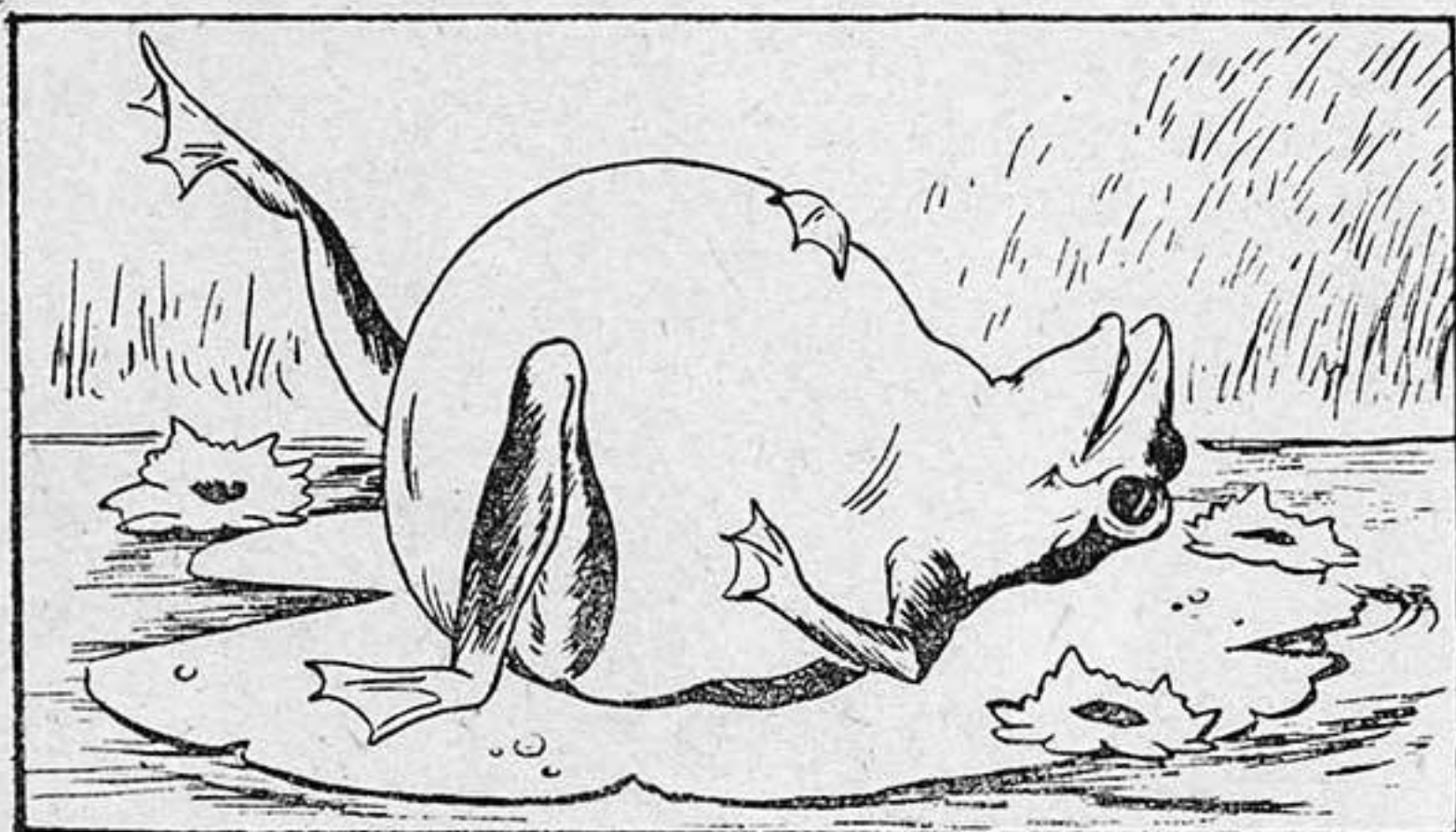
きよう

こ

うき

ぶくろ

羽村京子



一体いつの間に私はこのような感覚を身に付けてしまったのでしょうか。すっかり狂ってしまったって、鳴り出したらとまらない目覚し時計のように私の肉体は異常な刺激を求めて夜も昼も叫びつづける、恥ずかしくてとても、人前では口にも出せないような欲望が私のこの小さな体の中で奔流しているのです。

私は今、九ヶ月の妊婦、もう半月も経てば、臨月です。大きなお腹、その中でうごめいている胎児、妊娠ほど女が動物であるということ痛切に思い知らせるものはありません。そしてよみがえった下等動物の強烈な感覚が私の中で荒れ狂って、私は物狂おしいまでに倒錯した官能の地獄につき落され、喘いでいるのです。

叢の中から捕えて来た一匹の蛙のお尻の穴に草の莖をつき差して息を吹きこむと、ぷうとお腹がふくらむ、しかし、多くは入らず、莖を抜くと一度に出してしまいます。固い莖を力一杯深くつつこんで、その先が腸壁

を破つて腹腔の中に突き出ると、それから先は蛙の体がまん丸くなるまで空気を入れることが出来、抜いてももとにもどりません。苦しがつてもがいている蛙を白い腹を上にして足でふみにじると破れた腹壁と裂けた口から臓腑がはみ出てくる、このような無惨な遊びを小さな女の子であつた私はどんな興奮に眼を輝かせてくりかえしたことでしよう。

私はこのような遊びを蛙の代りに私の体に応用して見ることに異常な熱意をもつたのでした。人間の体で、しかも他ならぬ私自身の体で実験することによつて、私は忘れることの出来ない感覚を私の肉体に覚えさせてしまったのでした。肛門と大腸、そして内臓一般にわたる圧迫感、苦しいければ苦しいほど、またそのあとでの後悔が激しければ激しいほど、一週間、十日と経つうちに又してもより一層強い誘惑へと私を駆りたててやまないのでした。

最初に用いた自転車用の空気ポンプは、逆流を防ぐため一回毎にゴム管を押えたり離したりしなければなりません。片手でポンプを操作することはまだ子供だった私の力に余ることでしたから、私はいつも汗だくになつてあつちを押さえ、こつちを押さえした

ものです。水道のホースはもつと扱い易かつたのですが私の一人での遊びですから自分の口で吹きこまねばならず、腹の方に力が入らないように注意するために口の方がすぐ疲れてしまうのでした。水道栓にじかにとりつければ入つて来る水が冷たくて夏だけしか出来ません。水泳の浮き袋、空気まくら等手当り次第試みましたが、何れも口のところは難点があつてうまく入つてくれませんでした結局駄目、スポイトや浣腸器では一回毎に抜き出さねばならず一回の分量が少なすぎて手間がかかりすぎて駄目でした。

私のこのような奇妙な悪癖が十年余り経つた現在でも尚つづいていてということとは驚くべきことにちがいません。しかも私の夫を理解ある協力者として！しかし、現在私は妊娠しており、四月には産まれるのですから、もう数ヶ月来このような実験は中止しています。けれども私は益々新しい実験の構想に悩まされつづけ、私の中のアブノーマルな血が沸き立つのを抑えきれないのです。



そうです。私は今、私の体がもと通りになつたらすぐにでも実行してみたい或る計画をもっているのです。私は今、うさ晴しのために、ここでその計画についてお話ししたいと思います。

それは人間の浮囊（うきぶくろ）についての実験なのです。誰でも魚に浮囊——鰾（うきぶくろ）とも書く、ドイツ語でルフト・ブラーゼ Luftblase（Luft は空気、Blase は膀胱の意）——があることは知っています。しかし京子には大腸があります。京子の大腹は京子の浮囊。京子のルフトブラーゼなので

す。南氷洋に活躍する捕鯨船は鯨を仕止めるとその肛門から空気を送り込んで鯨を海上に浮かせて置き、直ちに次の鯨を追うということですが、京子がその鯨になると思えばいいのです。

腸内に空気を詰めこんで入浴し、空気の浮力をはかるという実験は私も今までにやつて見なかつたわけではありません。しかし、まさか銭湯などで行うことは出来ない以上、私の家の風呂槽では狭すぎて全然問題にならないのです。従つて大きな浴槽を夫と二人つ切りで利用出来るどこかの温泉場か、それとも青天の下、真夏の海水浴場で誰の目もとどかない岩かげかボートで漕ぎ出して沖合に限られるわけですが、子供でも出来たら海水浴なども望めないでしょうから、私は今のところ、どこか適当な温泉を利用する方法を考えています。

先ず用意すべきものは若干の縄と、近頃よく百貨店などで売っている直径一二センチのビニール製のホース二本、これだけあれば充分です。いよ／＼温泉宿の人がすつかり寝

しずまった頃、二人でそつと湯殿に下りて行きます。縄は私の裸体を縛るため、二本のビニール・ホースは一つは腸内に空気を吹きこむため、もう一つは呼吸用に口にくわえるためのものです。それから忘れていましたが、若干の石塊が浮力を調節するための錘りとして必要です。

さあ、用意が出来ました。真つぱだかになつた私の体は、両手をうしろで縛り合され両ひざを縛り台せられた脚もひざのところで折り曲げられて両方の足首の股のつけ根のところで縛りつけられます。両手と両足の縄がひつぱり合わされて、ちようど逆海老といった恰好です。それからビニール・ホースの先端を一尺ばかり肛門から直腸内にさしこまれ、もう一本のホースのはしを口にくわえて浴槽の中に沈められます。夫は石をつかつて、私の体がちようど底から浮き上らないように背中の結び目のところで調節しますが、私の口のホースのおかげで水中に沈んだまま呼吸が出来ますから苦しいことはありません。

それがすむと、いよいよ実験がはじまります。夫の口からビニール・ホースを通つて圧搾空気が私の腸内に送りこまれるのです。一尺も奥深く入つてゐる上に縛り合された脚が

挟んでゐるので抜けることはありません。ググググと腸壁が拡張されて腹が張つて来ます。空気が胃の下を通つて盲腸のところまで一通りまわつてしまうと、私の体は湯槽の底から静かに離れるでしょう。夫は尚も空気を吹きこむことを止めません。妊娠のために腹壁の従つて腹腔のキヤパシテイの増大した私の腹部はコツペ・パンの形に美事に膨れ上つて、仰向けのままポツカリと浮き上り、そのコツペ・パンの腹部だけが水面にポカツと姿を現わします。私は張り切つた腹の苦しさ、こみ上げて来る嘔吐の苦しさに我を忘れて透き通つた湯を汚物でよごしながらも、私の腹の中で今や解剖した鮎の中から出て来る浮囊のように膨れ上つた大腸を想像してゐるのです。人間の腸はS字状結腸の腸捻転などの場合にはガスがたまつて大人の頭位の大きさになることもあると聞いています。京子の腹の中で魚の浮囊のように空気を入れて膨らまされた大腸、本当に京子の浮囊、京子のルフ・ブラーゼは大腸なのです。

私は以前妊娠するまでは妊婦の突き出した丸い腹にくらべて、肛門から腸内に空気を入れて膨らました腹は肋骨の下から下腹部一杯に一樣にコツペ・パンのように不恰好に膨れ

上るので、前者の方が後者よりもすばらしいように思つていましたが、自分が妊娠してみると皮肉なもので、後者の異様なグロテスクさにより一層惹かれるようになりました。そしてこのようなルフト・ブラーゼの幻想にとりつかれるようになったのです。

ルフト・ブラーゼの幻想はまだまだはてしなくつづくのです。手足を自由にしてルフト・ブラーゼの浮力をたのしみながら、同時にルフト・ブラーゼの圧迫にのたうちながら――浴槽の中をとびまわり、浮きまわる京子の夢は何れ実現するものと思ひますが、身体を直立の姿勢に置いた場合、お湯の中では空気の浮力で肛門への、排出を促すような圧力は弱くなりますから膨らんだままであることがずつと我まんし易くなることは私の家の小さな風呂で既に実験済みです。(終り)

謹告

連載中の「痴迷」は作者旅行中のため原稿の到着が遅れ、本月号に間に合いませんでしたので、次号に掲載いたします。「痴迷」はあと二回にて完結いたしますので、次は新構想のマゾ・ストーリーを鬼山紬策氏の健筆によつて掲載の予定であります。

万山懸賞原稿入選発表



懸賞入選作品

一席 (一名)

賞金 参万円

被虐願望の女の手記

(仮題)

細川美也子

二席 (二名)

賞金 各壹万円

私のモデル

飛田良二

赤い川 (スンゲイ・メラ)

村瀬雷三

詮衡経過 KM生

先ず圧倒的な御支持により驚くべき多数の皆様から御応募頂きました事を厚く御礼申し上げます。

応募作品四百六十八篇を第一回で約三分の一に篩い落とし第二回の予選を経て、約一割の候補作品を選定、更に締切直前のものを加えて第三回目に入選候補十八篇中より十一篇を選び、上記のように

一席入選の

細川美也子さんからの便り

私は本年二十四才の女でございます。昨年暮、夫と離婚しました。現在五つになる女の子とたった二人きりで、他に身寄りもありません。夫は製薬会社を営んでいました。夫は親戚等の相續争いにかゝらる訴訟事件等があり、私までがその渦中に巻き込まれて主人に悪意で遺棄され、侮辱、監禁、暴行等さんさん酷い目にあわされました。私はその圧迫に対して争い

決定いたしました。佳作或は選外のものの中にも、これらと思うものも多数ありましたが、表現が公開を許されない程度に逸脱した内容の為、敬遠しなければならなかったのは残念でした。入選作の賞金は本誌発売後一週間以内にお贈りいたします。切手同封の要返却作品は、整理出来次第、漸次御返却申し上げます。暫く御猶予下さい。

ましたが、結局正しい者であつても、弱い方が駄目なものでした。

私は一生かゝつても争つてやるつもりでしたが、誰一人相談相手もなく、思い悩んでおりましたところ、はからずも御誌を書店で手に入れ、心機一転する気持でした早速、私の只今の心境をありのまま書いて、懸賞に応募することにしました。これはヒロポン中毒患者の夫に、私が虐げられる過程を描いていますが、現在では、マゾヒストとして育てられた自分の赤

本誌創刊七周年記念

三 席

(三名)

賞金 各 五 千 円

小説童貞作家

淡美 一郎

二百字讃歌

真砂 十四郎

美しい暴君

馬 族 保

四 席

(五名)

賞金 各 参 千 円

悦虐回想録

魔 園 吉 年

華々しき凌辱

小 山 矮 男

妖 虫 記

芳 野 眉 美

切腹蔓陀羅図絵

法 谷 四 郎

病める花びら

須 賀 織 代

裸々な告白でもあります。

離婚以来、自分の僅かな持物を
売り喰いしながら書いてみました
拙い筆の運びではございますが
どうか、御一覽下さいますようお
願い申し上げます。

佳作・作品 —三十篇—

本誌一カ年分贈呈 (十名)

○脂 足 永 一郎

○恭子の告白 乃木 恭子

○凌辱願望 森田 綾子

○不具者の告白

伊田 市朗

○腐 臭 鋼 麻 能

○悪 魔 荒川 弥生

○あるマゾ男の告白

才 昭 吾

○血染めの舞台

吉本すいこ

○魔海の業火 弓 鬼 崇

○黒い瞳 堀川 恭子

本誌半年分贈呈 (十名)

○早熟日記 小竹 紀男

○責めのアルバム 丹羽 久夫

○十字架の妻 竹谷 十三

○結 婚 久留木 栄

○美貌の人妻故に 玻玖 藍作

○淫 火 野中 愛三

○スーダン 川野 京輔

○宮村画伯の告白 河場象之助

○花 と 蕾 近 藤 一

本誌三カ月分贈呈 (十名)

○蛇精に魅入られた花嫁 辻 佳月子

○哀恋腑分奇談 伊藤 悦代

○栄 吉 日文世古六

○転落の姉妹 白川美智子

○あるモノローグ 近 藤 一

○春宵夢 千田まゆみ

○非人部落 波鋼 鋭郎

○悔懺録 岡田 守

○ぜい弱 坂 まこと

○白い玩具 土岐伊佐子



奇ク二月号に沼正三氏が特に、「二つの赤御殿」と題し、小生の一文(一月号所載)に触れられているので、更に一言付け加えさせて頂く。

赤く館 (Der rote Edelhof) は L. von Sacher-Masoch の短篇集、謎の女 (Das Rätsel Weib) の中の第六番目にあるもので氏の云われる。「毛皮を着た貴婦人たち」(Damen im Pelz) の中ではありません、上記の短篇集はラ イプツヒの Georg H. Wigand 書店から発行されたもので、左に記

す同型の五つの小説集の中の一つです。

残酷な女たち (Grausame Frauen) (短篇集) 悪魔とサイレン

(Dämonen und Sirenen)

(同右) プラトールの恋 (Die Liebe

bes Pluto (同右) 毛皮を着た

ヴィナス (Venus im Pelz) (長

篇) 此に前記「謎の女」が加わるわけです。

小生は「プラトールの恋」はもつていませんが、他は皆あります、短篇集はいずれも十二、三の短篇を集めたもので、面白いのもあり一向につまらないものもあります。

小生は別に文学者でも又研究者でもないで組織的に集めたものではありませんが、同氏の引用された文面には、「毛皮を着た貴婦人たち」がマゾツホの作である事はどこにも見当りません。或は引用されなかつた他の部分に現れて来るのでしようか。

小生の知っているマゾツホの作で、此と似ているのは、前記「毛皮を着たヴィナス」で此は有名ですが、中味は例に依つてやゝ退屈です、その中には女が足の裏を舐めさせる場面がありますが、赤い館とは別で、従つて上記引用の文も、マゾツホとの関連に於ては、

小生によく分りません、小生もよく調べますが、此点を誌上で御教示頂ければ、読者諸氏の御参考にもなるかと思ひます。

次に同氏はシュリヒテグロル (

Carl Felix von schlichtegroll)

について述べておられますが、マ

ゾツホに関する研究の著書があり

小説としては、「ヴィナスの鞭」と云う二部作のものがあつます。

一九〇二年の作で第一部は「クレ

バンの巫女」第二部「ウルリッ

ヒ、フォン、リヒテンシュタイン

」で、歴史小説ですが、此も大して面白くはないようです。

小生は前に述べたように専門家でも、素人研究家でもないで、上記の本も十五年程前ベルリンに住んでいた頃、同市西部の石の広場 (Steinplatz) のそばの本屋で何の気なく一冊を求めたもので、其後夫に刺戟されたか、夫とも前からあつたものが目覚まされたのか、手当り次第漫然と買った同系統の小説類に大分あります。

奇クに訳出されている残酷な女たちの原本も持つています、沼氏を初め色々の方が、真面目な研究や、記録を出されている事は、本誌のためにも大変いい事だと思ひます。

(富岡陽夫)

「読者案内欄の廃止」について謹告

読者諸氏の強い要望によつて本誌三月号より、読者案内欄の開設をいたしましたが、これは当局の見解によれば、売春案内であり、公然たるボン引行為だそうでありますので、本月号より読者案内欄は廃止いたします故、悪しからず御諒承願います。

○

初めて十一月号を読みまして口絵、滝麗子さんの「棒と柱を用いた縛り方」都築峰子さんの拷問部屋を拝見し、非常な興味と好奇心をあふられました。特にあぶまにやの手記の河真田子路さんの「自虐鬼の独白」の記事には非常な共感さえ覚えました。私が幼い時分兄弟と浣腸どっこをして両親に叱られた事がよみがえり同時に平素想像していた、浣腸をした上りのリソチがびつたり合っているのにつの間にやら自分が、アームスの讚美者になつてゐる事に気付きました。毎月麗子さんの縛り方、十二月号の都築峰子さんの女囚処刑の図、新年号の置屋主人と芸妓の仕込み、二月号地下室の怪、おさ

すりの室の車部屋等は興味深いものです。十二月号鷺の谷渡り、新年号の私の求めた男、二月号の悦虐の家、人間燭台、三月号蜘蛛と蝶々等はどれも素晴らしい読物です。同じ愛読者の中、羽村京子さんが蛙腹を書いていられる事や三月号の読者通信での感想は、私の考えている事と同じなので大へん面白く思います。もし京子さんに御面接出来て、お互に意見を交換し合えれば非常に楽しいと思うのですが、もしその機会が与えられれば本当に嬉しいです。尚、四月号に肛門いじめが出ていないので失望致しましたが一日も早く発表をお願いします。(京都)西本生

○ 四月号本日受取ました。発禁直後なのでどうだろうと心配していたのですが予期に反し全く素晴らしいものです。殊に時事数久画伯の「轢殺」は物凄くもので思い切りよく掲載された編集の方々に厚くお礼申し上げます。この様な雑誌の手に入ることを嬉しく存じます。毎月一日でも着本が遅れると何か事故でも起きたのではないかと心配でなりません。それに取締りの都合で掲載を見合せるのか。訂正するかという記事のあるのは

原稿応募者にとつても又読者にとつても非常に淋しいことなので、早くKK通信の改善拡充を希望いたします。

責についての写真は「縛」だけでは長い読者に対してはもう行きつまりつつあるのではないかと思うので特別の趣向や興味を持つている人は別ですが、裸女のレスリングや跳躍等もり上つた肉体美の躍動さも作製して頂きたいと思います。レスリングの足裂き固めやエビ固め等、サド、マゾにも十分満足出来ると思います。困難な中にあつて愛読者の為、十分満足できる様に御奮闘下さる御社の皆様様の努力に感謝致します。

二月十七日

杉本早三

○ 久しく御無沙汰致しました。一時発禁などといわれましたので心配しましたが、昨日日本屋の店先で四月号を見出してほつと致しました。私も相変らず、色々工夫してほのかな自虐を楽しんで居ります。さて一月に盲腸の手術をしました。少々手遅れで普通の人の倍を要しました。手術の時は夢中でした。顔は赤くしています。手術後は顔は赤くしています。手術後は恥しくてどうしても小用出来ず看

護婦さんが心配してマッサージをしたり暖めたりするのですが益々駄目で一日に二回づつ導尿されしました。こればかりは重ねる毎に恥しさが増してきて出来るだけがまんするのです。この時の小用をがまんするのが何とも云えない自虐的気持が忘れられず最近でも一週間に一遍位、わざとコンビネーションの下に長いズロースをつけて登校して放課後、真青な顔でとんで帰りお手洗へとび込んで用をたし、其の時の何とも云えない気持を味わっています。

○ 退院後お腹を十糎以上も切つたので義母がスタイルがくずれるといけなと云つて、コルセットを買つて来てコンビネーションの上につけています。股下がボタンになつていてズロース型で学校へ行つても洋服の下に私一人が、こんなものを着ていると云う自虐的気分は私を満足させるのですが、お腹を押えているので小用が近くて且つ時間のかかるのは困つています。つい調子にのりくらぬ事ばかり書いてしまいました。此のあたりで失礼します。かしこ

(東京 市川公子)

○ 私は云わば戦後派のサジストと

自認しているのですが、時々自分でもサジであるかマゾであるか判然としない事があります。というのは対象者がいない為、自分自身で色々な試みをしている為と思つています。私は十六、七歳の時にそんなという雑誌が失念しましたがその雑誌か娼婦達の座談会の記事で遊びに来る人の中には色々変つた人がいて、ある人は(マゾヒストと思われる)娼婦に向つて「お……でも……ろ」というとそれの通りにするといふ場面が記されていてそれが私の頭にこびりついていてそれからというものは、肛門に対して興味を持つています。私は男性間の同性愛は最も嫌悪していて対象はあく迄も女性にありま

す。特に羽村京子さんの体験をよんで今迄の自分が更に啓発されたように思えますが、私は勿論、独身で羽村さんの様に良き理解者がいないのでちよつとひがんでいます。それから私は皆様と同様に女性の責めを好みますが、中でも海老責め股間縛りには特に興味をもつています。此の様な私の性癖から云つて羽村京子さんの書いた物ならなんでも又、三月号の南川さんや滝さんの画、坂口利子さんのモデル写真、「高圧浣腸」二月中

の人間燭台、古くは二十七年度の錯乱の倫理などは大いに気に入つた次第です。尙、私は今迄二人の女性と交際した事がありました。がノーマルなその人達には（別に尋ねたわけでもありませんが）私はそう思いました。（私の様な異常な性癖を打ち明ける勇氣はありませんでした。おきまりの映画を見たお茶を飲んだりするだけでは面白くなく矢張りアブ的な女性と語り合ふたら楽しいだろうと思ひます。

大阪の島津雅子さん、東京の市川公子さんお手紙頂けませんか？それから羽村さんが三月号の読者通信欄にて述べて居れた様に浣腸の写真を出来なければ画でも結構です。から発表して下さい。

（東京、柳一郎）

KK三月号が発禁になつたという社告を見て、何度も三月号を読み返えしましたが、何処に法に抵触するところがあるのか判りません。敗戦後慚く検閲のない自由な表現が保証され、そして一昨年私共が待ちに待った雑誌KKを手にした時の喜びも束の間、又、あの戦前と同じような検閲禍によつて私達の自由が奪われようとしてい

るのかと思うと全く残念でたまりません。この発禁の影響か四月号は稍低調だつたのではないでしようか。目次裏の滝さんの「サーカス責め」は今月の最優秀の作品、特に逆海老水平吊、逆海老が傑作です。でも、今月のは奇妙な下ばきが一寸変ですね、毎号のようなパンティか全裸のものにして下さい。美容体操、鰻責めも同様です。

写真では外国の縛り写真の縄の掛け方、緊縛感是十分です。私はこの様に無駄なく掲め上げたものを好みます。是非この種のもので多く発表して下さい。坂口さんの高手小手、縛り方はいいのですが着衣ではね、前号でお願いしましたように全裸になつて下さい。

読物では二人のモデル嬢の手記が短篇ながら興味あるものでした。他のモデルの方の手記もきつと発表して下さい。高瀬さん、坂口さんに股間を縛られたときなんて手記をお願いしたいものです。川端さんの私の好きな縛られ方への手記をお待ちしています。

（舞鶴 岡田芳夫）

◎岡田さんと同じような意味の御便りを四月号発売直後沢山頂戴しました。私達も三月号の抵触個所に

ついてはどうも納得がゆきませんが、最終判決がどうあるうとも、容疑によつて、雑誌の押収を受けますことは、関係者の方々に非常な御迷惑をお掛けすることでありますので、私達は公刊誌という立場から、よし刑法に触れない程度のものでありまして、十分自粛自戒の上、誤解を受けないようにしてゆきたいと思つております。そのかわり、代理部の分譲写真或はアルバム等では十分御希望にそつうものを企画して参ります故、何卒御諒解下さるようお願いします。

（箕田京二）

貴社御一同様お元気でお暮しの事と存じます。私の手許には四十冊もの奇クがあります。KK通信創刊号から共に全部揃つて丈夫な私製本箱に並べて休日毎に抜き読みのお楽しみに生きています。幸福をしみじみと感じております。四十冊の奇クを前にして、奇クの発展はそのまゝ私のサディスティックな愛戯の成長であつた事を覚りました。発禁の波を乗り越えて私達の期待に添えて下さい。奇クが消えれば、この世から消える人間が無いとはいへません、私もその一人なのです。尙私は鼻腔礼讃

に書いたように鼻腔美を求めます。縛つた女性の鼻腔美を見せて下さい。頭を仰向けるだけで実に女性の美は増すものと信じます。四月号の「高手小手」及び「猿ぐつわの掛け方」の様に鼻腔かくしてしまわないで下さい。モデル嬢の中には鼻腔美の持主もあるでしょうから、是非仰向けて下さい。それから猿ぐつわを掛ける為には被縛女性は嚙まされる布を避けて口を閉じるのですから、口を開けさせる為には鼻をつまんで呼吸を止めねばならないわけです。ですから美を失わせない程度に小鼻をつまんで口の中へ布を押し込む所な人も写して下さい。眼を閉じている方が大半ですが、猿ぐつわを嚙まされた女は眼を見開いて恨をこめて相手を睨みつける方がよくないでしようか。

（升岡金吉）

小生は貴誌の口絵に毎月云い知れぬ喜びを感じている偶像愛好者です。貴絵等を集めることが何よりの楽しみで、今では相当のコレクションが出来ました。それらの中には素晴らしいものが沢山ありますが、皆何かしらわざとらしさがあるのです。そしてその女性の顔には純真さがありません、純な乙

奇譚クラス

断然！ 群誌を圧して独走を続ける本誌が次号六月号では再び皆様をあつと言わせる企画を樹てました。定価据置きのまま放つ本誌のヒットに対して刮目して御期待下さい。

◎ 新企画による堂々二十四頁の豪華口絵陣

◎ 懸賞（告白と手記と体験）入選作並にモデル嬢の体験記
倒錯の手記等、興味ある短篇多数掲載！

回を追うて益々大好評 感情教育……………吾妻 新

アブニス）痴 迷……………鬼山 絢策
トの記）

愈々本格的な責場へ入った

私の求めた男……………松井 籟子

（告白）わが心の記……………古川 裕子

呼物 吾妻新の海外サデイズム雑誌

懸賞入選作品掲載

二席 私のモデル……………飛田 良二

三席 美しい暴君……………馬族 保

悪の部屋（完結篇）……………二俣志津子

夫から妻から……………久留木 栄

あるマゾヒストの手帖……………沼 正三

55（手紙その四） 56（人間は動物である）

緊縛の構成と責の……………辻村 隆

アイディア

女、それも女学生位の年令がこの上なき責苦にあつてゐる。これこそ私の永年待ち望んでいたものでした。その願望をとう／＼達する機会を貴誌は与えて下さいました。それは四月号、畔亭数久先生の「鉄路に散る二輪の花」でした。これ程の名画を見た事はありません。着想を奇抜でないところに求められ奇抜さを出しておられます常人でも考えつけるようなところに目をつけられ、そして云い知れぬ可憐さ、云い知れぬむごさ、そして底知れぬ迫力を出しておられます。そしてそのむごさは、少しもわざとらしさがなく、そのむごさの故にこそ一段と美しさを加えています。これは一種の責絵であつて責絵でありません。気高き芸術品です。これ迄の責絵の殆どが成人女性を描いてゐるのに反して女学生を題材としてゐる所に美しさがあります。二枚目の絵で自分達は鉄路に倒れてしまい、背後から来る列車になすすもなく、只あれよ／＼と戸惑う少女の表情、下半身の乱れ、全七枚それぞれ構図のとり方の素晴らしさ、一点の非の打ち所のない名画だと思ひます。こういう絵で第一義的に大切なものは私にとつては顔です。

私の大好きな乙女の純な美しさというものが、この上なくよく表現されてゐます。若しもこの絵が貴誌に発表されずに、小生の友人でもそれを持つてゐるとしたら、永年かゝつて蒐集したコレクションを一枚残らず投げ打つてでも交換してくれと依頼したことでしょう、貴誌を知つたお蔭でこんな素晴らしい画が入手出来たことは只感謝の外はありません。数久先生に御礼申し上げます。（大阪西沢生）

○ 御社の御繁栄を喜んでゐる一読者ですが、最近の出版物取締傾向にも拘らず益々特色を発揮されてゐる事を心強く思います。その上益々充実され、他誌の一部では定価値上げしてゐるにも拘らず貴社では定価据置きのまゝサービスしてゐられるのは、読者本位の営業政策と感心しております。私は貴誌の内容で特に切腹に関するものに興味を持つておりますが、貴誌を拝見すれば毎日のくさ／＼した気分も吹き飛んでしまい、明日への英気が養われます。四月号の田谷敬生氏の文では、十七例の説明があれはよかつたと思ひます。特に姉妹揃つての切腹の件等、非常に興味をそゝられました。是非詳細を本誌上にのせて下さる様御願ひして下さい。（東京、H・T生）

原稿募集

- 一、本誌の内容に適したものでしたら、どんな形式でも問いません。
- 一、必ず未発表の作品に限ります。
- 一、責絵、責写真についても自信のある方は御応募下さい既に優秀なる作品は誌上に紹介しております。
- 一、締切日は特に定めません。掲載篇は作品に応じ発表後謝礼を差し上げます。
- 一、枚数は十枚から三十枚程度但し内容によつては五十枚位迄は構いません。
- 一、誌上の匿名は御自由ですし筆者の個人的秘密は厳守いたします。
- 一、何卒、奮て皆様の力作をお寄せ下さるようお待ちいたします。

奇譚クラブ編集部

最寄有名書店へ御予約下さい

本誌は、他誌のように合併号の発行や休刊等することなく、毎月確実なる発行を続けておりますが、熱狂的なファンが増え、ため各地で本誌の入手難が伝えられておりますので、是非、最寄りの有名書店へ毎月御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

☆代理部より☆

迅速確実をモットーにしています代理部の事務処理は読者の皆様は絶大な信用を博しております。今回、従来の分譲品以外に多数の新版を追加しましたので、何卒多少に拘らず御用命の程お待ち致します。

特別会員募集

本誌並にKK通信の購読者を以て組織しております特別会員は、漸増の一途を辿っており、その連絡誌として発展して参りましたKK通信もここに、第十九号を迎えました。今後、更に内容の充実と新しい企画による飛躍を意図しておりますので、未入会の方々は是非お申込下さるようお願いいたします。申込用紙は郵券八円同封にてお送りいたします。

◎編集方針について

読者の皆様の声をも最も敏感に誌上に反映させる雑誌として有名な本誌を、更に一段と皆様の身近かなものにするため、編集内容、編集方針一般に亘つての御意見を求めます。編集者は誌上或は直接の回答を行う外、今後の本誌の編集に関し、それらの御意見を活かし、以て清新潑刺とした雑誌に育て、行きたいと考えます。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文献的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけておりますが、御買入れのないよう是非直接購読を御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には實められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

奇譚クラブ

第八巻 第五号
毎月一回一日発行

五月号 定価 百円

昭和二十九年四月二十五日印刷
昭和二十九年五月一日発行

編集人 箕田京二
印刷人 上田庄之助
発行人 吉田 稔

発行所

曙書房

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇
振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。